國譯禪學大成

第十八卷

國譯禪學大成第十八卷凡例

一、本大成第十八卷に收載する所の書は、黃檗山斷際禪師傳心法要一卷、黃檗和尚太和集一卷及び禪林口實混名集二卷の三部四卷なり。

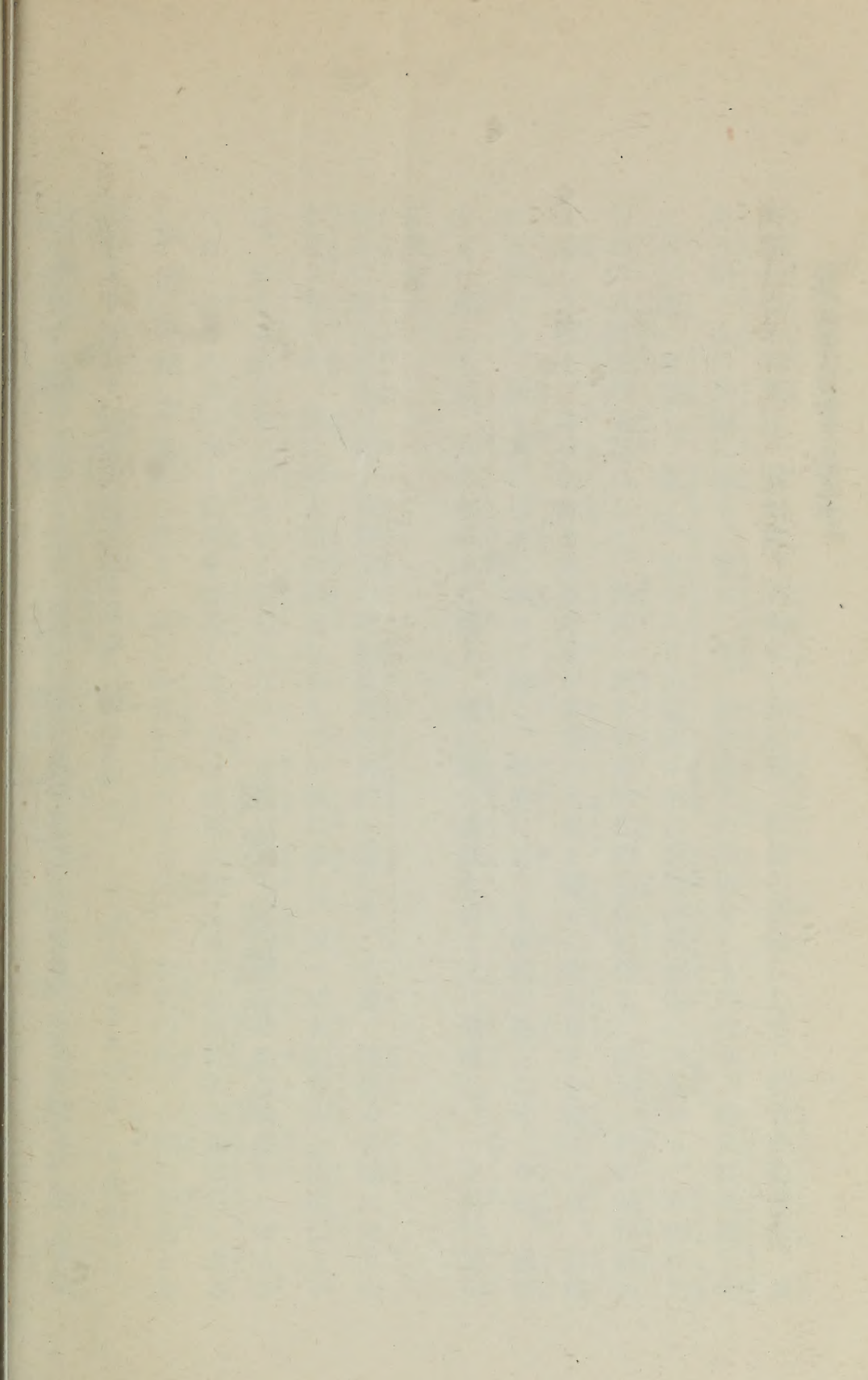
一、以上の書中、黃檗山斷際禪師傳心法要は、略して單に『傳心法要』、又は『黃檗傳心法要』とも稱し、支那唐代の名僧、黃檗山の希運禪師が提唱せし法語を門下の居士裴休が輯錄し、唐の宣宗の大中十一年、黃檗門下の僧太舟法建なるものに授けて、之を公にせしめたるものなり。我が國に於ては後宇多帝の弘安六年、北條顯時の施財に依り、來朝僧たる鎌倉壽福寺の僧大休正念が唐本に模して刊行せし以來、弘く叢社の間に行はれたり。其の後、京都に於て發刊せられたる年代不明の古活字本や寬永九年の刊本及び寬文十三年刊行の古版本などあり。また縮冊大藏經、續大藏經、景德傳燈錄、禪學大系、大正大藏經などにも編入せられて行はる。其の他、單行本としては明治十九年刊行の『增冠傍注傳心法要』は最も弘く流布す。今次、國譯するに際しては、專ら寬文十三年版を底本となし、之に寬永の刻本及び冠注本、其の他二三の刊本を參考して譯注せり。

一、黃檗和尚太和集は、我が國、黃檗宗の開祖隱元禪師の語錄にして、侍者南源性派、高泉性潡二人の共編に係り、寛文二年、鐵眼道光の開板せしものなり。隱元は承應三年に我が國に來朝し、寛文元年八月山城國宇治の黃檗山萬福寺に入院せり。本書は乃ち其の入院後の法語にして、禪師の最も得意時代の述作に係る。隱元一代の著作極めて多しと雖も、本書の如きは實に我が黃檗の宗風と隱元の眞面目とを窺ふには、好箇の資料たり。而も其の刊本は極めて鮮く、學界に於ても奇覯の書となす。今回、國譯するに際しては、其の初版本に據り、猶ほ隱元廣錄を以て之に對照し、一々其の異同を辨せり。

一、禪林口實混名集は我が黃檗宗の僧斷橋實外和尚の著なり。古來、禪林の古德には其の字及び諱の外、別に呼ぶ所の綽名なるものが甚だ多し。例へば黃龍慧南を南匾頭といひ、佛果圜悟を勧巴子といふ類是れなり。本書は乃ち之等異稱の由來を明かにせんがため、內外の典籍四十餘種を涉獵して、上は達磨大師より下は明代の卍庵愼行に至るまで一百九十人の諸祖に就き、其の略傳を述ぶると共に、本名の外、一種の綽名ともいふべき異名、類稱、別號等を揭げ、而して同名にして異人なるものを一々辨析せり。故に本書は支那に於ける禪宗諸祖の一種の異稱辭典とも云ふべきものなり。而も本書

は由來刊本、極めて稀にして、專門の學者も往々其の名すら知らざるほどなり。今次國譯するに方り、正德五年の初版本に據れり。

昭和五年六月

編者　黃楊道人識す

國譯禪學大成　第十八卷

目　次

國譯黃檗山斷際禪師傳心法要解題……………………一—三
國譯黃檗山斷際禪師傳心法要序……………………一—三
國譯黃檗山斷際禪師傳心法要……………………一—七〇
黃檗山斷際禪師傳心法要原文……………………一—二四
國譯黃檗和尚太和集解題……………………一—六

國譯黃檗和尚太和集……一—六
黃檗和尚太和集原文……一—四四
國譯禪林口實混名集解題……一—三
國譯禪林口實混名集序並凡例書目……一—五
國譯禪林口實混名集……一—九一
禪林口實混名集原文……一—六〇

國譯黃檗山斷際禪師傳心法要

解　題

唐の黃檗希運禪師は法を百丈懷海に嗣いで洪州高安縣（今の江西省廬陵道高安縣）の黃檗山に住す。相國裴休居士、鍾陵（今の江西省進賢縣）に官たりし時、師の高德を慕ひて、武宗の會昌二年（我が仁明帝の承和九年、皇紀一五〇二）、州の龍興寺に請じて、日夕、法を問ひ、聽くに隨つて之を筆錄せり。是れ本書の前半にして、一名『鍾陵錄』と題する所以なり。大中二年、居士、宛陵（今の安徽省宣城縣）を鎭するに方り、復た師を請じて其の地の開元寺に住せしめ、旦夕、道を聽いて之を記せり。是れ本書の後半にして、一に『宛陵錄』と號する所以なり。斯くの如くにして本書は居士の輯錄に成ると雖も、各種の大藏經及び景德傳燈錄などに收むる所のものは、本大成本とは少からず異同あり。卽ち明藏に據れる大正新修大藏經中に編入せられたるものは、『黃檗山斷際禪師傳心法要』と『黃檗斷際禪師宛陵錄』とに分ちて二部の書となし、又傳燈錄收載のものと寬永刻本とは共に一部の書となせども、鍾陵錄及び宛陵錄の小見出を設けず。加之、傳燈錄中のものは其の內容に於ても往々異なる所あり。故に之等の異本を比較する時は、寬文の刻本は最も完きものの如し。是を以て今は之を採擇して譯註せり。

初め裴休、之を筆錄して、自己の心印となし、敢て世に發表せざりしが、師の滅後、其の法義の後世に傳はらざらんことを虞れ、大中十一年に至り、之を黃檗門下の僧太舟法建なるものに授けて公刊せしめしものなり。書名の由來は、唯だ一心を傳へて更に別法なしの義に取る。其の內容は達磨大師より嫡嫡相承せる心を以て心を傳へて別に文字を立せざる所謂佛心宗の樞要を提撕して、直截簡明に法門の要旨を說示すると共に、生佛、心境、明暗、有無、眞妄等の相對的觀念を打破して、絕對的觀念を建設せんとしたるものなり。故に本書は古來、參禪者のために盛んに愛誦せられ、宗門興隆のために鴻補ありしものなり。

黃檗の傳を案ずるに、師、諱は希運、唐の福州閩縣（今の福建省閩侯縣）の人なり。幼にして本州の黃檗山（今の福建省福清縣にあり）に於て出家す。額間隆起して肉珠の如く、音辭朗潤にして志意亦沖澹なり。後、天台に遊び、一僧に逢ふ。師偸かに之を窺ふに、眼光爛として人を射る。乃ち俱に談笑して行く。偶々澗水の暴かに漲るに値ふ。其の僧、師を率ゐて同じく渡らんとす。師曰く、「兄渡らんと要せば自ら渡れ」と。僧乃ち衣を褰げて波を蹋むこと平地を蹋むが若し。迴顧して曰く、「渡り來れ、渡り來れ」と。師曰く、「咄、此の自了の漢、吾れ早く知らば、當に汝の脛を斫るべし」と。僧歎じて曰く、「眞の大乘の法器なり、我れの及ばざる所なり」と。言ひ訖つて見えず。師後京師に遊び、人に因つて啓發せられ、乃ち往いて百丈山（今の江西省奉新縣にあり）の懷海禪師に參じ、又南泉普願に寄る。

師得悟の後、老母を省覲せんとして往いて宿す。母問うて曰く、「何處の僧ぞ。」師曰く、「江西」と。母親しく其の足を洗ふ。師の足心に大痣あり、母洗へども己が子たるを知らず。師辭し去つて後、鄕人、母に告げて曰く、「昨夜の僧は是れ女の子なり」と。母乃ち走り慕うて福淸渡に至り、遽に一跌して死す。師已に渡りて隔岸にあり、卽ち炬を秉つて曰く、「一子出家、九族生天。若不生天、諸佛妄言」と。炬火を擲つ。兩岸の人、其の母を見るに、火焰裏に轉じて男子となり、光明に乘じて天に登れり。福淸渡を後に改めて大義渡と云ふ。師行脚の後、洪州の大安寺に住す。衆徒輻輳して常に千餘人に滿つ。時に相國裴休、宛陵を鎭し、乃ち大禪苑開元寺を建て、師を請じて說法せしむ。師酷だ舊山を愛するの故を以て黃檗を以て之に名づけ、四來の雲衲を接得せり。就中、臨濟義玄は師の門下の第一座たり。斯くの如くにして、師は唐の宣宗皇帝の大中四年（我が仁明天皇の嘉祥三年、皇紀一五一〇）八月、開元寺に於て示寂す。勅して斷際禪師と諡し、塔を廣業と名づく。語錄八卷あり、世に行はる。師は身長七尺、容貌魁偉、而も學人接得の手段、甚だ辛辣にして毫も假借する所なく、これがために江湖皆慄服せりといふ。

國譯（イ）黃檗山（ロ）斷際禪師（ハ）傳心法要

（ニ）河東　（ホ）裴　休　集幷（ヘ）序

（ト）大禪師あり、法の諱は希運、洪州の高安縣黃檗山鷲峯の下に住す。乃ち曹谿の（チ）六祖の嫡孫、（リ）西堂（ヌ）百丈の（ル）法姪なり。（ヲ）獨り最上乘を佩びて、（ワ）文字の印を離れ、（カ）唯だ一心を傳へて、更に別法なし。（ヨ）心體も亦空にして、（タ）萬緣倶

（イ）黃檗山。福州洪州の兩處にあり、玆は洪州を指す、高安縣にあり、一名は鷲峯山といふ、古の筠州なり、大安寺と號す。裴休宛陵に鎭たるとき、師を請じて說法せしむ、洪州は今の江西省の南昌なり。黃檗とは「きはだ」の木の澤山ある山といふ。

（ロ）斷際禪師。本錄の首に脚注す、福州の黃檗山に於て出家す。

（ハ）傳心法要。單傳佛心印の法式肝要を錄す。

（ニ）河東。平陽府に河東郡あり。

（ホ）裴休。本錄の首に傳を記す、唐の宣宗皇帝の宰相。

（ヘ）序。此の序凡そ大段二、小段三、都べて五段なり。

（ト）有大禪師。已下法姪に至るまで、人境法系を述ぶ。

（チ）六祖。慧能の正嫡法孫。

（リ）西堂。知藏禪師、馬祖大寂に嗣ぐ、百丈と同參。

（ヌ）百丈。懷海禪師、馬祖に嗣ぐ。

（ル）法姪。一本に「百丈の子、西堂の姪」に作る。

（ヲ）獨佩最上乘。已下本佛に至るまで黃檗の自行を述ぶ。直に毘盧頂を坐斷す。佩は持なり。

（ワ）離文字之印。不立文字なり、敎相等を文字といふ。

（カ）唯傳一心。生佛不二の故に云ふ、四敎五時等の法なり、一塵一法を立せず。

（ヨ）心體亦空。一心の本體も不可得なり。洒々落々。

（タ）萬緣倶寂。萬波の聲は海底に至つて止む、靜寂なり。

（レ）大日輪。これは喩なり、眞佛露現をいふ、寂滅現前なり。

（ソ）纖埃。纖は迷悟、佛埃を生ず、之をさは一心なり、證は悟るなり。

（ツ）無新舊。今時と久遠となり、無始已來改變なし、三世の諸佛、歷代の祖師も同一國。

（ネ）無淺深。是法平等、無有高下。

に寂なり、(レ)大日輪の虛空の中に昇つて、光明照耀して、淨うして(ソ)纖埃なきが如し。之を證するものは、(ツ)新舊なく(ネ)淺深なし、之を說くものは、(ナ)義解を立せず、(ラ)宗主を立せず、(ム)戶牖を開かず、(ウ)直下便ち是なり。(ヰ)念を運ふれば即ち乖く、然して後(ノ)本佛と爲す。(オ)故に其の言簡にして、其の理(ク)直なり、(ヤ)其の道峻にして、

(ナ)不立義解。義理情解なり、無味の談、人口に塞斷すと。

(ラ)不立宗主。宗旨は主意也、無法の故に、元來無修無證なり。

(ム)不開戶牖。門庭を立せず、掃蕩す。

(ウ)直下便是。即處現成の故に。

(ヰ)運念卽乖。念慮を運轉すれば乖角す、煩惱を斷除して重ねて病を增す、趣向直に亦是の如きか。一本、運を動に作る。

(ノ)爲本佛。本源天眞佛と。

(オ)故其言簡。三小段二已下、千餘人に至るまでは化他を述ぶ。其の言は黃檗の示衆をいふ、簡は要なり、本佛を得る宗師の故に。

(ク)直。質直なり。

(ヤ)其道峻。黃檗の日用嶮峻をいふ、孤とは危なり。

(マ)四方學徒。四來の參徒が、黃檗山を望んで趁り來る。

(ケ)覩相。黃檗の威儀をいふ、作家の相見、揚眉瞬目の上をいふ。

(フ)海衆。淸淨大海衆の略語、無量の義。

(コ)予。四大段二已下發揚に至るまで、裴休得法の因由を述ぶ。

(エ)會昌二年。壬戌、唐の武宗の年號、日本の仁明天皇承和九年。

(テ)廉于鍾陵。鍾陵は洪州にあり、廉は使なり、官名、又廉は察なりと。

(ア)自山。黃檗山より、龍興寺は開元寺とともに、唐の玄宗、天下諸郡に勅して建つるところ。

(サ)問道。旦夕は猶ほ日日といふがごとし、大道を請ひ問ふ。

(キ)大中二年。唐の宣宗の年號、戊辰、日本の仁明天皇承和十五年、この間七年を經るなり、その明明年の大中四年に、師は遷化す、年八十。

(ユ)宛陵。鄭州にあり。

(メ)所部。管轄地、則ち領地內。

(ミ)安居。「形心攝靜を安といひ、要期此に在るを居といふ」と、名義集の四に出づ。

(シ)十得一二。十の內の一二なり、紀は記なり、實を記してのこす。

(ヱ)佩爲心印。佩は持なり、肺腑に自己の心印。達磨云く、「法は心を以て契ふが故に心印といふ」と。

(ヒ)敢發揚。敢は容易なり、世間に激發擧揚。

(モ)今恐。已下流布の因由を述ぶ。

(セ)入神精義。易の繫辭の語、神妙精微義理不測を神といふ、これは黃檗の說法の深義。

(ス)不聞於未來。後世に傳聞せざるをいふ。

(イ)出之。記する所の文を。

(ロ)門下。黃檗の參徒。

其の行孤なり。(マ)四方の學徒、山を望んで趨り、(ケ)相を覩て悟る。往來の(フ)海衆、常に千餘人、(コ)予(エ)會昌二年、(テ)鐘陵に廉たり、(ア)山より迎へて州に至らしめ、龍興寺に憩はしめ、旦夕に(サ)道を問ふ。(キ)大中二年、(ユ)宛陵に廉たり、復た去つて禮し迎へて、(メ)所部に至つて開元寺に(ミ)安居せしめ、旦夕法を受く。退いて之を紀するに、(シ)十が一二を得たり。(ヱ)佩びて心印と爲す、(ヒ)敢て發揚せず。(モ)今(セ)神に入るの精義(ス)未來に聞せざらんことを恐れて、遂に(イ)之を出して、(ロ)門下の僧(ハ)太舟法建といふものに授けて、舊山の廣唐寺に歸つて、(ニ)長老法衆に、往日常に親しく聞く所と、同異何如と問はしむ也。時に唐の(ホ)大中十一年十月八日序す。

(ハ)太舟。未詳、廣唐寺も未詳、舊山は黄檗山か。

(ニ)長老法衆。審舊等に親しく黄檗の所説を聞きしこと、裴公の記するところとの同異を問はしむ。

(ホ)大中十一年。大藏本には時の字なし、又十月八日を「十一日初八日に作る。

國譯(イ)黃檗山斷際禪師傳心法要

鐘陵錄

(ロ)師、(ハ)休に謂つて曰く、『(ニ)諸佛と一切衆生と、(ホ)唯だ是れ一心にして更に別法なし。(ヘ)此の心無始より已來、(ト)曾て生ぜず曾て滅せず、(チ)靑ならず、黃ならず、(リ)形なく相なく、有無に屬せず、新舊を(ヌ)計せず、(ル)長にあらず短にあらず、(ヲ)大にあらず小にあらず、(ワ)一切の限量、(カ)名言蹤跡、對待を超過して、(ヨ)當體便ち是なり。(タ)念を動ずれば卽ち乖く、(レ)猶ほ虛空の(ソ)邊際あること無く、(ツ)測度すべからざるが如し。(ネ)唯だ此の一心卽ち是れ佛なり、佛と衆生と更に(ナ)別異なし。但だ是れ衆生は(ラ)相に

(イ)黃檗希運禪師の賜號。大中天子初め黃檗に賜ふに麤行沙門と爲す、裴休之れを諫めて三掌は陛下の爲めに三際を斷ずとなす、仍つて易へて斷際禪師と賜ふといふ。南嶽下三世、百丈懷の法嗣、其の下に臨濟宗の祖、臨濟義玄を出す、相國裴休、宛陵を鎭す、師に歸依すること篤く、大禪苑を建て請じて說法せしむ。師甚だ故山を愛するを以て、山を黃檗と名く、それより黃檗の門風天下に振ふ。會昌二年鐘陵の龍興寺に移り、大中二年宛陵の開元寺に入る、唐の宣宗大中四年八月、黃檗山に寂を示す、其の著語錄八卷、鐘陵錄、宛陵錄の一卷あり、皆門人の輯錄に係る。

(ロ)師。黃檗なり。

(ハ)休。黃檗禪師に參じて得法す、名は休、字は公美、河東の聞喜の人、越の觀察使たり、新安に守たりしとき、日に運禪師に參じて、途に冠を掛けて大安精舍に入り、殿堂の掃灑を事とす、圭峯宗密と、法に於て昆仲、義に於て交友、恩に於て善知識、教に於ては內外護たりしといふ。

(ニ)諸佛與。果上なり、華嚴に所

著し㋰外に求む、之を求むれば、轉た失す。㋒佛をして佛を覓めしめ、心を將つて心を捉へしむ。㋼窮劫形を盡すも、終に得ること能はず、念を息め慮を忘ずれば、佛自ら現前することを㋨知らず。

此の心卽ち是れ佛、佛卽ち是れ衆生なり。衆生と爲る時此の心㋔減ぜず、諸佛と爲る時此の心㋗添はず。㋳乃至㋮六度萬行、㋘河沙の功德、㋫本自ら具足して修添を假らず、㋙緣に遇うては卽ち施し、㋓緣息めば卽ち寂なり。㋢若し決定して此は是れ佛なりと信ぜずして、㋐相に著し修行して、以て㋚功用を求めんと欲せば、皆是れ妄想にして道と相乖く。此の心卽ち是れ佛、更に㋖別佛無し、亦別心なし。㋴此の心明淨なること、猶ほ虛空の一點の㋱相貌無

謂「心佛及衆生、是三無差別。」
㋭唯是一心。一佛乘の故に、心外無法、滿目青山。
㋬此心。一心なり。
㋣不曾生。生滅に渉らざるが故に。
㋠不靑不黃。色相なきが故に。
㋷無形無相。形相を絶す、形は長短、相は善惡の相。心法無形、十方に通貫す。有無の二邊中道。
㋦不計。無始無終の故に。
㋸非長非短。度量を絶す。
㋾非大非小。小無間に入り、大方所を絶するが故に。
㋻一切限量。際限度量、過限分量。
㋕名言蹤跡。名相言句、迷悟生佛、又名言は名字言句。
㋵當體。色身の當體、卽是とは卽ち無相。
㋟動念。迷悟生佛等の二念をいふ。

㋹猶。一心體段なり。
㋞邊際。上下四維なり。
㋡測度。測量計度なり。
㋧唯此一心。馬祖の卽心卽佛の語を脫出す、是佛とは眞佛。
㋤別異。隔別變異なり。
㋶著相。有相卽ち三十二相等なり。
㋰外求求之。外邊に、之とは佛なり。
㋒使佛。その故に。
㋼窮劫盡形。窮盡永劫、生生身形。
㋨不知。是の如き佛を求むる人は、忘念を息め、知慮を忘ずれは、眞佛直下に現前せんことを知らず。
㋔減。減少なり。
㋗添。增なり。
㋳乃至。超越の辭。
㋮六度萬行。六度は總、萬行は別、六度は六波羅密、萬行は八萬の細の略、すべて菩薩行。

きが如し。㋯心を擧し念を動ずれば卽ち㋛法體に乖く、卽ち著相と爲す。㋽無始より已來、著相の佛無し。六度萬行を㋪修し、成佛を求めんと欲するは卽ち㋲是れ次第なり。無始より已來㋝次第の佛なし。但だ㋜一心を悟つて更に少法の得べき無し、此れ卽ち眞の佛なり。佛と衆生と一心にして異なること無し、猶ほ虛空の㋑雜も無く壞もなきが如し。㋺大日輪の四天下を照し、日昇るの時は明天下に徧きとも、㋩虛空曾て明ならず、㋥日沒するの時は、暗天下に徧きとも、虛空曾て暗ならざるが如し。明暗の境は自ら㋭相凌奪するも、虛空の性は㋬廓然として變ぜず。佛及び衆生の心も、㋣亦此の如し。若し㋠佛を觀て、㋷淸淨光明解脫の相と作し、㋦衆生を觀て、㋸垢濁暗昧生死の相と作す、㋾

㋘河沙功德。其の外。
㋫本自具足。從本以來、自然に修行增添の功を假らず。
㋙遇緣卽施。建化門、隨緣眞如、因緣會遇せば、施爲施設。
㋓緣息卽寂。掃蕩門、不變眞如、寂にして常照。
㋢若不決。迷人もし決せずんばと。
㋐著相。敎相に執著し、色相に著してとなり。
㋚功用。悟道の功德妙用。
㋳別佛。別佛の求むべきなき、別心の悟るべきなし。
㋴此心明淨。求めず著せず、妙明淸淨。
㋱相貌。形相なり。
㋯擧心。擧起なり。
㋛法體。眞如の法體。
㋽無始已來。然るに。
㋪修。敎相に依るときは則ち。
㋲是次第。修行。
㋝無次第佛。次第階級、一超直入如來地なり。

㋜一心。自己の一心。
㋑無雜無壞。雜物壞敗。
㋺大日輪。迷悟に依つて、一心の明暗變相なきに喩ふ。
㋩虛空。人心眞空。
㋥日沒。迷沒に喩ふ。
㋭相凌奪。明は暗を奪ひ、暗は明を凌ぐ。
㋬廓然不變。明暗なし、變交せず。
㋣亦如此。虛空の明暗なきが如し。
㋠親佛。尊崇の心を起してと、これは凡夫の境界を說く。
㋷淸淨光明。淸淨は其の體、光明は其の智、煩惱を解脫す。
㋦觀衆生。下劣の思を生じてと。
㋸垢濁暗昧。垢濁は其の體、暗昧は其の智、生死に流轉す。
㋾此解。二見なり。
㋻爲著相。所以は生佛の相に著

此の解を作さば河沙劫を歷るとも、終に菩提を得ず。(ワ)相に著するが爲の故に、唯だ此の一心、更に微塵許りも(カ)法の得べき無し、即心是れ佛なり。(ヨ)如今の學道の人(タ)此の心體を悟らず、便ち(レ)心上に於て心を生じ、(ソ)外に向つて佛を求め、(ツ)相に著して修行す。皆是れ(ネ)惡法にして菩薩道にあらず。(ナ)十方の諸佛を供養するは、(ラ)一箇の無心道人を供養するに如かず。何が故ぞ、無心とは(ム)一切の心無きなり。(ウ)如々の體は(ヰ)內木石の如くにして、動ぜず搖かず、(ノ)外虛空の如くにして、塞がず碍へず、(オ)能所もなく(ク)方所も無く、(ヤ)相貌もなく、(マ)得失もなし。(ケ)趨ゆる者は敢て此の法に入らず。(フ)空に落ち棲泊の處無からんとを恐る。故に(コ)崖を望んで退く、(エ)例して皆廣く知見を求む。(テ)所以に(ア)知

して隔を成す。

(カ)法可得。悟迷等の法。

(ヨ)如今。來世の。

(タ)此心體。生佛不二の心體。

(レ)心上生心。即心即佛なるに、慮智の心を生ず。

(ソ)向外。本心を放擲して、外邊に。

(ツ)著相。教相に着して。

(ネ)惡法。心外に法を求むるが故にいふ。

(ナ)供養十方。有相に執着して。

(ラ)一箇無心。雜用無心。

(ム)無一切心也。佛を求め衆生を嫌ふ等なり、我れに一切の心なくんば、何ぞ一切の心を用ひん。

(ウ)如如。法身如如なり、動着せざること、心如鏡如なり、或人の云く、「有無不二、是れを如となす」と。

(ヰ)內如木石。內心なり、心墻壁の如くにして道に入るべし、不動は八風等の爲めに。

(ノ)外如虛空。外相汚染なきの故に、不塞は事物に凝らず。

(オ)能所。能は動きかくること、能動、主觀、積極、所は動きかけらるること、受動、客觀、消極。

(ク)無方所。即處現成。

(ヤ)無相貌。長短美惡。

(マ)無得失。不可得の故に。

(ケ)趨者。藏本は「趨」に作る、向なり、相に著して外邊に求むるもの。

(フ)落空無棲。頑空なり、所住處なきを恐る。

(コ)望崖。莊子山木篇に「其れ江を渉つて海に浮んで之を望むとも其の崖を見ず、愈往けども而も其の窮むる所を知らずして、君を送る者崖より反らば、君此れより遠からん」と、之より出づ。前崖をばになり、大道は大海の渺茫なるが如き

見を求むる者は㋚毛の如く、㋖道を悟る者は角の如し。

㋴文殊は、㋱理に當り、㋯普賢は㋛行に當る。理とは㋽眞空無碍の理、行とは㋪離相盡くる無きの行なり、㋲觀音は大慈に當り、勢至は大智に當る。㋝維摩とは淨名なり、淨とは㋜性なり名とは㋑相なり、㋺性相異ならざるが故に淨名と號す。㋩諸大菩薩の表する所の者、㋥人皆之れ有り、一心を離れず、之を悟れば㋭即ち是なり。㋬今學道の人、㋣自心の中に向つて悟らず乃ち心外に於て㋠相に著して境を取る、皆㋷道と背く。㋦恒河沙とは佛是の沙を説きたまはく、㋸諸佛菩薩、㋾釋梵諸天、㋻歩履んで過ぐれども、沙亦喜ばず、㋕牛羊蟲蟻、踐踏して行けども、沙亦怒らず、珍寶馨香をも、沙亦貪らず、

故に、小機の者は退くと。

㋓例。一例なり、槩なり、世間の學は凡そ、みな。

㋢所以。元より知見を營せず、然るに。

㋐知見云云。知見を求むるもの多く、道を求むるもの少きをいふ。

㋚如毛。龜毛なり、無を以て有となす。

㋖悟道者如角。道なきに悟を求むるものは兎角の如しと。

㋴文殊。文殊師利の略、曼殊室利、滿殊尸利とも書く、梵音Manjusriの音譯、妙吉祥、妙德、妙音などと譯す、華嚴三聖の一、普賢と相對して釋尊の左側にあり、普賢の慈悲門を司るに對し、智慧門を司る。

㋱理。妙理。

㋯普賢。普賢菩薩は梵語に三曼多跋陀羅(Samantadhdra)といひ、義譯して普賢といふ、普は普遍、賢は賢善にして、德の法界に周きを普といひ、至順にして、善を調ふるを賢といふ、釋尊の右の脇士なり、慈悲を司る。

㋛行。妙行を云ふ、これより諸佛の妙相を説く。

㋽眞空。假を離るるを眞空といふ。

㋪離相。有爲の相を離れ、盡より佗に至るを無盡といふ。

㋲觀世音菩薩、梵語阿婆盧吉佐舍婆羅(Avalokiteçvara)の舊譯、新譯には觀自在となす、又光世音、救世淨聖ともいふ、南海普陀洛島に在り、常に大慈大悲を以て十方諸國土に身を現じ、世人の名を稱する音聲を觀じて、皆解脱を得せしむ。

㋝維摩は印度毗舍離國の長者、佛在世の時、在家にして能く菩薩の行業を修す、故に維摩

糞溺臭穢をも、沙亦惡まず。（ヨ）此の心は卽ち無心の心なり。（タ）一切の相を離るれば、衆生と諸佛と更に差別無し。但だ能く無心なる、便ち是れ（レ）究竟なり。學道の人、若し直下に無心ならずんば、累劫に修行するも終に道を成ぜず、（ソ）三乘の（ツ）功行に（ネ）拘繫せられて解脫を得ず。然して（ナ）此の心を證するに（ラ）遲疾あり、（ム）法を聞いて一念に便ち無心を得る者あり、（ウ）十信十住、十行十廻行に（ヰ）至つて、乃ち無心を得る者あり、十地に至つて乃ち無心を得る者あり、（ノ）長短無心を得れば乃ち住む、（オ）更に修すべく證すべき無し。（ク）實に所得なし、（ヤ）眞實にして虛しからず、（マ）一念にして得ると（ケ）十地にして得る者と、（フ）功用恰も齊しうして更に深淺無し。（コ）祇だ是れ歷劫枉げて（エ）辛勤を受くるのみ。惡を造り善

居士といふ。
（ス）性也。自性なり、染汚せざるが故に。
（イ）相也。有相の故に名あり、又形相なり。
（ロ）性相不異。內外異變一致するを云ふ。
（ハ）諸大。如上の。
（ニ）人皆。一切衆生、人人具足、箇箇圓成。
（ホ）卽是。人人爲心を離れず、諸菩薩の如く一切卽ち是なり。
（ヘ）今。今時。
（ト）自心。自己一心。
（チ）著相。有相に著して佛境を取る。
（リ）與道。大道と相背く。
（ヌ）恒河。恒河は四十里あり、沙は無量無數をいふ、此れより無心を說く。
（ル）諸佛。最勝なり。
（ヲ）釋梵。帝釋梵天等、その外つきそふもの三十二天。

（ワ）步履。行步履踐。
（カ）牛羊。下劣。
（ヨ）此心。喜ばず怒らず、內外木石、不動不搖。
（タ）離一切相。佛と衆生と珍寶と糞臭と。
（レ）究竟。大道。
（ソ）三乘。聲聞、緣覺、菩薩をいふ。
（ツ）功行。勤功修行。又功田行由。
（ネ）拘繫。執縛。
（ナ）此心。無心なり、證は藏本「証」に作る、已下同じ。
（ラ）遲疾。鈍根利根。
（ム）聞法。疾者は。
（ウ）十信云云。妙覺の位に進む五十二の位階あり、卽ち十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺の順を經、卽ち菩薩より佛に至るまでの順路なり。
（ヰ）有至。遲者、藏本には已下の九字なし。
（ノ）長短。遲疾。

を造る、皆是れ(テ)著相なり。相に著して(ア)惡を造るは、枉げて(サ)輪廻を受く、相に著して(キ)善を造るは、枉げて勞苦を受く。(ユ)總て言下に便ち自ら(メ)本法を認取せんに如かず。(ミ)此の法卽ち心なり、心外に法無し、此の心卽ち法なり、法外に心無し。(シ)心自ら無心なれば、(エ)亦無心なるもの無し。心を將つて心を無すれば、(ヒ)心却つて有と成る、(モ)默契するのみ。(セ)諸の思議を絕す、故に(ス)言語道斷、(イ)心行處滅と曰ふ。(ロ)此の心是れ(ハ)本源淸淨佛なり、(ニ)人皆是れ有り、(ホ)蠢動含靈と(ヘ)諸佛菩薩と(ト)一體にして異ならず、(チ)祇だ(リ)妄想分別するが爲に、種々の(ヌ)業果を造る。(ル)本佛上には實に(ヲ)一物なし、(ワ)虛通寂靜にして、(カ)明妙安樂なる而已。深く自ら悟入すれば、直下に便ち是れ(ヨ)圓

(オ)更無。休歇。
(ク)實。無心を得さいふさ雖も。
(ヤ)眞實不虛。一切の虛假を離るる故に。
(マ)一念。疾者。
(ケ)十地而得者。遲者。
(フ)功用。功德作用。
(コ)祇是。遲者は。
(エ)辛勤。勤辛勉勵。
(テ)著相。有相。
(ア)惡。種種の惡生、死の輪廻を受く。
(サ)輪廻。迷界の衆生が、三界六道に沈淪して、車輪の如く出生入死するこさ。
(キ)善。五戒十善。
(ユ)總。善相惡相に著せず。
(メ)本法。本源心法則ち無心の。
(ミ)此法。法心の規則なり、本心なり。
(シ)心自。慮知を用ひず。
(エ)亦無。無心に超越するなり。
(ヒ)心却。心の蹤跡を露す時は有心さなる。
(モ)默契。默識證契、眞の無心は。
(セ)絕諸思議。此の無心は思量議擬なし。
(ス)言語道斷。舌頭上に在らざるが故に。
(イ)心行處滅。知解を離るるが故に。
(ロ)此心。染汚の心にあらざるが故に。
(ハ)本源。一切迷悟凡聖等を超越するが故に淸淨なり。
(ニ)人皆。具足。
(ホ)蠢動含靈。一切の有情をいふ、蠢動は動搖のこさ。
(ヘ)諸佛。向上。
(ト)一體。同一本體、變異あらざる。
(チ)祇。凡夫。
(リ)妄想分別。外に向つて佛を求め悟を求む。
(ヌ)業界。善惡の業界。
(ル)本佛。本源淸淨佛。

滿㋟具足して更に㋹欠くる所無し。縱使ひ㋡三祇精進修行して㋡諸地位を歴るも、一念證する時に及んでは、只だ㋧元來自佛を證す。㋤向上に更に一物を㋶添得せず、㋰却つて歴劫の㋒功用を觀るに、總て是れ夢中の㋖妄爲なり。故に㋨如來云く「我れ㋔阿耨菩提に於て實に㋗所得なし、若し㋳所得あらば、㋮然燈佛は則ち我れに㋘授記を與へず」と。㋫又云く「㋙是の法は平等にして高下有ること無し、是れを菩提と名く」と。卽ち㋓此の本源清淨心と㋢衆生諸佛世界山河と、㋐有相にもあれ無相にもあれ、徧十方界と㋚一切平等にして㋖彼我の相なし。此の本源清淨の心、㋴常に㋦自ら㋯圓明にして、㋛偏く照すも、㋽世人悟らずして、只だ㋪見聞覺知を認めて心と㋲爲し、見聞覺知の覆ふ

㋾無一物。迷悟凡聖等。
㋻虛通寂靜。虛靈明虛、靈通體寂、又は融通寂照安靜。
㋕明妙安樂。不昧故に、明妙始覺たいふ、生死を絶するが故に安樂。
㋵圓滿。萬德を具す。
㋟具足。相好。
㋹欠。減なり。
㋡三祇は三阿僧祇劫の略、三無數劫のこと、菩薩が佛果を得る迄に經たまふ修行の年時なり、三祇百劫に於て。
㋡諸地位。五十二位。
㋧元來自佛。本元已來、自己佛心は他より來らず。
㋤向上。心佛は。
㋶不添。新には。
㋰却。證得後却つて。
㋒功用。修功行用。
㋖妄爲。妄想の所爲。
㋨如來云。金剛經の文。
㋔阿耨多羅三藐三菩提の略、無上正徧智、無上正等覺と譯す、佛陀の智德を稱する一名號にして、佛は絶對の智者、絶對の德者なる故に無上といひ、正徧といふ。
㋗無所得。無所得の無得なるが故に。
㋳有所得。奴を認めて郎と爲すなり。
㋮然燈佛。錠光佛、定光佛ともいふ、佛名、梵名は、提和竭羅、燈佛と譯す、又多く燃燈といふ、過去久遠の昔に出現し給ひし如來にして、釋尊に記莂を授けられたる師佛なりとす。
㋘授記。作佛の。
㋫又云。同じく金剛經の文。
㋙是法。心、生佛平等、高は佛、下は衆生、菩提は道なり。
㋓此本源。人人具有。
㋢衆生世界。有情と無情と。
㋐有相無相。明界と幽界と、

所と爲る。所以に(セ)精明の本體を觀ず。但だ直下に(ス)無心なれば、本體(イ)自ら現ずること(ロ)大日輪の虛空に昇り、徧く十方を照して更に(ハ)障碍無きが如し。故に(ニ)學道の人、唯だ見聞覺知を(ホ)認めて(ヘ)施爲動作す、見聞覺知を(ト)空却すれば、卽ち(チ)心路絕して(リ)入處無し、但だ見聞覺知の處に於て本心を認む。(ヌ)然も本心は見聞覺知に屬せず、亦見聞覺知を離れず。但だ見聞覺知の上に於て(ル)見解を起すこと莫れ、見聞覺知の上に於て念を動ずること莫れ、亦見聞覺知を離れて心を覓むること莫れ。亦見聞覺知を捨てゝ法を取ること莫れ。(ヲ)卽せず離せず(ワ)住せず著せざれば、(カ)縱橫自在にして道場に(ヨ)非ざること無し。世人諸佛は皆心法を傳ふと道ふことを聞いて、將に謂へり、(タ)心上に別に一法

(サ)一切平等。天地同根、萬物一體。
(キ)彼我相。我は差別。
(ユ)常。常住。
(メ)自。求めず修せず。
(ミ)圓。滿ちて缺けず、明は明亮不昧。
(シ)徧。偏頗なし。
(エ)世人。凡夫。
(ヒ)見聞覺知。眼耳了能、知識を本心となして。
(モ)爲。本心却つて覆は蓋なり。
(セ)精明。本心なり。
(ス)無心。一心の本體。
(イ)自現。倚證を借らず、露現。
(ロ)大日輪。喩なり。
(ハ)無障碍。十界成佛の面目。
(ニ)學道人。修學大道の。
(ホ)認。日用光中、意識の見聞覺知をば。
(ヘ)施爲。左之右之、又識蘊の作用、動轉造作。
(ト)空却。見聞覺知を嫌ふ。

(チ)心路。頑石の如く、又意識分別も及ばず、不思議大解脫の處。
(リ)無入處。悟入の。
(ヌ)然。見聞覺知の上に於て、本心を認むと雖も。
(ル)見解。知見解會。
(ヲ)不卽不離。見聞等。
(ワ)不住不著。見聞等。
(カ)縱橫。一切事上、天堂地獄。又云く、自性本心は。
(ヨ)無非。卽處處處。
(タ)心上。自己の。
(レ)將心。自心心法なり、騎レ牛尋レ牛。
(ソ)將心。頭上重レ頭。
(ツ)當下。言語分別を容れず。
(ネ)向外。額内に在るを知らず。
(ナ)當時。一に卽時と云ふ。
(ラ)如故。迷はざる時の如し。
(ム)依次第。五十二位の階級。
(ウ)亦無所得。一切事上に。
(ヰ)無依。依據なし、住著なし。

の證すべく取るべきありと。遂に㋹心を將つて法を覓む、心卽是法、法卽是心なるを知らず、㋞心を將つて更に心を求むべからず、千萬劫を歷とも終に得る日無からん。如かず㋡當下に無心ならんには。便ち是れ本法なり、力士の額內の珠に迷うて、㋧外に向つて求覓して周く十方に行けども、終に得ること能はざるが如し。智者は之を指せば㋤當時に自ら本珠を見ること㋶故の如し。故に學道の人、自の本心に迷ふて、認めて佛と爲さず、遂に外に向つて求覓して、功用の行を起して㋰次第に依つて證とす、歷劫勤求すとも永く道を成ぜず。如かず當下に無心ならんには。決定して一切の法本所有も無く㋒亦所得もなく、㋼依も無く住もなく、㋨能も無く所も無しと知りぬれば、㋔妄念を動ぜずして便ち菩提を證す。道を證する時に及んで、㋗只だ㋳本心の佛を證す。㋮歷劫の功用、並に是れ虛しく修するなり。力士の珠を得る時、只だ本額の珠を得て、外に向つて求覓するの力に關らざるが如し。故に㋘佛言はく、「我れ阿耨菩提に於て、實に所得なし」と。人の㋫信ぜざることを恐る、故に㋙五眼の所見、㋓五語の所言を引く。㋢眞實にして虛ならず、是れ㋐第一義諦なり。

㋨無能無所。自他。

㋔妄念。生佛迷悟。

㋗只。別物に非ずと、この字は藏本には祇に作る、已下同じ。

㋳本心佛。元來屋裏の本來自心。

㋮歷劫。證得上より見來れば。

㋘佛言。引證文、前に出づ。

㋫不信。信得及。

㋙五眼。肉眼、天眼、法眼、慧眼、佛眼、これを五眼といふ。

㋓五語。金剛經に云く、須菩提、如來是眞語者實語者、如語者、不誑語者、不異語者。

㋢眞實不虛。無所得の語。

㋐第一義諦。第二義の對、具には第一義門、又は第一義諦といふ、人の上よりいへば、言說を離れ、思慮を絕したる絕對の妙境に名づく。大集經に「第一義とは卽ち無上甚深の妙理なり、其の體湛寂、其の性虛融にして、名なく相なく、

學道の人、㋚疑ふこと莫れ、四大を身と爲す、㋖四大我無く、我も亦㋴主なし。故に知んぬ、㋱此の身我無く㋯亦主無きことを。五陰を心と爲せば、㋛五陰我無く亦主無し。故に知んぬ、此の心我無く㋽亦主なきことを、㋪六根六塵㋲六識和合す、生滅も㋝亦復た是の如し。㋜十八界㋑既に空ずれば、一切皆空ず、唯だ本心のみありて、㋺蕩然として清淨なり。㋩識食あり㋥智食あり、四大の身㋭饑瘡して患と爲る。㋬隨順供養して㋣貪著を生ぜざる、之を智食と謂ふ。㋠情を恣にして味を取り、妄に㋷分別を生じ、唯だ㋦口に適せんことを求めて、厭離を生ぜざる、之を識食と謂ふ。㋸聲聞は㋾聲に因つて得悟す、故に之を聲聞と謂ふ。㋻但だ自心を了ぜずして、㋕聲教の上に於て㋵解を起し、或は㋟神通に因り、或は㋹瑞相㋞言語㋡運動に因つて、菩提涅槃あることを聞いて、三僧祇劫修して、佛道を成ずるは㋧皆聲聞道に屬す、㋤之を聲聞佛と謂ふ。㋶唯だ直下に㋰頓に自心本來是れ佛なることを了じて、㋒一法の得べき無く、㋼一行の修ずべき無し、此れは是れ㋨無上の道なり、此れは是れ㋔眞如佛なり。學道の人、祇だ㋗怕らくは一念、有なれば卽ち㋳道と隔たる矣。㋮念々㋘無相、念々㋫

識を絶し相を絶す」と。此の無所得の道。

㋚莫疑。我が言を。

㋖四大。地、水、火、風、之れを四大といふ、色香味觸の四微に對するに因る、故に稱して四大と爲す。

㋴無主。四大中主處なし。

㋱此身。四大身をいふ。

㋯亦。我れも。

㋛五陰。色、受、想、行、識をいふ、陰は蓋なり。

㋽亦無主。我れも亦五陰中主處なし。

㋪六根。眼、耳、鼻、舌、身、意の六識の所依となりて、六境を認識せしむるもの、之れを六根といふ、能生なり。六塵は六境をいふ、卽ち六識の認識の對象たる客觀の事象なり、染汚なり。

㋲六識。五根五塵を五識と爲すと見て、五塵境に於て分別を

無爲なる、卽ち是れ佛なり。學道の人、若し(コ)成佛を得んと欲せば、(エ)一切の佛法、總て學ぶことを用ひざれ。唯だ(テ)無求無著を學べ、求むること無ければ、(ア)卽ち心生ぜず、著すること無ければ、(サ)卽ち心滅せず、不生不滅、(キ)卽ち是れ佛なり。八萬四千の法門は八萬四千の(ユ)煩惱に(メ)對す。祇だ是れ(ミ)敎化接引の門なり。(シ)本一切の法無し、(ユ)離は卽ち(ヒ)是れ法なり、離することを知る(モ)者は(セ)是れ佛なり。但だ一切煩惱を離るれば、是れ法の得べき無し。

學道の人、若し(ス)要訣を知ることを得んと欲せば、但だ(イ)心上に於て一物に著すること莫れ、(ロ)佛の(ハ)眞法身は、猶ほ(ニ)虛空の如しと言ふ。此れは法身卽虛空、虛空卽法身なるに喩ふ。常人は法身は虛空に徧く、虛空の中に處して、

起すを第六識と爲す。
(セ)亦復如是。十八界中我なし、亦四大五陰の如し。
(ス)十八界。六根と六境、六識とを總稱して十八界といふ。
(イ)旣空。我なき故に空なり。
(ロ)蕩然。高大廣遠の貌。
(ハ)有識食。八識は本心を養ふ。
(ニ)智食。法喜禪悅等。
(ホ)饑瘡。色身は饑を以て瘡となす、患は本心の患。
(ヘ)順。時節に隨順し、給は供給不足なく、養は生育。
(ト)不生貪著。一切事物の上に於て、貪求執着を生ぜず。
(チ)恣情。六識を。
(リ)分別。五塵坑。
(ヌ)求適口。五根中、口を擧げて四を攝す。
(ル)聲聞。小乘なり。
(ヲ)因聲。如來の聲敎に。
(ワ)但不了自心。これは聲聞の修行を述ぶ、自心は自己の本心なり。
(カ)聲敎。如來說法の。
(ヨ)起解。見解。
(タ)神通。如來の。
(レ)瑞相。六種の瑞相、天花等。
(ソ)言語。問答等。
(ツ)運動。行住坐臥。
(ネ)皆屬。是の如くの次第、階級修行。
(ナ)謂之。此の果の上には。
(ラ)唯直下。一超直入、如來地の法門なり。
(ム)頓了。喫茶喫飯の上に。
(ウ)無一法。悟の佛と、八萬法、法門中には。
(ヰ)修一行。五十二位中。
(ノ)無上道。諸道中。
(オ)眞如佛。眞如實相の田地。
(ク)一念怕。有所得念。
(ヤ)與道隔。無上道と隔歷す、無上道は不可得の故に。
(マ)念念。前念後念。
(ケ)無相。有相に著せざるない

法身を(ホ)含容すと謂ふ。法身卽虛空、(ヘ)虛空卽法身なることを(ト)知らず。若し定んで(チ)虛空ありと言はば、虛空是れ法身にあらず、若し定んで法身ありと言はば、法身(リ)是れ虛空にあらず。但だ(ヌ)虛空の解を作すこと莫れ、虛空卽法身なり、法身の解を作すこと莫れ、法身卽虛空なり虛空と法身と(ル)異相無く、佛と衆生と異相なく、生死と(ヲ)涅槃と異相無く、煩惱と菩提と異相なし。(ワ)一切の相を離る、卽ち是れ佛なり。凡夫は(カ)境を取り、(ヨ)道人は(タ)心を取る。心境雙び忘ず、乃ち是れ眞法なり。(レ)境を忘ずることは猶ほ易く、(ソ)心を忘ずることは至つて難し。(ツ)人敢て心を忘ぜざるは、(ネ)空に落ちて(ナ)撈摸無き處を恐る。空(ラ)本空無く、唯だ一眞法界のみなることを知らざるのみ。此の(ム)靈覺の性は、

ふ。

(ウ)無爲。有爲に著せざるを云ふ これが眞如佛なり。

(コ)成佛。直下に。

(エ)一切佛法。燒香禮拜看經等、文字言句を捨て去れよ、學得せぬがよいさ。

(ホ)無求無著。所求貪著。

(ア)卽心。有所得心不生。

(サ)卽心。淸淨心。

(キ)卽是佛。大般涅槃の故。

(ユ)煩惱。煩昏の法心神を惱亂す故にいふ。

(メ)對。煩惱對治の爲に法門を說く。

(ミ)敎化接引。衆生を敎化し、佛道に接引すること。

(シ)本無一切法。煩惱なければ則ち對治の法門もなし。

(ヱ)離。一切の諸法を離るればさ、これは煩惱等をいふ。

(ヒ)是法。心法をいふ。

(モ)者。猶ほ人さいふが如し。

(セ)是佛。直下。

(ス)要訣。法身を悟るの肝要妙訣。

(イ)心上。自己の心上。

(ロ)佛身。普賢行願品にあり。

(ハ)眞法身。法を體させるものの義、佛三身の一、法身佛なり無身無形の佛の靈覺をいふ、又本覺眞如、佛性の義にして、法界遍滿の理性、或は吾人の靈知靈覺に名くることあり、又法身無相の意、無相は一體平等にして、差別を絕するをいふ。

(ニ)如虛空。如は此の一如の如にして、似如の如に非ず、一如同體の義。

(ホ)含容。虛空に含容す。

(ヘ)虛空卽法身。定相なし。

(ト)不知。前言の如し。

(チ)言有虛空。一物體、虛空。

(リ)不是虛空。一物體の故に。

(ヌ)莫作虛空解。虛空無物の如き

無始より已來、（ウ）虛空と壽を同じうす、（ヰ）未だ曾て生ぜず、未だ曾て滅せず、（ノ）未だ曾て有ならず、（オ）未だ曾て無ならず、（ク）未だ曾て穢ならず、未だ曾て淨ならず、（ヤ）未だ曾て喧ならず、未だ曾て寂ならず、（マ）未だ曾て少ならず、未だ曾て老いず。方所無く内外無く、數量無く形相無く、（ケ）色象無く音聲無し。（フ）覓むべからず求むべからず、（コ）智慧を以て識るべからず、（エ）言語を以て取るべからず、（テ）境物を以て會すべからず、（ア）功用を以て到るべからず、諸佛菩薩と一切蠢動含靈と、同じく此れ大涅槃の性なり。（サ）性は即ち是れ心、心即ち是れ佛、佛即ち是れ法なり。一念も（キ）眞を離るれば（ユ）皆妄想と爲る、（メ）心を以て更に心を求むべからず、（ミ）佛を以て更に佛を求むべからず、（シ）法を以て更に法を求むべから

の解を作し了ることなかれ。
（ル）無異相。一如にして、しかも異相なしと、已下同じ。
（ヲ）涅槃。泥洹、涅槃那ともいふ、梵音 Nirvana、滅度、圓寂、寂滅等の譯あり、又無爲、無作、無生等の稱あり、迷妄を脫し眞理を窮め、寂滅無爲の法性を究めて、不生不滅の法身の眞證に歸するをいふ、又さとりのこと。「煩惱卽菩提、生死卽涅槃」といふが如し、又釋尊の入滅を涅槃といふ。
（ワ）一切相。異相なり。
（カ）取境。佛と衆生と。
（ヨ）道人。學道の人。
（タ）取心。取るときは則ち一物體を成す、未だ是れ十成ならず。
（レ）忘境。粗法の故に、
（ソ）忘心。微細の故に、法執は忘じがたし。
（ツ）人。學道の人。
（ネ）落空。心を忘るるとは。

（ナ）無撈摸。撈は取、摸は捉なり。
（ラ）本無空。本來空名、相なし。
（ム）靈覺性。妙明の性。
（ウ）與虛空。所謂無量壽如來。
（ヰ）未曾生。生滅を離るるが故なり。
（ノ）未曾有。有無を離るるが故なり、無形無相。
（オ）未曾無。眞空妙有。
（ク）未曾穢。淨穢を離るるが故に。
（ヤ）未曾喧。動靜を離るるが故なり。
（マ）未曾少。年月を離るるが故なり。
（ケ）無色象。顯色影象、藏本「像」に作る。
（フ）不可覓。非ならざるに從ふ。
（コ）以智慧。知慮を離るるが故に。
（エ）以言語。言詮を以てすべからざるが故に。
（テ）以境物。一機一境、山川國土草木。

ず。故に㋽學道の人、直下に無心にして㋪默契するのみ。㋲心を擬すれば卽ち㋝差ふ、㋜心を以て心を傳ふ、是れを㋑正見と爲す。㋺愼んで㋩外に向つて境を逐ふこと勿れ、境を認めて心と爲すは、是れ賊を認めて子と爲すなり、㋥貪瞋癡あるが爲に、卽ち㋭戒定慧を立つ。本煩惱無くんば、焉ぞ菩提あらん。故に㋬祖師云く、「佛㋣一切の法を說くことは、㋠一切の心を除かんが爲なり、我れに一切の心無くんば、何ぞ一切の法を用ひん」と。本源淸淨佛の上に、更に㋷一物を著けず。譬へば虛空の無量の珍寶を以て莊嚴すと雖も、㋦終に住むること能はざるが如し。佛性は虛空に同じ、無量の功德智慧を以て莊嚴すと雖も、㋸終に住むること能はず。但だ㋾本性に迷ふて轉た㋻見ざるのみ。所謂心

㋐以功用。功夫作用、又は功行力用なり。
㋚性卽是心。此の涅槃の性は眞心。
㋖離眞。眞心。
㋴皆爲妄想。一切作業。
㋱以心。學道の人。心卽佛の故に。
㋯以佛。自己の卽佛の故に。
㋛以法。一切諸法眞法の故に。
㋽學道人。外に向つて求むべからざるが故に。
㋪默契。默識潛契、心念言語の相を離る。
㋲擬心。擬議思量、擬は議なり、揣度して以て待つなり。
㋝差。差過。
㋜心。自己なり、此の心卽佛心の故なり。
㋑正見。正智見。
㋺愼。學道の人。
㋩向外逐境。心外に六境を、見聞覺知等の。

㋥貪瞋癡。大病なり。
㋭戒、定、慧、之れを三學といふ、華嚴疏に曰く、「惡を止むるを戒といひ、慮を靜むるを定といひ、滯らざるは慧といふ」と。又梵網經に云く、「持戒を平地となし、禪定を屋宅となし、能く智慧の光を生ず」と。是れは對治の藥なり。
㋬祖師云。未考とあり、或は達磨大師の言か。
㋣一切法。對治法。
㋠一切心。妄想心。
㋷一物。迷悟生佛。
㋦終不能住。虛空の中珍寶を留住すること能はず。
㋸終不能住。佛性の上に一物を著せず、故に功德智も用不着。
㋾迷本性。外境を逐ふて。
㋻不見。佛性を見ざるのみ。
㋕遇境卽有。此の心境に遇へば有とは現成、無とは空寂なり。
㋵轉。傳燈には轉を專と作す。

地の法門とは、萬法皆此の心に依つて建立す。㋕境に遇へば卽ち有、境なければ卽ち無なり。淨性の上に於て、㋵轉じて㋟境の解を作すべからず。言ふ所の定慧㋹鑑用、㋞歷歷㋡寂寂㋧惺惺たり、見聞覺知は㋤竝に是れ境上に解を作す。暫く㋶中下根の人の爲に說くことは卽ち得たり。若し㋰親證を欲せば、㋒皆此の如きの見解を作すべからず。㋼盡く是れ境の㋨法なり。沒處有れば㋔有地に沒す、但だ一切の法に於て㋗有無の㋳見を作さざる、卽ち見法なり。』

九月一日師、休に謂つて曰く、『達磨大師㋮中國に到つてより、㋘唯だ一心を說き㋫唯だ一法を傳ふ。㋙佛を以て佛を傳へて㋓餘佛を說かず、㋢法を以て法を傳へて㋐餘法を說かず㋚法は卽ち不可說の法、㋖佛は卽ち不可取の佛な

㋟境解。迷悟の境の。
㋹鑑用。明鑑作用。
㋞歷歷。現成分明、又歷歷孤明。
㋡寂寂。寂靜時に寂跡なし。
㋧惺惺。染汚せず、さとるなり。
㋤竝是境上。竝は藏本「皆」に作る、迷悟の境上。
㋶中下根人。轉迷開悟は。
㋰親證。卽心是佛。
㋒如此見解。轉迷開悟、傳燈には「見」の字なし。
㋼盡是境。自レ門入者不ㇾ家珍と、傳灯には境の下に「縛」の字あり。
㋨法有沒處。法に於て沒入不通の處あれば有見地に沒入するが故に、纔に無と云ふ處あれば有に沒すぞ、沒は卽ち無の義なり、沒溺心に見ろときは、纔に菩薩聲聞等には趣向する處あれば、有に沒するぞ。
㋔有地。境有。
㋗有無。境有無。

㋳見。性見。也の字は傳燈にはなし。
㋮中國。達磨西來の年月、諸傳各別なり、或は普通元年九月、或は同八年、或は普通七年九月十一日と。
㋘唯說一心。直指人心。
㋫唯傳一法。正法眼藏。
㋙以佛傳佛。猶ほ以心傳心といふが如し。
㋓不說餘佛。只だ直心を說いて餘心を說かず。
㋢以法傳法。正法を以て正法を傳ふ、一法といふが如し。
㋐不說餘法。第二第三。
㋚法卽。非口所詮なり。
㋖佛卽。非心所識なり。
㋴是本源。各自人人。
㋱唯此一事、淸淨心なり。法華の文なり。
㋯般若。梵音Prajna也、智慧と譯す、法界の事理を照して、能く一切の眞性に通達する靈

り。乃ち(ユ)是れ本源清淨の心なり。(メ)唯だ此の一事實にして、餘の二は卽ち眞に非ず、(ミ)般若を慧と爲す、此の慧は卽ち無相の本心なり。凡夫は(シ)道に趣かず、唯だ(エ)六情を恣にして乃ち六道を行ず。學道の人、一念も(ヒ)生死を計れば卽ち魔道に落つ。一念も(モ)諸見を起さば卽ち(セ)外道に落つ、生ありと見て(ス)其の滅に趣くは卽ち(イ)聲聞道に落つ、生ありと見ずして唯だ滅ありと見ば、卽ち(ロ)緣覺道に落つ。(ハ)法本より不生、今も亦滅無し。(ニ)二見を起さず、(ホ)厭はず忻はず、一切の諸法、(ヘ)唯だ是れ一心なり。然る後乃ち佛乘と爲す。

凡夫は皆(ト)境を逐うて心を生ず、心遂に(チ)忻厭す。若し境無からんことを欲せば、當に(リ)其の心を忘ずべし。心忘ずれば卽ち(ヌ)境空なり、

智をいふ。

(シ)不趣道。無相の大道に趣向せず。

(エ)六情。六根識情。

(ヒ)生死。有生有死。

(モ)諸見。有無迷悟の。

(セ)外道。無は斷見、有は常見の故に。

(ス)趣其滅。滅は寂滅、趣は生を厭ふ。

(イ)聲聞。二乘、三乘、五乘の一、梵語舍羅婆迦の譯、佛の敎誨の聲をききて悟る人をいふ意。佛の言敎を聞き、或は佛の遺敎によりて四諦の理を觀じ、三生六十劫の修行を經て、阿羅漢を證する聖者をいふ。

(ロ)緣覺道。三乘、また二乘の一、梵音の辟支佛陀(プラトエーカ、ブッド。)の意譯さす、十二因緣の法を觀じて、我執を除き涅槃に悟入す、十二因緣を觀ずるを緣さして覺了する

(ハ)法本。法心は。が故に名づく。

(ニ)二見。生死なり。

(ホ)不厭。生を厭ふは寂を忻はず、藏本には「欣」に作る。

(ヘ)唯是一心。一心の所見を徹見す、さとり悟つて。

(ト)逐境生心。前境差別心、已下境の字同じ。

(チ)忻厭。よろこび、又はいさふを云ふ。忻は喜、厭は惡。

(リ)其心。妄心。

(ヌ)境空。所對境。

(ル)心滅。能對心。

(ヲ)不忘心。能對心。

(ワ)除境。所對境。

(カ)紛擾。心みだろ。

(ヨ)心亦不可。唯心も元來不可得。

(タ)不見有。諸法皆空を了得す。

(レ)絕意。所求の。

(ソ)三乘。聲聞、緣覺、菩薩乘これなり。

境空なれば卽ち㋸心滅す。若し㋾心を忘ぜずして但だ㋻境を除かば、境除くべからず、祇だ益㋕紛擾す。故に萬法唯心、㋵心も亦不可得なり、復た何をか求めんや。

般若を學する人は、一法の得べき㋟あるを見ず、㋹意を㋞三乘に絕す、唯だ㋡一眞實にして證得すべからず。我れ㋥能く證し能く得ると謂ふは、皆㋤增上慢の人なり。㋶法華會上に㋰衣を拂つて去りし者、㋒皆斯の徒なり。故に㋼佛言はく、「我れ菩提に於て實に所得なし」と、默契するのみ。

凡そ人㋨終らんと欲する時に臨んで、但だ㋔五蘊皆空にして、㋗四大我無く、㋳眞心無相にして、去らず來らずと觀ずべし。生ずる時、㋮性も亦來らず、死する時性も亦去らず、㋘湛然圓寂にして、心境一如なり。但だ能く是の如く直下に頓に了ずれば、㋫三世の拘繫する所と爲らず、便ち是れ出世の人なり。切に分毫の㋙趣向あることを得ざれ。若し㋓善相の諸佛來迎し、及び種種現前するを見ても、亦㋢心の隨ひ去ること無し。若し㋐惡相種種に現前するを見ても、亦㋚心の怖畏すること無し。但だ自ら㋖心を忘じて、㋙法界に同じければ、便ち㋱自在を得るなり、此れ卽ち是れ㋯

㋡一眞實。一心を云ふ、此の眞心は不可得の故に。
㋥能證能得。證すべきなく得べきなし。
㋤增上慢人。增上心を以て法を慢ずる人。
㋶法華會上。方便品會上なり。藏本には此の四字なし。
㋰拂衣。五千人。
㋒皆斯徒也。能證能得を謂ふ人なり。
㋼佛言。金剛經の文。
㋨欲終。命終の時。
㋔五蘊。色受想行識の五蘊は、皆畢竟空なりとの意。
㋗四大。主宰なきが故。
㋳眞心。眞實本心。
㋮性。心性。
㋘湛然圓寂。心識則ち自性、水の動ぜざるが如く湛然。圓寂は缺けず喧ならず。
㋫三世。生死。
㋙趣向。佛を求め悟を求む趣向

要節なり。』

十月八日師、休に謂つて曰く、『㋛化城と言ふは、二乘及び十地等覺妙覺、皆是れ權に㋞接引を立するの敎、並びに化城と爲す。寶所と言ふは、乃ち㋪眞心本佛自性の寶なり。此の寶は㋲情量に屬せず、建立すべからず、㋝佛も無く衆生も無く、㋜能も無く所も無く、何處にか城あらん。若し此れ既に是れ化城ならば、何の處をか㋑寶所と爲さんと問はば、寶所指すべからず、指せば卽ち方所あり、眞の寶所に非ざるなり。故に㋺在近と云ふのみ。定量して之を言ふべからず、但だ㋩當體之を㋥會契するは卽ち是なり。

㋭闡提と言ふは信不具なり。一切六道の衆生、乃至二乘㋬佛果あることを信ぜざる、皆㋣

心。
㋓善相。命終の時、如來來迎、天花雨ふる等。
㋢無心隨去。善相に隨喜する、みな是れ魔事なり。
㋐惡相。火車惡鬼等なり。
㋚無心怖畏。夢幻なり、三塗地獄、頓に現ずるとも。
㋖忘心。慮知心。
㋙法界。宇宙一切萬有の諸法にして、界とは之れを包含する無邊無際の大境界とす。一切衆生、色心の本體にして、有情非情悉く此の體上より顯出するなり。又一眞法界ともいふ。
㋱自在。生死岸頭。
㋯要節。臨命終の肝要節目なり。
㋛化城。方便門なり。法華七喩の一、法華化城喩品に出づ。衆人寶所に行かんとして、旅途の險惡に疲る。先達之れを見て一計を立て、神通力を以て假りに一の大城を化作して曰く、「是れ寶所なり」と、衆人乃ち喜び入りて休息す、先達衆人の疲勞の去りたるを見て、今の化城を滅し、再び眞の寶所に至らしむとあり。
㋞立接引。中下根機の接取導引。
㋪眞心本佛。等覺妙覺化城に非ず。
㋲情量。情識度量。
㋝無佛。心佛衆生の假名なし。
㋜無能無所。對待を絕するが故に。
㋑寶所。十方世界、沙門の一隻眼。
㋺在近。寶所在近と脚下底。
㋩當體。頭上脚下。
㋥會契。入と證と。
㋭一闡提の略。又一闡提伽、一闡底柯、一顛伽ともいふ、斷善根、信不具と譯す。本來解

之を斷善根闡提と謂ふ。菩薩とは深く佛法あることを信じ、大乘小乘あることを見ず、佛と衆生と同一法性なる、乃ち之を善根闡提と謂ふ。大抵（チ）聲教に因つて悟る者、之を聲聞と謂ふ。（リ）因緣を觀じて悟る者、之を緣覺と謂ふ。若し（ヌ）自心の中に向つて悟らざれば、（ル）成佛に至ると雖も、亦之を聲聞佛と謂ふ。學道の人、多く（ヲ）教法の上に於て悟つて、心法の上に於て悟らずんば、歷劫に修行すと雖も、是れ（ワ）本佛にあらず。若し（カ）心に於て悟らず、乃至教法の上に於て悟らば、即ち（ヨ）心を輕くして（タ）教を重んずるなり。遂に（レ）塊を逐ふと成す。本心を忘るるが故に、但だ（ソ）本心に契ふて（ツ）法を求むることを用ひざれ、心即ち法なり。

凡そ人多く（ネ）境、心を礙へ、（ナ）事、理を礙ふる

脫の因なく、成佛の見込なきもの、無性有情のもの、又成佛することは甚だ難けれども佛威神力に依りて、畢には成佛するものを有性闡提、又を斷善根と名づく、又菩薩、衆生濟度の爲、故らに成佛せざるものを大悲闡提と名づく。

（ヘ）佛果。中道實相等、大乘の佛果。

（ト）謂之善根闡提。法性を認めて超佛越祖の大道を信ぜざるが故に。

（チ）聲教。四諦の。

（リ）因緣。十二因緣を。

（ヌ）自心。自己心上。

（ル）至成佛。二乘涅槃。

（ヲ）教法。古今多くの人は聲教の法に。

（ワ）本佛。本源自在の、藏本には終の字、不の字の上にあり。

（カ）於心。自己心上。

（ヨ）輕心。自己の本心。

（タ）重教。他の聲教を。

（レ）逐塊。文字言句をばいふ、狂狗逐塊の如し。

（ソ）契本心。自己の本心に契當す。

（ツ）求法。他の法。

（ネ）境礙。前境の聲色は本心を礙へ。

（ナ）事礙。外事內理を礙ふと。

（ラ）屏。除なり、斥なり。

（ム）心礙。前坑を染汚するなり、前坑は無情の故に、心を礙へず。理礙は內理外事を生ず。

（ウ）境自空。前境自然空寂なり。

（ヰ）理寂。內理寂靜。

（ノ）倒用心。坑心を礙へ、事理を礙ふると思ふは顚なり。

（オ）人。學人をいふ。

（ク）空。空見。

（ヤ）自心。然るに。

（マ）事。相心は識心。

（ケ）虛空。一切を染汚せず。

（フ）內外。理事。

と爲うて、常に境を逃れて以て心を安んじ、事を(ラ)屛てて以て理を存せんと欲す。知らず、乃ち是れ(ム)心、境を碍へ、理、事を碍ふることを。但だ心をして空ならしむれば、(ウ)境自ら空なり、但だ(ヰ)理をして寂ならしむれば、事自ら寂なり、(ノ)倒に用心すること勿れ。凡そ(オ)人多く心を空ずることを肯はざる、(ク)空に落ちんことを恐れてなり。(ヤ)自心本空なることを知らず。愚人は(マ)事を除いて心を除かず、智者は心を除いて事を除かず。菩薩は心(ケ)虛空の如くにして、一切倶に捨てて、所作福德、皆貪著せず。然して捨に三等あり、(フ)內外身心、一切倶に捨てて、(コ)猶ほ虛空の如くにして取著する所なし。然る後、(ヱ)方に隨つて物に應ずれども、(テ)能所皆忘ず、是れを大捨となす。若し(ア)一邊、道を行じ德を布き、(サ)一邊に旋捨てて(キ)希望の心無き、是れを中捨となす。若し廣く衆善を修して、(ユ)希望する所あれども、法を聞いて(メ)空を知りて、遂に乃ち(ミ)著せざる、是れを小捨と爲す。大捨は火燭の前にあるが如く、更に迷悟無し、中捨は火燭の(シ)傍に在るが如く、或は(ヱ)明或は暗、小捨は火燭の後に在るが如く、(ヒ)坑穽を見ず。故に菩薩は心、虛空の如くにして、一切倶に捨つ。過去心不可

(コ)猶。其の心なほ。
(ヱ)隨方應物。方所萬物に應化す。又隨方は度生說法　應物は現形如水中月。
(テ)能所。化我と化他と。
(ア)一邊行道。猶ほ一方といふが如し、十方に通ずることを能はず、佛道を修行して。
(サ)一邊旋捨。一切を捨つる能はず。
(キ)希望心。執着心。
(ユ)所希望。衆善。
(メ)知空。諸法空にして、不可得なり。
(ミ)不着。諸法に。
(シ)在傍。十方に通ずることを能はず、故に傍といふ。
(ヱ)明暗。一方を明し、一方を暗す。
(ヒ)坑穽。面前の坑穽、迷悟凡聖有無等。
(モ)迦葉。前集に見ゆ、之を略す。
(セ)以心印心。佛心を以て祖心を

得なるは是れ過去の捨、現在心不可得なるは是れ現在の捨、未來心不可得なるは是れ未來の捨、所謂三世倶に捨するなり。如來、法を㋲迦葉に付してより已來、㋝心を以て心を印して、㋜心心異ならず、㋑印、空に著くれば卽ち印、文を成さず、㋺印、物に著くれば卽ち印、法を成さず。故に心を以て心を印して、心心異ならず。㋩能印所印、倶に㋥契會し難し、故に得る者少し。㋭然して㋬心卽ち無心なれば、得も卽ち無得なり。

佛に三身あり、法身は㋣自性虛通の法を說き、報身は一切淸淨の法を說き、㋠化身は六度萬行の法を說く。法身の說法は、言語音聲、形相文字を以て求むべからず、所說なく所證なし、自性虛通なるのみ。㋷故に曰く、法の說くべき無し、是れを說法と名くと。㋦報身化身は、皆㋸機に隨つて感現す、所說の法も亦㋾事に隨ひ根に應じて、以て㋻攝化を爲す。皆㋕眞法に非ず。故に曰く、報化は㋵眞佛に非ず、亦㋟說法者にあらずと。

㋹言ふ所同じく是れ一精明、分つて六和合と爲る。㋞一精明とは一心なり、六和㋡合とは六根なり。此の六根各塵と合す、眼と色と合し、耳と聲と合し、鼻と香と合し、舌と味と合し、身と觸と合し、㋤意と法と合す。

印す。
㋜心心不異。佛心祖心、同一眞心の故に。
㋑印著空。空劫に落ちて、今時の文彩を顯さず。
㋺印著物。今時の事相に著して、眞理の法體を欠く。
㋩能印所印。然るに。
㋥難契會。佛、迦葉を得、達磨、二祖に遇ふが如きは、實に千歲一遇なり。
㋭然。縱ひ心を以て心を印すと云ふと雖も。
㋬心卽。能印心無心なれば、所印心も亦無得なり。
㋣自性虛通。說くといふと雖も、言語音聲を以てするに非ず、旣に法身と云ふときは、自性虛通の法顯れ去る。
㋠化身。言說を以てす、應身化現の故に化身と云ふ、又應身といふ。
㋷故曰。金剛經に。

(ナ)中間に(ラ)六識を生じて十八界と爲る。若し十八界、(ム)所有なしと了ぜば、六和合を束ねて一精明と爲す。一精明とは卽ち心なり。(ウ)學道の人、皆(ヰ)此を知れども、但だ一精明、六和合の(ノ)解を作すことを免るゝこと能はず。遂に法縛を被り、(オ)本心に契はず、如來世に現じて、一乘の眞法を說かんと欲すれども、則ち衆生信ぜずして、(ク)謗を興し苦海に(ヤ)沒す。若し都べて說かずんば、則ち(マ)慳貪に墮せん。衆生の爲に溥く(ケ)妙道を捨てず、(フ)遂に方便を設けて三乘ありと說く。乘に(コ)大小あり、(エ)得に淺深あり、皆(テ)本法に非ず、(ア)故に云く、「唯だ(サ)一乘道あり、(キ)餘の二は則ち眞に非ず」と。然れども終に(ユ)未だ一心の法を顯すこと能はず、故に(メ)迦葉を召して法座を同じうして、別に(ミ)一心を付

(ヌ)報身。因地の修行の德に報ゆ、果身故に報身。
(ル)隨機感現。衆生の機に隨つて感應化現す。
(ヲ)隨事應根。事相機根。
(ワ)攝化。故に大小乘、四教、五時等の差別あり。
(カ)非眞法。引攝の法の故に。
(ヨ)非眞佛。因に報じ機に應じて化現するが故に。
(タ)非說法。唯だ是れ方便說と說くと雖も。
(レ)所言。楞嚴經文殊の偈。
(ソ)一精明者一心也。已下釋文なり。
(ツ)合。故に和合といふ。
(ネ)意與法。一切意に對する所知の法を法と名く。
(ナ)中間。根塵中間、分別識を生ず。
(ラ)生六識。眼色を見て分別し、耳聲を聞いて分別する等。
(ム)無所有。元來四大等。假和合相の故に。

(ウ)學道人。今日の。
(ヰ)知此。一精明と爲すと知るといへども。
(ノ)解。敎相判釋、則ち情解。
(オ)本心。精明、契は當なり。
(ク)興謗。却つて誹謗を興す。
(ヤ)沒。誹謗佛法と爲すなり。
(マ)慳貪。衆生。
(ケ)妙道。一乘。
(フ)遂。中下根の爲めに。
(コ)有大小。中根の爲に大を說き下根の爲に小を說く。
(エ)得有淺深。衆生了得、淺は下根、深は中根。
(テ)非本法。方便法門の故に。
(ア)故云。法華經の文、前に出づ。
(サ)一乘。眞法。
(キ)餘二。大小等。
(ユ)未能顯。機根に隨つて說くと雖も以心傳心の故に。
(メ)召迦葉。付法藏因緣經の一に出づ、世尊半座を分ち給ふ。

して言說の法を離る。此の㋛一枝の法を㋽別に行ぜしむ、若し能く㋪契悟せば、便ち佛地に至らん矣。」

㋲問ふ、「如何が是れ道、如何が修行せん。」師云く、「㋝道は是れ何物ぞ、汝修行せんと欲すや。」問ふ、「㋜諸方の宗師、相承して參禪學道するは如何。」師云く、「鈍根の人を㋑接引するの語なり、㋺未だ依憑すべからず。」云く、「此れ既に是れ鈍根の人を接引する語なり、未審し上根の人を接するに、復た何の法をか說く。」師云く、「若し是れ上根の人ならば、何の處にか更に㋩他に就いて㋥他を覓めん、自己すら尙ほ不可得なり。何に況んや更に㋭別に法有つて㋬情に當らんや。見ずや、敎中に云く、㋣法法何の狀ぞと。」云く、「若し此の如きんば、則ち都べて㋠求覓を要せざらんや。」師云く、「若し㋷與麼ならば則ち㋦心力を省く。」云く、「是の如くならば渾べて㋸斷絕となる、㋾是れ無なるべからざらんや。」師云く、「㋻阿誰か㋕他をして無ならしむ。㋵他は是れ阿誰ぞ、儞他を覓めんと擬すや。」云く、「既に覓むることを許さずんば、何が故ぞ、又他を斷ずること莫れと言ふ。」師云く、「㋟若し覓めずんば便ち休せん、卽ち誰か㋹儞をして斷ぜしむ。儞目前の虛空を見

この緣は前卷に出づ。

㋯一心付言說の法。正法眼藏涅槃妙心、卽ち直指人心見性成佛の法なり。世尊揚眉瞬目、既是拖泥滯水。一本「別付二一心一離二言說法一」を「離二人心一付二言說法一」に作る。

㋛一枝法。金波羅華を指す。

㋽別行。敎外別傳。

㋪契悟。直下に。

㋲問如何。以下の文は古尊宿錄卷の二にあり。

㋝道是何物。道は是れ人人圓通、何ぞ他に向つて修行せんと欲するや。

㋜諸方宗師。此の僧、人人脚下底、七通八達なるを了ぜず。

㋑接引。祖師慈悲。

㋺未可依憑。眞箇の衲僧は。

㋩就他。修行なり、異本には「就人」に作る、又自己卽心卽佛なるに。

㋥覓他。悟道。

るに、(ソ)作麼生か他を斷ぜん。」云く、「此の法便ち虛空に同じきことを得べけんや否や。」師云く、「虛空早晩儞に向つて、(ツ)同あり異ありと道ふ、我れ暫く此の如く說く、儞便ち這裏に向つて解を生ず。」云く、「應に是れ人の與に(ネ)解を生ぜざるべしや。」師云く、「我れ曾て(ナ)汝を障へず、要且つ(ラ)解は情に屬す、情生ずれば(ム)智隔たる。」云く、「(ウ)這裏に向つて情を生ずること莫くんば是なりや否や。」師云く、「若し情を生ぜずんば、阿誰か是と道はん。」

問ふ、「纔かに和尙の處に向つて言を發すれば、什麼と爲てか便ち(ヰ)話墮すと道ふ。」師云く、「汝自ら是れ(ノ)語を解せず、人に什麼の墮負か有らん。」

問ふ、「向來如許多の言說は、皆是れ(オ)抵敵の

(ホ)別有法。心外に別に悟道の法あらん。
(ヘ)當情。學人。
(ト)法法。世法佛法、何狀とは畢竟不可得なり。
(チ)求覓。佛を求め道を覓む。
(リ)若與麼。大道元來求覓すべからざるを知る時。
(ヌ)省心力。工夫と修行と。
(ル)斷絕。修行せず道を求めず。
(ヲ)是無。斷無見。
(ワ)阿誰。これ宋代の俗語。
(カ)他無。人人具足底。
(ヨ)他是。高著眼。
(タ)若不覓。馳求の心歇得せばなり、直下大道全體。卽の字、藏本には「休」の字に作る。
(レ)敎儞。元來斷滅に非ず。
(ソ)作麼生。什麼生、做麼生、似麼生等の文字を以て寫す、宋朝以後、支那俗間に用ひられたる疑問詞なり、如何、どうだ、どうした、如何なるわけ等の義に用ふ。
(ツ)有同有異。虛空元來道中、一物體何ぞ同異を論ぜんや。
(ネ)生解。同異の解也、知解情解。
(ナ)障汝。障知せず。
(ラ)解情。知解識情。
(ム)智隔。眞智隔歷。
(ウ)這裏。這は者に作るべし、この大道に向つて。
(ヰ)話墮。敗闕の義なり、道の字、藏本に「言」に作る、什麼の字、「甚」に作る、已下皆同じ。
(ノ)不解語。我が語をなり、人にとは人人向上那一人をいふ。
(オ)抵敵。相敵對の義。
(ク)實法無顚倒。一言半句、實法に非ざるはなし、然して指示せずと云ふ、これ顚倒なり。
(ヤ)什麼實法。顚倒に非ざるが故に、元來實法の人に與へて說くなし。
(マ)和尙答處。此の僧我見未だ脫

語なり、都べて未だ曾て實法の人に指示すること有らず。」師云く、「(ク)實法には顚倒なし、汝今問處に自ら顚倒を生ず、(ヤ)什麽の實法をか覓めん。」云く、「既に是れ問處に自ら顚倒を生ず、(マ)和尙の答處如何」と。師云く、「儞且つ(ケ)物を將つて面を照して看よ、他人を(フ)管すること莫れ。」又云く、「只だ箇の痴狗の如くに相似たり、(コ)物動ずる處を見て便ち吠ゆ、風草木を吹くも也た(エ)別ならず。」又云く、「我が此の禪宗、(テ)從上相承してより已來、曾て人をして知を求め解を求めしめず。只だ學道と云ふも、早く是れ(ア)接引の詞なり。然して(サ)道も亦學ぶべからず、情に(キ)學解を存すれば、却つて(コ)迷道と成る。道に方所なきを大乘の心と名く。此の(メ)心は內外中間に在らず、實に方所なし。第一に知解を作すことを得ざれ、只だ是れ汝が(ミ)如今の(シ)情量の處を說く。情量若し盡きなば、(エ)心に方所なし、(ヒ)此の道は天眞にして(モ)本名字無し、只だ世人(セ)識らずして、迷うて(ス)情中に在るが爲に、所以に諸佛(イ)出來して(ロ)此の事を說破す。儞諸人の(ハ)了ぜざることを恐れて、(ニ)權に道の名を立つ。(ホ)名を守つて解を生ずべからず。(ヘ)故に云く、(ト)魚を得ては筌を忘ずと。(チ)身心自然に(リ)道に達し心を

せず。
(ケ)持物。自己を返照するの義。一本。將を「持」に作る。
(フ)莫管。顚倒。
(コ)物動。師家の言句に就いて是非を爭ふ、狂狗の如しと。
(エ)不別。又吠なり。
(テ)上相承。佛祖師資。
(ア)接引。中下根。
(サ)道亦。道は元來人人具足、學得せざる底の故に。
(キ)學解。學知了解。
(コ)成迷道。道と遠うして遠し矣。
(メ)心不在內外。細入ニ無間一、大絕ニ方所一。
(ミ)如今情。知を求め解を求む。
(シ)一本、「只從說ニ汝如今情量所レ盡爲レ道」に作る。
(エ)心無方所。迷悟凡聖。
(ヒ)此道。無方所の。
(モ)本無名字。從來共住、不レ知レ名。
(セ)不識。大道を。

識つて(ヌ)本源に達するが故に、號して(ル)沙門と爲す。沙門の(ヲ)果とは(ワ)慮を息むるに從つて成ず、學に從つて得るにあらず、汝如今心を將つて心を求め、(カ)他の家舍に傍ふ、只だ學取せんと擬す、(ヨ)什麽の得る時か有らん。古人は(タ)心利にして纔に一言を聞いて(レ)便乃ち(ソ)絕學す、所以に喚んで(ツ)絕學無爲の閑道人と作す。(ネ)今時の人は只だ多知多解を得んと欲して、廣く文義を求むるを、喚んで修行となす。知らず、多知多解は却つて(ナ)壅塞と成ることを。唯だ多く兒に(ラ)酥乳を與へて喫せしむることを知つて、(ム)消と不消と都べて總に知らず、(ウ)三乘學道の人、皆是れ此の(ヰ)樣なり。盡く(ノ)食不消者と名く。所謂知解消せずんば皆(オ)毒藥と爲る。(ク)盡く生滅の中に向つて(ヤ)取る。眞如の中には都べて

(ヌ)情中。知解。
(イ)出來。出世。
(ロ)此事。一大事。
(ハ)不了。天眞の道を。
(ニ)權。方便。
(ホ)守名。道を名とす、元來權方便の故に。
(ヘ)故云。莊子にいふ。
(ト)得魚忘筌。人具足底じやに道名を忘るべし。
(チ)身心。不レ假ニ粧粉一轉風流。
(リ)達道識心。道は假名、自己本來眞心をしらば。
(ヌ)達本源。人人の本源。
(ル)沙門。桑門、沙門那、室囉摩拏、舍囉摩拏、沙迦摩囊ともいふ。何れも梵音Sramanaの轉化なり、勤息、又は止息と譯す、諸の善法を勤修して諸の悪法を止息するものの義、出家して佛道を修むる人、僧侶のこと。
(ヲ)果。極果。

(ワ)慮。知慮學解。
(カ)他家舍。自己の家珍を知らず。
(ヨ)什麽得時。一心止まざれば萬行空しく施す。
(タ)心利。穎利。
(レ)便乃。言下に。
(ソ)絕學。肇法師の寶藏論に云く、「習學之を聞といふ、絕學之を隣といふ、」その注に「隣は近なり、又學無學に至る之を絕學といふ」と、所謂身心を忘却するなり。
(ツ)絕學無爲。身心脫落底、大休歇底。
(ネ)今時人。今時の學人の誤謬を擧ぐ。
(ナ)壅塞。大道の障碍なり。
(ラ)酥乳。知解文義。
(ム)消。藥毒を消すること。
(ウ)三乘。教相家。
(ヰ)此樣。模樣。
(ノ)食不消。却つて毒と爲る。

(マ)此の事なし。(ケ)故に云く、我が(フ)王庫の内に(コ)是の如きの刀なしと。從前の所有、一切の(エ)解處、盡く須らく(テ)屛却して空ならしむべし、更に(ア)分別なくんば、即ち是れ空如來藏なり。(サ)如來藏とは更に纖塵の有るべき無し、即ち是れ(キ)有を破る法王、世間に出現するなり。亦云く、我れ(ユ)然燈佛の所に於て、少法の得べき無しと。此の語只だ儞が(ヌ)情解知量を空ぜんが爲なり。但だ(ミ)表裏を消融し、(シ)情盡くれば都べて依執無し、是れ(エ)無事の人なり。(ヒ)三乘の敎網、只だ是れ(モ)應機の藥、隨宜の所說なり。(セ)時に臨んで施設して、(ス)各各同じからず。(イ)但だ能く了知せば、即ち(ロ)惑を被らず。第一に(ハ)一機一敎の邊に於て、文を守つて解を作すことを得ざれ。何を以てか此の如くなる、(ニ)實に定

(オ)毒藥。佛の慧命を殺す。
(ノ)盡向生滅中。盡は諸人をいふ、生滅は妄念。
(ヤ)取。認取。
(マ)此事。事は知解、無とは道を求め佛を尋ぬ。
(ケ)故云。涅槃經の文。
(フ)王庫。眞如の。
(コ)如是。生佛等の。
(エ)解。知なり。
(テ)屛却。又幷、併に作る。
(ア)分別。迷悟等の。古尊宿錄には、更の字已下三字なし。
(サ)如來藏。眞心直說をいふ、眞心の異名、眞如法性の體、一切衆生の色心を離れず、圓滿染淨の諸法を具足するを、是れを如來藏と名づくと。
(キ)破有法王。法華經藥草喩品の文、此の解は前に出づ、有は妄有、法王は空如來なり。問を一本「問」に作るは誤なり。
(ユ)然燈佛。この解、前集にあり、金剛經の文。
(ヌ)情解知量。藏本には「情量知解」に作る。
(ミ)表裏。依報器世間は表なり、正報身色は裏なり。
(シ)情盡。執情、所依執着。
(エ)無事人。本來無事、佛と祖とは只だ是れこれなり、猶ほ身心脫落の人といふがごとし。
(ヒ)三乘。聲聞四諦、緣覺十二因緣、菩薩六度なり。敎網は維。
(モ)機藥。機根藥方。
(セ)臨時。五時等の如し。
(ス)各各。性相法門。
(イ)但能。應機の藥なりと。
(ロ)惑。敎相の繫縛。
(ハ)一機一敎。攝化方便して、一人一機に就き、攝化の一敎を說く解は念解なり。
(ニ)實無有定法。金剛經の文なり、定は一定。
(ホ)宗門。禪宗なり　此の事とは作佛證道。

法ありて如來の說くべき無しと。我が此の（ホ）宗門には此の事を論ぜず、但だ（ヘ）息心を知れば卽ち休す、更に前を思ひ後を慮ることを用ひざれ。」

問ふ、「（ト）從上來、皆云ふ、卽心是佛と、未審し卽ち那箇の心か是れ佛なる。」師云く、「（チ）儞幾個の心かある。」云く、「爲復卽ち凡心是れ佛なるか、卽ち聖心是れ佛なるか。」師云く、「儞何れの處にか（リ）凡聖の心あるや。」云く、「卽今三乘の中に（ヌ）凡聖ありと說く、和尚何ぞ無と言ふことを得ん。」師云く、「三乘の中に分明に儞に向つて道ふ、凡聖の心是れ妄なりと。儞今解せずして、（ル）反つて執して有と爲し、空を將つて實となす、豈に是れ妄あらざらんや。妄なるが故に（ヲ）心に迷ふ、汝但だ（ワ）凡情と聖境とを除却せば、（カ）心外に更に別佛なからん。祖師西來して、直に（ヨ）一切の人の（タ）全體、是れ佛なりと指す。汝今（レ）識らずして、凡を執し聖を執して、（ソ）外に向つて馳騁して、還つて自ら心に迷ふ。所以に汝に向つて道ふ、卽心是佛と。一念も情生ずれば、卽ち（ツ）異趣に墮す。無始より已來、（ネ）今日に異ならず。（ナ）異法あること無きが故に、（ラ）成等正覺と名く。」云く、「和尚言ふ所の卽とは、是れ何の道理ぞ。」師云く、「（ム）什麼の道理をか覓むる、纔に道理あれ

（ヘ）息心。妄心なり、休とは大休歇、更とは此の外なり。

（ト）從上來。諸祖を云ふ、卽心卽佛とは馬祖等。

（チ）儞。心は是れ凡聖不二を云ふ、古尊宿錄にはこの「儞」の字なし。

（リ）凡聖心。差別。

（ヌ）有凡聖。凡位は內外凡に分つ、見道修道、無學道を聖道となす。

（ル）反執。執は凡聖の心、藏本には反は「返」とあり。

（ヲ）迷心。故に那箇の心か是れ佛といふ。

（ワ）凡情聖境。凡夫の根情、聖境ありと思ふ心。

（カ）心外別佛。人人本心の外に、三十二相八十種好の佛。

（ヨ）一切人。利根鈍者、男女貴賤等。

（タ）全體。心身不二の故に、直指人心、見性成佛せしむ。

ば便卽ち(ウ)心異なり。」云く、「前に無始已來、今日に異ならずと言ふ、此の理如何。」師云く、「只だ(ヰ)覓むるが爲の故に、汝自ら(ノ)他に異なり、汝若し覓めずんば、何れの處にか(オ)異あらん。」云く、「既に是れ(ク)異ならずんば、何ぞ更に卽と説くことを用ひん。」師云く、「(ヤ)汝若し凡聖を認めずんば、阿誰か汝に向つて卽と道はん、(マ)卽若し卽にあらずんば、心も亦心ならず、可の中(ケ)心と卽と倶に忘ぜば、阿儞更に(フ)何れの處に向つてか覓め去らんと擬する。」

問ふ、「妄能く自心を障ふと、未審し而今何を以てか(コ)妄を遣らん。」師云く、「(エ)妄を起し妄を遣るも亦妄と成る、(テ)妄本根無し、只だ(ア)分別に因つて有なり、儞但だ(サ)凡聖の兩處に於て、(キ)情計念なくんば自然に妄なし、更に(コ)若爲が

(レ)不識。生佛不二の理を識らず。
(ソ)向外。心外に。
(ツ)墮異趣。地獄等の六道に輪轉す。
(ネ)不異今日。日日是れ好日で、朝朝日從レ東出、夜夜日沈レ西。
(ラ)無有異法。喫茶喫飯で、花開葉落じや。
(ラ)成等正覺。蠢動含靈、各各成佛の面目。
(ム)什麼道理。我が這裡、恁麼の閒家具を要せずと。
(ウ)心異。既に是れ妄心。
(ヰ)爲覓。心を。
(ノ)異他。本心に。
(オ)有異。心なり。
(ク)不異。元來卽して言はば、卽せざるに生ず、心佛異ならず則ち何ぞ卽と説かん。
(ヤ)汝若。凡聖を認むるが爲に卽心と云ふ、卽言は却つて汝が邊に在り。

(マ)卽若不卽。我說、卽者只是卽不レ對ニ不卽一之卽ト心、亦然矣。
(ケ)心卽。心卽の名相、既に是れ妄想。
(フ)何處。不レ向不レ求處、卽心卽佛の脫體、現成。
(コ)遣妄。妄想を除遣せん。
(エ)起妄。取捨の心、巧僞を成す。
(テ)妄本無根。一念起れば、無にして忽地に生ずるが故に。
(ア)分別。汝が。
(サ)凡聖兩處。内凡外聖は三賢十聖等なり。
(キ)藏本は「情盡」に作る。
(コ)若爲。妄本無なり、他とは妄なり。
(メ)我捨。法華經藥王品の語。
(ミ)兩臂。凡聖生佛、迷悟眞妄等の二見なり、臂は手に來物を把捉することあるが故に、妄執の情識に喩ふ。
(シ)相承。的的相承。
(ヱ)若心相。傳心の旨に著し來る。

他を遣らんと擬する。都べて纖毫の依執有ることを得ざることを、名けて㋱我捨㋯兩臂、必當得佛と爲す。」云く、「既に依執無くんば、當に何をか㋛相承すべき。」師云く、「心を以て心を傳ふ。」云く、「㋽若し心相傳せば、㋪云何が心も亦無と言ふ。」師云く、「㋲一法を得ざるを名けて傳心と爲す、若し㋝此の心を了ぜば、卽ち是れ心も無く法も無し。」云く、「若し心も無く法も無くんば、云何が㋜傳と名く。」師云く、「汝心を傳ふと道ふを聞いて、將に謂へり、㋑得べきありと。㋺所以に㋩祖師云く『心性を認得する㋥時、不思議と說くべし、了々として所得なし、得る時㋭知と說かず』と。此の事㋬若し會せしめば何ぞ堪へん。」

問ふ、「祇だ㋣目前の虛空の如くならば、是れ境にあらざるべけんや、豈に境を指して心を見ること無からんや。」師云く、「什麼の心か汝をして境上に向つて見せしむ。設ひ汝見得すとも、祇だ是れ㋠箇の㋷境を照す底の㋦心なり。人の鏡を以て面を照すが如し、縱然ひ眉目分明なることを見るを得るも、㋸元來只だ是れ影像なり、何ぞ㋾汝が事に關らん。」云く、「若し㋻照に因らずんば、何れの時か㋕見ることを得ん。」師云く、「若し也た㋵因

㋪云何。既に傳心と云ふときは、當に心あるべし。

㋲不得一法。一法の見るべきなきを傳心と云ふ、汝未だ祖門下の言句を會せず。

㋝了此心。不傳の傳心。

㋜名傳。猶ほ言句に屈著して、狂狗逐レ塊。

㋑有可得也。一物の。

㋺所以。得べきもののなきが故に。

㋩祖師云。二十三祖鶴勒那尊者。

㋥時。非口所詮、非心所議、卷舒自在。

㋭知。不可得の得の故に、般若無知無所不知。

㋬若教會。不思議心性をばなり、堪とは歡喜するに堪へんと。

㋣目前。心法。

㋠箇。藏本には「個」とあり。

㋷照境底。鑑覺底なり。

㋦心。眞心に非ず。

に渉らば、常に須らく物を假るべし、什麼の(タ)了ずる時かあらん。汝見ずや、(レ)他汝に向つて道ふことを。(ソ)手を撒しで君に(ツ)侶すに一物なし、徒に謾に數千般と說くことを勞す。」云く、「(ネ)他若し識り了らば、照も亦(ナ)物無からんや。」師云く、「若し(ラ)是れ物無くんば、更に何ぞ照を用ひん、儞(ム)眼を開いて(ウ)寐語し去ること莫れ。」

(ヰ)上堂云く、「百種の(ノ)多知は、(オ)求むる無きの最第一なるに如かず、道人は是れ事無の人なり、實に許多般の心無し、亦(ク)道理の說くべきなし、無事にして散じ去れ。」

問ふ、「如何なるか是れ(ヤ)世諦。」師云く、「(マ)葛藤を說いて什麼かせん、(ケ)本來清淨なり、何ぞ言說の問答を假らん。但だ(フ)一切の心無きを、

(ル)影像。眞面目に非ず、鏡中の影像。
(ヲ)汝事。一大事因緣。
(ワ)照。鏡照。
(カ)得見。眉目を則ち本心を。
(ヨ)迯因。照に因ろに迯らば。
(タ)了時。眞心。
(レ)他。古人。
(ソ)撒手。放なり、撒なり、藏本「撥」に作る。
(ツ)侶は似に作る、奉なり。
(ネ)他。心なり。
(ナ)無物。外を照す所なし。
(ラ)是無物。照は外物を照すの義、未だ無物を照すを聞かず。
(ム)開眼。前言後語に應ぜず、是れ寐語なり。
(ウ)寐語。ねごとなり。
(ヰ)上堂。この解は前集に見ゆ。
(ノ)多知。多聞和解。
(オ)無求。佛に就いて求めず、祖に就いて求めず。
(ク)道理。這個の古尊宿錄には、亦已下六字なし。
(ヤ)世諦。有爲相の、俗諦をいふ。世俗差別の上にたつろ理をいふ、眞諦に對する語なり、諦は確實不虛妄の義にして、動すべからざる眞理のことをいふ。
(マ)葛藤。共に荳科の植物にして、山野自生の蔓草木なり、纏縛の義より轉じて、事件の錯綜紛糾の義に喩ふ、又言句の枝葉に纏綿して、宗旨の根源に通達せざるをいふ、又煩惱、妄想の意。
(ケ)本來。人人脚下。
(フ)一切心。佛を求め祖を求むる等。
(コ)無漏智。佛智。
(エ)有爲。梵語 Asaṃskṛta の譯、種種因緣和合によりて作られたる現象をいふ、無爲に對する語。
(テ)莫著。不着は則ち事事物物大

即ち(ヨ)無漏智と名く。汝毎日の行住坐臥、一切の言語、但だ(ウ)有爲の法に著することと莫れ。(ア)言を出し目を瞬す、盡く(サ)同じく無漏なり。(キ)如今末法向去、多く是れ禪道を學ぶ者、皆一切の聲色に著す、(ユ)何ぞ我が心に與らざる。(メ)心虚空に同じくし去り、(ミ)枯木石頭の如くにし去り、(シ)寒灰死火の如くにし去つて、方に(エ)少分の相應あらん。若し是の如くならずんば、他日盡く(ヒ)閻老子に儞を(モ)拷することを被ることと在らん。儞但だ(セ)有無の諸法を離却して、心(ス)日輪の常に虚空に在つて、光明自在に(イ)照さずして、而も照すが如くならば、是れ(ロ)省力底の事にあらず。(ハ)此の時に到つて、(ニ)棲泊の處なし。即ち是れ諸佛の路を行ず、便ち是れ(ホ)應無所住而生其心なり。此れは是れ儞が清淨法身なり、名けて(ヘ)阿耨菩提と爲す。若し此の意を會せずんば、縱ひ儞多知を學得し、勤苦修行して(ト)草衣木食すとも、(チ)自心を識らずんば、盡く(リ)邪行と名く、定んで天魔の眷屬となす。(ヌ)此の如く修行して、當に復た(ル)何の益ぞ、(ヲ)誌公云く、『佛は(ワ)本是れ自心の作、那ぞ文字の中に向つて求むることを得ん』と。假饒ひ儞(カ)三賢四果、十地の(ヨ)滿心を學得すとも、也た祇だ是れ(タ)凡聖の内に在つて坐

光明を放つ、世間有爲虚妄の法には心念を動ぜざれ。
(ア)出言瞬目。心地開通せば則ち直下即ち是なり。
(サ)同無漏。無漏道。
(キ)如今。學人。
(ユ)何不與。一切聲色は何ぞ我が本心に關らん。
(メ)同虚空。一切染汚なし。
(ミ)枯木石頭。一切の所求を離る。
(シ)寒灰死火。一切の情識を絕す。
(エ)少分相應。未だ全分にあらず、と、眞心と相應あらんや。
(ヒ)閻老子。閻魔王に同じ。
(モ)拷。打なり。掠なり。
(セ)有無。二見の有爲の諸法。
(ス)日輪。無心にして物に應ぜば染汚なく障礙なし。
(イ)不照而照。無心の照なり。光明遍照。
(ロ)省力底。自を省し勉力す、休

す。道ふことを見ずや、(レ)諸行は(ソ)無常にして、(ツ)是れ生滅の法なり、(ネ)勢力盡きぬれば、箭還つて墜つ　來生の(ナ)不如意を(ラ)招き得たり。爭か(ム)無爲(ウ)實相の門に似かん、(ヰ)一超直入、如來地と儞是れ(ノ)與麼の人にあらざるが爲なり。須らく古人の(オ)建化門に向つて、廣く知解を學することを要すべし。誌公云く、『(ク)出世の明師に逢はずんば、(ヤ)枉げて(マ)大乘の法藥を服す』と。儞如今一切時中、行住坐臥、但だ無心を學せよ、(ケ)久々にして須らく(フ)實得すべし。儞が力量小なるが爲に、(コ)頓に超ゆること能はず、但だ三年五年或は十年を得て、須らく箇の(エ)入頭の處を得て自然に會し去るべし。汝(テ)是の如くなること能はざるが爲に、須らく心を將つて禪を學び道を學することを要むべし。(ア)佛法に

歇なり。
(ハ)此之時。無作の作。
(ニ)棲泊。無所著といふ。
(ホ)應無所住。金剛經莊嚴淨土分の文、住する所なくして、其の心を生ずべしと也。境に居て境に取らへられず、不變の淸淨心生ずる事を云ふ。無は寂滅道場なり、生は諸の威儀を現ずるなり、心は淸淨心なり。
(ヘ)阿耨菩提。阿耨多羅三藐三菩提の略、無上正等正覺をいふ。
(ト)草衣木食。皆是れ二乘外道の修行。
(チ)自心。本心。
(リ)邪行。佛道に非ざるが故に。
(ヌ)如此。草衣木食等。
(ル)何益。我が事に管せず。
(ヲ)誌公。寶誌禪師、支那金陵の人、少時出家して道林寺に止り、禪定を修す。齊の建元中、武帝衆を惑はす者として、建康の獄に投ず、神異ありて常に市中に往來して敢て苦せず、梁の高祖卽位して禁を解く、而して帝十二因緣並びに大い靜心安樂の法を問ひて、時に大乘讚に心要を得たり、時に大乘讚二十四首を作りて帝に献ず、其の作に係る十二時頌、今世に行はる。天監十三年疾なくして終ろ、年九十七、妙覺大師と諡す。
(ワ)本是自心作。他に向つて求めず、自己本心の作用。
(カ)聲門、緣覺、菩薩これを三賢といふ、四果は小乘見道以後の證果の四位、一、須陀洹果(預流果)、二、斯陀含果(一來果)、三、阿那含果(不還果)、四、阿羅漢果(無學果)の四をいふ、十地は、凡夫より成佛迄の階級に五十二段あり、十信、十住、十行、十回向、十地、等覺、妙覺の內、四十一より五十に至る位なり。

什麽の(サ)交渉かあらん。故に云く、如來の所説は皆(キ)人を化せんが爲に、(ユ)黃葉を將つて金と爲し、(メ)小兒の啼を止むるが如し、決定して實ならずと。若し(ミ)實に得ることありとせば、(シ)我が宗門下の客にあらず、且つ(ヱ)儞が本體と何の交渉か有らん。故に(ヒ)經に云く、『(モ)實に少法の得べき無きを、名けて阿耨菩提と爲す』と。若し也だ(セ)此の意を會得せば、方に知んぬ(ス)佛道と魔道と倶に錯ることを。(イ)本來淸淨、(ロ)皎皎地にして、(ハ)方圓なく、大小無く、長短等の相なし。無漏無爲にして迷も無く悟も無く、(ニ)了々として見るに一物も無し、亦人も無く佛も無く、大千沙界海中の漚、一切の賢聖は電の拂ふが如しと。(ホ)一切、心の眞實なるには如かず、法身は古より今に至るまで、(ヘ)佛祖と一般

(ヨ)滿心。果滿覺心。
(タ)凡聖内。名相。
(レ)諸行。學得底。
(ソ)無常。常住の法に非ず。
(ツ)是生滅。法解脱の法に非ず。
(ネ)勢力。これは喩なり、證道歌の文。
(ナ)不如意。三界六道。
(ラ)招得。法なり、修行作善報盡くれば。
(ム)無爲。佛を求めず、悟を求めず。
(ウ)實相。眞實本相。
(ヰ)一超。五十二位の階級を。
(ノ)與麽人。一超直入の。
(オ)建化門。法幢を建立し、化門を開張するをいふ、自行を出でて化他に從事するこさ、又第二義門さもいふ。
(ク)出世明師。一超直入、眞箇の明師。
(ヤ)枉服。如來眞實の本意に非ず、故に枉さいふ。

(マ)大乘。大乘教さ雖も、應病與藥、如來の本意に非ず。
(ケ)久久。劫より劫に至る。
(フ)實得。眞實得入。
(コ)頓超。頓は速なり、凡聖の界を超ゆ。
(エ)入處。門なり。一本、「頭」の字はなし。
(テ)如是。三年五年の修業。
(ア)佛法人。人々眞實具足。
(サ)交渉。關係なきの義。
(キ)爲化人。大乘の法門さ雖も。
(ユ)將黃葉。人方便なり、皆攝引法門、金は眞法なり。
(メ)小兒啼。大小乘の機根。
(ミ)實得。權化法を以て。
(シ)我宗門。無所得の。
(ヱ)儞。是の如き權作物に非ず。
(ヒ)經云。金剛經なり。
(モ)實。眞實。
(セ)此意。經の意なり、少法の得べきなきものを。
(ス)佛道魔道。不可得の法門より

なり、何れの處にか一毫毛を(ト)欠少せん。既に(チ)是の如き意を會せば、大いに須らく努力して(リ)今生を盡し去つて、(ヌ)出息入息を保たざるべし。」

問ふ、「六祖(ル)經書を會せず、何ぞ(ヲ)衣を傳へて祖と爲ることを得る。(ワ)秀上座は是れ(カ)五百人の首座、(ヨ)教授師となつて(タ)三十二本の經論を講得す、(レ)云何ぞ衣を傳へざる。」師云く、「(ソ)他は有心なるが爲に、是れ有爲の法なり、(ツ)所修所證將に是となす、所以に(ネ)五祖、六祖に付す、六祖當時只だ是れ默契す、密に如來甚深の意を授くることを得たり。(ナ)所以に法を付して(ラ)他に與ふ。汝(ム)道ふことを見ずや、(ウ)法の本法は無法なり、無法の法も亦法なり、(ヰ)今無法を付する時、法法何ぞ曾て法ならんと。若し此

見來れば。

(イ)本來。人人本具の佛性。

(ロ)皎皎地。潔白なり。

(ハ)無方圓。本來無形相の故に。

(ニ)了了。證道歌の文。

(ホ)一切不如心。聖賢と雖も電光の如し、有にして忽ち無なるが故に、心の眞實とは自己本心なり。

(ヘ)與佛祖。衆生と。

(ト)欠少。衆生と雖も。

(チ)如是、唯一佛乘。

(リ)今生。有所得念。

(ヌ)出息。何處有二執著一染汚あらんや、人命は。

(ル)不會經書。文字を知らず。

(ヲ)傳衣、達磨より傳來の。

(ワ)秀上座、六祖下の神秀、卽ち北宗の祖となる。開封尉氏の人、姓は李氏、江陽當陽山に住す、唐の神龍二年入寂す、大通禪師と諡す。

(カ)五百人首座。五祖會下の中の上座。首座は梵語悉替那、此に上座といふ。

(ヨ)教授師。五種阿闍黎の第三比丘教授の師。

(タ)三十二本。古來より金剛經といふ說あり。

(レ)云何。如是人。

(ソ)他有心。他は神秀、有所得心のために。

(ツ)所修所證。修行證得。

(ネ)五祖。三十二祖弘忍大師、唐の高宗上元二年、日本の天武天皇白鳳四年に寂す。付すとは衣を付屬す、これは無心の法を以て、有心の人に付すべからざるが故に、神秀には傳へず。

(ナ)所以。修して證を得んと欲す。

(ラ)與他。無心の六祖に。

(ム)不見道。釋尊付法の偈。

(ウ)法本法無法。無心なり、無所得なり、無知の般若なり、靈

の意を會せば、方に出家兒と名けん、方に㋨好し修行するに。㋔若し信ぜずんば、云何ぞ㋗明上座、大庾嶺頭に走り來つて六祖を尋ねん。六祖便ち問ふ、『汝來つて何事をか求む、衣を求むるが爲か、法を求むるが爲か。』明上座云く、『衣の爲に來らず、但だ法の爲に來る。』六祖云く、『汝且つ暫時㋳念を斂めて、善惡都べて思慮すること莫れ。』明乃ち語を稟く。六祖云く、『㋮不思善不思惡、正當與麼の時、我れに明上座、㋘父母未生の時の面目を還し來れ。』明言下に於て忽然として㋫默契す。便ち禮拜して云く、『㋙人の水を飲んで冷暖自知するが如し、某甲、五祖の會中に在つて、㋓枉げて三十年の功夫を用ふ、今日方に㋢不是を知る。』六祖云く、『㋐如是』と。此の時に㋚到つて方に知る、祖師西來、㋖直指人心、見性成佛は、言說に㋴在らざることを。豈に見ずや、㋱阿難、迦葉に問うて云く、『世尊、金襴を傳ふる外、別に何の法をか傳ふ。』迦葉、㋯阿難と召す、㋛阿難應諾す。迦葉云く、『㋽門前の㋪刹竿を倒却著せよ。』此れ便ち是れ㋲祖師の標榜なり、甚生ぞ阿難三十年㋝侍者を爲せども、只だ多聞智慧の爲に佛に訶せらる。云く、『㋜汝千日慧を學ばんより、一日道を學するに如かず』と。若し道を

覓眞心、各各圓滿。

㋼今付無法時。法に所得なしと說く、見聞覺知、何を以てか境とせん。

㋨好修行。無心無證の法の故に心佛心法、眞の修行。

㋔若不信。無心の人、無法を得ろさ。

㋗明上座云云。六祖壇經行由一に委し。明上座は袁州蒙山道明禪師、六祖に嗣ぐ。

㋳斂念。心意識を想觀す。

㋮不思善不思惡。身心脫落、正當恁麼の事。

㋘父母未生時。無明煩惱なり、面目とは頭上三尺。

㋫默契。身心脫落の人、脫落の法を默契す。

㋙如人飲水。餘人は見ざる所の故に。

㋓枉用。無所得の中に向つて。功夫を藏本に「工夫」に作る。

㋢知不是。修證を求めば也、藏

學せずんば、㋑滴水も消し難からん。」

問ふ、「如何ぞ㋺階級に落ちざることを得る。」

師云く、「㋩但だ終日飯を喫して、未だ曾て一粒の米を咬著せず、㋥終日行いて、未だ曾て一片の地を踏著せず。與麼の時、㋭無人無我等の相、終日一切の事を離れず、諸の㋬境惑を被らざるを方に㋣自在の人と名く。更に㋠時時念念、一切の㋷相を見ず、前後㋦三際を㋸認むること莫れ。㋾前際去ること無く、㋻今際住する無く、㋕後際來ること無く、㋵安然として端坐して、㋟任運拘はらざるを方に解脱と名く。努力めよや努力めよや。㋹此の門中には千人萬人、祇だ㋞三箇五箇を得たり、若し㋡將つて事と爲ずんば、㋧殃を受くること㋤日有ること在らん。故に云く、㋶力を著けて今生に須らく㋰了却すべし、

本この三字「省前非」とあり。
㋐如是。證明の語。
㋚到。默契の時。
㋖直指。所示の。
㋴不在。有心有思量には。
㋱阿難迦葉。無門關廿二に出づ、其の頌に曰く、「問處何ぞ答所の親しきに如かん、幾人か此れに於て眼に筋を生ぜん、兄呼び弟應じて家醜を揚ぐ、陰陽に屬せず別に是れ春」と。
㋯召阿難。迦葉座下拈華。
㋛阿難應諾。活潑々地、直下に未生以前の面目に築着す。
㋽門前利竿。拖泥少からず。
㋪刹竿。刹柱ともいふ、寺院殿堂廟所等を標示する爲に建つる竿なり、其の柄に焔形の寶珠を付す。
㋲祖師之標榜。祖師下傳法の表牌、榜は看板。榜を一本「牓」に作る。
㋝爲侍者。如來の。

㋜汝千日。慧は聞慧。
㋑滴水難消。一滴水と雖も施主の物なり、豈に妄りに消費すべけん。この語、楞嚴會上、佛、阿難を訶しての給ふ。
㋺階級。修證等の階級、得るとは直下見性するなり、階級は教家の五十二位等なり。
㋩但終日。六塵中、味塵を擧げて六根を示して、六塵に著せず、即ち根塵脱落なり。
㋥終日行。四威儀の中、威儀の一を擧行して、四威儀の沒蹤跡を示す、即ち四威儀脱落なり。
㋭無人、無我。四相、即ち人相、我相、衆生相、壽者相のなきをいふ、そのうちの二を擧げたるなり。
㋬境惑。六境落惑。又萬念萬境なり。
㋣自在。六輪輪轉、更に風流解脱自在。

㋒誰か能く㋖累劫に㋨餘殃を受けんと。」

㋔宛陵錄

㋗裴相公、師に問うて曰く、「㋳山中四五百人あり、幾人か和尚の法を得る。」師云く、「得る者、㋮其の數を測ること無し。」何が故ぞ、㋘道は心にありて悟る、豈に㋫言說に在らんや。言說は祇だ是れ㋙童蒙を化するのみ。」

問ふ、「如何なるか是れ佛。」師云く、「卽心是れ佛、無心是れ道なり。但だ㋓心を生じ念を動じ、㋢有無長短、彼我能所等の心無くんば、㋐心本是れ佛、佛本是れ心なり。心は虛空の如し、㋚所以に云く、佛の眞法身は猶ほ虛空の如しと。㋖別に求むることを用ひざれ、求むることあるは、㋵皆苦なり。設使ひ恒沙劫に數六度萬行を

㋠時時。古尊宿錄に此二字なし。
㋷相。有相なり、見ずとは汚染せざるの故に。
㋦三際。過去、未來、現在の三世をいふ。
㋸認。前後際斷。
㋾前際。無所從來。亦無所去那一人。
㋻今際。異本に「今」とあり。現在。
㋕後際。未來。
㋵安然。環中虛白の處。
㋟不拘。任運は無功用の貌なり、一切繫縛せられずと。
㋹此門。黃檗の。
㋞三箇五箇。眞箇悟徹して、無礙自在の人。
㋡將事。將は上來の事、事は行なり、生死の大事、急切。
㋤受殃。分段生死、所謂生死輪廻。
㋤有日。期をいふ。
㋶著力。精進なり、此の身今生に向つて度せずんば、更に何れの時をか待たんや。
㋰了却。生死大事をば。
㋒誰。大夫丈兒。
㋖累劫。生生世世。
㋨餘殃。六道輪廻。
㋔宛陵錄。この全篇は古尊宿錄の三卷に載す。一本に此の三字なし。
㋗裴相公。相公は百官の長なり、相國は金印紫授。古尊宿錄には「丞相裴公」に作る。
㋳山中。黃檗。
㋮其數。人人喫茶着衣、神通三昧、誰れ人か得ざらんや。
㋘道在心悟。人人自己の心にあり、心法は諸斷に墮せず、何ぞ寒の時は寒を知り熱の時は熱を知る、誰か心悟せざらんや。
㋫在言說。見聞上に在らず。
㋙化童蒙。蒙は微昧闇弱の名なり、化は敎化。
㋓生心動念。心意識運轉なり、

行じて、佛菩提を得るとも、亦(メ)究竟に非ず。何を以ての故に、(ミ)因緣造作に屬するが爲の故なり。因緣若し盡きなば、還つて(シ)無常に歸せん。(エ)所以に云ふ、(ヒ)報化は眞佛にあらず、(モ)亦說法の者に非ずと。但だ自心を識れば(セ)我無く人無く、本來是れ佛なり。」

問ふ、「聖人の無心は卽ち是れ佛なり、凡夫の無心は(ス)空寂に沈むこと莫しや否や。」師云く、「(イ)法に凡聖無く、亦沈寂なし、(ロ)法本有にあらず、無の見を作すこと莫れ、(ハ)法本無にあらず、有の見を爲すこと莫れ、有と無とは盡く是れ(ニ)情見なり、猶ほ(ホ)幻翳の如し。所以に云ふ、見聞は幻翳の如しと。(ヘ)知覺は乃ち衆生なり、祖師門中には只だ(ト)機を息め見を忘ずることを論ず、所以に機を忘ずるときは則ち佛道(チ)隆んなり、分別するときは則ち魔軍熾んなり。」

問ふ、「心既に本來是れ佛なり、還つて六度萬行を修するや否や。」師云く、「悟は(リ)心に在り、六度萬行に關るに非ず、六度萬行は盡く是れ(ヌ)化門(ル)接物度生邊の事なり。設使ひ菩提眞如、實際解脫、法身直に(ヲ)十地四果の聖位に至るも、盡く是れ(ワ)度門にして、(カ)佛心に關るに非ず。(ヨ)心卽ち是れ

念は妄念。
(テ)有無。一切二見。
(ア)心本是佛。染汚せざるを云ふ。
(サ)所以云。金光明經の文。
(キ)別求。心外に求むるなき、卽處虛空ならざるはなし、卽處法身ならざるはなし。
(ユ)皆苦也。勞苦なり、益なし、集は苦なり。
(メ)究竟。眞の究竟に。
(ミ)因緣造作。行相は因緣所生有爲の造作に屬するが故なり。
(シ)歸無常。無常壞滅に歸向す、造作者の故に不生滅の法に非ず。
(エ)所以云。金剛般若論の文、前にも出づ。
(ヒ)報化非眞佛。報身化身なり、因に報ずるの果、佛は因緣機に應ず、化佛は造作なり。
(モ)亦非說法者。眞の說法者は無言說無示無識にして、自己に默契するのみ。

佛なり、所以に㋟一切諸度門の中には、㋹佛心第一なり。但だ㋞生死煩惱等の心無くんば、卽ち㋡菩提等の法を用ひず。所以に道ふ、佛㋧一切の法を說いて、我が一切の心を㋤度す、我れに一切の心無くんば、何ぞ一切法を用ひんと。㋶佛より祖に至るまで並に㋰別事を論ぜず、唯だ一心を論ず。亦云く、㋒一乘と。所以に十方諦かに求むるに、更に餘乘なし、此の衆に㋼枝葉なし、唯だ諸の眞實のみ有り、所以に㋨此の意信じ難し。達磨此の土に來つて、㋔梁魏の二國に至る、祇だ㋗可大師一人のみありて、㋳密に自心を信じて、㋮言下に便ち卽心是佛、㋘身心倶に無なるとを會す。是れを大道と名く。㋫大道は本來平等なり、所以に深く㋙含生同一眞性なることを信ず。心と性と異ならざれば、卽

㋝我人。我相人相。

㋜空寂。偏身空理。

㋑法無凡聖。凡聖二見を破す。

㋺法本不有。有無の二見を破す、只だ諸の所有を空じて諸の所無を實とすることを莫れと。

㋩法本不無。眞空妙有。

㋥情見。凡夫の。

㋭幻翳。有にして有にあらず、無にして無にあらず。

㋬知覺。慮知念覺。

㋣息機。知覺を息め、一切有無の見を忘ろ、一切放拋して無心。

㋠隆。興隆熾盛。

㋷在於心。自心にあり、心性をば明むるにあり、心外の六度萬行に用はないと。

㋦化門。建化の度門。

㋸接物度生。接取物機、濟度衆生。

㋾十地四果。大乘小乘。

㋻度門。化度門中の假名相。

㋕佛心。自己の。

㋵心卽。唯だ二心。

㋟一切諸度門中。假名相の中には。

㋹佛心第一。假名相なり、天眞佛に非ず。

㋞無生死。生死煩惱等の有漏心なくば。

㋡不用菩提。煩惱對治の假法の無漏の名相を用ひず。

㋧一切法。菩提眞如等の法なり所以道は龍樹大士の語、上卷に出づ。

㋤度。生死煩惱等の一切の心を。

㋶從佛至祖。三世の諸佛、歷代の諸祖。

㋰別事。心外の自己の一心。

㋒一乘。一心の異名なり。

㋼無枝葉。六度萬行等の。

㋨此意。一佛乘大乘至極の意、難信とは下根のものは。

ち性即ち心なり。心、性に異ならざる、之れを名けて祖となす。(エ)所以に云ふ、心性を認得する時、(テ)不思議と説くべしと。」

問ふ、「佛衆生を度するや否や。」師云く、「(ア)實に衆生として如來の度すべきものなし、我れすら尚ほ不可得なり、(サ)我れに非ず何ぞ得べけん。佛と衆生と(キ)皆不可得なり。」云く、「現に三十二相あり、(コ)及び衆生を度して何ぞ(メ)無と言ふとを得る。」師云く、「凡そ(ミ)所有の相皆是れ(シ)虚妄なり、(ヱ)若し諸相の相に非ざるとを見ば、(ヒ)即ち如來を見ん。佛と衆生と盡く是れ汝(モ)妄見を作す、祇だ(セ)本心を識らざるが爲に、謾に(ス)見解を作す。纔に佛見を作せば、便ち(イ)佛に障へらる。纔に衆生見を作せば、即ち(◎)衆生に障へらる。凡を作し聖をなし、淨をなし穢を

(オ)梁魏二國。傳燈には梁の普通八年丁未九月二十一日南海に達す、十月梁都金陵に至る、十一月二十三日洛陽に届る、後魏孝明帝太和十年に當る。

(ク)可大師。二祖なり、大乘上根の人なり、慧可大師なり、傳は前に出づ。

(ヤ)密信自心。親密に自己の本心。

(マ)言下。初祖の一言下に。

(ケ)身心。有相身心、直に無漏の法なることを了得す。

(フ)大道平等。大道は本來心身一如平等なり。

(コ)含生同一。蠢動含靈、平等にして不增不減。

(エ)所以云。鶴勒那尊者なり、前に出づ。

(テ)不思議。言説譬喩も及ばず、故にいふ。三四の句は了了として所なし、得る時知ると說かず。

(ア)實無衆生。法身佛の作用なり、佛祖元來生佛二見を脫す、故に能度所度の人を見ず。

(サ)非我。衆生は也た尚ほ不可得。

(キ)皆不可得。從來形名なし、佛と衆生と元來隔別なし。

(コ)及。說法及び。

(メ)言無。佛と衆生となしと。

(ミ)所有相。一切諸有の相眞常の法に非すと、三十二相は如來應化の身、此の三十二相を具して、以て法身衆德の圓極を表す、人天中尊衆聖の王なり、法界次第にあり。法華の提婆品にもかくあり、この「所有相皆是れ虚妄」等は金剛經の文なり。

(シ)虛妄。生滅に屬するが故に。

(ヱ)若見諸相非相。三界の如くにして三界に見えず。

(ヒ)即見如來。山色は清淨身なり。

(モ)作妄見。對待なり。

なす等の㋩見、盡く其の障となる。汝の心を障ふるが故に總べて㋥輪轉と成る。猶ほ㋭獼猴の㋬一を放つて一を捉りて、㋣歇期有ると無きが如し。㋠一等に是れ學せば、直に須らく㋷無學なるべし。凡もなく聖もなく、淨なく垢なく、大なく小なく、㋦無漏無爲なり。是の如くの一心の中に、㋸方便して勤めて㋾莊嚴するとは汝に聽す、㋻三乘十二分教を㋕學得するも、一切の㋵見解あらば、總べて須らく捨却すべし。所以に所有を㋟除き去つて、唯だ㋹一牀を置いて疾に寢して臥す、祇だ是れ諸見を起さざれ。一法の得べき無ければ、法の障を被らず、三界凡聖の境域を透脫す、始めて名けて㋞出世の佛と爲ることを得たり。㋡所以に云く、㋧稽首す㋤空の如くにして㋶所依なく、外道を㋰出過する

㋲本心。自己。
㋜作見解。有相の知見了解。
㋑被佛障。本心の光明をも障碍せらる。
㋺被衆生障。自己の光明も障碍せらる。
㋩見盡成其障。二見もみな本心の障。
㋥成輪轉。生死の輪廻なり、佛となり衆生となり、十界を成ず。
㋭獼猴。尾なが猿なり。
㋬放一提一。衆生や佛を。
㋣歇期。休歇の期日。
㋠一等。諸人一切平等。
㋷無學。佛を求めず祖を求めず。
㋦無漏無爲。一切の二見を脫するを、爲に所爲なき。
㋸方便。善巧方便。二見を忘るるを以て方便となす。
㋾莊嚴聽汝。無漏無爲を以て莊嚴と作す。聽は許なり。莊嚴とは身相、器具、殿堂、佛前等を莊嚴に嚴飾すること。
㋻三乘十二分教。聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘これを三乘といふ、十二分教は、又十二部經ともいふ、佛の所說を內容及び形式により十二に分類したるもの稱なり、一に修多羅（契經）、二に祇夜（重頌）、三に和伽羅那（授記）、四に伽陀（諷誦）、五に優陀那（無問自說）、六に尼陀那（因緣）、七に阿婆陀那（譬喩）、八に伊帝目多伽（本事）、九に闍多迦（本生）、十に毘佛略（方廣）、十一に阿浮多達磨（希法）、十二に優婆提舍（論議）、之れを總稱して十二分教といふ。
㋕學得。縱令。
㋵見解。心佛衆生。
㋟除去。維摩經問疾品の文、一切の見解を除く。
㋹一牀。眞心。

こと、心既に(ウ)異ならざれば法も亦異ならず、(ヰ)心既に無爲なれば法も亦無爲なり。(ノ)萬法は盡く心に由つて變ず、所以に我心空なるが故に、諸法空なり、(オ)千品萬類、悉く皆同じ。盡十方空界、同じく一心の體なり。心本異ならざれば、法も亦異ならず。祇だ(ク)汝が見解、同じからざるが爲の所以に(ヤ)異あるのみ。譬へば(マ)諸天の(ケ)寶器を同じうして、食するに其の(フ)福德に隨つて、(コ)飯食に異あるが如し。十方の諸佛、(エ)實に少法の得べき無し、名けて阿耨菩提となす。(テ)祇だ是れ一心にして實に(ア)異相なく、(サ)亦光彩なく、(キ)亦勝負なし、勝なきが故に、佛相無し、負無きが故に衆生相無し。」云く、「心既に無相ならば、豈に全く(ユ)三十二相(メ)八十種好の衆生を化度すること無きを得んや。」師云く、「三十二相は(ミ)相に屬す、(シ)凡そ所有の相は、皆是れ虛妄なり。八十種好は(ヱ)色に屬す、(ヒ)若し色を以て我れを見ば、是の人(モ)邪道を行ふ、(セ)如來を見たてまつること能はず。」

問ふ、「(ス)佛性と衆生の性と同と爲んか別と爲んか。」師云く、「(イ)性に同異無し、若し三乘の敎に(ロ)約せば、(ハ)卽ち佛性あり衆生の性ありと說く。遂に三乘の(ニ)因果あり、卽ち同異あり。若し(ホ)佛乘及び(ヘ)祖師相傳に約すれ

(ソ)出世佛。一佛の出興。
(ツ)所以云。所出不詳。
(ネ)稽首。首を屈して地に至るをいふ。これ周禮九拜の初拜なり。
(ナ)如空。一心は。
(ラ)無所依。凡聖有無。
(ム)出過。二見を脫するを云ふ。
(ウ)不異。生佛に。
(ヰ)心、法。一心、一切法。
(ノ)萬法。唯識所變の故に、變は變化轉變。
(オ)千品萬類。世間所有の相。
(ク)汝。學人。
(ヤ)異耳。法異なり、藏本には「差別」に作る。
(マ)諸天。天部の諸神をいふ。また印度に上界の諸神をいふ。
(ケ)同寶器。同一佛性に喩ふ。同の字は藏本には「共」に作る。
(フ)福德。諸見解に喩ふ。維摩及び楞伽にも出づ。
(コ)飯食。所得の法に喩ふ。

ば、即ち是の如きの事を(ト)說かず。唯だ一心を(チ)指して、(リ)同に非ず異にあらず、(ヌ)因に非ず果に非ず。(ル)所以に云く、唯だ此の一乘道のみありて、二も無く亦三もなし、佛の(ヲ)方便說を除くと。」

問ふ、「(ワ)無邊身菩薩、什麼としてか如來の頂相を見ざる。」師云く、「實に見るべき無し、何を以ての故に無邊身菩薩は便ち(カ)是れ如來なり、(ヨ)更に見るべからず。祇だ汝をして佛見を作さずんば、(タ)佛邊に落ちず、衆生見を作さずんば衆生邊に落ちず、有見を作さざれば有邊に落ちず、無見を作さざれば無邊に落ちず、凡見を作さざれば凡邊に落ちず。聖見を作さずんば、聖邊に落ちず。但だ(レ)諸見無ければ即ち是れ(ソ)無邊身なり。若し(ツ)見處あれば即ち外道と名けん。

(エ)實少法。金剛經の文。
(テ)祇是。十方の諸佛。
(ア)無異相。心佛及び衆生等。
(サ)無光彩。三十二相に。
(キ)勝頁。佛は勝、衆生は頁。
(ユ)三十二相。釋尊は三十二の妙相を有せりとの傳說なり、又印度古來、佛及び轉輪聖王は皆此の相を具有すと。
(メ)八十。大聖佛陀瑞形の妙好なり、相と好とは總別の異にして、相、若し好を備へざれば圓滿なりとなす能はずと。
(ミ)屬相。色相に。
(シ)凡所有相。金剛經の文、虛妄とは無相の眞相に非ざるがゆゑに假相なり。
(ヱ)屬色。顯色に。
(ヒ)若以色見我。金剛經の偈文なり、見我の下に以音聲求我の五字あり、今の文は色を主とす、故に聲を略す。
(モ)邪道。如來は色相に非ざるが故。
(セ)如來。眞實の如來。
(ス)佛性衆生。諸佛性一切衆生。
(イ)性無同異。人々自性不變、これは大乘法門中にはなり。
(ロ)約。小乘に。
(ハ)即說。差別ありと。
(ニ)因果。聲聞緣覺菩薩、四諦十二因緣六度の因果。
(ホ)佛乘。一佛乘。
(ヘ)祖師。正傳の。
(ト)不說。三乘差別の法門を。
(チ)指。直指、藏本に指を「有」に作る。
(リ)非同非異。佛と衆生と同異の名目なし。
(ヌ)非因非果。修證因果なし。
(ル)所以云。法華の方便也。
(ヲ)除方便說。方便說中、生佛修證あり。
(ワ)無邊身菩薩。無邊際身、即ち徧法界身なり即ち法身なり。
(カ)是如來。法身の如來なり。

外道は諸見を樂しむ、菩薩は諸見に於て㋧動ぜず、如來は卽ち㋤諸法如の義なり。所以に云く、㋶彌勒も㋰亦如なり、衆聖賢も亦如なりと。如は卽ち㋒無生なり、如は卽ち㋼無滅なり、如は卽ち㋨無見なり、如は卽ち㋔無聞なり、如來の頂は卽ち是れ㋗圓なり。見は亦圓見無きが故に、圓邊に落ちず。所以に佛身は無爲にして㋳諸數に墮せずと。㋮權に虛空を以て喩と爲す、㋘圓なること太虛に同じく、欠くることも無く餘ることも無し。㋫等閑に無事にして彊ひて㋙他の境を辨ずること莫れ。辨著すれば便ち㋓識と成る。所以に云く、圓成すれば識海に沈む、㋢流轉すること飄蓬の如しと。祇だ我れ知れり、學得せり契悟せり、解脫せる道理ありと道ふて、㋐彊處は卽ち喜び、弱處は嗔を生ず。這個の見解

㋵不應更見。金不レ換レ金、水不レ洗レ水。
㋟佛邊。邊際、已下同じ。
㋹諸見。人々の諸見なければ。
㋞無邊身。無邊際の故に。
㋡見處。諸見。
㋧不動。諸見に着せざれば心念を動ぜず。
㋤諸法如義。松竹梅、當意卽妙、如は眞如。
㋶彌勒。又は梅咀麗耶と稱す、梵音 Kaitreya 譯して慈氏といふ、菩薩の名。姓は阿逸多、無能勝と譯す、南天竺の婆羅門にして兜率天に上生し、現に兜率の內院に居て、當來には此土に出興して、釋迦佛の處說を補ひ、賢劫千佛中の第五佛となる。
㋰亦如也。眞如、已下同じ。
㋒無生。生に生相なし。
㋼無滅。滅に滅相なし。
㋨無見。見に見相なし。
㋔無聞。聞に聞相なし。
㋗圓。圓滿、異本には「圓見」の二字なし。
㋳諸數。數量長短方圓。
㋮權。權方便を以てなり、佛の眞法身は猶ほ虛空の如しと。
㋘圓同。三祖信心銘の文。
㋫等閑。直卽是なり、慮知造作を用ひずと云ふ。
㋙他境。佛身を辨着す。
㋓識。分別意識。
㋢流轉。流浪輪轉、生死海に。
㋐彊處卽喜。自己の見解を爭ふて。彊所喜の字は、一本に「如意」に作り、生瞋の二字を「不如意」に作る。
㋚用心。論語陽貨篇に出づ。
㋖暫。一本に「蹔」に作る。
㋴鐵圍山。梵語にて斫迦羅、拘羯羅といひ、輪山と譯す、輪は圍繞の義なり、此の山堅牢破壞すべからざる鐵山にしてこの世界の外海を圍繞するが

に似たらば、什麽の用處かあらん。我れ汝に向つて道ふ、等閑に無事にして漫に(サ)心を用ふること莫れ、眞を求むることを用ひざれ、唯だ須らく見を息むべしと。所以に內見外見俱に錯り、佛道魔道俱に惡し。所以に文殊(キ)暫く二見を起せば、(ユ)二鐵圍山に(メ)貶向せらる。文殊は卽ち(ミ)實智、普賢は卽ち(シ)權智なり、權と實とは(ヱ)相對治す、究竟して亦權實なし。(ヒ)唯だ是れ一心なり、(モ)心は且つ佛にあらず、衆生にあらず、(セ)異見あること無し。纔に佛見あれば、便ち衆生見と作る。有見無見、(ス)常見斷見、便ち二鐵圍山と成つて見に障へらる。故に祖師、直に一切衆生の本心本體本來是れ佛なりと指して、(イ)修成を假らず(ロ)漸次に屬せず、(ハ)是れ明暗にあらず。是れ明にあらざるが故に明なし・是れ暗にあらざるが故に暗無し。所以に無明も無く亦無明の盡くることも無しと。我が此の宗門に入らば、(ニ)切に須らく意を在くべし。此の如く見得するを之を名けて(ホ)法と爲す。法を見るが故に、之を名けて佛と爲す。佛法俱に無なるを、之を名けて僧と爲す、喚んで(ヘ)無爲僧と爲す、亦(ト)一體三寶と名く。夫れ法を求むる者は、佛に著しても求めず、法に著しても求めず、衆に著しても求めず、應

ゆゑに、鐵圍山と名づく、所謂須彌山を中心とせる諸山の最も外圍にありて、須彌四洲を圍繞す。

(メ)貶。謫。

(ミ)實智。文殊は根本智の故に、理門を以て眞理を說く、對治す、華嚴の意。

(シ)權智。普賢は行願門の故に、一切の行を說く、故に權智なり、實智に非ず、二大士行と理とを以て、互に權實相交へて諸法を對治す、畢竟何ぞ二あらん。

(ヱ)對治究竟。對待して一切諸法を對治するなり、究竟は至極の處にはなり。

(ヒ)唯是。權實に。

(モ)心且。心の本源は。

(セ)無有異。變異。

(ス)斷見。常見に對する語、我が身を觀じて一度死すれば、その儘斷滅して生ずることなし

に求むる所無かるべし。佛に著して求めざるが故に佛も無く、法に著して求めざるが故に法も無く、僧に著して求めざるが故に僧も無し。」

問ふ、「和尚㋠見今の說法、何ぞ㋷僧も無く亦法も無しと言ふことを得る。」師云く、「汝若し法の說くべき有りと見ば、卽ち是れ㋦音聲を以て我れを求むるなり。若し我れありと見ば卽ち是の處法なり、㋸法も亦無く、㋾法は卽ち是れ心なり。所以に祖師云く、『此の心法を付する時、㋻法法何ぞ曾て法ならん、法も無く本心も無く、始めて㋕心心の法を解す。實に一法の得べき無きを㋵道場に坐すと名く』と。道場とは祇だ是れ諸見を起さず、法の本空を悟つて、喚んで空㋟如來藏と作す。㋹本來無一物、何れの處にか㋞塵埃あらん。若し此の中の意を得ば、㋡逍遙何の論ずるところかあらん。」

問ふ、「本來無一物ならば、物無き便ち是なりや否や。」師云く、「㋧無も亦是れ菩提にあらず、㋤是處も無く、亦無知の解も無し。」

問ふ、「何者か是れ佛。」師云く、「汝が心是れ佛、佛卽ち是れ心なり、㋶心と佛と異ならず。故に云ふ、㋰卽心卽佛と。若し心を離るれば別に更

さする執着妄見をいふ、因果の理を知らざる邪見なり。

㋑修成。積功累德。

㋺漸次。次第階級に。

㋩是暗。明暗兩奪の境に。

㋥切。急切に、在意は意根下に掛在すべし。

㋭爲法。心法。

㋬無爲僧。無事是れ貴人。

㋣一體三寶。三寶は佛、法、僧の三寶なり、證理大覺を名けて、佛寶となし、淸淨離染を名けて法寶と爲し、至理和合無擁無滯なるを名けて、僧寶と爲す、此の三寶は眞如法性の三德の理の上より表現したるが故に其の體もと一なり、三寶卽一體、一體卽三寶の理を言ひ表はしたる語なり。

㋠見今。現今に同じ。

㋷無僧無法。和尚是れ僧、說法是れ法と。

㋦以音聲。眞說法は音聲に非

に佛無し。」云く、「若し自心是れ佛ならば、祖師西來して如何が傳授せん。」師云く、「祖師西來して唯だ心佛を傳ふ。(ウ)直に汝等が心、本來是れ佛なるとを指す、(キ)心心異ならず、故に名けて祖と爲す。若し(ノ)直下に此の意を見ば、卽ち頓に三乘一切の(オ)諸位を超ゆ。本來是れ佛、(ク)修を假つて成ぜず。」云く、「(ヤ)若し此の如くならば十方の諸佛出世して、何の法をか說く。」師云く、「十方の諸佛出世して、祇だ共に一心の法を說く。所以に佛、(マ)密に摩訶大迦葉に付與す、此の一心の(ケ)法體は、(フ)盡虛空法界に徧きを名けて諸佛と爲す、(コ)這箇の法を(エ)理論せば、豈に是れ汝が言句上に於て、(テ)他を解得せんや。亦是れ(ア)一機一境の上に於て、(サ)他を見得せざれ。此の意唯だ是れ默契す。這の(キ)一門を得る

ず。
(ル)法亦無法。我所なきが如し。前に出づ。
(ヲ)法是心。無法の法も卽ち是れ心法なり。
(ワ)法法。能付の。
(カ)心心。以心傳心、この二句彌遮迦の偈。
(ヨ)道場。空王の大道場。
(タ)如來藏。藏識の本性は清淨なり、客塵の爲に染められて不淨となる、卽ち實相眞如なり。迷ふときは八識となる。
(レ)本來。人人。
(ソ)塵埃。佛見法見。
(ツ)逍遙。一切處一切事上に於て、論とは迷悟生佛と議する。
(ネ)無亦。無を認むるときは則ち是れ有なり。
(ナ)是處。是は非に對するの言なるが故に。
(ラ)心佛不異。同一體なり。
(ム)卽心卽佛。馬祖の語。

(ウ)直指。その傳授の方法は。
(キ)心心。祖心と衆生心。
(ノ)直下。學人が見徹せば。
(オ)諸位。五十二位等超過せば。
(ク)不假修成。修行人成をなり、本佛は。
(ヤ)若如此。人人已佛。
(マ)密付。正法眼藏を。
(ケ)法體。體段なり。
(フ)盡虛空。法身卽虛空、虛空卽法身と徧滿す。
(コ)這箇。異本に這は「者」、箇は「個」に作る。
(エ)理論。理解論窮。
(テ)解得他。他とは本佛一心法。
(ア)一機一境上。學人の機に應じて示すに境を以てす、猶ほ問ふに西來意を以てし、答ふるに柏樹子を以てするが如し。
(サ)見得他。他とは一心法。
(キ)一門。一心の法門、本心にして默契の處。

を名けて(ル)無爲の法門と爲す。若し會得せんと欲せば、但だ無心を知れ、(ヌ)忽ち悟れば卽ち得ん。若し心を用つて學取せんと(ヲ)擬せば、卽ち(ワ)轉た遠くし去る。若し(カ)岐路の心、一切の(ヨ)取捨の心無くして、(タ)心木石の如くならば、始めて學道の分あらん。」云く、「如今現に種種の妄念あり、何を以てか(レ)無と言ふ。」師云く、「妄本(ソ)體なし、卽ち是れ汝が心に起る所なり。(イ)汝若し心是れ佛なることを識らば、心本妄無し。那ぞ(ロ)心を起して更に妄を認むることを得ん。汝若し心を生じ(ハ)念を動ぜずんば、(ニ)自然に妄なし。所以に云く、(ホ)心生ずれば卽ち種々の法生ず、心滅すれば卽ち種種の法滅すと。」云く、「今正に妄念起る時、佛何れの處にか在る。」師云く、「汝今妄起ると覺する時、覺正に是れ佛なり。可の中に若し妄念無くんば、(ヘ)佛も亦無し。何が故ぞ、此の如くなる。汝(ト)念を起して佛見を作すが爲に、便ち佛の成ずべき有りと謂ふ、衆生見を作して便ち衆生の度すべきありと謂ふ。起心動念は總べて是れ(チ)汝が見處なり、若し一切の見無くんば、佛に何の處所か有らん。文殊纔に佛見を起すが(リ)如きんば、便ち二鐵圍山に貶向せらる。」云く、「今正に悟る時、佛何れの處にか在る。」師云く、「(ヌ)問

(ル)無爲法門。實相の法門。
(ヌ)忽悟卽得。情識を用ひず、直下に。
(ヲ)擬。情識。
(ワ)轉遠。一心の法に於て。
(カ)岐路心。種種差別の。
(ヨ)取捨。佛や衆生やと。
(タ)如木石。惟だ情識分別の心なきのみ、木石に活用の心なきに譬ふるに非ず。
(レ)言無。岐路取捨等の心。
(ソ)無體。鏡上の影の如く。
(イ)汝心。心上、起は妄想。
(ロ)起心。分別心念。
(ハ)動念。生佛の念。
(ニ)自然。妄を除くの意なし。
(ホ)心生。起信論の語、古尊宿錄には、この心生の上の「云」の字なし。
(ヘ)佛亦無。佛と云ふは妄に對する語なり、己に妄なきが故に。
(ト)起念。生佛隔別の念を。
(チ)汝見處。自ら妄作する。

何れよりか來り、覺㋸何れよりか起る。㋾語默㋻動靜、㋕一切聲色、盡く是れ㋵佛事なり、㋟何れの處にか佛を覓めん、更に頭上に頭を安じ、觜上に觜を加ふ㋹べからず。但だ㋞異見を生ずること莫くんば、㋡山は是れ山、水は是れ水、僧は是れ僧、俗は是れ俗、㋧山河大地、日月星辰總べて汝が心を出でず。三千世界、㋤都來是れ汝が箇の自己なり。何れの處にか㋶許多般あらん。㋰心外無法、滿目青山、虛空世界は㋒皎々地にして、絲髮許りも汝が與に㋼見解を作すこと無し。所以に㋨一切聲色は、是れ佛の㋔慧目なり、㋗法孤り起らず、境に仗つて方に生ず、㋳物の爲の故に㋮其の多智あり、㋘終日說けども何ぞ曾て說かん、㋫終日聞けども何ぞ曾て聞かん。所以に㋙釋迦四十九年の說、未だ曾て一字を說著せず。」云く、「若し此の如きんば、何れの處か是れ菩提なる。」師云く、「㋓菩提に是處なし、㋢佛も亦菩提を得ず、㋐衆生も亦菩提を失はず、㋚身を以て得べからず、㋖心を以て求むべからず、㋴一切衆生即ち菩提の相なり。」云く、「如何が㋱菩提心を發せん。」師云く、「菩提に所得なし、儞今但だ無所得の心を發して、決定して一法を得ざる、即ち菩提心なり。菩提に㋯住處なし、是の故に㋛

㋷如。引證。
㋦問從何來。卽今汝問は來處なし。
㋸從何起。起處なし。
㋾語默。語默動靜の相なし。
㋻動靜。動は行、靜は住坐臥。
㋕一切聲色。六塵の中の二を擧ぐ。
㋵佛事。來雁遷鶯もなみ祇園の佛事。
㋟何處。聲色外に於て。
㋹不可。之を求めて得べからず。
㋞異見。生佛等の。
㋡山是山水。現成公案なり、布袋の語。
㋧山河大地。知んぬべし、自己妙明、眞心の所現なりと、汝が自己の本心を出でず、皆是れ本來の面目なり。
㋤都來是。天地の太祖と爲り、萬物の根元となる。
㋶許多般。異本にこの三字な

得る者あること無し、(ヱ)故に云く、我れ然燈佛の所に於て、少法の得べき有ることなしと。佛即ち我れに(ヒ)授記を能ふるは、明かに知る、(モ)一切衆生本是れ菩提なり、應に更に菩提を得べからざることを、儞今菩提心を發すと聞いて、(セ)一個は心を將つて(ス)佛を學取し去らんと謂へり。唯だ作佛の道を擬するは、(イ)任ひ汝三祇劫修すとも、亦祇だ箇の(ロ)報化佛を得ん、儞が(ハ)本源眞性の佛と何の交渉かあらん。故に云く、外に有相の佛を求めば、(ニ)汝と相似ならずと。」

問ふ、「(ホ)本既に是れ佛ならば、那ぞ更に(ヘ)四生六道、(ト)種々の(チ)形貌の不同あることを得ん。」師云く、「(リ)諸佛の體は圓にして、更に(ヌ)增滅なし、六道に流入すれども、(ル)處々皆(ヲ)圓なり。(ワ)萬類の中、箇箇是れ佛なり、譬へば(カ)一

し。
(ム)心外無法。天眞自如顯露。
(ウ)皎皎地。一切染汚せず、潔白なりと。
(ヰ)作見解。迷悟生佛の。
(ノ)一切聲色。經に云く、「一切聲は是れ佛聲、一切色は是れ佛色」と。
(オ)慧目。智慧眼目。
(ク)法不孤起。八萬の法門は八萬の煩惱と爲つて起る。
(ヤ)爲物。機なり、又物は一切衆生を云ふ。
(マ)其多智。其のは佛の多智の法門。
(ケ)終日說。諸說は終日に無舌人語を解する故に。
(フ)終日聞。耳根を以て聞かざるが故に。
(コ)四十九年。唯だ是れ應機說法、釋尊成道時より涅槃時まで說法の年數、橫說縱說八萬四千の法門を開示すれども、

舌頭に骨無く、語に語相、即ち不立文字教外別傳なり。大般若經四百二十五に「我が道を得てよりこのかた、一字を說かず、汝又聞かず」と。
(エ)菩提無是處。元來無所得法の故に。
(テ)佛亦。たとひ成佛すと雖も、新所得の法にあらず。
(ア)衆生亦。人人具足。
(サ)以身。此の菩提道は、修行の身を以て得べからず。
(キ)以心。工夫の心を以てなり。已上は維摩經の文。
(ユ)一切衆生。脫體現成の故に。
(メ)發菩提心。不得不失ならば。
(ミ)無住處。一方の住處なし、徧法界、菩薩道の全體なれば。
(シ)無有得者。別得なり、菩薩道をなり、擧足下足。
(ヱ)故云。金剛經引證。
(ヒ)授記。記別を授くること、記莂は梵語、和伽羅那の譯、佛

團の水銀の諸處に(ヨ)分散すれども、(タ)顆々皆圓なるが如し、若し(レ)分たざる時は、祇だ是れ一塊なり、此の(ソ)一卽ち一切、一切卽ち一なり、(ツ)種々の形貌は喩へば屋舍の如し、(ネ)驢屋を捨てゝ人屋に入り、(ナ)人身を捨てゝ天身に至る。乃至聲聞、緣覺、菩薩佛、屋は皆是れ汝が(ラ)取捨の處なり。所以に(ム)別あり、(ウ)本源の性(ヰ)何ぞ別あることを得ん。」

(ノ)問ふ、「諸佛如何ぞ大慈悲を行じて、衆生の爲に說法する。」師云く、「佛の慈悲は無緣なるが故に、大慈悲と名く。(オ)慈とは佛の成ずべき(ク)有りと見ず、(ヤ)悲とは衆生の度すべき(マ)有りと見ず。(ケ)其の所說の法は、說無く示無し、(フ)其の聽法の者は、聞無く(コ)得無し。譬へば(エ)幻士の幻人の爲に說法するが如し。(テ)這箇の法若爲

の修行者の成果に對する豫言のこと、單に記とも云ふ。

(モ)一切衆生。奇なる哉、一切衆生、如來の智惠德相を具す、更には此の外なり。

(セ)將一箇心。發心なり、將の字、藏本には「將謂」に作る。

(ス)擧取佛。他に佛ありと思つて。

(イ)任汝。作佛の心を以て。

(ロ)報化佛。修得因を報ず。

(ハ)本源眞性佛。法身佛は修得佛にあらざるが故に。

(ニ)與汝。本源眞性佛と似同せず。

(ホ)本。本來。

(ヘ)四生六道。胎、卵、濕、化生之れを四生といひ、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六界之れを六道といふ。

(ト)種種。人畜等。

(チ)形貌。長短有足無足、毛羽鱗甲等。

(リ)諸佛體。人人本源の眞佛本體。

(ヌ)增減。佛と衆生と。

(ル)處處。六道等。

(ヲ)圓。無缺無餘。

(ワ)萬類。四生等の。

(カ)一團。諸佛の本體に比す。

(ヨ)分散。六道の流入に比す。

(タ)顆顆。處處皆圓なるに比す。

(レ)不分。分散。

(ソ)一卽一切。佛體が六道四生なれば一切といふ。

(ツ)種種。六道四生。

(ネ)驢屋。畜生界より畜生界に入る、屋は身。

(ナ)捨人身。人界より天界に生ず、身は屋。

(ラ)取捨。見解。

(ム)有別。十界。

(ウ)本源。人人。

(ヰ)何得。心佛衆生、是三無差別。

(ノ)問諸佛。この一段、古尊宿錄に載せず。

が我れ善知識に從つて、言下に(ア)領じ得て、心なり、悟れりと道はん。者箇の慈悲、若爲が汝の心を起し(サ)念を動じて學得せん。他の(キ)見解は、是れ自ら本心を悟らず、究竟して益なし。」

問ふ、「何者か是れ(ユ)精進なる。」師云く、(メ)身心起らざる、是れを第一の(ミ)牢彊の精進と名く。纔に(シ)心を起して、(エ)外に向つて求むる者をば名けて(ヒ)歌利王の遊獵を愛すと爲す。(モ)心を去つて(セ)外に遊ばざる、(ス)即ち是れ忍辱仙人なり。身心俱に無なる、即ち是れ佛道なり。」

問ふ、「若し無心にして此の道を行じ得てんや否や。」師云く、「無心にして即便ち是れ此の道を行ずれば、更に(イ)什麼の得と不得とを說かん。且く(ロ)一念を瞥起するが如きんば、便ち是れ境なり、若し一念無くんば、便ち是れ境忘じ、(ハ)

(オ)慈者。大慈なり、諸佛佛見なし。
(カ)不見有。樂を與へて生佛一致。
(ヤ)悲者。大悲なり、衆生なきが故に。
(マ)不見有。苦を拔いて、無我無人等の四相を絕す。
(ケ)其所說法。諸佛法相の見なきが故に。
(フ)其聽法。無所說の法の故に。
(コ)得。所得なり。
(エ)幻士爲幻人。幻士とは木人、木人の爲に說法す、彼此無心を、幻人は元來無心。士を一本に「師」に作る。
(テ)這箇法。無說無聞の法。一本、這を「者」に作る。
(ア)領得。領解して。心の字は藏本には「會」に作る。
(サ)動念。妄念。
(キ)見解。知見解會。
(ユ)精進。六度の一。心を淸淨にして精しく道に勵み進む意、善行を修すること、又身を淸め、心を愼み潔齋すること、又菜食して魚鳥の肉を喰はざること。
(メ)身心不起。身心は身心脫落なり。
(ミ)牢彊精進。堅牢剛彊、彊は健なり、壯なり、古尊宿錄には「强」に作る。
(シ)起心。所求の心を。
(エ)向外求。心外に法を求む。
(ヒ)歌利王。佛昔し南天竺の富單那城、婆羅門の家に生る。是時王有り、迦羅富と名づく、性驕惡、暴慢、佛城外に於て寂然禪思の時、婇女を具し來りて曰く、（中略）「汝盛年未だ貪欲を斷たず、何ぞ色を見て當に着せざるべき。」遂に其の身體を割截す、佛、顏色變ぜずと。此の時四天王、怒をなして礫砂を雨らす、王恐れて

心自ら滅して復た追尋すべき無し。

問ふ、「如何なるか是れ(ニ)出三界。」師云く、「善惡都べて(ホ)思量すること莫くんば、當處に便ち三界を出づ。如來の出世は(ヘ)三有を破せんが爲なり、若し一切の心無くんば、(ト)三界も亦有にあらず、如し一微塵を破して百分と爲して、九十九分是れ無にして、(チ)一分是れ有ならば、(リ)摩訶衍、勝出すること能はず、(ヌ)百分倶に無ならば、摩訶衍、始めて能く勝出せん。」

(ル)上堂云く、「即心是佛、(ヲ)上諸佛に至り、下(ワ)蠢動含靈に至るまで、皆佛性有つて、同一心體なり。(カ)所以に達磨西天より來つて、唯だ一心法を傳へて、直に一切衆生、本來是れ佛なることを指す。(ヨ)修行を假らず、但だ(タ)如今、(レ)自心を識取し、自の本性を見て、更に(ソ)別に求

懺悔す云云と、此の時の佛を忍辱仙人といふ。
(モ)去心。無心なり。
(セ)外遊。外緣。
(ス)卽。藏本、この字なし。
(イ)什麼得與。無心卽ち是れ道なり、此の外道の得べきなし。
(ロ)一念。得不得等の境とは對待の境なり。
(ハ)心自滅。所得の心滅する處、是れ道なり、別に尋ぬべきなし、道の追尋すべきなし。
(ニ)出三界。法華要解に煩惱寃生死の因となり、陰寃死魔生死の果となる、之を滅し之を破るを、卽ち三界を出づと。
(ホ)思量。分別。
(ヘ)三有。欲、色、無色の三有。
(ト)三界亦非有。三界唯心の所造、無心三界亦無。
(チ)一分。一點思量の一分。
(リ)摩訶衍。梵音摩訶衍那、大乘と譯す、小乘の對、大人の所乘にして大苦を滅し、大利益を與ふる如來の敎法をいふ、菩薩地持經に、大に七義を立つ、一に法大、二に心大、三に解大、四に淨心大、五に衆具大、六に時大、七に得大これなり、乘は運載の義にして、此の法能く衆生を乘せて、迷界の岸より悟界の岸に濟度するが故に名づく。
(ヌ)百分倶無。所謂非思量底。
(ル)上堂。粥飯の時、僧堂に上るを上堂といふ、傳燈錄藥山章に「院主報ず、鐘を打せり、請ふ和尚上堂せよ、師曰く、我が與に鉢盂を擎げ去れ」と、又、「師曰く、二時の上堂、一粒米を咬破することを得ず」又法堂に上りて演法することをいふ、普說のこと、又陞座ともいふ。又出世の儀式の稱、祝國上堂、開爐上堂、晉山上堂これなり。

むること莫し。云何が自心を識る、(ツ)即ち如今の言語する者、正に是れ汝が心なり。(ネ)若し言語せず、又用心を作さざれば、(ナ)體、虚空の如くに相似て、相貌あること無く、亦方所なし。亦(ラ)一向に是れ無にあらず、(ム)有にして見るべからざるが故に、(ウ)祖師云く、『眞性(ヰ)心地藏、(ノ)頭無く亦尾無し、(オ)緣に應じて物を化す、(タ)方便して呼んで智となす。』若し緣に應ぜざる時は、其の有無を(ヤ)言ふべからず、(マ)正に應ずるの時も亦蹤跡無し、既に(ケ)此の如くなるとを知つて、如今但だ(フ)無中に向つて棲泊する、即ち是れ諸佛の路を行ふなり。(コ)經に云く、『(エ)應無所住(テ)而生其心』と。(ア)一切衆生の輪廻して、生死を息めざる者は、(サ)意緣(キ)走作して(ユ)心六道に於て(メ)停らず、種々の苦を受けしむるとを

(ヌ)上至諸佛。其の故、如何となれば則ち。
(ワ)蠢動含靈。原人論に曰く、「萬靈の蠢々たる皆其の本あり」と。又仁王經に曰く、「衆生蠢蠢として都べて幻の如くにして居るのみ」と、有情をいふ。
(カ)所以。引證。
(ヨ)不假修行。人人。
(タ)如今。直下。
(レ)自心。自己本心。
(ソ)別求。心性外に。
(ツ)即如今。隨緣眞如を說く。
(ネ)若不言語。不變眞如を說く。
(ナ)體。心體。
(ラ)一向是無。無にして無にあらざるが故に。
(ム)有而。妙有。
(ウ)祖師。二十七祖般若多羅傳法偈。
(ヰ)心地藏。心萬法を生ずるが故に。
(ノ)無頭亦無尾。不生不滅の故に。前後中間、此の心名邈すべからず。
(オ)應緣。處處身、處處現ずる故に、秋月長江に暎たるが如く、隨器敎を設く。
(タ)方便。權方便。方便。
(ヤ)不可言。佛眼見れども見えず、魔外窺ひ難し。
(マ)正應。所緣に應じて、物機を化する時。
(ケ)知如此。上來。
(フ)無中棲泊。無相法中なり、棲泊は猶ほ行履といふがごとし。
(コ)經云。引證。
(エ)應無所住。環中虚白の處。
(テ)而生其心。緣に應じて物を化す。
(ア)一切衆。本來成佛、然るに。
(サ)意緣。意識緣慮。
(キ)走作。奔走造作。
(ユ)心。善惡の心。
(メ)不停。念起念滅して停らず。

致す。(ミ)淨名云く、『難化の人は(シ)心猨猴の如し、故に若干種の法を以て其の心を(ヱ)制禦して、然る後調伏す。』(ヒ)所以に心生ずれば種々の法生ず、心滅すれば種々の法滅すと。故に知んぬ、(モ)一切の諸法は皆(セ)心に由つて造り、乃至人天地獄、六道修羅盡く心に由つて造ることを、如今但だ(ス)無心を學して、頓に(イ)諸緣を息めて、妄想分別を(ロ)生ずること莫くんば、人も無く我も無く、貪瞋も無く憎愛も無く、勝負も無からん。但だ如許多種の妄想を除却して、性自ら本來清淨なる、卽ち是れ菩提の法を修行して佛と等し。若し(ハ)此の意を會せずんば、縱ひ徧廣く學び、勤苦修行して木食草衣すれども、(ニ)自心を識らずんば、皆(ホ)邪行と名く。(ヘ)盡く天魔外道、水陸の諸神と作さん。此の如く修行せば、當に復た(ト)何の益かあらん。(チ)誌公云く、『(リ)本體是れ自心の作、那ぞ(ヌ)文字の中に求むることを得ん』と。如今但だ(ル)自心を識つて、(ヲ)思惟を息却せば、妄想塵勞、(ワ)自然に生ぜず。(カ)淨名云く、『(ヨ)唯だ一牀を置いて疾に寢して臥して、心起らざるなり』と、人の疾に臥すが如し、攀緣都べて息み、妄想歇滅する卽ち是れ菩提なり。(タ)如今若し心裏紛々として定まらずんば、任ひ徧學して、三乘四果十地

輪轉して。
(ミ)淨名云。引證なり、維摩經香積佛品。
(シ)心如猨猴。顚倒心。
(ヱ)制禦。制伏止禦。
(ヒ)所以。起信論の語。
(モ)一切。三界一切。
(セ)由心。心生ずるに由り、唯心所造。
(ス)學無學。無心無念を參學す。
(イ)息諸緣。外。
(ロ)莫生。內。
(ハ)不會此意。自性本來清淨、生佛同體の意。
(ニ)不識自心。本來清淨。
(ホ)名邪行。心外に法を求むる故に。
(ヘ)盡。三界出離するものは、遠うして遠しと。
(ト)何益。自己成佛は。
(チ)誌公云。前にも出づ。
(リ)本體是自心作。佛性の本體は自心の外にあらず。

の諸位に到つて㋹合殺すとも、㋞祇だ㋡凡聖の中に向つて坐す。㋧諸行は盡く㋤無常に歸して、㋶勢力皆盡くる期あり、猶ほ箭の空を射るに、力盡くれば還つて墜つるが如し、却つて生死に歸して㋰輪廻す。斯の如く修行すとも、佛意を解せずんば、虚しく㋒辛苦を受く、豈に大なる錯にあちざらんや。㋼誌公云く、『未だ㋨出世の明師に逢はず、㋔枉げて大乘の法藥を服す』と。如今但だ一切時中、行住坐臥、但だ無心を學して、亦㋗分別無く、亦㋳依倚無く、亦㋮住著無く、終日㋘任運㋫騰々として癡人の如くに相似たらば、㋙世人盡く儞を識らず、儞も亦人をして不識を識らしむることを用ひず、心頑石頭の如くにして、都べて㋓縫罅無し。一切の法、汝が心を透り入らず、㋢兀然として㋐無著なり。此の如くにして始めて㋚少分の相應あらん。三界の境を透得し過ぐるを名けて佛出世となす、心相を㋖漏さゞるを名けて㋴無漏智と爲す、㋦人天の業を作さず、㋯地獄の業を作さず、㋛一切の心を起さず、㋥諸緣盡く生ぜずんば、㋪卽ち此の身心是れ㋲自由の人なり。是れ一向に㋝生ぜざるにあらず、祇だ是れ㋜意に隨つて生ず。㋑經に云く、『菩薩㋺有意生身』と是れなり。忽ちに若し未だ

㋦文字中。文字言句の。
㋸自心。自己本心。
㋾思惟。分別。
㋻自然。除却を用ひず。
㋕淨名云。維摩經問疾品、前にも出づ。
㋵唯置一牀。自然本來淸淨。
㋟如今。諸人。
㋹合殺。佛に逢ふては佛を殺し祖に逢ふては祖を殺すといふ樣に、兩箇相逢ふて互にせしめ合ふ樣子をいふ。又殺は助字なり、諸位と修行と一合相にして、違はざるをいふ。
㋞祇。未だ凡聖位中を脫せず。
㋡凡聖中。生佛凡聖の差別に。
㋧諸行。凡聖などの僞に。
㋤歸無常。心外の法の故に。
㋶勢力。修行の。
㋰輪廻。五道に。
㋒辛苦。して益なし。
㋼誌公云。前に出づ、これは大乘諸教も未だ佛の本懷にあち

無心を會せずして、(ハ)相に著して(ニ)作さば、皆魔業に屬せん。乃至(ホ)淨土の佛事を作すも並に皆(ヘ)業と成る、乃ち佛障と名く、(ト)汝が心を障ふるが故に、因果の(チ)管束を被つて、(リ)去住して自由の分なし、所以に(ヌ)菩提等の法、本(ル)是れ有なるにあらずや。如來の(ヲ)所說、皆是れ人を化す、猶ほ黃葉を(ワ)金錢と爲して、權に小兒の啼を止むるが如し。故に(カ)實に法の阿耨菩提と名くること有ること無し、如今既に此の意を會せば、何ぞ(ヨ)驅馳することを用ひん。但だ(タ)緣に隨つて舊業を消し、更に(レ)新殃を造ること莫れ。(ソ)心裏明明たり、所以に舊時の見解、總べて須らく捨却すべし。(ツ)淨名に云く『所有を除去す』と、(ネ)法華に云く『二十年の中、常に糞を除かしむ』と。(ナ)祇だ是れ心中に(ラ)見解を作す

ざるを證す。
(ノ)出世明師。直指の端的。
(オ)枉服。大乘諸經は惑病に對する法藥のみ、佛法的的の意に非ざるが故に枉といふ。
(ク)分別。思慮分別。
(ヤ)依倚。一物なし。
(マ)住著。佛見法見に住著することなし。
(ケ)任運。天地自然の理に隨ひ、一片の布置、調節を用ひざるを云ふ。無功用なり、逍遙自在。
(フ)騰騰。心作なき貌、上躍又奔なり。
(コ)世人。彼我一切忘却し了る。
(エ)縫罅。裂なり、「衣の縫、」穴のあきたる綻びなり、是非迷悟等の。
(テ)兀然。不動なり、無心の貌。
(ア)無著。一切上に。
(サ)少分相應。佛法に於て。
(キ)不漏。落なり、生佛等の境に於て、思慮分別なきをいふ、頑石の如く。
(ユ)無漏、漏は煩惱の義なり、故に煩惱羈鎖を脫したる境界をいふ。
(メ)人天業。善業。
(ミ)地獄業。惡業。
(シ)一切心。所求の。
(ヱ)諸緣。善惡の。
(ヒ)卽此身心。諸緣の縛を受けず。
(モ)自由人。天地の間一箇。
(セ)不生。緣不生。
(ス)隨意生。天眞自在、任運に生ず。
(イ)經云。楞伽經に出づ。
(ロ)有意生身。自由自在の境界なり、登地の菩薩、如幻三昧を得て、能く無量自在神通を見て、普く一切佛刹に入りて、意に隨つて無碍、意彼に至らんと欲せば、身も亦至る、故に意生身といふ。

の處を除去す。(ム)又云く、(ウ)戲論の糞を(ヰ)蠲除すと、所以に如來藏は本自ら(ノ)空寂なり、祇だ是れ並に一法を(オ)停留せず。故に(ク)經に云く、『諸佛國土も亦復た皆空なり。』若し佛道は是れ修學して得ると言はば、此の如きの見解全く(ヤ)交涉無し。或は(マ)一機一境(ケ)揚眉動目を作して、(フ)祇對して(コ)相當つて便ち道ふ、契會せり、禪理を證悟することを得たりと。忽ち(エ)一人に逢はば、(テ)便ち道ふことを解せず、(ア)都べて所知無し、他に對して若し(サ)道理を得れば、心中に便ち歡喜す、若し他に(キ)折伏せられて他に如かざれば、便卽ち心に(ユ)惆悵を懷く、此の如きの(メ)心意にして禪を學せば、(ミ)何の交涉かあらん。任ひ汝少し許りの道理を會得するも、祇だ箇の(シ)心所の法を得て、禪道とは總べて沒交涉

(ハ)著相。外相に。
(ニ)作者。修行の。
(ホ)作淨土佛事。誌公云く、「若し作業して佛を求めんと欲せば是れ生死の大兆云云。」
(ヘ)成業。障の。
(ト)汝心。淸淨の。
(チ)管束。管轄束縛。有相の修行なれば。
(リ)去住。行住坐臥、凡聖の相に著して。
(ヌ)菩提等法。著相魔業病の對治法なり。
(ル)不是有。眞空の故に。
(ヲ)所說。應機假設なれば。
(ワ)金錢。藏本には「錢」の字なし。この語、涅槃經の文、前に出づ。
(カ)實無。本源淸淨心上には「經に名を得」に作る。
(ヨ)驅馳。藏本には「區區」に作る、外に向つて成佛作祖を求むるを云ふ。

(タ)隨緣。自得逍遙なり、習氣の舊業を消得し。
(レ)新殃。心外に法を求むる等の罪禍。
(ソ)心裏。是の如くなれば。
(ツ)淨名云。引證、問疾品、「卽以二神力一、空二其室內一除二去所有一、及諸侍者一、唯置二一牀一、以レ疾而臥。」
(ネ)法華云。信解品。
(ナ)祇是。異本、この二字なし。
(ラ)見解。舊來の。
(ム)又云。信解品。
(ウ)戲論之糞。心外に佛を求む、皆是れ戲論也、又見思をいふ。
(ヰ)蠲除。明なり、潔なり。
(ノ)空寂。生佛迷悟等の冗物なし、故に空なり。
(オ)不停留。停畜留住。
(ク)經云。維摩經問疾品。
(ヤ)無交涉。佛道と。
(マ)一機一境。或は一機一境、人に對して。

ならん。所以に達磨㋽面壁して、都べて㋪人をして見處あらしめず、㋲故に云く、㋝機を忘ずる是れ佛道なり、㋜分別は是れ魔境なりと。此の㋑性は縱ひ汝㋺迷ふ時も亦失せず、㋩悟る時も亦得ず。㋥天眞の自性にして本より迷悟なし。縱盡十方虛空界、元來是れ㋭我が一心體なり。縱ひ汝㋬動用造作するも豈に㋣虛空を離れんや。虛空本來㋠大も無く小も無く、㋷無漏無爲、㋦迷無く悟なく、㋸了々として見るに㋾一物も無し、亦㋻人も無く亦佛も無し、纖毫の㋕的量を絶す。是れ㋵依倚無く㋟粘綴無き㋹一道の淸流なり。是れ自性なり、㋞是れ無生法忍なり。何の㋡擬議することかあらん。眞佛に㋧口無し、說法を解せず、㋤眞聽に耳無く、㋶其れ誰か聞かんや。㋰珍重。」

㋘揚眉動目。揚眉は眉を揚ぐること、動目とは目ばたきすること、師家が學人接化の場合に於ける禪機の作用をいふ。馬祖の示衆に、「有る時は彼れをして揚眉瞬目せしめず、有る時は伊れをして揚眉瞬目せしむるも是、有る時は伊れをして揚眉瞬目せしむるも不是」と。

㋫祇對は敵對の意なり、轉じて應答の意に用ふ。人に祇對して。

㋙相當。語話に。

㋓一人。具眼の那一人。

㋢便道。說なり。

㋐都。本分の處に於て。

㋚道理。少分の理路に涉る。

㋖折伏。破折降伏、外道邪教の徒を挫くこと、破邪に同じ。

㋴惆悵。悲哀。

㋱心意。勝負の心を以て。

㋯何交涉。菩薩道と。

㋛心所法。慮知境に對する法なり。

㋽面壁。一句を示さず。

㋪人。學人をして知見の處あらしむるを禁ず。

㋲故云。古人は。

㋝忘機。慮知心を。

㋜分別。分別心。

㋑性。佛性は。

㋺迷時。凡夫は。

㋩悟時。佛は新に得ず。

㋥天眞。本來天然。

㋭我一心體。天地同根、萬物一體。

㋬動用造作。晝より夜に至つて、折旋俯仰。

㋣離虛空。眞に心體如なり、人人具足底。

㋠無大無小。大にして大なく、小にして小なし、大小の量を絶するが故に。

㋷無漏無爲。諸漏已に盡くるが故に。

師一日上堂、大衆に(ウ)開示して云く、「(ヰ)豫め前に若し(ノ)打不徹ならば、(オ)臘月三十夜到來、儞が(ク)熱亂を管取せん。有般の(ヤ)外道、纔に人の工夫を做すことを説くを見いて、他便ち(マ)冷笑して、猶ほ這箇の在る有り。我れ且つ汝に問ふ、忽然として命終に(ケ)臨む時、儞何を持つてか生死に抵敵せん。儞且く思量して看よ、却つて(フ)箇の道理ありや、那ぞ(コ)天生の彌勒(エ)自然の釋迦を得ん。(テ)一般閑神野鬼有り、纔に(ア)人の些少の病有るを見て、便ち他人の與に説く、儞只だ放下著せよ。(サ)他病あるに至るに及んで又却つて(キ)理會を下さず、(ユ)手忙しく脚亂れて、儞が肉利刀の碎割するが如きを(メ)爭奈せん。(ミ)主宰を做すことを得ず、(シ)萬般事須らく是れ(エ)閑時に辨得下して、(ヒ)忙時に用ふることを得

(ヌ)無迷無悟。悟らず迷はず。
(ル)了了。分明のこと。
(ヲ)無一物。生佛迷悟等。
(ワ)無人亦無佛。人見なく。佛見なし。
(カ)的量。思量目的なり、端的度量なり。
(ヨ)無依倚。獨脱無依。
(タ)無粘綴。粘着連綴。
(レ)一道。喩なり、清淨の流輩。
(ソ)是無生法忍。人々の自性なり、不生滅の故に、無生法忍といふ、此の法は忍渠。藏本には「是」の字なし。
(ツ)擬議。擬議思量、生佛迷悟等。
(ネ)無口不解説法。眞佛は口の所詮に非ざるが故に、「松風野月肅説法」なり。
(ナ)眞聽無耳。眼處に聲を聞き、耳處に見る。
(ラ)其誰聞。恁麽の説法、誰とは座下の諸人なり。遍界無不聞。
(ム)珍重。請ふ自愛を加へよと、「おさらば」と嘱するなり。

(ウ)開示。迷情を破りて理に通ずるを開といふ、示は顯示、知見現れて宇宙の萬德の分明に顯示さるること、實相無相の法門に名づく。
(ヰ)豫前。命終以前。一本、豫を「預」に作る。
(ノ)打不徹。古句に「雲在㆓嶺頭㆒閑不徹」と、打は助字。
(オ)臘月三十。臨命終の時をいふ。
(ク)熱亂。熱心亂動。
(ヤ)外道。正見の人に非ざるを云ふ。
(マ)冷笑。この二字の下に云の字を脱するか。這箇在とは人人這箇の在るあり、何ぞ工夫辨道を用ひん。一本、「遮箇」に作る。
(ケ)臨。卽今。
(フ)箇道理。工夫辨道を作さずして、道を得るの理は。

べし。㋲多少省力なり、渇に臨んで井を掘るを㋝待つことを休めよ。手脚辨ぜざることを做さん。㋜遮場の猥藉、如何が廻避せん。㋑前路黑暗なり、信に㋺胡鑽亂撞を采らん。㋩苦なる哉苦なる哉、㋥平日只だ口頭三昧を學んで、禪と說き道と說く、佛を喝し祖を罵る。㋭這裏に到つて都べて用不著。平日只管に人を瞞ず、爭か知らん、㋬今日自ら瞞了すと道ふことを、阿鼻地獄の中、決定して儞を放すことをえず、而今末法㋣將に沈せんとす、全く有力量の兄弟家に㋠仗つて負荷して、佛の慧命を續ぎて斷絕せしむること莫れ。㋷今時纔に一箇半箇の行脚あり、只だ去つて山を觀景を觀て、光陰能く幾何か有るを知らず、㋦一息回らざれば便ち是れ來生なり、未だ甚麼の㋸頭面をか知らず、嗚呼、㋾儞

㋙天生。天然自然の。
㋓自然。三祇修行を作さずして。
㋢一般閑神。人に著いて害を爲すものなり。杜撰の知識の學人を接するのに比す。
㋐人。學人の些少の禪病。
㋚他。杜撰の知識。
㋖理會不下。自己本分。
㋴手忙脚亂。臨命終の時。
㋱爭奈。其の苦痛を。
㋯做主宰。自由自在を得す。
㋛萬般事。上來如是の故に。
㋽閑時。平常無事。
㋪忙時。命終の。
㋲多少省力。閑時に辨得せば、則ち死に臨んで減省用力。
㋝休待。臨死求道に喩ふ。
㋜遮場。臨命終の時。
㋑前路黑暗。死出の山、三途の河等。
㋺胡鑽亂撞。地獄の苦惱を云ふ。

㋩苦哉。黃檗の赤心片片。
㋥平日。杜撰の師徒。
㋭到這裏。命終時。
㋬今日自。平日人を瞞じて命終に至つて、始めて自己を瞞することを知る。
㋣將沈。大法は。
㋠仗。法は人に依つて弘通するが故に。
㋷今時。末後實參の人なきを歎ず。
㋦一息回らざるは死するなり。
㋸頭面。本來那人の。
㋾儞。行脚の衲子。
㋻康健。安康壯健。
㋕討取箇分曉。人々分曉の處を尋討念取せよと。
㋵不被人瞞。他人の鼻孔を借りて呼吸せず。
㋟一段大事。人人脚下底。
㋹關棙子。具には向上の關棙子といふ、關棙子は閂なり、佛祖屋裡の要機をいふ。關と同

兄弟家に勸む、色力㋻康健の時を趁ふて㋕箇の分曉の處を討取せよ。㋵人に瞞ぜられざる底の㋟一段、大事這れ些の㋹關棙子、甚だ是れ㋞容易なり。㋡自ら是れ儞肯て㋧去下せず、㋤死志、に工夫を做す。只管に道ふ、了じ難く又好し難しと。儞に敎ふ、㋶那の樹上に自生し得る底の木杓を知れ、儞也た須らく自ら去つて、個の㋰轉變を做し始めて、若し是れ個の丈夫の漢ならば、個の公案を看よ。僧、㋒趙州に問ふ、『狗子に還つて佛性ありや也た無や。』州云く、『無。』但だ去つて二六時中に個の無字を看よ、㋼晝參夜參、行住坐臥、著衣喫飯の處、屙屎放尿の處、㋨心心相顧みて猛に精彩を著けよ。箇の無字を守つて、日久しく月深うして打成一片ならば、忽然として心華頓に發け、佛祖の㋔機を悟る、㋗

意なり、疑關を開發するなり。
㋞容易。他力を借らざるが故に。
㋡自。學人。
㋧去下。恁麼容易地に。
㋤死志。專一に力を用ふること。
㋶那樹上。此の語未だ詳ならず、蓋し人人一大事は他に向つて求めざるに喩ふか。
㋰轉變。舊面目を一新するの義。
㋒趙州狗子話。無門關に委し。此れは後代の公案を提撕するの始めなり。
㋼晝參夜參。以下は打成一片の義を述ぶ。
㋨心心。不退轉。
㋔機。要。
㋗便不被。如是の大丈夫の鐵漢。
㋳開大口。有說も是、無說も是。

㋮達磨西來。恁麼の人より見來れば。
㋘世尊拈華。何の閑模樣ぞ。
㋫閻羅老子。三舍を避く。
㋙千聖。汝に向つて命を乞はん。
㋓直。直下に寸步を移さず。
㋢怕。若し一點も所求の心あらば則ち遠うして遠し。
㋐迴脫。三乘四果十地等の知る處に非ず、故に。
㋚緊。十二時中、放下せず。
㋖一番寒。闍梨を寒殺するの時節。
㋴梅花撲鼻。佛祖の鼻孔を穿却し了る。
巳上の脚注は舊寬文本に某師の書き入れせしもの、明治本增冠傍註に依りて書せり。
脚註者宮裡祖泰。

便ち天下の老和尚の舌頭に瞞ぜられず、便ち㋳大口を開くことを會す。㋮達磨西來して、風無きに浪を起す、㋘世尊拈華、一場の敗缺なり、這裏に到つて甚麼の㋫閻羅老子とか説かん。㋙千聖も尚ほ儞を奈何ともせず、道ふことを信ぜずや、㋓直に這般の奇特あり、甚としてか此の如くなる。此の事有心の人を㋢怕る。」

頌に曰く、

〔偈〕「塵勞㋐迥脱す事常にあらず。㋚緊く繩頭を把つて一場を做す、是れ㋖一番寒骨に徹するにあらずんば、爭か㋴梅花の鼻を撲つて香しきを得ん。」

國譯黄檗山斷際禪師傳心法要 終

國譯裴相國傳心偈

予宛陵・鐘陵に於て、皆黄檗希運禪師に親むことを得て、盡く心要を傳ふ。乃ち傳心偈を作ること(イ)爾り。

心不可傳、以契爲傳、心不可見、
以無爲見、契亦無契、(ロ)無亦無無、
化城不住、迷額有珠、珠是强名、
城豈有形、卽心卽佛、(ハ)佛卽無生、
直下便是、(ニ)勿求勿營、使佛覓佛、
(ホ)倍費功程、隨法生解、(ヘ)卽落魔界、
凡聖不分、乃離見聞、無心似鏡、
與物無競、(ト)無念似空、(チ)無物不容、
(リ)三乘外法、(ヌ)歴劫希逢、(ル)若能如是、
是出世雄。

(イ)傳心偈。爾の字の左に「休」の一字を記すも、今之を省きたるなり、此の偈は四言八句より成る。
(ロ)無亦無無。直に掃蕩し了る。
(ハ)佛卽無生。本源自性天眞佛。
(ニ)勿求勿營。外に向つて馳求し、經營するなき。
(ホ)倍費功程。功行途程、則ち修行の次第階級。
(ヘ)卽落魔界。天魔等の境界、則ち有相の修行。
(ト)無念似空。虛空に。
(チ)無物不容。萬象を含容す。
(リ)三乘外法。敎外別傳。
(ヌ)歴劫希逢。曇華は見易く、知識には逢ひ難しき。

嘗て聞く、河東の(ヲ)大士、親しく(ワ)高安の導師に見えて、心要を當年に傳へ、偈章を著して後に示すと、頓に聾瞽を開いて、(カ)煥として丹清の若し、予其の遺つる所を(ヨ)惜んで、本錄に(タ)綴るといふ爾り。

(レ)慶曆戊子の歲、(ソ)南宗字は夫眞といふもの題す。

(ル)若能如是。無心似レ鏡、無念似レ空等。

(ヲ)大士。在家の菩薩にして、裴休を指す。

(ワ)高安導師。斷際禪師のこと。

(カ)煥若丹清。清は寧ろ靑に作るべし。

(ヨ)惜。愛惜。

(タ)綴。補綴。

(レ)慶曆。宋の仁宗の年號。戊子は八年、日本の後冷泉天皇永承三年に當る。

(ソ)南宗。不詳なり、夫眞は異本に「天眞」に作る。

後敍

イ鷲嶺に微笑して、心法を付囑し、ロ少室に面壁して、直に人心を指す。ハ神光の安心、ニ馬祖の即心、ホ百丈ヘ黄檗の諸大老に至るまで、密に心印を傳ふ。ト大機普く被り、チ大用繁興す、リ一心に本かざることなし。譬へば大海のヌ千波を洶湧して、波海を離れざるが如く、又精金の衆器を革變して、器の金に異ならざるが如し、故に曰く、森羅及び萬象、一法の印する所なりと、其れル唯だ心の謂か。昔唐朝の相國裴休、ヲ新安に守たりし日、大安寺に入つて、ワ香を行き畫壁を觀て、主事の僧に問うて曰く、「是れ何の圖相ぞ。」主曰く、「高僧のカ眞儀。」裴曰く、「眞儀觀つべし、高僧何くにかある。」主對ふることなし、適黄檗の運禪師、ヨ彼に寓す。公之を詢ふ

イ鷲嶺。耆闍は鷲、崛は頭と翻す、この山の頂、鷲に似たるを以て名く、故に靈鷲山といふ、この故事は前に委し。これは世尊のこと。
ロ少室。嵩山少林寺、これは達磨のこと。
ハ神光。二祖慧可大師、安心の話。
ニ馬祖。道一禪師、即心即佛の話。
ホ百丈。懷海禪師、耳聾の話。
ヘ黄檗。希運禪師、噇酒糟の話。
ト大機。大根機の人、普く其の化を被る。
チ大用。或は棒、或は喝、繁昌興起。
リ一心。正師家の。
ヌ洶湧千波。大機大用繁興して、即ち千差の法要なり、海は一心。
ル唯心之謂歟。唯心の所現。
ヲ守新安。巳下弟子に至るまでは、傳燈十二の裴休章の文と大同小異なり、新安は郡の名、今の直隷省徽州府にあり。
ワ行香。律の中にこの法あり。
カ眞儀。眞相儀容。

て曰く、「一偈一問あり、諸徳㋟吝辭す、代つて㋹一語を酬ゆべし」と。檗、諸公の垂問せんことを請ふ、裴、前話を擧す、檗聲を厲して曰く、「裴休」と、公應諾す。檗云く、「甚麼の處にかある。」裴當下に㋞旨を領ず、㋡髻珠を獲るが如し。乃ち㋧延いて府署に入つて弟子の禮を執る。偈を贈つて曰く、「自從㋤大士傳二心印一、㋶額有二圓珠一七尺身、㋰掛レ錫十年棲二㋒蜀水一、㋖浮レ杯今日渡二㋨漳濱一、㋔千徒龍象隨二㋗高步一、㋳萬里香花結二勝因一、㋮擬三欲事レ師爲二弟子一、不レ知㋘將二法付何人一。」爾しより師資の道合ふ。㋫玄論を渇聞して、輯めて編を成す、目けて傳心法要といふ、仍つて㋙自ら語を序す。唐の好事のもの、此の集を刊行して、㋓流へて日本に入る、檀那越州の刺史、志を内典に篤うす、

㋵寓彼。大安寺に居す。
㋟吝辭。謙損。
㋹一語。一轉語。
㋞領旨。玄旨を領會す。
㋡如獲髻珠。髻中の寶珠、これは裴公の歡喜にたとへたる。
㋧延。引なり。
㋤大士。達磨。
㋶額有圓珠。異相を述べて黄檗を賛す、達磨已後唯だ一人。
㋰掛錫。今日まで十年。
㋒蜀水。今の筠州米山縣の北三里にあり、閩の黄檗のある所。
㋖浮杯。一木杯を船にたとふ。
㋨漳濱。南昌縣の漳水。
㋔千徒。隨徒の盛をいふ。異本千徒を一千、又八千と作す。
㋗高步。黄檗の風儀の高きをいふ。
㋳萬里。敎化の遠方に及ぶをいふ、拈香獻花して般若の勝因を結緣す。

㋮擬欲。裴公自述。
㋘將法。大法の心を何人にか付囑す。
㋫渇聞玄論。深玄高論を渇望聽聞して、水を得るが如く、法を聞くを喜ぶ。
㋙自序。裴公の序文、前に見ゆ。
㋓流。流布、刊行は字を刻するなり、行は用なり。
㋢公事。官用の餘暇。
㋐心要。心法の簡要。
㋚制心一處。坐禪せよと勉策す。
㋖無事不辨。一處透れば千處透得す。
㋴施財命工。越州刺史の施主。
㋱本國。日本なり。
㋯直指之宗。達磨門下の單傳。
㋛本。本來なり。自性本體の大光明藏。
㋼無盡燈。毘耶は毘耶離、此には廣嚴といふ、淨名は維摩所居の城なり、この語は菩薩品

(テ)公事の暇、喜びて是の書を閲す。嘗て(ア)心要を以て予に問ふ。予、但だ其の(サ)心を一處に制するときは、則ち(キ)事として辨ぜずといふことなきを勉む。因つて(ユ)財を施し工に命じて、唐本を以て模刊し、廣く傳へて(オ)本國、未だ(ミ)直指の宗を信ぜざるものをして、人人此の心中に、(シ)本一段の大光明藏を具して、天を輝し地を鑑み、古に耀き今に騰ることあることを知らしめんと欲す。亦猶ほ毘耶の淨名の、所謂(エ)無盡燈のごとくなる者なり。越に囑して後序と爲す、然も亦未だ(ヒ)蛇を畫いて足を添ふるの誚を免れず焉。旹に(モ)弘安癸未の仲春、(セ)金剛壽福禪寺に住する宋の沙門(ス)大休正念、(イ)藏六庵に書す。

に出づ。

(ヒ)畫蛇添足。故事は前に出づ、無用の事をなすと卑下す。

(モ)弘安癸未。日本の後宇多天皇弘安六年、元寇の明明年なり。

(セ)壽福寺。鎌倉五山の一、龜ケ谷にあり、開山は榮西禪師。

(ス)大休。諱は正念、宋溫州永嘉郡の人、石溪月に嗣ぐ、咸淳五年本朝の文永六年東渡す、平時宗之を歸依す、禪興、建長、壽福、圓覺の諸刹に住す、正應二年十二月晦日正觀寺に於て遷化す、勅して佛源禪師と諡す、松源四世なり。

(イ)藏六庵。圓覺寺塔頭、師の塔所なり。

黃檗山斷際禪師傳心法要

河東裴休集并序

有大禪師、法諱希運、住洪州高安縣黃檗山鷲峯下、乃曹谿六祖之嫡孫、西堂百丈之法姪、獨佩最上乘、離文字之印、唯傳一心、更無別法、心體亦空、萬緣俱寂、如大日輪昇虛空中、光明照耀、淨無纖埃、證之者無新舊無淺深、說之者不立義解、不立宗主、不開戶牖、直下便是、動念即乖、然後爲本佛、故其言簡其理直、其道峻其行孤、四方學徒、望山而趍、覩相而悟、往來海衆常千餘人、予會昌二年、廉于鍾陵、自山迎至州、憩龍興寺、旦夕問道、大中二年、廉于宛陵、復去禮迎至所部、安居開元寺、旦夕受法、退而紀之、十得一二、佩爲心印、不敢發揚、今恐入神精義、不聞於未來、遂出之、授門下僧太舟法建、歸舊山之廣唐寺、問長老法衆、與往日常所親聞、同異何如也、時唐大中十一年十月八日序。

黃檗山斷際禪師傳心法要

鐘陵錄

師謂休曰、諸佛與一切衆生、唯是一心、更無別法、此心無始已來、不曾生、不曾滅、不青不黃、無形無相、不屬有無、不計新舊、非長非短、非大非小、超過一切限量名言蹤跡對待、當體便是、動念卽乖、猶如虛空無有邊際、不可測度、唯此一心卽是佛、佛與衆生更無別異、但是衆生、著相外求、求之轉失、使佛覓佛、將心捉心、窮劫盡形、終不能得、不知息念忘慮、佛自現前。

此心卽是佛、佛卽是衆生、爲衆生時、此心不減、爲諸佛時、此心不添、乃至六度萬行、河沙功德、本自具足、不假修添、遇緣卽施、緣息卽寂、若不決定信此是佛、而欲著相修行、以求功用、皆是妄想、與道相乖、此心卽是佛、更無別佛、亦無別心、此心明淨、猶如虛空無一點相貌、擧心動念卽乖法體、卽爲著相、無始已來、無著相佛、修六度萬行、欲求成佛、卽是次第、無始已來、無次第佛、但悟一心、更無少法可得、此卽眞佛、佛與衆生一心無異、猶如虛空無雜無壞、如大日輪照四天下、日昇之時、明徧天下、虛空不曾明、日沒之時、暗徧天下、虛空不曾暗、明暗之境、自相凌奪、虛空之性、廓然不變、佛及衆生心亦如此、若觀佛作淸淨光明解脫之相、觀衆生作垢濁暗昧生死之相、作此解者、歷河沙劫、終不得菩提、爲著相故、唯此一心、更無微塵許法可得、卽心

是佛、如今學道人、不悟此心體、便於心上生心、向外求佛、著相修行、皆是惡法非菩提道、供養十方諸佛、不如供養一箇無心道人、何故、無心者無一切心也、如如之體、內如木石、不動不搖、外如虛空、不塞不礙、無能所、無方所、無相貌、無得失、趨者不敢入此法、恐落空無棲泊處、故望崖而退、例皆廣求知見、所以求知見者如毛、悟道者如角。

文殊當理、普賢當行、理者眞空無礙之理、行者離相無盡之行、觀音當大慈、勢至當大智、維摩者淨名也、淨者性也、名者相也、性相不異、故號淨名、諸大菩薩所表者、人皆有之、不離一心、悟之卽是、今學道人、不向自心中悟、乃於心外、著相取境、皆與道背、恒河沙者、佛說是沙、諸佛菩薩、釋梵諸天、步履而過、沙亦不喜、牛羊蟲蟻、踐踏而行、沙亦不怒、珍寶馨香、沙亦不貪、糞尿臭穢、沙亦不惡、此心卽無心之心、離一切相、衆生諸佛更無差別、但能無心、便是究竟、學道人若不直下無心、累劫修行、終不成道、被三乘功行拘繫、不得解脫、然證此心有遲疾、有聞法一念便得無心者、有至十信十住十行十廻向、乃得無心者、有至十地、乃得無心者、長短得無心乃住、更無可修可證、實無所得、眞實不虛、一念而得與十地而得者、功用恰齊、更無深淺、只是歷劫枉受辛勤耳、造惡造善、皆是著相、著相造惡、枉受輪廻、著相造善、枉受勞苦、總不如言下便自認取本法、此法卽心、心外無法、此心卽法、法外無心、心自無心、亦無無心者、將心無心、心却成有、默契而已、絕諸思議、故曰言語道斷、心行處滅、此心是本源清淨佛、人皆有之、蠢動含靈與諸佛菩薩、一體不異、祇爲妄想分別、造種種業果、本佛上實無一物、虛通寂靜、明妙安樂而已、深自悟入、直下便是圓滿具足、更無所欠、縱使三祇精進修行、歷諸地位、及一念證時、祇證

元來自佛、向上更不添得一物、却觀歷劫功用、總是夢中妄爲、故如來云、我於阿耨菩提、實無所得、若有所得、然燈佛則不與我授記、又云、是法平等無有高下、是名菩提、卽此本源清淨心、與衆生諸佛、世界山河、有相無相、徧十方界、一切平等、無彼我相、此本源清淨心、常自圓明徧照、世人不悟、只認見聞覺知爲心、爲見聞覺知所覆、所以不覩精明本體、但直下無心、本體自現、如大日輪昇於虛空、徧照十方、更無障碍、故學道人、唯認見聞覺知、施爲動作、空却見聞覺知、卽心路絕無入處、但於見聞覺知處認本心、然本心不屬見聞覺知、亦不離見聞覺知、但莫於見聞覺知上起見解、莫於見聞覺知上動念、亦莫離見聞覺知覓心、亦莫捨見聞覺知取法、不卽不離、不住不著、縱橫自在、無非道場、世人聞道諸佛皆傳心法、將謂心上別有一法可證可取、遂將心覓法、不知心卽是法、法卽是心、不可將心更求於心、歷千萬劫終無得日、不如當下無心、便是本法、如力士迷額內珠、向外求覓、周行十方、終不能得、智者指之、當時自見本珠如故、故學道人、迷自本心、不認爲佛、遂向外求覓、起功用行、依次第證、歷劫勤求、永不成道、不如當下無心、決定知一切法本無所有、亦無所得、無依無住、無能無所、不動妄念、便證菩提、及證道時、祇證本心佛、歷劫功用、並是虛修、如力士得珠時、祇得本額珠、不關向外求覓之力、故佛言、我於阿耨菩提、實無所得、恐人不信、故引五眼所見、五語所言、眞實不虛、是第一義諦。

學道人莫疑、四大爲身、四大無我、我亦無主、故知、此身無我亦無主、五陰爲心、五陰無我亦無主、故知、此心無我亦無主、六根六塵、六識和合、生滅亦復如是、十八界既空、一切皆空、唯有本心、蕩然清淨、有識食、有智食、四大之身、饑瘡爲患、隨順給養、不生貪著、謂之智食、恣情取味、妄

生分別、唯求適口、不生厭離、謂之識食、聲聞者因聲得悟、故謂之聲聞、但不了自心、於聲教上起解、或因神通、或因瑞相言語運動、聞有菩提涅槃、三僧祇劫、修成佛道、皆屬聲聞道、謂之聲聞佛、唯直下頓了自心本來是佛、無一法可得、無一行可修、此是無上道、此是眞如佛、學道人祇怕一念有、即與道隔矣、念念無相、念念無爲、即是佛、學道人、若欲得成佛、一切佛法、總不用學、唯學無求無著、無求即心不生、無著即心不滅、不生不滅即是佛、八萬四千法門、對八萬四千煩惱、祇是教化接引門、本無一切法、離即是法、知離者是佛、但離一切煩惱、是無法可得。

學道人、若欲得知要訣、但莫於心上著一物、言佛眞法身猶如虛空、此是喩法身即虛空、虛空即法身、常人謂法身徧虛空處、虛空中含容法身、不知法身即虛空、虛空即法身也、若定言有虛空、虛空不是法身、若定言有法身、法身不是虛空、但莫作虛空解、虛空即法身、莫作法身解、法身即虛空、虛空與法身無異相、佛與衆生無異相、生死與涅槃無異相、煩惱與菩提無異相、離一切相即是佛、凡夫取境、道人取心、心境雙忘、乃是眞法、忘境猶易、忘心至難、人不敢忘心、恐落空無撈摸處、不知空本無空、唯一眞法界耳、此靈覺性、無始已來、與虛空同壽、未曾生、未曾滅、未曾有、未曾無、未曾穢、未曾淨、未曾喧、未曾寂、未曾少、未曾老、無方所、無內外、無數量、無形相、無色象、無音聲、不可覓不可求、不可以智慧識、不可以言語取、不可以境物會、不可以功用到、諸佛菩薩、與一切蠢動含靈、同此大涅槃性、性即是心、心即是佛、佛即是法、一念離眞、皆爲妄想、不可以心更求於心、不可以佛更求於佛、不可以法更求於法、故學道人、直下無心默契而已、擬心即差、以心傳心、此爲正見、愼勿向外逐境、認境爲心、是認賊爲子、爲有貪嗔癡、即

立戒定慧、本無煩惱、焉有菩提、故祖師云、佛說一切法、爲除一切心、我無一切心、何用一切法、本源清淨佛上、更不著一物、譬如虛空雖以無量珍寶莊嚴、終不能住、佛性同虛空、雖以無量功德智慧莊嚴、終不能住、但迷本性轉不見耳、所謂心地法門、萬法皆依此心建立、遇境卽有、無境卽無、不可於淨性上轉作境解、所言定慧鑑用、歷歷寂寂、惺惺見聞覺知、皆是境上作解、暫爲中下根人說卽得、若欲親證、皆不可作如此見解、盡是境法、有沒處沒於有地、但於一切法不作有無見、卽見法也。

九月一日、師謂休曰、自達磨大師到中國、唯說一心、唯傳一法、以佛傳佛、不說餘佛、以法傳法、不說餘法、法卽不可說之法、佛卽不可取之佛、乃是本源清淨心也、唯此一事實、餘二則非眞、般若爲慧、此慧卽無相本心也、凡夫不趣道、唯恣六情、乃行六道、學道人、一念計生死、卽落魔道、一念起諸見、卽落外道、見有生趣其滅、卽落聲聞道、不見有生、唯見有滅、卽落緣覺道、法本不生、今亦無滅、不起二見、不厭不忻、一切諸法、唯是一心、然後乃爲佛乘也。

凡夫皆逐境生心、心遂忻厭、若欲無境、當忘其心、心忘卽境空、境空卽心滅、若不忘心、而但除境、境不可除、祇益紛擾、故萬法唯心、心亦不可得、復何求哉。

學般若人不見有一法可得、絕意三乘、唯一眞實、不可證得、謂我能證能得、皆增上慢人、法華會上拂衣而去者、皆斯徒也、故佛言、我於菩提實無所得、默契而已。

凡人臨欲終時、但觀五蘊皆空、四大無我、眞心無相、不去不來、生時性亦不來、死時性亦不去、湛然圓寂、心境一如、但能如是直下頓了、不爲三世所拘繫、便是出世人也、切不得有分毫趣

向、若見善相諸佛來迎、及種種現前、亦無心隨去、若見惡相種種現前、亦無心怖畏、但自忘心同於法界、便得自在、此即是要節也。

十月八日、師謂休曰、言化城者、二乘及十地、等覺妙覺、皆是權立接引之教、並爲化城、言寶所者、乃眞心本佛、自性之寶、此寶不屬情量、不可建立、無佛無衆、生無能無所、何處有城、若問此既是化城、何處爲寶所、寶所不可指、指即有方所、非眞寶所也、故云在近而已、不可定量言之、但當體會契之即是。

言闡提者、信不具也、一切六道衆生、乃至二乘不信有佛果、皆謂之斷善根闡提、菩薩深信有佛法、不見有大乘小乘、佛與衆生同一法、性乃謂之善根闡提、大抵因聲教而悟者、謂之聲聞、觀因緣而悟者、謂之緣覺、若不向自心中悟、雖至成佛、亦謂之聲聞佛、學道人、多於教法上悟、不於心法上悟、雖歷劫修行、不是本佛、若不於心悟、乃至於教法上悟、即輕心重教、遂成逐塊、忘於本心、故但契本心、不用求法、心即法也。

凡人多爲境礙心、事礙理、常欲逃境以安心、屏事以存理、不知乃是心礙境、理礙事、但令心空、境自空、但令理寂、事自寂、勿倒用心也、凡人多不肯空心、恐落於空、不知自心本空、愚人除事不除心、智者除心不除事、菩薩心如虛空、一切俱捨、所作福德皆不貪著、然捨有三等、內外身心一切俱捨、猶如虛空、無所取著、然後隨方應物、能所皆忘、是爲大捨、若一邊行道布德、一邊旋捨、無希望心、是爲中捨、若廣修衆善、有所希望、聞法知空、遂乃不著、是爲小捨、大捨如火燭在前、更無迷悟、中捨如火燭在傍、或明或暗、小捨如火燭在後、不見坑穽、故菩薩心如虛空、一

切俱捨、過去心不可得、是過去捨、現在心不可得、是現在捨、未來心不可得、是未來捨、所謂三世俱捨、自如來付法迦葉已來、以心印心、心心不異、印著空卽印不成文、印著物卽印不成法、故以心印心、心心不異、能印所印俱難契會、故得者少、然心卽無心、得卽無得。

佛有三身、法身說自性虛通法、報身說一切淸淨法、化身說六度萬行法、法身說法、不可以言語音聲形相文字而求、無所說無所證、自性虛通而已、故曰、無法可說、是名說法、報身化身皆隨機感現、所說法亦隨事應根、以爲攝化、皆非眞法、故曰、報化非眞佛、亦非說法者。

所言同是一精明、分爲六和合、一精明者一心也、六和合者六根也、此六根各與塵合、眼與色合、耳與聲合、鼻與香合、舌與味合、身與觸合、意與法合、中間生六識、爲十八界、若了十八界無所有、束六和合爲一精明、一精明者卽心也、學道人皆知此、但不能免作一精明六和合解、遂被法縛、不契本心、如來現世、欲說一乘眞法、則衆生不信、興謗沒於苦海、若都不說則墮慳貪、不爲衆生溥捨妙道、遂設方便說有三乘、乘有大小、得有淺深、皆非本法、故云、唯有一乘道、餘二則非眞、然終未能顯一心法、故召迦葉同法座、別付一心離言說法、此一枝法令別行、若能契悟者便至佛地矣。

問、如何是道、如何修行、師云、道是何物、汝欲修行、問、諸方宗師相承、參禪學道如何、師云、接引鈍根人語、未可依憑、云、此旣是接引鈍根人語、未審接上根人、復說何法、師云、若是上根人、何處更就他覓、他自己尙不可得、何況更別有法當情、不見、敎中云、法法何狀、云、若如此則都不要求覓也、師云、若與麼則省心力、云、如是則渾成斷絕、不可是無也、師云、阿誰敎他無、他是阿

誰、儞擬覓他、云、既不許覓、何故、又言莫斷他、師云、若不覓便休、卽誰敎儞斷、儞見目前虛空、作麼生斷他、云、此法可得便同虛空否、師云、虛空早晚向儞道有同有異、我暫如此說、儞便向者裏生解、云、應是不與人生解耶、師云、我不曾障汝、要且解屬於情、情生則智隔、云、向這裏莫生情是否、師云、若不生情、阿誰道是。

問、纔向和尚處發言、爲什麼便道話墮、師云、汝自是不解語、人有什麼墮負。

問、向來如許多言說、皆是抵敵語、都未曾有實法指示於人、師云、實法無顚倒、汝今問處自生顚倒、覓什麼實法、云、既是問處自生顚倒、和尚答處如何、師云、儞且將物照面看、莫管他人、又云、只如箇癡狗相似、見物動處便吠、風吹草木也不別、又云、我此禪宗、從上相承已來、不曾敎人求知求解、祇云、學道、早是接引之詞、然道亦不可學、情存學解、却成迷道、道無方所、名大乘心、此心不在內外中間、實無方所、第一不得作知解、祇是說汝如今情量盡處爲道、情量若盡、心無方所、此道天眞本無名字、祇爲世人不識迷在情中、所以諸佛出來、說破此事、恐儞諸人不了、權立道名、不可守名而生解、故云、得魚忘筌、身心自然、達道識心、達本源故、號爲沙門、沙門果者、從息慮而成、不從學得、汝如今將心求心、傍他家舍、祇擬學取、有什麼得時、古人心利、纔聞一言便乃絕學、所以喚作絕學無爲閑道人、今時人祇欲得多知多解、廣求文義喚作修行、不知多知多解、翻成壅塞、唯知多與兒酥乳喫、消與不消都總不知、三乘學道人、皆是此樣、盡名食不消者、所謂知解不消、皆爲毒藥、盡向生滅中取、眞如中都無此事、故云、我王庫內無如是刀、從前所有一切解處、盡須屛却令空、更無分別、卽是空如來藏、如來藏者、更無纖塵可、

有、卽是破有法王出現世間、亦云、我於然燈佛所、無少法可得、此語祇爲空儞情解知量、但消融表裏情盡都無依執、是無事人、三乘敎網、祇是應機之藥、隨宜所說、臨時施設、各各不同、但能了知、卽不被惑、第一不得於一機一敎邊守文作解、何以如此、實無有定法如來可說、我此宗門、不論此事、但知息心卽休、早不用思前慮後。

問、從上來皆云卽心是佛、未審、卽那箇心是佛、師云、儞有幾箇心、云、爲復卽凡心是佛、卽聖心是佛、師云、儞何處有凡聖心耶、云、卽今三乘中、說有凡聖、和尙何得言無、師云、三乘中、分明向儞道、凡聖心是妄、儞今不解、反執爲有、將空作實、豈不是妄、妄故迷心、汝但除却凡情聖境、心外更無別佛、祖師西來、直指一切人全體是佛、汝今不識、執凡執聖、向外馳騁、還自迷心、所以向汝道、卽心是佛、一念情生、卽墮異趣、無始已來、不異今日、無有異法、故名成等正覺、云、和尙所言卽者、是何道理、師云、覓什麼道理、纔有道理、便卽心異、云、前言無始已來不異今日、此理如何、師云、祇爲覓故、汝自異他、汝若不覓、何處有異、云、旣是不異、何更用說卽、師云、汝若不認凡聖、阿誰向汝道卽、卽若不卽、心亦不心、可中心卽俱忘、阿儞更擬向何處覓去。

問、妄能障自心、未審、而今以何遣妄、師云、起妄遣妄、亦成妄、妄本無根、祇因分別而有、儞但於凡聖兩處情莫計念、自然無妄、更擬若爲遣他、都不得有纖毫依執、名爲我捨兩臂必當得佛、云、旣無依執、當何相承、師云、以心傳心、云、若心相傳、云何言心亦無、師云、不得一法、名爲傳心、若了此心、卽是無心無法、云、若無心無法、云何名傳、師云、汝聞道傳心、將謂有可得也、所以祖師云、認得心性時、可說不思議、了了無所得、得時不說知、此事若敎會何堪也。

問、祇如目前虛空、可不是境、豈無指境見心乎、師云、什麼心教汝向境上見、設汝見得、只是箇照境底心、如人以鏡照面、縱然得見眉目分明、元來祇是影像、何關汝事、云、若不因照、何時得見、師云、若也涉因、常須假物、有什麼了時、汝不見、他向汝道、撒手似君無一物、徒勞謾說數千般、云、他若識了、照亦無物耶、師云、若是無物、更何用照、儞莫開眼寐語去。

上堂云、百種多知、不如無求最第一也、道人是無事人、實無許多般心、亦無道理可說、無事散去。

問、如何是世諦、師云、說葛藤作什麼、本來清淨、何假言說問答、但無一切心、卽名無漏智、汝每日行住坐臥、一切言語、但莫著有爲法、出言瞬目、盡同無漏、如今末法向去、多是學禪道者、皆著一切聲色、何不與我心、心同虛空去、如枯木石頭去、如寒灰死火去、方有少分相應、若不如是、他日盡被閻老子拷儞在、儞但離卻有無諸法、心如日輪常在虛空、光明自然不照而照、不是省力底事、到此之時、無棲泊處、卽是行諸佛路、便是應無所住而生其心、此是儞清淨法身、名爲阿耨菩提、若不會此意、縱儞學得多知、勤苦修行、草衣木食、不識自心、盡名邪行、定作天魔眷屬、如此修行、當復何益、誌公云、佛本是自心作、那得向文字中求、假饒儞學得三賢四果十地滿心、也祇是在凡聖內坐、不見道、諸行無常、是生滅法、勢力盡箭還墜、招得來生不如意、爭似無爲實相門、一超直入如來地、爲儞不是與麼人、須要向古人建化門、廣學知解、誌公云、不逢出世明師、枉服大乘法藥、儞如今一切時中、行住坐臥、但學無心、久久須實得、爲儞力量小、不能頓超、但得三年五年或十年、須得箇入處、自然會去、爲汝不能如是、須要將心學禪學

道、佛法有什麼交涉、故云、如來所說、皆爲化人、如將黃葉爲金、止小兒啼、決定不實、若有實得、非我宗門下客、且與儞本體有甚交涉、故經云、實無少法可得、名爲阿耨菩提、若也會得此意、方知、佛道魔道俱錯、本來清淨、皎皎地無方圓、無大小、無長短等相、無漏無爲、無迷無悟、了了見無一物、亦無人亦無佛、大千沙界海中漚、一切賢聖如電拂、一切不如心眞實、法身從古至今、與佛祖一般、何處欠少一毫毛、既會如是意、大須努力盡今生去、出息不保入息。

問、六祖不會經書、何得傳衣爲祖、秀上座是五百人首座、爲教授師、講得三十二本經論、云何不傳衣、師云、爲他有心、是有爲法、所修所證將爲是也、所以五祖付六祖、六祖當時祇是默契、得密授如來甚深意、所以付法與他、汝不見道、法本法無法、無法法亦法、今付無法時、法法何曾法、若會此意、方名出家兒、方好修行、若不信、云何明上座、走來大庾嶺頭尋六祖、六祖便問、汝來求何事、爲求衣爲求法、明上座云、不爲衣來、但爲法來、六祖云、汝且暫時斂念、善惡都莫思慮、明乃稟語、六祖云、不思善不思惡、正當與麼時、還我明上座、父母未生時面目來、明於言下忽然默契、便禮拜云、如人飲水冷暖自知、某甲在五祖會中、枉用三十年功夫、今日方知不是、六祖云、如是、到此之時、方知祖師西來、直指人心、見性成佛、不在言說、豈不見、阿難問迦葉云、世尊傳金襴外、別傳何法、迦葉召阿難、阿難應諾、迦葉云、倒却門前刹竿著、此便是祖師之標榜也、甚生阿難三十年爲侍者、祇爲多聞智慧被佛訶、云汝千日學慧、不如一日學道、若不學道、滴水難消。

問、如何得不落階級、師云、但終日喫飯、未曾咬著一粒米、終日行、未曾踏著一片地、與麼時、無

人無我等相、終日不離一切事、不被諸境惑、方名自在人、更時時念念、不見一切相、莫認前後三際、前際無去、今際無住、後際無來、安然端坐、任運不拘、方名解脫、努力努力、此門中千人萬人、祇得三箇五箇、若不將爲事、受殃有日在、故云、著力今生須了却、誰能累劫受餘殃。

宛陵錄

裴相公問師曰、山中四五百人、幾人得和尚法、師云、得者莫測其數、何故、道在心悟豈在言說、言說祇是化童蒙耳。

問、如何是佛、師云、卽心是佛、無心是道、但無生心動念、有無長短、彼我能所等心、心本是佛、佛本是心、心如虛空、所以云、佛眞法身、猶如虛空、不用別求、有求皆苦、設使恒沙劫、數行六度萬行、得佛菩提、亦非究竟、何以故、爲屬因緣造作故、因緣若盡、還歸無常、所以云、報化非眞佛、亦非說法者、但識自心、無我無人、本來是佛。

問、聖人無心卽是佛、凡夫無心莫沈空寂否、師云、法無凡聖、亦無沈寂、法本不有、莫作無見、法本不無、莫作有見、有之與無、盡是情見、猶如幻翳、所以云、見聞如幻翳、知覺乃衆生、祖師門中、祇論息機忘見、所以忘機則佛道隆、分別則魔軍熾。

問、心既本來是佛、還修六度萬行否、師云、悟在於心、非關六度萬行、六度萬行、盡是化門、接物度生邊事、設使菩提眞如、實際解脫法身、直至十地四果聖位、盡是度門、非關佛心、心卽是佛、所以一切諸度門中、佛心第一、但無生死煩惱等心、卽不用菩提等法、所以道、佛說一切法、度

我一切心、我無一切心、何用一切法、從佛至祖、並不論別事、唯論一心、亦云一乘、所以十方諦求、更無餘乘、此衆無枝葉、唯有諸眞實、所以此意難信、達磨來此土、至梁魏二國、祇有可大師一人、密信自心、言下便會、卽心是佛、身心俱無、是名大道、本來平等、所以深信含生同一眞性、心性不異、卽性卽心、心不異性、名之爲祖、所以云、認得心性時、可說不思議。

問、佛度衆生否、師云、實無衆生如來度者、我尙不可得、非我何可得、佛與衆生、皆不可得、云、現有三十二相、及度衆生、何得言無、師云、凡所有相、皆是虛妄、若見諸相非相、卽見如來、佛與衆生、盡是汝作妄見、祇爲不識本心、謾作見解、纔作佛見、便被佛障、纔作衆生見、便被衆生障、作凡作聖、作淨作穢等見、盡成其障、障汝心故、總成輪轉、猶如獼猴放一捉一、無有歇期、一等是學、直須無學、無凡無聖、無淨無垢、無大無小、無漏無爲、如是一心中、方便勤莊嚴、聽汝學得三乘十二分敎、有一切見解、總須捨卻、所以除去所有、唯置一牀、寢疾而臥、祇是不起諸見、無一法可得、不被法障、透脫三界凡聖境域、始得名爲出世佛、所以云、稽首如空無所依、出過外道、心既不異、法亦不異、心既無爲、法亦無爲、萬法盡由心變、所以我心空故諸法空、千品萬類悉皆同、盡十方空界、同一心體、心本不異、法亦不異、祇爲汝見解不同、所以差別、譬如諸天同寶器食、隨其福德、飯食有異、十方諸佛、實無少法可得、名爲阿耨菩提、祇是一心、實無異相、亦無光彩、亦無勝負、無勝故無佛相、無負故無衆生相、云、心既無相、豈得全無三十二相八十種好化度衆生耶、師云、三十二相屬相、凡所有相、皆是虛妄、八十種好屬色、若以色見我、是人行邪道、不能見如來。

問、佛性與衆生性、爲同爲別、師云、性無同異、若約三乘教、即說有佛性有衆生性、遂有三乘因果、即有同異、若約佛乘及祖師相傳、即不說如是事、唯指一心、非同非異、非因非果、所以云、唯此一乘道、無二亦無三、除佛方便說。

問、無邊身菩薩爲什麼不見如來頂相、師云、實無可見、何以故、無邊身菩薩便是如來、不應更見、祇教汝不作佛見、不落佛邊、不作衆生見、不落衆生邊、不作有見、不落有邊、不作無見、不落無邊、不作凡見、不落凡邊、不作聖見、不落聖邊、但無諸見、即是無邊身、若有見處、即名外道、外道者樂於諸見、菩薩於諸見而不動、如來者即諸法如義、所以云、彌勒亦如也衆聖賢亦如也、如即無生、如即無滅、如即無見、如即無聞、如來頂即是圓見、亦無圓見、故不落圓邊、所以佛身無爲、不墮諸數、權以虛空爲喩、圓同太虛、無欠無餘、等閑無事、莫彊辨他境、辨著便成識、所以云、圓成沈識海、流轉若飄蓬、祇道我知也、學得也、契悟也、解脫也、有道理也、彊處即如意、弱處即不如意、似者箇見解、有什麼用處、我向汝道、等閑無事、莫謾用心、不用求眞、唯須息見、所以內見外見俱錯、佛道魔道俱惡、所以文殊暫起二見、貶向二鐵圍山、文殊即實智、普賢即權智、權實相對治、究竟亦無權實、唯是一心、心且不佛不衆生、無有異見、纔有佛見、便作衆生見、有見無見、常見斷見、便成二鐵圍山、被見障故、祖師直指一切衆生本心、本體本來是佛、不假修成、不屬漸次、不是明暗、不是明故無明、不是暗故無暗、所以無無明、亦無無明盡、入我此宗門、切須在意、如此見得、名之爲法、見法故名之爲佛、佛法俱無、名之爲僧、喚作無爲僧、亦名一體三寶、夫求法者、不著佛求、不著法求、不著衆求、應無所求、不著佛求故無佛、不著法求故無法、

不著僧求、故無僧。

問、和尚見今說法、何得言無僧亦無法、師云、汝若見有法可說、即是以音聲求我、若見有我、即是處法、法亦無法、法是心、所以祖師云、付此心法時、法法何曾法、無法無本心、始解心心法、實無一法可得、名坐道場、道場者祇是不起諸見、悟法本空、喚作空如來藏、本來無一物、何處有塵埃、若得此中意、逍遙何所論。

問、本來無一物、無物便是否、師云、無亦不是、菩提無是處、亦無無知解。

問、何者是佛、師云、汝心是佛、佛即是心、心佛不異、故云、即心即佛、若離於心、別更無佛、云、若自心是佛、祖師西來、如何傳授、師云、祖師西來、唯傳心佛、直指汝等心本來是佛、心心不異、故名爲祖、若直下見此意、即頓超三乘一切諸位、本來是佛、不假修成、云、若如此十方諸佛出世說於何法、師云、十方諸佛出世、祇共說一心法、所以佛密付與摩訶大迦葉、此一心法體、盡虛空徧法界、名爲諸佛、理論這箇法、豈是汝於言句上解得他、亦不是於一機一境上見得他、此意唯是默契、得這一門、名爲無爲法門、若欲會得、但知無心、忽悟即得、若用心擬學取、即轉遠去、若無岐路心、一切取捨心、心如木石、始有學道分、云、如今現有種種妄念、何以言無、師云、妄本無體、即是汝心所起、汝若識心是佛、心本無妄、那得起心更認於妄、汝若不生心動念、自然無妄、所以云、心生則種種法生、心滅則種種法滅、云、今正妄念起時、佛在何處、師云、汝今覺妄起時、覺正是佛、可中若無妄念、佛亦無、何故如此、爲汝起念作佛見、便謂有佛可成、作衆生見、便謂有衆生可度、起心動念、總是汝見處、若無一切見、佛有何處所、如文殊纔起佛見、便貶向二

鐵圍山、云、今正悟時、佛在何處、師云、問從何來、覺從何起、語默動靜、一切聲色、盡是佛事、何處覓佛、不可更頭上安頭、觜上加觜、但莫生異見、山是山、水是水、僧是僧、俗是俗、山河大地、日月星辰、總不出汝心、三千世界、都來是汝箇自己、何處有許多般、心外無法、滿目青山、虛空世界、皎皎地無絲髮許與汝作見解、所以一切聲色、是佛之慧目、法不孤起、仗境方生、爲物之故、有其多智、終日說何曾說、終日聞何曾聞、所以釋迦四十九年說、未曾說著一字、云、若如此、何處是菩提、師云、菩提無是處、佛亦不得菩提、衆生亦不失菩提、不可以身得、不可以心求、一切衆生卽菩提相、云、如何發菩提心、師云、菩提無所得、儞今但發無所得心、決定不得一法、卽菩提心、菩提無住處、是故無有得者、故云、我於然燈佛所、無有少法可得、佛卽與我授記、明知、一切衆生、本是菩提、不應更得菩提、儞今聞發菩提心、謂將一個心學取佛去、唯擬作佛道、任汝三祇劫修、亦祇得箇報化佛、與儞本源眞性佛、有何交涉、故云、外求有相佛、與汝不相似。

問、本旣是佛、那得更有四生六道、種種形貌不同、師云、諸佛體圓、更無增減、流入六道、處處皆圓、萬類之中、箇箇是佛、譬如一團水銀、分散諸處、顆顆皆圓、若不分時、祇是一塊、此一卽一切、一切卽一、種種形貌、喩如屋舍、捨驢屋入人屋、捨人身至天身、乃至聲聞緣覺菩薩佛屋、皆是汝取捨處、所以有別、本源之性、何得有別。

問、諸佛如何行大慈悲、爲衆生說法、師云、佛慈悲者、無緣故、名大慈悲、慈者不見有佛可成、悲者不見有衆生可度、其所說法、無說無示、其聽法者、無聞無得、譬如幻士爲幻人說法、這箇法若爲道、我從善知識言下領得會也悟也、者箇慈悲、若爲汝起心動念學得、他見解不是自悟、

本心、究竟無益。

問、何者是精進。師云、身心不起、是名第一牢彊精進。纔起心向外求者、名爲歌利王愛遊獵。去心不外遊、卽是忍辱仙人。身心俱無、卽是佛道。

問、若無心行此道得否。師云、無心卽便是行此道。更說什麼得與不得。且如暫起一念、便是境。若無一念、便是境忘、心自滅、無復可追尋。

問、如何是出三界。師云、善惡都莫思量、當處便出三界。如來出世、爲破三有。若無一切心、三界亦非有。如一微塵破爲百分、九十九分是無、一分是有、摩訶衍不能勝出。百分俱無、摩訶衍始能勝出。

上堂云、卽心是佛。上至諸佛、下至蠢動含靈、皆有佛性、同一心體。所以達磨從西天來、唯傳一心法、直指一切衆生本來是佛、不假修行。但如今識取自心、見自本性、更莫別求。云何識自心、卽如今言語者、正是汝心。若不言語、又不作用、心體如虛空、相似無有相貌、亦無方所、亦不一向是無、有而不可見。故祖師云、眞性心地藏、無頭亦無尾、應緣而化物、方便呼爲智。若不應緣之時、不可言其有無。正應之時、亦無蹤跡。既知如此、如今但向無中棲泊、卽是行諸佛路。經云、應無所住而生其心。一切衆生、輪廻不息生死者、意緣走作、心於六道不停、致使受種種苦。淨名云、難化之人、心如猨猴。故以若干種法、制禦其心、然後調伏。所以心生種種法生、心滅種種法滅。故知、一切諸法、皆由心造。乃至人天地獄、六道修羅、盡由心造。如今但學無心、頓息諸緣、莫生妄想分別。無人無我、無貪瞋、無憎愛、無勝負。但除却如許多種妄想、性自本來清淨、卽是

修行菩提法佛等、若不會此意、縱儞廣學、勤苦修行、木食草衣、不識自心、皆名邪行、盡作天魔外道、水陸諸神、如此修行、當復何益、誌公云、本體是自心作、那得文字中求、如今但識自心、息却思惟、妄想塵勞、自然不生、淨名云、唯置一牀、寢疾而臥、心不起也、如人臥疾、攀緣都息、妄想歇滅、卽是菩提、如今若心裏紛紛不定、任儞學到三乘四果十地諸位、合殺祇向凡聖中坐、諸行盡歸無常、勢力皆有盡期、猶如箭射於空、力盡還墜、却歸生死輪廻、如斯修行、不解佛意、虛受辛苦、豈非大錯、誌公云、未逢出世明師、枉服大乘法藥、如今但一切時中、行住坐臥、但學無心、亦無分別、亦無依倚、亦無住著、終日任運騰騰、如癡人相似、世人盡不識儞、儞亦不用教人識不識、心如頑石頭、都無縫罅、一切法透汝心不入、兀然無著、如此始有少分相應、透得三界境過、名爲佛出世、不漏心相、名爲無漏智、不作人天業、不作地獄業、不起一切心、諸緣盡不生、卽此身心是自由人、不是一向不生、祇是隨意而生、經云、菩薩有意生身是也、忽若未會無心、著相而作者、皆屬魔業、乃至作淨土佛事、並皆成業、乃名佛障、障汝心故、被因果管束、去住無自由分、所以菩提等法、本不是有、如來所說、皆是化人、猶如黃葉爲金錢、權止小兒啼、故實無有法名阿耨菩提、如今既會此意、何用驅馳、但隨緣消舊業、更莫造新殃、心裏明明、所以舊時見解、總須捨却、淨名云、除去所有、法華云、二十年中、常令除糞、祇是除去心中作見解處、又云、蠲除戲論之糞、所以如來藏、本自空寂、祇是並不停留一法、故經云、諸佛國土、亦復皆空、若言佛道是修學而得、如此見解、全無交涉、或作一機一境、揚眉動目、祇對相當、便道契會也、得證悟禪理也、忽逢一人不解、便道都無所知、對他若得道理、無中便歡喜、若被他折伏不如他、便

即心懷惆悵、如此心意學禪、有何交涉、任汝會得少許道理、祇得箇心所法、禪道總沒交涉、所以達磨面壁、都不令人有見處、故云、忘機是佛道、分別是魔境、此性縱汝迷時亦不失、悟時亦不得、天眞自性、本無迷悟、盡十方虛空界、元來是我一心體、縱汝動用造作、豈離虛空、虛空本來無大無小、無漏無爲、無迷無悟、了了見無一物、亦無人亦無佛、絕纖毫的量、是無依倚無粘綴、一道清流、是自性、是無生法忍、何有擬議、眞佛無口、不解說法、眞聽無耳、其誰聞乎、珍重。

師一日上堂、開示大衆云、預前若打不徹、臘月三十夜到來、管取儞熱亂、有般外道、纔見人說做工夫、他便冷笑、猶有遮箇在、我且問汝、忽然臨命終時、儞將何抵敵生死、儞且思量看、却有箇道理、那得天生彌勒、自然釋迦、有一般閑神野鬼、纔見人有些少病、便與他人說、儞只放下著、及至他有病、又却理會不下、手忙脚亂、爭奈儞肉如利刀碎割、做主宰不得、萬般事須是閑時辨得下、忙時得用、多少省力、休待臨渴掘井、做手脚不辨、遮場狼藉、如何廻避、前路黑暗、信采胡鑽亂撞、苦哉苦哉、平日只學口頭三昧、說禪說道、喝佛罵祖、到這裏都用不著、平日只管瞞人、爭知道今日自瞞了也、阿鼻地獄中、決定放儞不得、而今末法將沈、全仗有力量兄弟家、負荷續佛慧命、莫令斷絕、今時纔有一箇半箇行脚、只去觀山觀景、不知光陰能有幾何、一息不回、便是來生、未知甚麼頭面、嗚呼勸儞兄弟家、趁色力康健時、討取箇分曉處、不被人瞞底一段大事、遮些關棙子、甚是容易、自是儞不肯去下死志做工夫、只管道難了又難、好教儞知、那得樹上自生底木杓、儞也須自去做個轉變始得、若是個丈夫漢、看個公案、僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無、但去二六時中、看個無字、晝參夜參、行住坐臥、著衣喫飯處、屙屎放尿

處、心心相顧、猛著精彩、守箇無字、日久月深、打成一片、忽然心華頓發、悟佛祖之機、便不被天下老和尙舌頭瞞、便會開大口、達磨西來、無風起浪、世尊拈華、一場敗缺、到這裏、說甚麼閻羅老子、千聖尙不奈爾何、不信道、直有遮般奇特、爲甚如此、此事怕有心人、

頌曰、

塵勞逈脫事非常、　緊把繩頭做一場、　不是一番寒徹骨、　爭得梅花撲鼻香、

黃檗山斷際禪師傳心法要　終

裴相國傳心偈

予於宛陵鍾陵、皆得親黄檗希運禪師、盡傳心要、乃作傳心偈爾。
心不可傳、以契爲傳、心不可見、以無爲見、契亦無契、無亦無無、化城不住、迷額有珠、珠是强名、城豈有形、卽心卽佛、佛卽無生、直下便是、勿求勿營、使佛覓佛、倍費功程、隨法生解、卽落魔界、凡聖不分、乃離見聞、無心似鏡、與物無競、無念似空、無物不容、三乘外法、歷劫希逢、若能如是、是出世雄。
嘗聞河東大士親見高安導師、傳心要於當年、著偈章而示後、頓開聾瞽、煥若丹靑、予惜其所遺、綴於本錄云爾、慶曆戊子歲、南宗字夫眞者題。

後叙

鷲嶺微笑、付囑心法、少室面壁、直指人心、神光安心、馬祖卽心、至于百丈黃檗諸大老、密傳心印、大機普被、大用繁興、莫不本乎一心、譬如大海洶湧千波、波不離海、又如精金革變衆器、器不異金、故曰、森羅及萬象、一法之所印、其唯心之謂歟、昔唐朝相國裴休、守新安日、入大安寺行香觀畫壁、問主事僧曰、是何圖相、主曰、高僧眞儀、裴曰、眞儀可觀、高僧何在、主無對、適黃檗運禪師寓彼、公詢之曰、偶有一問、諸德吝辭、可代酬一語、檗請相公垂問、裴擧前話、檗厲聲曰、裴休、公應諾、檗云、在甚麼處、裴當下領旨、如獲髻珠、乃延入府署、執弟子禮、贈之偈曰、自從大士傳心印、額有圓珠七尺身、掛錫十年棲蜀水、浮杯今日渡漳濱、千徒龍象隨高步、萬里香花結勝因、擬欲事師爲弟子、不知將法付何人、自爾師資道合、渇聞玄論、輯而成編、目曰傳心法要、仍自序語、唐好事者、刊行此集、流入日本、有檀那越州刺史、篤志內典、公事之暇、喜閱是書、嘗以心要問予、予但勉其制心一處、則無事不辦、因施財命工、以唐本模刊廣傳、欲使本國未信直指之宗者知、有人人此心中、本具一段大光明藏、輝天鑑地、耀古騰今、亦猶毘耶淨名所謂無盡燈者也、越囑爲後序、然未免畫蛇添足之誚焉、旹弘安癸未仲春、住金剛壽福禪寺、宋沙門大休正念、書于藏六庵。

國譯黃檗和尚太和集

解題

黃檗の隱元禪師は近代の高僧にして、初め支那福州の黃檗山萬福寺（寺は今の福建省福清縣にあり）に住す。明の永曆八年（我が後光明帝の承應三年、四代將軍德川家綱時代）聘に應じて我が國に渡來し、寬文元年、山城國宇治莊大字五箇所の字太和田に一寺を創建し、舊名に因んで之を黃檗山萬福寺と號し、別に臨濟宗と別れて玆に日本黃檗宗を開立するに至れり。本書太和集は乃ち斯の黃檗晉山より約二年間に涉る語錄にして、書名の太和は黃檗山所在の地名に據るものなり。其の內容は、萬福寺晉山の法語より詩偈、書問、題讚、法語、序文、祭文、銘及び歌等より成り、編者は師の侍者南源性派、高泉性潡の二人にして、寬文二年、鐵眼道光の開板に係る。故に其の初版本の奧に左の如き識語あり。

弟子道光、捐資敬刻黃檗和尚太和集一冊流行。伏願般若智人人現前、金剛眼個個開豁者。

壬寅年葭月初四日識。

隱元渡來の當時は、何れかと言へば、他宗の誹謗や幕府の監視などの爲に、寧ろ逆境に處したるが如し。然れども萬治三年官許を得て、萬福寺を開創するに至り、尋で寛文元年には一宗開山の盛譽を擔ひたる年にして、彼が一代中に於て最も得意の時代とも謂ふべし。本書は乃ち此の時期に於ける著作なれば、其の中には亦這般の消息を流露したるものも多々あり。就中、「初到₂檗山₁偶成」二偈の如き、「題₂雙鶴亭₁」の二章の如き、將又「與₂松平土佐守₁書」、「復₂獨健徒₁書」、「首七祭文」、「終七再祭」の各篇の如きは、皆是れ師が得意の心境を呈露するもの、其の他、何れの偈頌、孰れの法語を取つて視るも、隱元其の人の眞面目は、奕々として紙上に躍動するを覺ゆ。

師の傳を案ずるに、姓は林氏、諱は隆琦、隱元は其の號なり。父の名は德龍、母は龔氏、明の萬曆二十年十一月四日を以て支那福建省福清縣に生る。兄弟三人、仲兄子春も亦僧となる。師は其の季子なり。九歳にして學に入り、靜夜、二三の侶と倶に喬松の下に坐臥し、仰いで天河の運轉、星月の流輝するを觀て感ずる所あり。是れより慕佛の意盛んなり。時に父久しく楚に客たり、而も其の所在を知るなし。是に於て師は母の許しを得、二十歳の時、父を尋ねて豫章に抵る。金陵を經て寧波の舟山に到り、三載を歴て南海の普陀山に往き、觀音を禮して父の所在を知らんことを祈らんとす。既に山に登りて、忽ち佛境の殊勝、人世に超出するを見、凡情頓に氷釋し、乃ち潮音洞主に投じて茶頭の執事となる。久しうして茶山に往く。既にして閩に歸りて母を省す。母大いに喜ぶ。母の亡後、貲を竭して以て其の

冥福を修す。泰昌元年、黃檗に入つて、賜紫の大德鑑源壽公を禮して剃髮す。時に年二十九なり。師卽ち發願して曰く、「此處に落髮す、若し佛行を精修し、法門を興崇せずんば、生きながら泥犂に陷らん」と。是れより常に民間に出でて貲を募り、以て梵宇を興す。暇日には講席に遊びて楞嚴、涅槃、法華、を聽く。既にして俄かに金粟に往いて密雲老和尙に參ず。天啓六年、師、客堂主となり、五峰西堂に遇ひ、研鑽大いに力めて聲價日々に騰る。崇禎三年、密雲和尙、黃檗に遷る、因つて師も亦同じく黃檗に回る。未だ周歲ならざるに、密雲辭し去る。時に徑山の費隱通容和尙、來つて其の席を補す。師を擧げて第二座に居らしむ。師室に入りて參請すること多年、一偈を呈して曰く、「一聲茶毒聞皆喪。偏野髑髏沒處藏。三寸舌伸安國劍。千秋凜凜白如霜」と。乃ち印證を受けて臨濟の正傳を得て第三十二世となる。時に崇禎七年、年四十三歲なり。師職滿ちて獅子巖に再住す。同じく十年、黃檗、席を虛しうするや、請に應じ往いて住す。一時の龍象、湊集して數千指に至り、宗風大いに揚る。明年、千日の期を限りて龍藏を開閱し、賜藏の恩に答ふ。又大殿、山門、その他の僧舍を重建し、輪奐の美、林巒の間に貫映す。是れより諸所に應化し、正法の興隆を以て已の任となす。同じく十七年の春、金粟に往いて本師和尙を省し、夏五月、天童に至りて塔を掃ふ。此の年、福巖寺の請に應じ、又長樂の龍泉寺に移り住す。明年黃檗山に回る。

永曆六年（我が承應元年）、將軍德川家綱、足利氏の故事に倣ひ、禪刹一宇を創建せんと欲して、道

德優長の僧を支那に索む。長崎興福寺の逸然和尙、命を奉じて之を徑山の費隱和尙の法嗣隱元に通じ、以て其の渡來を請ふ。隱元乃ち應諾し、同じく八年夏、東渡し、七月六日長崎に抵りて東明山興福寺に進む。是れ本朝の承應三年に當る。尋で聖壽山崇福寺に移り、明曆元年、請に應じて攝津の普門寺に進む。普門寺の龍溪和尙、師を邀して祝國開堂せしむ。座下至るもの皆諸山の名德にして、棒喝交馳、風蜚び雷厲しく、實に龍象の蹴踏たり。是れより以後、宰官問道のもの常に踵を接す。其の最も弘護を存するものは閣老酒井雅樂頭忠勝、京都所司代板倉重宗の二人に如くはなし。萬治元年東上し、江戶に來りて湯島の麟祥院に寓す。緇素の參謁するもの容るゝに地なし。十一月朔日、將軍家綱に謁す。時に列國の侯伯、倶に座に列して冠蓋相連ね、恰も蓬萊の一會の如し。將軍大いに喜びて衣金を賜ふ。尋で深川海福寺に過り、寺主獨本、師を請じて開山となす。歸途至る所、應化して普門寺に回る。

萬治三年、將軍の上旨を承けて、地を山城太和田に選びて一寺を創す。越えて寬文元年秋八月、工事稍備はり、錫を移して焉に居す。名づけて黃檗山萬福禪寺といふ。其の自る所を忘れざるを示さんがためなり。入院未だ幾ならざるに、內外の學侶袂を連ねて集り、法門の盛事、此に極まれりといふ。將軍復た莊田若干頃を捨てゝ永く僧饍を資く。後水尾太上皇、師の道を欽ひて、龍溪に詔して法語を請はしむ。師乃ち忱を傾けて奉答し、允に皇情に稱ふ。同じく三年冬、兩堂首座を立て、大いに爐鞴を開き、又禪門の大乘戒壇を設けて戒を授く。受者數千人。時に門人弟子等、師の春秋、既に高きを念ひて

壽藏を寺の左に營む。四年秋九月、座元木庵瑫公をして其の法席を繼がしめ、自ら松隱堂に退休す。木庵其の遺志を繼ぎ、檗門の基礎を確立せり。師退休の後も、諸山の請に應じて法化を布く、且つ木庵を輔けて殿堂伽藍の經營に餘念なし。而も身を持すること寒素、日常自ら粮食を辦じ、並に常住の分文を用ゐず。蓋し後人の漸染を杜がんがためなりと。同じく六年、上皇特に佛舍利と御製の贊を賜ふ、師、天恩の隆重なるを念ひて別に殿を構へて以て之を安置す。將軍復た令旨を發して、爲に大雄寶殿、天王殿を建てて、以て一代開山の公案を圓かにす。嗣いで應供の堂、鐘鼓の閣、乃至伽藍祠、祖師堂など一時に告成す。實に一方の選佛場たり。同じく十三年春二月、上皇復た旨を降して法を問ふ、師奏答して旨に稱ひ、唐國の錦織大士の像と御香とを賜はる。師、聖恩の無窮に感ず。同じく三月、微疾を示し、諸山の門弟子並に宰官居士、省侍問候の者、踵を接す。師應答常の如し。三十日、上皇使を遣はして存問す。師、謝恩の偈を進めて曰く、「廿年弘化寓東方。屢受洪恩念不忘。珍重上皇增壽算。西來正法仗敷揚」と。尙ほ病餘、遺訓を作りて衆徒を誡む。四月朔日、偈を遺して將軍に謝す。二日師の病革るや、上皇復た使を遣はし、身を以て師に代はらんことを請ふ、且つ特に大光普照國師の號を賜ふ。三日午刻に至り、師遽かに起つて趺坐し、筆を索めて、遺偈を大書して曰く、「西來柳栗振雄風。幻出檗山不宰功。今日身心俱放下。頓超法界一眞空」と。書き了つて屛息斂目して寂す。實に寛文十三年四月三日なり。壽八十有二、法臘五十又三。附法の弟子五十有餘人、歸依の居士信女無慮數千人

を下らずといふ。寂後三日にして鎖龕し、龕を擁すること三年、延寶三年四月大祥日に全龕を奉じて壽藏に入塔す。法皇追思して止まず、勅して佛慈廣鑑國師と加諡せらる。七會の語錄及び褋集八十餘卷あり、今猶ほ世に傳ふ。後年、また徑山首出國師、覺性圓明國師、眞空大師などと加諡せらる。

猶ほ本書太和集の編者南源性派は支那福建省福州府福清縣井得井の人、隱元の門に入り、元に從つて渡來し、大阪の國分寺を開き、遂に其の寺に於て寂す。又、高泉性潡は同縣東閣の人、隱元の法嗣慧門如沛の門人にして、寛文元年隱元に招かれて來朝し、黄檗山に入りて隱元に侍す。後、黄檗第五世となつて本山に寂す。著書頗る多く、黄檗山中興の祖と稱せらる。

國譯黃檗和尚太和集

侍者　性派
　　　性潡　仝編

萬治三年庚子十二月十八日、上の令旨を承けて、賜ふ所の太和田を黃檗山萬福禪寺と爲し、寛文元年八月二十九日に於て、山門に進んで云く、「一錫筵に臨んで、千山稽首し、法法誠を獻じて、拈じ來つて手に信す。黃檗名を安じて、本有を忘れず、聊か一念無緣の慈を興して、永く千秋(イ)不請の友と爲る。老僧這裡に到つて、(ロ)法幢を建立することは且く止む、只だ進門の一句の如きんば、作麼生か道はん。萬福門開いて日日新に、時豐かに道泰うして長く悠久。」便ち進んで、佛殿の基に至つて云く、「乾坤蓋載、萬古在ますが如し。日月炤臨、光明廣大、一片坦平、縱橫無礙、個の中に卓立して、山靈待つこと有り、諸人還つて見る麼。(ハ)一莖草上に瓊樓を現じて、三世の如來倶に頂戴す。」方丈に至つて云く、「(ニ)六牕明淨、一室虛玄、個の中に摻入して、一會儼

(イ)不請の友とは衆人の招請を受けざれども、その友となつて能く之を利濟するをいふ。易に「速(まね)かざるの客三人あつて來る、之を敬する終に吉」と見え、又請はずして自ら來る、之を速かざるの客と謂ふと見えたり。維摩經佛國品第一に「衆人請ぜざれども、友として之を安んず」とあり。

(ロ)法幢を建立すとは、大法を擧揚するに譬ふ。碧巖第二十一

然たり。轟轟烈烈、白日青天、凡を轉じて聖と成し、愚を轉じて賢と作し、㋭隻眼を迸開して、後を耀かし、前を光す。觜鼻盧都不二を談じ、流轉燥辣風顚を起す。風顚を起すことは且く止む、今日新開又作麼生か道はん。一棒荒を破つて千古に振ひ、檗山瑞を現ず㋬萬斯年。」

初めて檗山に到る　偶成

新に黃檗を開いて禪基を壯んにす、正脈流傳海外奇なり。有志の英靈須らく眼を著くべし、苦心の道義共に撐持す。法身礙へず莊嚴の相、勝跡何ぞ妨げん出現の時。㋣屴崱たる峰頭慧日を觀、一莖草上須彌を拄ふ。岐路險崖の句を掀翻し、㋠希常過量の機を縱奪す。大道坦然として正果を成ず、孤かす塵世の好男兒。

又

聊か㋷隻手を伸べて天荒を破る、莖草拈じ來つて法幢に當つ。一片の㋦太和㋸道義を溫め、千秋の黃檗宗綱を振ふ。掀翻すれば陸地に波濤湧き、收放すれば紅爐燄上の霜。盡く謂ふ通身影像無しと、誰か知らん徧界曾て藏さゞることを。偶々來つて卓立す高峯の頂、笑つて看る大千の空しく自

則の垂示に「法幢を建て宗旨を立す」と。

㋩一莖艸上に瓊樓を現ずとは、法王の自在を明すなり。碧巖第四則の評に、「一莖草を將つて丈六の金身となして用ふ」と見え、華嚴經第十七、初發心功德品第十七に「一毛端に於て衆刹を現ず」とあり、首楞嚴經第四にも「一毛端に於て寶王刹を現じ、微塵裏に坐して大法輪を轉ず」と見えたり。

㋥六聰は六根即ち眼、耳、鼻、舌、身、意に譬ふ。一室とは一心の體性をいふ、皆譬喩の詞なり。

㋭隻眼とは片目のことにして、第一義諦即ち眞諦を明めたる眼目をいふ。

㋬萬斯年は萬年に同じ、斯は句調を助くるに用ふる字なり。

㋣屴崱とは、山の高く連る貌。

ら忙はしきことを。

㋾雙鶴亭に題す　引有り

歳㋻庚子の仲冬、上の令を承けて太和田を受け、黃檗萬福禪寺の基と爲す。越えて明年の春、再び遊んで取向し、仰いで松際を望めば、雙白鶴の焉に翹つ有り。更に上ること二十餘武、其の鶴㋕次崘の松頂に翔り鳴いて立つ。仍つて高峯の絶頂に陟つて、勝槩を大觀し、時を遞えて下るに、鶴猶ほ松に在り。嘆じて曰く、「奇なる哉奇なる哉、此の日我が前導を爲し、其の勝跡を點す。倘し刹を建つる時は、當に此を以て驗と爲すべし」と。卽ち遊を紀して近衞大納言公に贈る。「鶴、松頂に鳴いて賢侶を招く」といふの句有り、嗣後龍溪囘り、僧をして仲秋念日に起工し、閏八月二十九日に於て進山せしむ。次の早、亭に登つて遠眺すれば、大いに胸襟を暢ぶ、江山萬頃、翠靄千祥、盡く當人の一瞬に在り。謂つ可し千古の風光殊勝の事、一天の靈彩印文の中と。侍僧謂く、「前に白鶴の瑞を現ずるは卽ち此の處、當に之を雙鶴亭と顏して可なり」と。余唯唯として善しと稱す、仍つて㋵偈を説いて以て識す。

㋠希常は異常、又は非常の意、稀なること。

㋷隻手とは片手なり、力を用ひず輕々なる義。

㋦太和とは萬物の元氣、又は至正太中の道をいふ。易上經乾の卦に、「各性命を正しうし、太和を保合す」と見えたり。

㋸道義とは道德義利なり、易繫辭上傳に、「成性存存、道義の門」と。

㋾雙鶴亭は黃檗山西方丈の右にあり、後華藏院となりしが、今はその舊趾を存するのみなり。

㋻庚子は萬治三年なり。

㋕崘は山なり。

㋵偈は梵語伽陀の略なり。

空亭未だ現せず復た何をか知らん、白鶴松に翹つて悟期を示す。老眼豁開す雙翠壁、孤筇卓立す片靈芝。天然の雅趣風光別なり、曠世の達觀格外奇なり。此の日功成つて聊か錫を憩ふ、胷に秀氣を羅む正當の時。

又

亭開けて徹見す㋟歲寒の心、霜雪滿頭亦吟を喜ぶ。老い得て古梅共に友とするに堪へたり、靜に思ふ白鶴也た㋹知音。峰高うして忽ち吐く㋞寥天の月、葉落ちて平鋪す徧地の金。閒に藤條を把つて聊か卓朔すれば、萬緣放下して追尋を絕す。

瑞光院に示す

㋡勞生幻世轉た飄蓬す、百歲渾べて一夢の中と成る。金玉㋧到頭將ち去らず、兒孫滿眼孰れか終を同じうす。情關打破して眞常樂しく、慧性圓明にして業頓に空ず。倏忽として心花開けて爛熳、何ぞ愁へん結果功を全うせざることを。

出山の釋迦の㋤讚

頭を雪嶺に埋む豈に尋常ならんや、道の爲に軀を忘る世量ること莫し。

㋟歲寒の心とは、論語に「子曰く、歲寒うして然る後に松柏の彫むに後るゝを知る」と見えたり。利害に臨み事變に遇うて君子の守る所の變ぜざるに譬ふるなり。

㋹知音とは親友の義、周の伯牙、琴を鼓す、鍾子期善く聽く、伯牙、志、高山に在れば、子期曰く、巍々乎たる高山の若し、志、流水に在れば、子期曰く、洋々乎たる流水の若しと、子期死す、伯牙以て世に知音無しと爲して遂に絃を絕つて復た琴を鼓せざりきと。

㋞寥天とはしづかなるそら。

㋡勞生とは塵勞の衆生の義なり。

㋧到頭とは畢竟の義なり。

㋤「讚は人の美を稱するなり」と說文に見ゆ。

是れ一番徹骨の後にあらずんば、如何ぞ(ヲ)法中の王と做り得ん。

松浦肥前守に與ふる書

夫れ(ム)半偈(ウ)法界を撐持して、永劫にも窮り無し、成住壞空、安んぞ比す可き耳。一心宗門を護惜して、千生にも昧さず、幻花露影、豈に能く惑はさん哉。是を以て金剛の種子、百煉すれば愈々光輝、(ヰ)藥汞銀の禪、一煅に便ち逗漏す。驗當人に在つて至鑑を逃れ難し。老僧憶ふに二十年前、唐に在つて黄檗を重興する(ノ)砦、首疏に云く、「海に跨るは常木に非ず、天を撐ふ必ず大材。東君如し意有らば、我が門に吹き入り來れ」と。嗣後工竣り、扶桑の請に應じ、今に迄んで又八春秋を閱せり矣。茲に上命を蒙つて開山し、この地に草創す、仍つて黄檗と名く。始めて覺ゆ前偈、此の日に應驗することを。倘し數萬里の木を來して、梁と爲し棟と爲すといはば、豈に思議す可けん耶。又居士の護送して此に到ることを得たり、謂つ可し、天工人力、兩ながら其の美を全うすと。今古罕に聞き、擧世希に有り、誠に不可思議の境、凡小庸庸の知る所に非ざるなり。然らば則ち不思議の大材は、必ず不思議の大用有り、以て不思議の大功を顯はし、不思議の大

(ヲ)法中の王とは釋迦牟尼佛を指すなり。法華經譬喩品第三に「我れは法王爲り、法に於て自在」と見ゆ。
(ム)半偈とは華嚴經第十九、夜摩宮中偈讚品第二十の「若し人三世一切佛を知らんと欲せば、應に法界性を觀ずべし、一切惟心造」といへる破地獄の文を指すものなり。
(ウ)法界とは萬有の實體現象二界の總稱なり。劫とは梵語長時と譯す。
(ヰ)藥汞銀とは水銀をいふ、水銀の熱に逢へば直に溶解するが如く、虛僞の禪に譬ふ。
(ノ)砦は時の古文字。
(オ)龍象とは沙門の優秀なるものの稱なり、中阿含經に見ゆ。
(ク)日域とは日本國をいふ。
(ヤ)榔栗は一に榔椋に作る。拄杖の異稱。支那天台山に出づといふ、杖の材に適せる一種の

事を成す。功浪りに施さず、福歸するに地有り、他日奏成し、廣く㋔龍象を聚め、正法流通、普く㋗日域を利すれば、則ち護送の功得る所有り矣。㋳榔栗老僧徳尠く福徴なり、但だ一偈を說いて兩ながら黄檗を全うせん。或は試みに㋮西沒東涌を單提して、思議す可き耶、思議す可からざる耶。或は試みに黄檗に問ふ、黄檗亦自ら知らず。適々㋘管城子傍に在り、㋻忍俊不禁にして、聊か半偈を答へて、勝事を圓滿すと云ふ。二十年前用ふれども盡きず、海島に飄り來つて復た何をか疑はん。毫端逗漏して多子無し、突出す和山の第一枝。

性印信士㋙獨健、㋓劉通事と同じく西國の大木を舍てゝ至る、書して示す

大材は必ず大用、美器も亦常に非ず。一たび㋢空王殿を拄へて、功勳量る可きこと莫し。因緣出現の處、木石自ら㋐鏗鏘たり。相去ること幾萬里ぞ、何ぞ期せん此の方に到ることを。夙願力に非ずといふこと莫し、共に寶蓮坊を竪つ。㋚有爲の福を著けず、當人只だ自ら強うす。世間盛德の業、事事已に全く彰はる。檗岫靈彩を添ふ、千秋詎ぞ忘る可けん。

木なり。

㋮西沒東涌とは十八神變の一にして、禪祕要法經中卷に見ゆ。

㋘管城子とは筆の異名、史記毛穎傳に「毛穎管城に封ぜられ、管城子と號す」とあり。

㋻忍俊不禁とは伶利にしてこらへぬ義なり。

㋙獨健、姓は陳氏、初め九官と稱し、我が國に歸化して潁川官兵衛と稱す、獨健はその號なり。遠祖は支那安徽鳳陽府潁川縣に住し、後南京に移る。寛文九年通事となり、十一年六月八日卒す、年七十六。

㋓劉通事は姓は劉氏、名は宣義、道詮と號す。閩の劉眷庵の從弟なり、夙に東渡して長崎に在り、隱元大師の渡來に及びその通譯をなせり。隱元大師は常に我が拄杖子なりと呼べりといふ。

㋢空王とは釋迦牟尼佛を指す、

又

㋖靈山鎖すこと無うして夢雲開く、放出して天を撑へ地を拄へ來る、一たび㋙空門を竪てゝ千古振ふ、孤かず格外棟梁の才。

又

昔年筆底に夢花開き、點醒す鷲峯出格の才、此の際聊か舒ぶ㋱正法眼、㋯儼然たる一會也た奇なる哉。

洛中九十翁の慶會

九十の翁翁古稀を慶す、相看る盡く是れ白頭兒、頓に壽相を忘れて增減無し、千載同風一旨に會す。

文殊普賢同㋛幢の讚

妙道を對談して、獅象を忘卻す。行解相應、天下の榜樣。利己利人、㋼一合相を成す。乾坤を舒卷して二致無し、如意を單提して福量り難し。

㋪龐居士靈照女の讚

一法空ずる皆萬法空ず、家珍盡く急流の中に付す、靈女の生活を營むに因らずんば、龐老如何ぞ上風に立たん。

空王殿はその本堂なり。

㋾鏗鏘とは金石の聲に用ふる語なり。

㋚有爲とは因緣所成の義、爲は造作の義なり、無爲に對す。

㋖靈山とは靈鷲山の略稱、梵語に耆闍崛山といふ、釋迦牟尼佛の住處なり。

㋙空門とは諸法皆空と說く佛法なり、又禪宗に用ふ。

㋱正法眼とは一切諸の實相を看破する活眼なり。

㋯儼然たる一會とは靈山の一會儼然未散の義なり。

㋛幢は幀に同じ、畫繪をいふなり。

㋼一合相とは法界同一平等の體性なるをいふ、金剛經に見ゆ。但し玄奘譯には一合執に作れり。六祖曰く「心に所得あらば卽ち一合相にあらず、心に所得なければ卽ち一合相なり」と。

觀音の讃

大悲苦を度して全身を現ず、世上何人ぞ見得して親しき、惟だ當機のみ有り高く眼を著けよ、一回瞻禮すれば一たび天眞。

雙鶴亭にて松平若州守に示す

點塵飛んで到らず、雙鶴機先を占む、格外聊か眼を舒ぶれば、胸流大千に徧し。

井上信士㋲考心覺、妣妙春を薦せんことを求む

一言大道に合ひ、心覺して便ち超昇す。行藏罣礙無し、何れの處か通津ならざらん。孝道天地に感じ、心花妙春を發く。㋝清淨眼を點開し、本來人を昧さず。直指㋜回互無く、㋑悄然此の辰よりす。覺靈厥の旨を悟らば、妙天眞に徹證せん。

觀音の讃

垂楊の下に獨坐して、自觀㋺觀世音。慈心能く樂を與へ、悲願迷津を渡す。一瞻一禮一回顧、徹見す本來無二の人。

達磨の讃

㋪龐居士とは姓は龐、名は蘊、字は道玄、襄州居士と號す、支那衡州衡陽縣の人なり。馬祖道一禪師の法を嗣ぐ、靈照女は龐蘊の一女にして亦禪門の達者なり、父に隨つて竹漉籬を製し、之を鬻いで生活せりといふ。

㋲考は先父、妣は先母の稱なり、古事瓊林第三に「父死す何ぞ考と謂ふ、考は成すなり、已に事業を成すなり、母死す、何ぞと妣と謂ふ、妣は媲くるなり、克く父の美を媲くるなり」と見えたり。

㋝清淨眼とは正法眼に同じ。

㋜回互とは彼此交互に涉入する義なり、洞山の參同契に見ゆ。

㋑悄然とは悄は憂なり、急なり、景德傳燈錄第十一香嚴智閑の傳に、擊竹投機の偈を揭げて云く、「一擊所知を忘る、更に修治を假らず、動容に古路を

不識梁王に對し、凄凄として暗に江を渡る。去來罣礙無く、面壁亦何ぞ妨げん。直に神光斷臂の後に至つて、濫りに㋩五葉を傳へて諸方に偏し。

又

嘴瞼を突出し、半身を流露す。端無く西沒東湧、知んぬ他は是れ假是れ眞なることを。眼を㋥眨得し來る千萬里、㋭回光返照獨り神を全うす。

洛中の信士、古梅樹を送り至る

衲老いて巖隈に倚り、骨瘦せて寒梅の若し。纖塵渾べて染まず、曾て占む百花の魁。微笑殘雪に驚き、吟風獨り㋬腮を露す。清幽法界に偏し、脫俗也た奇なる哉。

申景禪人、㋣菩提樹を送り至る

菩提既に樹有り、的的西より來る。五葉中土に蔓り、歸根共に一枚。苟も原不二なることを知らば、詎ぞ栽培せざる可けんや。花發いて㋠三春麗かに、香は飄る㋷九品臺。丈夫須らく猛省すべし、那ぞ更に又疑猜せんや。苦口唯だ黃檗、端無く吼ゆること雷に似たり。知音如し㋦錯過せば、我れをして時なる哉を嘆せしむ。

揚ぐ、悄然の機に墮せず」と。蓋し今は大悟の意に用ひたるか。

㋺觀世音とは世の音聲を觀じて解脫せしむる義なり、新譯には觀自在といふ、觀は觀照の智慧、自在は解脫の境界なり。

㋩五葉とは臨濟、曹洞、潙仰、雲門、法眼の五宗をいふ。一華五葉を開くの譬喩より來る。

㋥眨は目の動くこと、まじろぐなり。

㋭回光返照とは自己に反省して道を修むる義なり、石頭希遷の草庵歌に「回光返照して便ち歸り來ろ、靈根に廓達して向背にあらず」と。

㋬腮は俗の顋の字、あぎとなり。

㋣菩提樹は道樹と譯す、釋迦牟尼佛此の樹下に坐して成道し給へり、今黃檗山境內にあるもの卽ち此の時の樹なるべし。

雙鶴亭に登る　四首

一度亭に登れば一たび懷を解く、乾坤何の意ぞ西來を待つ、寒梅雪鶴㋸龐眉の叟、偶爾として團圞すれば㋾拶すれども開かず。

一度亭に登れば一たび眉を展ぶ、江山萬頃布いて希奇なり、淡濃㋻隱約情狀し難し、筆を擧して三思すれども題し易からず。

一度亭に登れば一たび破顔、陰晴顯煥刹那の間、杖頭眼豁かなり幻花の夢、萬㋕竅の怒號也た等間。

一度亭に登れば一度新なり、㋵眸を凝せば何れの處か天眞ならざる、山環り水遶る村村の供、併せて太和萬劫の春と作す。

妻木彥右衞門の江戶に囘るに贈別す

道義圓明にして日月よりも昭かに、世情の濃淡㋟空華に等し。㋹本有を返觀すれば多子無し、生死岸頭路差はず。此の日重光萬福に臨む、聊か半偈を吟じて杯茶に當つ。

門頭の晚眺

庭前に閒坐して晚山を看る、半ば落日を啣んで江間に映ず、空しく餘す

㋠三春とは初春、仲春、晚春をいふ。

㋷九品臺とは上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生の九輩の託生する蓮臺をいふ、觀經に見ゆ。

㋦錯はあやまる、錯過はあやまりすぐるなり。

㋸龐眉とはおほいなる眉なり。

㋾拶とは逼る貌。

㋻隱約とはしかと取り定めて見えざること。

㋕竅は孔穴なり。

㋵眸はひとみなり。

㋟空華とは空中の幻華なり。

㋹本有とは本來の面目、即ち自己固有の本性をいふ。

㋞二時とは早粥と晝飯との二時なり。

㋡行門八萬とは沙門の儀式の多きをいふ、六祖曰く、「夫れ沙

返照の天德を光かすことを、彩氣門に臨んで老顏を壯んにす。

惟大禪者に示す

禪者調羹に善し、頗る能く老情に愜ふ。㋷二時候を失すること無く、一味卻つて精盈。日用如法を事とし、心華至誠を發す。㋦行門八萬を開き、福足つて自ら圓明。

道榮信士に示す

乾坤幻化の夢、業海浪滔滔たり。㋧六趣輪息むこと無く、悲しい哉若を奈何せん。幸に西方の聖有り、一心汝が曹を念ず。長年㋤隻手を垂れ、直に苦㋶娑婆を接す。智者は本を三思し、翻身して愛河を出づ。狂愚は癡莽鹵、浪を逐ひ又波に隨ふ。一たび利名の酒に醉うては、酣酣として自他を昧ます。一たび繁華の室に落ちては、㋰我山萬丈高し。福緣日を逐うて滅じ、業累轉た增々多し。縱ひ拔山の力有るも、曷ぞ能く一毫を動さんや。丈夫亟に猛省せよ、豈に自ら㋒蹉跎たる可けんや。本來靑白の眼、那ぞ更に塵勞に混ぜんや。須らく㋼金剛の劍を秉つて、㋨蘊中の魔を剖出すべし。德澤格外に馨しく、眞風太和に扇ぐ。珍重す道榮子、此の行甚麽の爲

門は三千の威儀、八萬の細行を具す」と、禮記に「禮儀三千、威儀八百」とあり。

㋧六趣とは地獄、餓鬼、畜生、人間、天上、修羅をいふ、趣は所往の義、又は到るの義とす、諸の有情の往き到る處なるが故に名づく、又六道ともいふ。

㋤隻手とは力を用ひず、輕々にといふ義。

㋶娑婆は梵語、譯して忍土といふ、諸の有情能く一切の苦を忍ぶが故に名づく。

㋰我山とは我見我慢の高きを山に譬へていふなり。

㋒蹉跎はつまづくこと。

㋼金剛の劍とは極めて堅利なる智慧に譬へたる語。

㋨蘊とは色受想行識の五蘊をいふ、卽ち自己の身心をいふなり。

㋔頤期とは期頤の倒文なり、百年をいふ。

ぞ。寵辱三更の夢、(オ)頤期一(ク)刹那。虛名世界に漫り、若個か烟蘿を挂く。返炤せよ(ヤ)孃生の面、(マ)老雪陀に孤かず。(ケ)無孔笛を吹く可く、拍拍として應に狂歌すべし。眞個に能く是の如くならば、千秋磨す可からず。

妻木彦右衞門、考朴英居士、妣梅室妙薫(フ)孺人を薦せんことを求む

(コ)三界一夢の宅、(エ)業識浪休むこと無し。福大なれば(テ)天府に昇り、業多ければ下流に汨む。杖頭正眼を開かば、直指蓮舟に上る。淳風萬古に亙り、朴道千秋に振ふ。(ア)梅室虛しうして白を生じ、靈然として(サ)祖猷を壯んにす。

雪を觀る

由來眼廓にして塵に沾はず、獨り占む(キ)閻浮の第一貧、閒に空亭に臥して赤洒洒たり、身を飜せば覺えず萬山の銀。

梅を栽う

老來無事天眞に任す、(ユ)一钁の生涯刹塵に混ず、纔に梅花を種ゑて又雪を惹く、然も骨瘦すと雖も也た精神。

林元實信士に示す

(ク)刹那とは時の極めて短きをいふ、一念の中に九十刹那ありともいひ、一彈指頃に六十刹那ありともいふ、俱舍論に依ろに一晝夜の六百七十二萬分の一に當る。

(ヤ)孃生の面とは少女の面目にして、本來の面目に譬ふ。

(マ)老雪陀とは雪山の老頭陀の意にして、釋迦牟尼佛を指せるものなるべし。

(ケ)無孔笛とは本分に譬ふ。

(フ)孺人とは大夫の妻の稱なり、禮記に「大夫の妻を孺人と曰ふ」と見えたり。

(コ)三界は欲界、色界、無色界をいふ、界は分段の義なり。

(エ)業識とは八識を總稱す、彼の識善惡の業を造り、及びその習氣を保ち、又はその種子を含有する作因あるが故なり。

(テ)天府とは天上界をいふ。

(ア)梅室白を生ずとは梅化發いて

萬卷の書を捜羅することは容易に、源頭に打徹して放下することは難し。得失窮通皆造化、榮枯夢幻相干らず。風波歷盡して心平坦、歲月推移して性地安し。海外の靑山山外の海、羨む君が一片の鐵心肝。

㋜七旬の誕日の自適

白雪頭に堆うして兩鬢㋯絲なり、峰高うして㋛煦日上ること遲遲たり。渾天の理氣運つて息むこと無く、蹈海の心眞移す可からず。鐵幹霜を淩いで志節を堅うし、老松甲を帶びて威儀を長ず。孤光閃爍として龍蛇動き、葉葉濤呼して此の時を慶す。

其の二

㋓中華咸く慶す古來稀なりと、㋪蓬島の古稀未だ奇とするに足らず。百歲にして知ること無くんば猶ほ赤子の如し、朝に聞き夕に死すとも頤期に勝れり。一心淨潔にして塵刹を超え、片念圓明にして悟迷に徹す。春秋幻化の夢に渉らずんば、㋲撞頭磕額盡く㋝龐眉。

其の三

未だ娘胎を出でずして全體現ず、降晨獨露す半邊の腮。人天相を見て咸く

室の明かなるをいふなり、本來の光明を生ずるに譬ふ。

㋚猷は道なり、祖猷とは祖道といふに同じ。

㋖閻浮とは閻浮提、又は贍部洲ともいふ、大地の總名なり、閻浮、又は贍部は樹名にして阿耨池の南に此の樹あるに因りて名づくといふ。

㋙鑊は大いなるくは、臨濟と黄檗とに鑊頭の商量あり。

㋜七旬とは七十なり。

㋯絲とは細き白ききぬいとの如しといふ意なり。

㋛煦日とは煖き日なり、日の出でて溫かなるなり。

㋓中華とは支那人の自らの國を尊んで稱する名なり。

㋪蓬島は日本を指す。

㋲撞はうつなり、つくなり。磕は兩つの石の相擊つ聲にいふ字、撞頭磕額は相集まれるもの悉く皆の意なり。

歸敬し、龍象機を知つて倶に嘆ずる哉。七旬幻化の夢を歷盡して、重ねて萬福㋦面門の開くことを增す、拈花の一會斯の日に逢ふ、奕葉香飄つて㋑九垓に偏し。

其の四

天然の一會也た奇なる哉、特地に全く彰す格外の材。眼は三千の光日月を爍かし、舌は一片の猛風雷を翻す。㋺東西坐斷して回互無し、今古頓に空じて去來を絕す。此れを以て人を祝し兼ねて自ら祝す、㋩大家共に住す碧蓮臺。

獨健徒に復する書

老僧太和に入つてより以來、面門高峯と、其の突兀を同じうし、㋥鼻孔愈々更に遼天、而も人情世務遣ることを待たずして忘れたり矣。忽然として峰頂に閒睡し、頣いで西方を望めば、又覺えず倏ち唐國故舊の思を起し、人をして之の事を聞くに忍びざらしむ。感愧懷に交はる、抑も已むこと能はざるなり。嗟嗟、此の末運に生るゝこと、宿業の成す所に非ずといふこと莫し、逆順の境緣、消して自己に歸すれば、則ち怨尤の嘆無し。公寧安

㋠厖眉とは大なる眉にて老年のこと。

㋦面門とは單に口門を指す場合と六根門を指す場合との二義あり、是れは廣く六根門を指す。

㋑九垓とは、九は數の極、垓は界なり、故に九垓とは國界のはてをいふなり。

㋺東西坐斷とは東西に拘らず東西の表に超脫して東西に自在なるをいふ。

㋩大家とは人を尊敬していふ語なり。

㋥鼻孔遼天とは昂ぎ視ろの義なり。遼は遙かなり、遠きなり。一に遼は當に撩に作るべし、撩は取るなりと見えたり。

㋭攔當とは攔は遮るなり、當は敵するなり。

㋬鼻孔とは無言說の義を表する語にして、本分の大道をいふなり。

間の地に獨居す、自ら當に努力して斯道に造り證することを急務と爲すべし。餘は蓋く是れ夢幻空花、何ぞ眷戀することを須ひんや。切に時光を錯過し、本來の面目を埋卻す可からず、是れ老僧の望む所なり。果して是れ丈夫の漢子ならば、直下に便ち行け、孰れか敢て(ホ)攔當せんや。他日老僧の(ヘ)鼻孔を摸著せば、愈々通風を見ん、其の慶快當に何如がすべきや。草草布謝不盡。

毓楚何信士に復する書

蹈海の老漢、人情の濃淡、早く已に之を東流に付す。(ト)具眼の(チ)禪和、窺覰するに門無し。而も況んや塵勞の中、業識の茫茫たる、豈に能く擬議する者ならん哉。邇者妄りに一念を動し、杖を携へ太和高峯の頂に卓立す。(リ)四表具に觀て、鶴鹿瑞を獻じ、人天仰ぎ祝し、雲の如く雨の如く、風の如く雷の如く、星の如く月の如く、稻麻粟葦の如く、轟轟烈烈、山川を震動し、讃する者祝する者、笑ふ者吒る者、吟ずる者呵する者、聲、(ヌ)九重に喧しきことを惹き得たり。正眼に看來れば逗漏少からず。面門の醜を添ふるに似たり、羞を遮ふに地無し。正に躊躇の間、忽ち來翰を報ず、之を讀むに、覺えず舊時の面目を翻轉し、抑も昔日の一會儼然たること故の如くなることを見ると。其の慶快思議す可き者ならん哉、耑ら此に布復す。

(ト)具眼とは正法眼を具する義。
(チ)禪和は禪僧の義なるべし、和は和合の意にして僧の譯語に當れり。碧巖第六十三則の頌に「杜禪和」の語見えたり。
(リ)四表とは四外といふに同じ、四方の義なり。
(ヌ)九重とは極めて高き天をいひ、上帝の居處を指し、轉じて天子の宮闕を稱す。

長崎の聾道婆を薦す

崎中の聾道婆、千里(ル)頭陀に謁す。淨念餘欠無く、誠心磨す可からず。別來將に(ヲ)七白ならんとす、道況意ふに如何。近く聞く西歸の信、人をして(ワ)輓歌を動かさしむ。靈彼岸に超ゆることを知る、決して塵勞に墮せず。我れ偈を說くこと是の如し、功は成る一刹那。

馬淵性益、母妙仁を薦せんことを求む

人生幻化の夢、夢裡轉た(カ)留連す。福大にして(ヨ)諸有を超え、業盈ちて(タ)九淵に墮す。昇沈幾萬劫ぞ、何れの時か悄然を得ん。孝誠なれば大地を撼し、念正しければ理偏すること無し。直に入る太和の室、拜し求む萬福の前。法を乞うて慈氏を薦す、救拔急なること絃の如し。孝眞薦すること必ず克し、定めて九品の蓮に超えん。此れを以て慈德に報ぜば、卽刻(レ)金仙に契はん。然も仁に敵無しと雖も、也た須らく(ソ)腦後に鞭つべし。

尼性蓮に示す

心淨潔にして蓮の如く、性明圓にして鏡に似たり。本來の人を昧さずんば、(ツ)觀體凡聖を超えん。死生の關を看破せば、何ぞ曾て欠剩有らん。善

(ル)頭陀は梵語又杜多に作る、貪欲を淘汰し淨心を修治する義なり、轉じて沙門の別稱となる。

(ヲ)七白とは七歲の義。

(ワ)輓歌とは死者を送る歌なり、輓は或は挽に作る、車を前より引く義なり。

(カ)留連とは留りて歸らざることなり。

(ヨ)諸有とは三界二十五有をいふ、又欲有、色有、無色有を三有ともいふ、有とは三界皆有漏法なるが故に名づくるなり。

(タ)九淵とは極めて深きふちなり、三界九地に譬ふるか。

(レ)金仙とは釋迦牟尼佛を稱す。

(ソ)腦後に鞭つとは一應表面は道理なれども、背面に缺陷あれば、一鞭を加へて悟らしめよといふなり。

(ツ)觀體とは現體の意、卽ち現身

人返炤を解せば、邪を摧いて正に入る。佛祖汝を欺かず、天人咸く歸敬す。

道詮劉信士に復する書

意者に今歲初めて太和に入つて、事事未だ備はらず。則ち大いに誕なりと雖も、如何若何を必とせず。但だ境に入つては俗に隨ふ、安然を慶と爲す。忽ち㋧聖壽、興福、福濟兼ねて信士等、人に著けて般般として祝を致す。舊に仍つて昔時の面門を突出す、一任す揉抹一上するに。所謂、㋨通身影象無し、㋶徧界曾て藏さず。花を添へ彩を獻じて可不可無きなり。前者には西國の大木を含つることを蒙り、嘆誦未だ已まず。今慶祝の誠を承く、其の功德重重曷ぞ思議す可き者ならん哉。蓋し此の時此の際、頗る物に利する者有り、爲す可くんば則ち爲せ。切に勝緣を錯過し、徒に丈夫の名を稱す可からず。吾れ亦老いたり、風燭定まらず、毎に思ふ放生を急務と爲すと。慧命と生命と永壽彊り無からんことを意欲す。乃ち本懷に稱ふ、苟も能く吾が意を體し吾が事を行はゞ、生生盡きず、放放窮り無からん。則ち國を祝し民を福にし、恩に報い福を植うる、盡く斯に在り。布謝何如何如を盡さず。

性堅信士に示す

の義なり。

㋧聖壽は長崎市高野平町の聖壽山崇福寺、興福は長崎縣伊貝林鄕の東明山興福寺、福濟は長崎市岩原町の分紫山福濟寺なり、之を三福寺と合稱す。

㋨通身とはからだ中、內外に亘りて餘す所なきの義なり、碧巖第八十九則に「通身是れ手眼」と見ゆ。

㋶徧界曾て藏さずとは全體一はるゝ意なり、碧巖第五十五則の垂示に「徧界藏さず、全機獨露す」と見えたり。

繁華世を蓋ふも摠べて空と成る、若個の丈夫か㋰被蒙ならざる。花落ち花開く夢眼の裏、香飄り香盡く幻光の中。一絲挂けず塵網を離れ、萬事干ること無く樊籠を出づ。聲色堆頭看得破す、是れを格外の主人翁と名く。

松平土佐守に與ふる書

㋗草を摽して刹と爲るは、㋖手眼親切なるに非ずんば能はざるなり。法門を撑持するは材用弘大なるに非ずんば支へ難し。是を以て大人は大器を成じ、大機は大用を得。今此の日に見るときは、則ち速かに成るの功期す可し。春間茅を峯頂に葢うて、風に吟じ月に嘯いて、自ら娯んで以て㋑輸地の德に酬いんと意欲する而已。後諸居士の樂んで結屋の資を助くることを蒙つて、誠に敢て虛しく費さず。則ち㋔方丈を建つるの擧有り、又功を全うすること能はざることを慮る。正に躊躇の間、忽ち華翰に接す、良材美木有つて惠まる。竊に喜ぶ、方丈の擧成る可しと、其の功德莫大、無相の福、思議す可からず。所謂謀らざれども而も自ら至り、介せざれども而も自ら親しと。天然に合ふ、豈に人情の能く議する所ならん哉。玆に使回るに因つて、勒して此に布謝す、㋗依依を盡さず。

王振鵬が畫く所の㋳五百尊者の觀音に朝する圖の序

㋰被蒙とは羽毛を被る義にして、禽獸の異稱なり。
㋗艸を摽して刹とするとは法に於て自在なるをいふなり。
㋖手眼とは師家手段眼識なり。
㋑輸地とは黃檗山は將軍より賜はりたる土地なる故にいふなり。
㋔方丈は今の西方丈を指す。
㋗依依とは餘情の多き貌なり。
㋳五百尊者とは五百の阿羅漢なり。

詳にするに、夫れ梵語には阿羅漢、華には殺賊と云ふ。無明の賊を殺し盡して、以て不生不滅の果を證し、遊戲㋮三昧、天上人間、各々神異を展べて、誠に測る可きこと莫し。亦代佛揚化の一助なり。忽ち振鵬王公に遇うて、一筆に收盡して、卷いて之を藏む。縦ひ無量の神通有りとも、曷ぞ能く爲さん哉。信なる乎、振鵬の妙用、猶ほ五百尊者に勝る者多きが如し矣。是を以て㋘仁宗皇帝孤雲の號を錫ふこと良に以有るなり。然るに天子の重んずる所は、孤雲の筆を重んずるに非ず、誠に尊者の妙道を貴ぶなり。我が明の太祖、天下を一匡するに至つて、臊气頓に除いて、胡人守を失ひ、此の卷、田舍翁の手に落つ。一日持ち出して糧に易ふ、㋫杜史張公㋙斗粟を以て之を得たり。嗟嗟其の時に遇はざれば賤しきこと固に是の如し。賤しき時孤雲の筆の賤しむに非ず、誠に五百尊者を帶累すること少からざるなり。後遊宦の點破するに値うて張公乃ち之を寶とす。寶とする時孤雲の名を寶とするに非ず、誠に尊者の妙道を寶とするなり。吾れ觀ずるに、開闢より以來、佛祖聖賢、天地萬物、榮枯得失、理素より是の如し、豈に獨り孤雲尊者而已ならん哉。然らば則ち奇㋓驥鹽車に困められしも、㋢伯樂一顧して、日に千里に馳す。大道勢利に屈せらるゝも、聖王一たび遇うて天子之を師とすれども、以

㋮三昧とは詳しくは三摩地、又は三摩鉢底といふ、等持とも正定とも譯す。心の散亂消沈なく一境に安住定立するをいふ。

㋘仁宗皇帝は宋の第四代の天子なり。

㋫杜史とは杜下史の略なるべし、杜下史は侍御史の別稱なり。

㋙斗粟とは一斗の粟。

㋓驥は千里の馬、卽ち駿足の馬なり。

㋢伯樂は古の善く馬を相せしもの。

て貴しと爲ず。玆に大明守を失して、胡虜縱横、此の春又亂兵の手に落つ、其の貴賤尊卑、又何如ぞや。今に迄んで三百餘載、東西の得失幾幾なるかを知らず、幸とする所の者は、水火に沒せず、尊者の神通の驗有るに非ざる莫き歟。余扶桑に遊んで意はざりき之を海外に得んとは。其の神遇道合、法屬相關し、古今揆を一にする、偶然に非ざるなり。一たび卷を展ぶれば神異萬狀、以て名言し難し。始めて知る、孤雲の名虛しからずして、而も尊者の道測り叵きことを。尊者に非ずんば孤雲の大名を顯すこと莫く、孤雲に非ずんば孰れか尊者の妙道を知らんや。尊者孤雲、名實並び稱ふ。其の貴賤尊卑、豈に能く擬議せん哉。眞に格外の美器、法門の大寶、觀音大士㋐圓通の境に入る可く、夫の㋚大光明藏と幷に永永に傳へて、而も窮り無き者宜なり矣。

㋖病中卽心卽佛の因緣を頌す

卽心卽佛死太だ急なり、非心非佛藥を下すこと遲し。大梅中毒す三十餘載、病膏肓に入つて醫す可からず。嘆するに堪へたり昔日路に迷ふ者、又個の裡に來つて唇皮を弄ず、浪りに藥病を談ずる人無數、累殺す江西の㋙

㋐圓通とは感として應ぜずといふことなき、之を圓と名づけ、物として感ぜずといふことなき、之を通と名づく。

㋚大光明藏とは法身所依の土にして、法性土とも常寂光土とも稱するもの、特に圓覺の說處に名づくるなり。大光明とは心性本具の大智慧光明なり、百千の神通光明皆之れより起る、故に之を藏といふなり、圓覺經第一に詳かなり。

㋖此の頌は馬祖道一と其の法嗣の大梅法常とに關する卽心卽佛非心非佛の因緣を頌するものなり。初め大梅、馬祖に參じて卽心卽佛の語を聞き、大悟して住山せり、後一僧より馬祖近日非心非佛と說けりときいて、大梅云く、「這の老漢、人を惑亂すること未だ了日あらず、任遮あれ汝は非心非佛、我は只管卽心卽佛」と。馬祖

馬簸箕。

又二偈を占す

偶々病魔に中つて素神を減ず、面門覺えず又塵に沾ふ、誠に破漏の㋱郎當の屋の如し、爭か風光舊日の新なるを得ん。

又

病を得て始めて知る幻化の身、豁然として㋯覷破す㋛本元辰、㋽瞿曇曾て說く病を藥と爲すと、今日翻じ來つて調更に新なり。

辛丑の十一月二十日、本師㋪福嚴老和尙の訃音至る。眞を挂けて云く、「此れは便ち是れ支那國杭州府崇德縣福嚴堂上傳曹溪の正脈三十五世費和尙の全眞なり。卷起する也纖塵立せず、展開する也大地全く彰る。曾て㋲十大寶刹に坐し、說法三十餘年、爲人一片、直心直行、紆曲を挽回すること良に多し。一條惡辣の㋝鉗鎚、鱗龍を收拾すること少からず。道四海に滿ちて、龍の如く虎の若し、大いに江西の馬老師、天下の人を踏殺すること無數なるに似たり。餘風直に海門の東に到つて、泥牛を驚かし得て、倶に起舞盪出せしむ。金烏海門を出でゝ、光前耀後、今古を超ゆ。玆を以て

之を聞いて云く、「大衆梅子熟せり」と、景德傳燈錄第七に詳なり。

㋴馬簸箕は馬祖を稱するなり、簸箕は米を揚げ糠を去るに用ふる具にしてみなり、馬祖の手段能く人をして轉迷開悟せしむる故に譬へたるなり。

㋱郎當とは老倒、潦倒に同じく老羸なり。

㋯覷破とはひそかに伺ひ視るなり。

㋛本元辰とは本命元辰にして、天の賦與せる人の性道をいふ。

㋽瞿曇とは釋迦氏の本姓にして、釋迦牟尼佛を指す。

㋪福嚴老和尙とは本師費隱通容和尙を指す、福嚴寺に住する故なり。

㋲十大寶刹に坐すとは、福州の黃檗山萬福禪寺、建寧の蓮峰院、溫州の法通寺、嘉興の金

用つて我が師恩に報ゆるも、究竟未だ一棒の痕に答へず、虚空忽ち聽いて涙雨の如し。白浪滔天自ら吐呑し、娘生眞の面目を打濕す。眞誠徹骨の逆兒孫、諸人還つて見る麽。山僧是の如く擧揚す、還つて酬恩の一句に當り得る麽。」復た云く、「大道存して兮師益々尊し、法輪常に轉ず一乾坤、正脈長へに流る四大海、光明㋜亘赫として師恩を見る。」便ち哀を擧ぐ。

首七の祭文

維れ寛文元年、歳辛丑に旅る十一月庚子二十日、不肖徒某、日本國山城州黃檗山萬福禪寺に寓し、爲に前一日の申刻、支那國杭州府崇德縣福嚴堂上本師費老和尚の遺囑幷に末後の事寔一封を郵到す。焚香跪讀して、乃ち知る、本師是の年三月念九日未の時を以て示寂したまふことを。越えて七日、念有五日、謹んで瓣香菰茗を以て奠を丈室に致し、昭かに告ぐるに文を以てして曰く、「於戲、我が老和尚は、㋑大明神宗正盛の世に生れ、玉融何氏の巨族に係る。㋺早歳にして本邑鎭東の三寶巖に脫白す。㋩年十九、便ち宗門中の事有ることを知り、遍く知識に參ずること二十餘秋、㋥宗教の二說、該通せずといふこと莫し。末後、㋭密師翁に謁して、惡辣の鉗

粟山廣慧禪寺、寧波の天童山景德禪寺、松江の超果寺、杭州の福嚴寺、同じく徑山興聖萬壽禪寺、同維摩寺、同堯峰院なり。最後福嚴寺に再住して寂を示す、清の順治十八年三月二十九日にして、世壽六十九なり。

㋝鉗鎚とは鉗ははさみ、鎚はつち、鍛冶の道具なり、師家の手段、學者を美器にするに喩へたり。

㋜亘赫は盛んなる貌、亘は桓に同じ、いさましと訓ず。

㋑明の神宗萬曆二十一年五月二十四日、福州福淸縣江陰里に生る。

㋺十四歲、鎭東の三寶寺慧山老師に依つて剃度す。

㋩十九歲、參禪遊方の志を起して、初め壽昌慧經に參じ、次いで博山元來に參ず。

㋥宗教とは禪宗と敎相との二說

鎚を受け、乃ち了手を得て、㋬大事已に畢り、生平を慶快す。其の受用安樂、餘蘊無し矣。後師翁金粟に應じ、再び上つて省覲す、乃ち西堂の職に就く。翁の黃檗に應ずるに逮んで、亦從つて服勤す。㋣一日當堂㋠正法眼藏を付囑す、嗣後浦城の馬峯院に隱る。㋷乙酉の冬、黃檗に應じて、首めて爐鞴を開く。鉗鎚惡辣、凡を鎔し聖を煆へ、一鎚の下良に本有るなり。某や不肖、首め其の毒に中り、今に迄んで三十餘載、幾處にか㋦申雪すれども、其の懷を罄し難し。然らば則ち毒に中るの深うして而して之を解くの易からざるなり。昨、訃の至るを聞く、㋸且喜すらくは天下太平なることを。昔日の寃、雪ぐを待たずして而も自ら解けり、更に歉ざる所の者は、㋾召し回すを承くること二書、敎誡諄諄、最親最切、婆心畢く露るゝことを徹見して、未だ覿面以て師資の命を快くすることを得ざりしことを、罪焉より大なるは莫し。今也已に眞常の果を證して、聲も無く臭も無し、聖賢佛祖と雖も知らざる所有り、況んや區區たる某小子をや。茲に首七の期に値ひ、敬んで㋻純陀の供を設けて、靈前に獻じ奉り、少しく萬德に酬ゆ。伏して惟るに老和尙、大寂光中、某が微忱を鑑みたまへ、

なり。
㋭密師翁とは密雲圓悟なり。
㋬大事とは佛祖の大道を指す語なり、法華方便品第二に「世尊は唯だ一大事の因緣を以ての故に世に出現し給ふ」と見え、臨濟錄開卷第一に「若し祖宗門下に約して大事を稱揚せば、直に是れ開口不得」と見え、又「此の日法筵一大事の爲の故なり」とも見ゆ。
㋣三十九歲、七月十五日密雲の付囑を受く。
㋠正法眼藏とは眞正眼目の法門なり、臨濟錄の行錄に出づ。
㋷明の崇禎六年癸酉十月十五日黃檗山に入院す。乙酉は誤りなり、時に隱元西堂となる。
㋦申雪とは寃をのべ辱をすゝぐをいふ、法門を宣揚するに譬へたるなり。
㋸且喜とは一往隨順して之を許す辭なり、まあよかつたと喜

尙はくは其れ之を饗けたまへ。」

福唐黄檗の因事を聞いて感有り、外護の居士に寄せ、幷に本山の僧衆を警む。

檗山千古、法幢聲實、徧く諸方を覆ふ。㋕正幹の開闢、㋵始祖の㋟鴻休、罵賊の名揚り、㋹斷際の道滿つ。天下軒かに知る、㋞源遠ければ流長し。邇來㋡天童、重ねて㋧濟道を振ひ、豁然として光あり。吾れ師席を繼ぎ、三載井井たり、條有り章有り、愧づ余が莽鹵、門頭を相續し、戸底開張し、力めて撐ふること十七春秋、兩鬢霜の如くなることを惹き得たり。一旦因緣別離し、㋤杯渡して直に扶桑に至る。大いに慧公の鼎首を擔ひ、慈悲一片、柔腸頑蠢、無知無賴、群を成し黨を成し殃を爲す。道義を尊ばず、法化利圖し、業識茫茫たり。愚者は由來、自ら用ひて焉んぞ知らんや。勢を審にして行藏せば、浪費斷じて無し、結局禍來るも蒼蒼を怨むこと莫し。江淺ければ魚蝦も掬す可く、林深ければ虎豹も當り難し。我れ是の如きの不軌を聞いて、㋶五內羹るが如く傷るが如し。水遠くして炎火を濟はず、天遙かにして豈に狐狼を拒がんや。全く始終の法護を借つて、正眼

ぶ意。

㋾召し回すとは隱元大師を聲隱和尙が支那へ還らしめんと懇切に勸められたるをいふ。

㋻純陀は釋迦牟尼佛に最後の供養を捧げし冶工なり。

㋕正幹は福州黄檗の開山正幹禪師なり、姓は吳氏、福建興化府莆田縣の人なり、六祖慧能の法を得て歸り、唐の貞元年間福唐の黄檗山に庵を結ぶ、是れ黄檗の始めなり。

㋵始祖は法脈の始祖にして希運禪師をいふなり。

㋟鴻休とは大いなる慶びなり。

㋹斷際とは希運禪師の勅謚號なり。

㋞華嚴疏第一に「根深ければ果茂り、源遠ければ流長し」と見えたり。

㋡天童は密雲和尙を指す。井井は秩序正しきをいふ。

㋧濟道とは臨濟の道風なり。

を圓明にし、㋰金湯極力、妖氛を掃除せば、大道萬古全く彰れん。

本師福嚴費老和尙を哭す

獅絃響を絕つて中華に在り、餘音を拶し得て海涯に到らしむ。老大の願王法界を超え、廣長の舌相恒沙を卷く。雲收つて碧漢空覺を生じ、葉落ちて寒林玉花を吐く。愁殺す杖藜㋒倚靠無きことを、一雙の白眼西霞に對す。

又

吾が師傑出して最も英華、奕葉芬芳海涯に徧し。手を㋭撒して歸源道果を成じ、吉祥にして逝し金沙を體す。粲然たる㋨舍利僧中の寶、亘赫たる名言錦上の花。一片の婆心碧漢に澄む、千秋の道義煙霞に挂く。

如何なるか是れ佛、渾身の骨を突出して、一飽す㋔乳香の糜、圓明の相滿月。

如何なるか是れ法、動着すれば活潑潑、拈じ來れば多子無し、一生用ひて乏しからず。

如何なるか是れ僧、白雪兩眉に橫ふ、老來思算無し、日午三更を喚ぶ。

㋣杯渡とは劉宋元嘉中に杯度なるものあり、常に木杯を浮べて水を度る、因つて名を得たり、隱元大師その東渡に假り用ふ。

㋶五內とは五臟に同じ、心、肝、腎、肺、脾の五つを總べて五臟と稱す。

㋰金湯とは金城湯池にして城郭の堅固なるにいふ、轉じて護法の堅固なるに譬ふ。

㋒倚靠とはよるの義なり。

㋭撒は放つなり。

㋨舍利とは梵語、正しくは設利羅といふ、身骨と譯す。

㋔釋迦牟尼佛成道の前、一牧牛の女難陀より乳糜の供養を受けられしをいふ。

㋾初度とは人の生日をいふ、古に云く、「日行三百六十日なれば初度に復するなり」と。

㋳玉融とは玉の如く温和なること。

如何なるか是れ道、日常光浩浩、十字縱横に任す、足下甚麼をか缺く。

如何なるか是れ禪、口を開けば半邊に落つ、一念未生の時、全く彰れて大千に徧し。

董太宰の軸の韻を次す

錫高峯に寄せて日上ること遲し、臥雲深き處敲詩を夢む、牧童歌舞して啼鳥を驚かし、豁醒す南窻の梅一枝。

參議乾菴陳檀越七十の㋨初度を壽す

天賦㋳玉融の叟、文章㋮世家を起す。一朝宦夢破れて、歸隱す舊桑麻。㋘五桂常に膝に薫じ、齊眉王花を榮る。人天咸く仰ぎ祝し、道義唯だ嘉なりと嘆ず。大なる哉㋫乾德備つて、妙用廣うして涯無し。一軸蓬島を壽し、㋙三山彩霞に映ず。理明かにして日月を昭し、筆老いて龍蛇を化す。海屋籌を添ふる日、瑤光寶華を篆す。㋓從心兩ながら互に炤し、稀有淨うして瑕無し。聊か東溟の水を捧げて、爛烹す㋢趙老の茶。懷を開く三五盞、福履恒沙に滿つ。栽庭花の甲に上り、江干返㋐杳を待つ。來時歲月を仝じうす、歸也定めて差ふこと無からん。

㋮世家とは世々忠貞を盡し、王家に勤勞して、功績あるものをいふ。桑麻は田夫。

㋘五桂とは五子の美稱、五代の竇禹鈞、五子あり、皆登第して齊しく榮ゆ、人、燕山の五桂と稱せり。

㋫乾は健なり、陽の性なり、易上經乾の卦の象に曰く「大なる哉乾元、萬物資つて始め、乃ち天を統ぶ」と見えたり。

㋙三山とは南京の西南に在る山、大江に臨み三峰排列せり、故に名づく。李白の金陵の鳳凰臺に登るの詩に「三山半は落つ青天の外」と。

㋓從心とは七十のこと、孔子七十にして心の欲する所に從へども矩を踰えずと是れなり、是の歲隱元大師も亦七十なり、稀有も七十のこと、人生七十古來稀なりより出づ。

㋢趙老の茶とは趙州從諗禪師の

文殊の讃

雲中に身を現じて、妙德神の如し。文點を加へず、分外に天眞なり。一卷の心經常に離れず、未だ知らず等待して何人にか付せん。

㋚終七に再び祭る

維れ寬文元年歲辛丑に次る臘月晦日、不肖徒某、謹んで純陀の供を以て、再び本師費老和尙覺靈の前に奠つて、而も告げて曰く、「嗚乎、我が老和尙、首め黃檗の爐鞴を開いて、濟北の道を中興す。耀後光前、何ぞ其れ偉なる歟。末後手を福嚴に撒して、千差を坐斷す。寂然として解脫す、よつて來ること有り。世壽六十有九、法臘五十餘春、開法三十年、十大剎を恢擴にす。師法森嚴、人を接して倦まず、往を繼ぎ來を開き、功勳固より極り無し矣。其の正眼圓明、靑天白日、胸開けて四達し、了に城府無し。人天に號令して、著著法る可し。棒頭に旨を得る者、轟轟烈烈、句下に脫落する者、㋖迥迥巍巍。乃至名公鉅卿、兒童㋙灶婦も、服膺染指せずといふこと靡し。宗門の鼎盛、師道炳如たり。嚴竅たる宗統、千古の龜鑑、禪林の禮樂、全く斯に備はれり矣。蓋し禮は節に中るを貴ぶ、之を行ふに方有り、情切正眞にして、幽顯に感通す。正眞の情を以て、師靈の前に剖露せば、必ず也俯鑒したまへ、中節の禮を以て、常寂の堂に行はば、斷じて格らざること無し。中誠は君子の貴ぶ所、常寂は衲僧の歸する所、其の源を得れば則ち㋱孟浪の弊無

喫茶去より來る、甲は花のきやなり。
㋐查は槎に同じ、いかだ。
㋚終七とは四十九日なり。
㋖迥迥とは光り輝く貌。
㋙灶は俗の竈の字なり。
㋱孟浪は精要ならざることにて、おろそかなることなり。

し。貴ぶらくは其の本誠を獲て超俗の方有ることを。吾が師兼ねて之を有す、行は以て天下を濟ふ可く、言は以て萬世に垂る可し。我が明より以來、名寔中正、獨脱無二なる者は、吾が師に非ずして而も誰ぞ歟。末後吉祥にして逝す、(ミ)雙林の遺旨を體す。(シ)茶毘の後、舍利燦然として二百餘顆あり、(ヱ)緇素區分して供養す。則ち當年の天上人間に流布する者、今日に異ならざるに似たり。不肖某、緣に海外に應じて、已に八歲を經たり、最後の音容を覩ること莫く、涅槃の遺訓を聞かず、恨を終身に抱き、羞を含むに地無し。玆に終七の期に當つて、敬んで(ヒ)伊蒲の供を陳ねて、聊か寸忱を表す。伏して惟れば尙饗せよ。」

臘月念九日、本師和尙圓七、卽日安座に云く、「濟道中興して興未だ闌ならず、如何ぞ手を撒して也た端無し。打翻す花甲春三月、嚼碎す紅爐鐵一團　位草堂に設けて田地穩かに、名海國に垂れて杖頭寛し。圓通應感す天眞佛、神を安ずるを用ひずして神自ら安し。神既に安し、且く道へ、卽今甚麼の處にか在る。」拂を擧して云く、「還つて見る麼、常光瑞現して靈機發し、一會拈花又破顏す。還つて當機の者有り麼、老倒兒を憐んで醜きことを覺えず、(モ)盤に和して托出す大家看よ。群を成して剔踏す春光の裡、若個の當機か自ら瞞せざる。」遂に(セ)吉服を披し、禮拜して方丈に歸る。

(ミ)雙林とは釋迦牟尼佛入涅槃の娑羅樹林、一榮一枯相一雙をなすに因りて名づけらろ。
(シ)茶毘とは梵語火葬の義なり。
(ヱ)緇素とは緇は僧、素は俗なり。
(ヒ)伊蒲とは佛僧に供する香饌をいふ、伊は伊蘭、蒲は菖蒲、清淨の供養なり。
(モ)盤に和して托出すとは、盤と共に出す義なるべし、禪林句集下に「盤に和して托出す夜明珠」と見え、註に「盤明珠を走らしめ、珠盤を走らしむ」とあり。
(セ)吉服とはめでたき服なり、喪

本師過七㋦金剛經を誦す

㋑電光泡影夢端無し、師恩を報ぜんことを圖つて再び展看す、道ふことを怪しむ口門に個の齒無しと、金剛嚼碎して又團圝。

又㋺法華經を誦す

七軸の蓮經一法華、心印を剖開して淨うして瑕無し、盤に和して托出して師德に酬ゆ、狼藉たる香風海涯に遍し。

㋩辛丑の辭年

乾坤我れに負く古猶ほ今、我れ乾坤に負く空しく自ら吟ず。七十愚の如く歲月に渾ず、多生の㋥習氣轉た浮沈す。者囘坐斷す孤峯の頂、那ぞ更に端無く外に向つて詩ねん。最も喜ぶ松濤晩節を㋭鏗することを、共に彈す一曲歲寒の心。

㋬壬寅の元旦

㋣洪鈞運轉して歲華新なり、惟だ心香を爇いて㋠至仁を祝す。丈室乍ち開いて萬福泰く、㋷衡門滅せず四時の春。喜ぶ車馬の靈谷に喧しきこと無きことを、却つて江山の法身を繞る有り。年去り年來る幻化の裡、日常

服に對す。

㋦金剛經は大般若經第五百七十七巻第九能斷金剛分と稱するものなり、鳩摩羅什三藏より玄奘三藏に至るまで凡そ六譯あり、羅什三藏の譯古來普く行はる。

㋑金剛經に「一切有爲の法は夢幻泡影の如く、露の如く亦電の如し、應に是の如きの觀を作すべし」と見ゆ。

㋺法華經は西晉の竺法護の正法華より隋の闍那笈多に至るまで凡そ三譯あり、就中鳩摩羅什の譯せる妙法蓮華經古來普く行はる。

㋩辛丑は寛文元年なり、隱元大師七十歲の時。

㋥習氣とは習慣性をいふ。

㋭鏗は鏗々の義、聲音に用ふる語なり。

㋬壬寅は寛文二年なり。

㋣洪鈞は大鈞に同じ、造化のこ

終に天眞を味さず。

又

㋦蒼蒼に愧づること無し是れ我が家、乾坤運泰うして年華を慶す。脚跟淨潔にして聊か主と爲り、眼目圓明にして豈に邪を逐はんや。梅南枝に發いて正氣を含み、日東海に昇つて朝霞を擁す。微風吹き醒す堂前の柳、鶯の滿院の花に啼くことを待ち得たり。

春日に懷を寄す

一氣の和風檗瞼を開く、翻身すれば鼻孔愈ゝ遼天、江山懸隔して徒に夢を懷く、惟だ梅花に對して共に悄然たり。

又

列祖の功勳誰にか寄向す、海天空廓たり奚をか爲さんと欲す、神頭鬼臉消磨し盡く、㋸十二峯巒又眉を展ぶ。

又

世界未だ寧からざるは家國の慮、禪心一ならざるは法門の憂、事難うして方に見る金湯の力、險を挽き危を扶けて秋を計らす。

となり、杜甫の詩に「一氣洪鈞を轉ず」と。

㋠至仁とは天子なり、德を以て仁を行ふ者は王なりとも、德の仁に合ふ者は之を王と謂ふとも見えたり。

㋷衡門とは衡木を以て造りたる門にて、賤者の門なり、詩經に「衡門の下以て棲遲すべし」と見ゆ。

㋦蒼蒼とは天なり、詩經に「彼の蒼たる者は天」と見ゆ。

㋸十二峰巒とは支那黃檗山に十二峰あり、之を指す、十二峰は、寶峰、屛嶂、紫微、獅子、香爐、佛座、羅漢、鉢盂、天柱、五雲、報雨、吉祥の十二峰是れなり、日本黃檗にも十二景あり、此の十二峰に擬したるものなるべし。

㋾杜田とは杜は塞ぐなり、田を杜ぎなす事なきの意なるべし。

又

新に黃檗を開いて今猶ほ古、舊く青松を種ゑて古より今に到る、兩點無私の閒日月、炤臨す千載歳寒の心。

自叙

少時學ばざれば術無し、一味㋾杜田にして老に到る。幸に內に雜毒無きことを得て、身心空淨掃ふが如し。等閑に皮囊を抖擻すれば、衣中の至寶を狼藉にす。手に信せて拈じ來つて人に示す、聲光蓬島に落落たり。寒山手を拍つて呵呵、拾得幾乎絕倒。苟も能く直下に承當せば、便ち是れ㋻風顚の種草。否らざれば則ち此の生を錯過し、㋕驢年にも夢にも斯の道を見んや。

觀音の讃

磐石に獨坐して、慈念永く眞なり。一甌の㋵甘露、遍く㋟刹塵に洒ぐ。楊柳枝頭悲願切に、却つて大地をして盡く春を回さしむ。

㋹彌勒小兒を負ふて水を過ぐる圖

新春筆を擧して、事事克くするに堪へたり。偶ゝ㋞布袋上人に逢ふ、必

㋻風顚の種艸とは臨濟の兒孫の意なり、黃檗、臨濟を稱して這の風顚漢といひしこと再三あり。

㋕驢年とは曆中に建つることなき年なれば、未來際に到るも竟にその年に過ふことなき意なり。永劫といふが如し。

㋵甘露とは梵語阿密哩多の譯語なり、不死の義。初めは蘇摩と稱する花の汁をいひ、之を飮めば靈力を回復すとせり。佛教には之を解脫の法門に譬へ、法華化城喩品第七に「能く甘露の門を開いて、廣く一切を度し給へ」と見え、支那にては長生不死の藥として道敎に用ひらる。老子第三十二章に「天地相合し、以て甘露を降す」とあり。

㋟刹塵とは塵刹に同じく無量の國土を云ふ。

㋹彌勒は當來成佛の菩薩なり。

竟何の所得か有る。背に少小の孩兒を負うて、覺えず脚跟の打濕することを。㋡兜率の路頭を忘るゝこと勿れ、便ち是れ眞正の彌勒。

列祖の圖の序

西乾の四七、眼横鼻直、中華の二三、寐語喃喃たり。天下を惑亂して、了期有ること無し。正眼に看來れば、電影空花、奚ぞ珍と爲るに足らんや。其の本源を詰れば、蓋し㋧靈山の老子闗頭の密ならざるに因る。聊か枝花を露して、以て㋤頭陀の咲破を致す。端無く虚を承け㋶響を接し、訛を以て訛に傳ふ。相襲うて風を成し、直に如今に至つて、人の截斷する無し。深く慨く可きなり、那ぞ更に樣に依つて猫兒を畫き、持し來つて余に示し、怍心をして惡發せしむることを致さんや。未だ呵叱糊塗一上することを免れず、累東土西方諸老の面門に及び、愈〻醜態を增す。我れを罪するも奚ぞ辭せん。然も是の如くなりと雖も、返つて憶ふ、㋰雲門老漢、一棒に打殺して、狗子に餧はして㋨吃せしめ、貴ぶらくは天下太平を圖るといふことを。源頭を掃潔して、恩を知るに地有り、余の逗漏、奚ぞ云爲するに足らんや。但だ願はくは智者斯の圖を達觀して、頓に其の本を悟らば、則

㋡布袋和尚、名は契此、彌勒の分身と稱せらる。その遺偈に「彌勒眞彌勒、分身千百億、時時人に示す、時人自ら識らず」と。

㋡兜率は具には珊兜率陀、又は珊都史多ともいふ、知足、又は妙足とも譯す、欲界六天の中の第四天に位す、彌勒の淨土とする所なり。

㋧靈山の老子とは釋迦牟尼佛なり。

㋤頭陀とは金色の頭陀摩訶迦葉をいふなり。

㋶响は响の誤りならん、响は漢音とう、吳音づ、虛言妄語なり。

㋰雲門文偃、釋尊の下生を評して曰く「我れ當時若し見ば、一棒に打殺して狗子に與へて喫せしめん　貴ぶらくは天下大平を圖らんことを」と、之を引けり。

ち圓明互赫として、淨潔餘すこと無く、樂しみ焉れより大なるは莫し。以て丈夫の志を遂げ、終に隨波逐浪せず。他日條白棒を拈じて、雲門を打殺して、釋迦老子の爲に、屈を雪ぐこと一番せば、敢保す佛日重ねて光り、道風益々熾んならんことを。列祖常寂光中、掌を拍つて呵呵すれば、則ち圖を按じて馬を得るの功に孤かざるなり。

（ヰ）一山寧禪師の賛　相國寺の愚溪禪人の請

頑極に祖承して、愈々倔僵を添ふ。法の人の爲にするもの無く、觸著すれば便ち棒す。放有り收有り、偏無く黨無し。宗、祖印を開き、白華逼り來る。隨波逐浪、褒貶黜陟、原兩樣に非ず。末後端無く聖顏を動かす、古今の標榜と爲す可し。

固心信士に示す

（ノ）仁智は山水を樂しみ、祖師は末萠に契ふ。頓に諸の色相を空せば、心月自ら圓明。物に遇うては則ち靈鑑し、緣に隨つて有情を利す。凡夫能く本に返れば、天下汝を輕んぜず。本來二致無し、何ぞ壞し復た何ぞ成せん。之を視るに見る可からず、之に名くるに豈に能く名けんや。唯だ餘す

（ウ）吃は喫に同じ、くらふなり。
（ヰ）一山一寧は支那浙江台州の人、正安元年日本に渡來し、鎌倉の建長、圓覺、京都の南禪に歴住し、深く後宇多天皇の歸崇を受く、頑極行彌は楊岐宗第十世、虎丘派第六世に當り、一山の師なり。
（ノ）論語に「子曰く、知者は水を樂しみ、仁者は山を樂しむ。知者は動く、仁者は靜なり、知者は樂しむ、仁者は壽し」と。
（オ）無生とは法の本體生滅の相を離れ、如々不動なるをいふ。
（ク）沙界とは恒沙界にして、無量無邊無數の世界をいふなり。
（ヤ）鄕愿とは鄕は鄙俗の意、愿は善良の意、世俗に善しと稱せらるゝ者をいふ。孔子深くその似て非にして反つて德を亂るを惡む、故に論語に「鄕愿は德の賊なり」とあり。

深造の者、歩歩㋭無生を證す。珍重す固心子、日常須らく力行すべし。本有の路を忘るゝこと勿れ、㋬沙界縱横に任す。

啓文林居士に示す

道を奉じて道を知らず、奉ずるもの甚麽ぞといふことを知らず。禪に參じて禪を會せず、莽鹵更に憐むに堪へたり。儒を學んで儒を識らず、㋳鄉愿の賊何如。㋮三敎既に漏逗、人をして長く嘆吁せしむ。㋘九流去つて返らず、何れの日か渠に逢ふことを得ん。半瓢東海を測り、一棒虛空に遼なり。千差の路を截斷して、圓明夜珠に徹す。天は開く太和の臉、法界一に吾が廬。坐臥風雅に乘じ、行藏缺餘無し。東西皆夢幻、夢破れて虞無きことを樂しむ。一段還鄉の曲、吹き來つて道軀を慰す。蒼蒼如し眼有らば、終に區區に負かず。

日昌劉信士に示す

本來一字無し、筆舌虛空に閣く。機に對して縫罅無し、何れの處にか風を通ず可き。有語干涉に非ず、無言大夢の中。有無俱に坐斷して、㋫八面盡く玲瓏。㋙塵說熾然說、心通ずれば道も亦通ず。㋓揚眉語默を超え、

㋮三敎とは儒、道、佛を總稱す。

㋘九流とは儒流(儒敎)、道流(道敎)、陰陽流(數術)、法流(律法)、名流(正名)、墨流(墨翟)、縱橫流(算法)、雜流(餘の八を兼ぬるなり)、農流(播種)是れなり。

㋫八面盡く玲瓏とは十方に應現すること無礙なるに譬ふ。碧巖第九十一則の垂示に見えたり。

㋙塵說熾然說とは一塵一法皆悉く熾然として說法すとの義なり。

㋓揚眉とは迦葉尊者の揚眉瞬目、破顏微笑を指す。

㋢直指とは達磨大師の直指人心、見性成佛を指す。

㋐三際とは過去、現在、未來を總稱す。

㋚頻伽鳥は具には迦陵頻伽鳥といふ、譯して好聲鳥、美音鳥、妙聲鳥といふ。

㋢直指迷蒙を醒す。言前の路を覰破せば、譯傳始めて功を見、格外の句を掀翻せば、本來の翁に負かず。

青木民部、罷山成休信士を薦せんことを求む

心心二念無く、念念二心無し。心念渾べて一致、圓明古より今に到る。正因正果を該ね、終に外に向つて尋ねず。花は發く蓮池の會、香は飄る碧玉林。茲を以て靈德を薦す、剖出す罷山の金。聊か偈を述べて證と爲す、名は標す上品の箴。

靈雲院信女を薦す

本寂㋐三際を超え、返觀自他無し。蓮は開く方寸の裡、香は熟す徧娑婆。道を助く㋚頻伽の鳥、心を安ず極樂の窩。一彈す無生の曲、慶快意如何。

辛丑の仲冬、檗山の㋖慧首座の專使慶誕し、兼ねて駕の山に歸らんことを請ふて果さず、偈を作つて之を慰す。

㋴洪荒として萬里一乾坤、獨り羨む薰風の海門を撼すことを。奕葉芬芳として法座を擁し、氤氳たる瑞氣祇園を壯んにす。無私撥轉す㋱天鈞の令、有力消し難し鐵棒の痕。昧さず㋯九潭雲孕の種、海嶽を掀翻して始めて恩を知る。

㋖慧門如沛は隱元大師の後を繼ぎ、支那黃檗山に在り、寛文元年十一月高泉、曉堂の二法子を遣して七十の賀を致しゝなり。

㋴洪荒とは秩序なく大いに荒れたることなり。

㋱天鈞とは造花のことなり。

㋯九潭とは水の極めて深きふちなり。

自叙

老倒たる杖藜海東に跨る、忘れず名質舊家風。尋常運用して事別無く、坐臥圓明なり方寸の中。圜遶せる人天萬福を増し、大いに手眼を開いて虚空を廓かにす。蓬島に逍遙して奚ぞ拘碍せられん、徹見す西來㊁功を宰せざることを。

深尾庄兵衞、考了喜信士を薦せんことを求む

生死由來幻なり、昇沈す曉復た昏。善い哉能く業を了することを、葉落ちて自ら根に歸す。八十六春の夢、空しく一法の存する無し。唯心常に昧さず、炤徹す本來の源。此を以て靈福を薦む、頓超詎ぞ論ず可けんや。心花開いて馥郁たり、果證是れ知恩。

性公尼、巖石見太守清閑居士を薦せんことを求む

佛日輝を流す四海の濱、杖頭指す處纖塵を絶す。死生爍破して烏何ぞ有らんや、來去分明に假眞を分つ。三十三春孝行滿つ、這囘提起して愈々尖新。蓮花會上風光美なり、盡く是れ清閑無事の人。

御史津田平左衞門を薦す　孝子平六求む

正氣天命を奉じ、代巡帝畿を壯んにす。生民倶に草に偃し、德化風の馳するよりも迅なり。㊂啓手留戀すること無く、歸途春正に肥えたり。恰も彼岸に屆るに逢ふ、徹證夫れ何ぞ疑はんや。偈を說い

㊁功を宰せずとは、功を主宰せざること、大功は宰せずといへる義なり。老子に「功成つて居らず」とあり。

㊂啓手とは死のことなり、曾子の臨終に「吾が手を啓け、吾が足を啓け」といへる故事より來る。

て靈性に通じ、頓に超ゆ淨者の機。圓明萬古に亘る、一會碧蓮の池。

仲春念五日方丈の上梁

藁草を拈じ來つて鋒芒を卻く、到る處爲に標す(ヒ)水月場。徹底大機、大用に堪へたり、果然として棟を成し又梁を成す。(モ)門不二を開いて千差攝し、法無多を演べて量る可きこと莫し。此の日太和(セ)風雅振ふ、檗山の正脈永く流長。

方丈の上梁、旦時陰翳す。侍僧雨り時に及んで便ならざるを恐れ、亟かに拜梁を催さしむ。老僧謂く、「時至らば自然に光輝ならん」と、稍々停む。果して驗あり、遂に偈を說いて之を識す。

新に丈室を開いて鋒芒を迅にす。御苑翻じ成す(ス)選佛場、道ふこと莫れ太和手眼無しと、遼天の一撥愈々風光。

小川又左衞門に示す

正信(イ)三思の本、平心自佗を一にす。檀門(ロ)六度を開き、慈海波を揚げず。浩氣眞主を衞り、脩身蘊魔を驅る。百年幻化の夢、豈に自ら蹉跎す可けんや。曾て西來の叟に謁し、胸開けて太和を滿たしむ。檗山翠を添へて

(ヒ)水月場とは菩薩應現の道場をいふ。證道歌に「一月普く現ず一切の水、一切の水月は一月に攝す」と見え、華嚴經第二十三兜率偈讚品に「譬へば淨滿月の普く一切の水に現ずるが如し、影像無量なりと雖も、本月未だ曾て二ならず」と見えたり。

(モ)門不二を開くとは維摩經の不二法門をいふ。一切の法二にして二ならざるを不二といふなり、維摩の一默は此の當體を明すなり。

(セ)風雅とは詩の國風と二雅とを總べいふものにして、正しくして後世の法となすべきものの義なり。

(ス)選佛場とは成佛を選定する所の道場をいふ。景德傳燈錄第十四丹霞天然の傳に「今江西に馬大師出世したまふ、是れ選佛の場なり」と見えたり。

茂く、福德轉た增々高し。四海玄化を誦し、功は一刹那に歸す。日常能く是の如くならば、必ずしも如何を問はず。

　三月三日㋩華嚴經を誦して畢る

華嚴を讀み罷んで春未だ闌ならず、白毫光耀す兩眉の間。悲心片片知識に承け、願海重重老顏を壯んにす。白城幻化の境を歷盡して、頓に三昧を忘れて空に徹して還る。㋥門開けて樓閣風光甚だし、忙忙として萬山を走らしむるに勝似たり。

　水野源太夫に示す

仁者は善事を興し、愚人は惡道を行ふ。惡極つて自ら身を滅す、幾人か能く老に到る。至善天下に優る、古今皆可しと曰ふ。黑白兩ながら分明、善擇是れ寶とする所。之を得れば用ひて窮らず、諸を藏すれば分外に好し。福德日に彌々新に、慧光圓にして杲杲たり。決定信じて疑無し、超群の種草。

　㋭虛櫺禪德過訪す

老衲心開く解脫の花、時時增長して福涯無し。薰風五度玄策に臨み、和

㋑三思とは審思、決定、動發の心的三作用をいふなり。

㋺六度は布施、淨戒、安忍、精進、靜慮、般若をいふ。度は波羅密の譯、生死を度脫する意なり。

㋩華嚴經に六十、八十、四十の三本あり、隱元大師の閱覽せられしは孰れか詳かならざれども、恐らくは八十華嚴なるべし。

㋥彌勒の樓閣門、彌勒の一彈指によりて忽ち開けるをいふ。

㋭虛櫺、名は了廓、妙心寺第二百十九代の住持なり、後、廣島の禪林寺に住せり。隱元大師の長崎より攝津の普門寺に上りし時、豫め道中宿泊等の便宜を計れり。

㋬潦倒は時勢に適せざる貌。

㋣五欲は色、聲、香、味、觸の欲なり。

氣三春紫霞に間はる。潦倒として迷はず正法眼、英賢豈に塵沙に混ず可けんや。香飄り果熟して人天慶す、便ち是れ靈山の一會家。

復た卓石信士に示す

人豪富の室に生る、多くは㋣五欲の籠罩する所を被つて、丈夫の志を活埋し、一も出離すること無きも、眞に慨く可きなり。信士の如き、㋠茂年に便ち無常の迅速を覺り、此の道を正信して、孜孜として退かず。唯だ此の精進力に依つて、頻りに佛知見を開かんことを願ふを急務と爲し、塵勞に汨されざるは、萬が中唯だ一二のみ。甚だ羨む甚だ羨む。但だ信得及して、晝參夜究、間忙を間つること無く、忽然として㋷囫地一聲せば、佛知見現前して、外より得ず。了了として自知せん、生死去來、千魔百恠も、搖動すること能はず。始めて自證の驗を知り、夫の龐老子と手を把つて並び行いて、便ち日用の事別無きことを信ずるときは、則ち虛しく此の生を度らず、否らざるときは則ち盡く是れ流俗の隊中に算し將ち去り、佛知見と奚ぞ啻に懸隔すること霄壤のみならんや。如何。

語石禪人、故考宗順信士を薦せんことを求む

予力めて參禪する有らば、薦超而も必ず克す。何ぞ須ひん余が言を乞うて、而る後に㋦明德を成ずることを。本來心を覷破せば、了然として空卽ち色。死生夢幻の中、夢破れて便ち超格せん。一揆せ

㋠茂年は盛年に同じく、さかりの年なり。
㋷囫とは船を牽く聲にして、力を出すとき「エイ」と勢を着けるにいふなり。
㋦明德とは、本然虛靈にして衆德を具へ、萬事に應ずるものなり、大學に出づ。

ば鼻天に遼に、圓明にして凝塞無し。觸處是れ(ル)菩提、靈然として得ざること無し。

季春望日、關梅巖居士過謁す

梅巖誠信の士、來り謁す太和の翁。花柳春將に暮れんとし、江山日正に紅なり。善遊倶に趣に適ひ、到る處盡く同風。個の中の旨を會得せば、歸家路路通せん。

新山仁左衞門、故考昭心性月信士を薦せんことを求む

世途見別にして各々(ヲ)崢嶸、直指西來路坦平。托出せば昭心常に昧さず、推開せば性月獨り圓明。三千の塵夢即時に斷じ、六五の春秋手を(ワ)撒して行く。此の日更に末後の句を求む、靈然として一撮せば無生を證す。

老子の讃　高力左近大夫求む

大隱は(カ)無知にして鬧間に混ず、如何ぞ犢に騎つて(ヨ)函關を過ぎん、誰人か一撮す(タ)五千の語、面門を玷汚して只だ自ら謾す。

松前志摩守に示す

正氣邊疆に鎭し、洪波海揚らず。功成つて宰せず、德業始めて全く彰る。本來の物を返照せば、頓に空じて量る可き莫し。死生事惑無く、萬慮盡く消忘す。天中の月を突出して、人を照して肝胆涼

(ル)菩提とは佛道と譯す。
(ヲ)崢嶸とは高峻なる貌。
(ワ)撒は放つなり。
(カ)老子第十八章に「智慧出でて大僞あり」「聖を絕ち智を棄てゝ民利百倍す」と見ゆ。
(ヨ)函關は函谷關なり、老子周末に青牛に騎つて函谷關を出づと傳ふ。
(タ)五千の語とは、老子關令尹喜の請を受け、書上下篇を著し、道德の意を言ふ、五千餘言にして去る、史記列傳に見えたり。

し。仁風四野を偃し、草木倶に香を生ず。格外に玄旨を求め、玉毫聊か放光す。淨く東海の畔に臨む、㋹地久と天長と。

老唐張振市に示す

孤岩頂上の峯を踏斷して、看來れば異無く亦同無し、眼開けて著けず繁花の夢、當人を撼醒す一瞬の中。

僧一紙を呈す、師目訖つて云く、「未だ祖師の關を透らず、謾に險崖の路を行く。」僧云く、「某甲、三十棒を喫するに分有り。」師云く、「棒有れども這の無血氣の死漢を打せず。」僧云く、「和尚、掌中に向つて死蛇を弄すること莫くんば好し。」師、大棒に打出して云く、「且く道へ、是れ死か是れ活か。」

㋹老子第七章に「天長地久」の語見ゆ。
㋷小祥忌とは一周忌なり。

福嚴先大和尚㋷小祥忌の拈香に云く、「吾が師德量虛空に廓かに、乾坤を包裹して功を宰せず。直截人の爲にす三痛の棒、無私物を照す一輪の紅。滔滔たる法海洪流の柱、兀兀たる宗門大雅の風。此の日涅槃初忌の諱、又涕淚を添ふ檗山の中。諸人還つて會す麼。福嚴堂上春光盡き、太嶽峯前正脈通ず。忤逆横に擔ふ鐵榔栗、觸翻すれば鼻孔盡く相同じ。此れを以て恩に酬ゆるに猶ほ未だ足らず、分身刹刹無窮に答ふ。」便ち燒香禮拜す。

一峯居士に示す

乾坤を統攝するの力、大いに(ツ)孔德の容を開く。生を衛ることは一子の如く、國を護ることは(ネ)雲の從ふが若し。中天の日を捧げ出して、祿は億萬(ナ)鍾を增す。英風八表に彌り、一劒先鋒を定む。生死回互無く、獨り蓋代の功を超ゆ。果して能く是の如く信せば、直截勝ること猶ほ龍の如し。

津田道茂信士に示す

前に云ふ、「一念一行ならば、成就せずといふこと無し」と。(ラ)所謂之を一處に置けば、事として辨ぜずといふこと無し。今人の工夫を作す、心境雜亂、一に歸すること能はず、生死岸頭、摠に用不著。正に謂へり、路多ければ草を踏めども死せずと、豈に能く本來の面目を徹見せん耶。又問ふ、「自今何を得てか行じ去らん」と。老僧云く、「一念圓明ならば萬古に亘る、涅槃生死空花に等し。苟も能く圓明の本體に徹證せば、中に於て涅槃生死の相を覓むるに、了に不可得、豈に歡喜憂慽の事有らん乎。故に古に云く、『(ム)流に隨つて性を認得すれば、喜も無く亦憂も無し。』之の本體豈に他人の擬議す可き者ならん哉。」是を以て末に又答へて云く、「(ウ)一念萬年終に改めず、任他あれ滄海桑田に變ずることを。始終一貫、無二無別、詎ぞ生死

(ツ)老子第二十一章に「孔德の容、惟道是れ從ふ」と見ゆ、而して孔は大なり、盛なりと注せられ、又空しきなりとも解せらる。

(ネ)雲從とは雲の如くにつきしたがふをいふ。

(ナ)鍾は量の名にして、六斛四斗を稱す、一說に八斛、又一說に十斛ともいふ。

(ラ)遺敎經に、「之を一處に制せば、事として辨ぜずといふこと無し」と見えたり。此の心の放逸を誡めたるなり。

(ム)景德傳燈錄第二、第二十二祖摩拏羅尊者の傳法の偈に、「心は萬境に隨つて轉ず、轉ずる處實に能く幽なり、流に隨つて性を認得すれば、喜も無く復た憂も無し」と見えたり。

(ウ)一念萬年とは三祖の信心銘に出づる語なり、一念を以て萬年を一貫するの意なり。

去來の遷變す可けん。謂つ可し、活潑自由、罣無く礙無しと。便ち是れ（キ）月明かにして簾外轉身の時、荊棘林中脚を下すの處。否らざれば則ち流俗の漢子に算し將ち去るに非ざる無し。一念圓明と奚ぞ啻に霄壤のみならん矣。道茂善人、諸を勉めよ、諸を勉めよ。」

性海夫人、法華經を寫すに示す

圓明眞の性海、心妙蓮華を發く。手眼淨きこと鏡の如く、揮毫彩霞に映ず。（ノ）三乘默して稽首し、諸子（オ）牛車を共にす。七軸心膽を昭し、萬言爪牙を露す。靈山會上の客、倶に（ク）法王家を證す。

張敬泉信士に示す

生平の造就只だ是の如し、百歳の風光一瞬に過ぐ。未だ源頭の活潑潑を得ず、那ぞ忙裡に咲呵呵たるに堪へん。眼は開く濃淡三更の夢、心は着す榮膺五蘊の魔。珍重す老人の亟かに猛省することを、聖賢の舊路蹉跎たること莫れ。

圓硯の（ヤ）銘

覆蓋（マ）渾淪、至德を涵容す。一氣元眞、靈然測り叵し。（ケ）盤古端無く、

（キ）禪林句集に「夜明簾外の主、偏正の方に落ちず」と見え、又同書に圓悟心要を引き「生死の關を跳出して、荊棘林を驀過す」と見えたり。

（ノ）三乘は聲聞、緣覺、菩薩の三聖なり。

（オ）牛車は羊、鹿、牛の三車を以て三乘に譬へ、大白牛車を以て一佛乘に譬へたるものにして、法華の譬喩品に詳なり。

（ク）法王家とは法華に佛を破有法王とも稱せり。

（ヤ）銘は志すなりと說文に見ゆ。

（マ）渾淪とは一氣の未だ分離せざる貌にいふ語。

（ケ）盤古氏は支那開闢の首君にして、天地人三才を始め、日月を分ち人なり。天池とは海の異名なり、莊子逍遙遊に出づ。

（フ）沒絃琴とは絃のなき琴なり、本分の妙音を彈出せしめんと

黑白を平分す。天池浪濺ぎ、乾坤色有り。風雲に際會せば、文章乃ち克す。三才を應用す、萬古の規則。

潁川藤左衞門に示す

人生幻夢自ら浮沈、若個か幻中に寸陰を惜む。塵勞を爍破す淨圓鏡、漆桶を打翻す吼雷音。出世丈夫の志を虚しうせず、豈に靈山大士の心を昧さんや。一味人に涼しうして間斷無し、格外の㋾沒絃琴を彈ずるに好し。

佛誕日

匃地一聲全體現す、㋙周回指顧更に吒吵。人天龍象希有と嘆じ、草木林巒瑞嘉を獻す。煦日忽ち臨む師子窟、薰風乍ち長ず法王家。團欒として拶入す娘生の會、特地に心開く㋓優鉢花。

偶成　三首

茅を把つて頂を蓋へば便ち心休す、那ぞ更に端無く強ひて出頭せん。事千差を別つも都べて坐斷、理一汲を明かにするも獨り全く周し。機暗室に生じて風席を翻し、寂として澄潭を照して月㋢勾を放つ。自得安閒舊習を消し、空花濃淡復た何をか求めん。

也た會て特地に奇哉と嘆ず、直に今に至るまで點埃を絕す。紅日自ら昇つて還た自ら落ち、白雲

ていへる語なり。

㋙周回指顧とは周行七歩左右を顧視し、右手天を指し左手は地を指し給ふを云ふ。吒吵はしかり又は嘲る聲なり、天上天下惟我獨尊と唱へ給ふをいふなり。

㋓優鉢花とは優曇鉢羅花の略なり、祥瑞靈異、又は希有とも譯す、花無くして子を結ぶ、故に佛經中希有に喩ふるなり。

㋢勾は句に同じ、屈曲するの意なり。

飛び去つて又飛び來る。無明の草は長ず菩提の路、荊棘の花は敷く般若の臺。死生幻化の夢を覷破すれば、千門萬戸一齊に開く。

牛頭沒し也た佛頭彰る、聖字凡名量る可き莫し。草木無心にして格外に薫じ、乾坤何の意ぞ山堂に映ず。自ら憐む一味㋐靜方の好きことを、嘆ずるに堪へたり㋚兩丸太殺だ忙はしきことを。但だ松梅素志を同じうするを得て、渾身の霜雪も也た風光。

某禪德に示す

正法眼を豁開して、徹見す太和の人。出入回互無く、去來始めて切親。㋖仁に當つて能く讓らず、正氣自ら高く昇る。末後須らく深く造るべし、機に臨んで轉身を貴ぶ。善藏縫罅無く、妙用自然の神。萬法本に收歸し、風光刹塵に徧し。果然として是の如く證せば、當體是れ㋴能仁。

松平伊豆守の世を謝するを聞いて感有り

九年壁觀追尋を絶す、㋱勞生に孤負して直に今に至る。意はざりき洪鈞線脈を轉ずることを、豁然として大地檀林と作る。㋯三思の德澤千古に垂れ、㋛一顧の太和萬金よりも重し。是の如く助揚す正法眼、靈明獨脫始めて知音。

㋐靜方は上方に同じく寺院のことなり。

㋚兩丸は日月のことなり。

㋖論語に「子曰く、仁に當つて師に讓らず」と見ゆ。

㋴能仁とは釋迦の譯名なり。

㋱勞生とは塵勞の衆生の義なり。

㋯論語公冶長第五に「季文子三たび思うて而る後行ふ、子、之を聞いて曰く、再びせば斯れ可なり」と、蓋し季文子事を慮ることの詳審なるをいふなり。

㋛顧はかへりみるなり。

參禪の偈　十首

參禪の人は眞心を發せよ、心眞なれば念念纖塵を絶す、觸著すれば一毫光燦爛、驢頭馬臉も也た天眞。

參禪の人は直截を貴ぶ、一念圓明ならば常に亘赫、死生夢幻の花を爍破して、拈じ來れば手に信せて何ぞ奇特なる。

參禪の人は自ら酌斟せよ、空花濃淡追尋すること勿れ、本有㋽多子無きことを返觀せば、徹骨の風騷㋪忍不禁。

參禪の人は亟かに返覺せよ、返覺すれば㋲現成彫琢無し、自家の應用自ら收藏せよ、何ぞ必ずしも蓮臺千葉に托せん。

參禪の人は難を辭すること勿れ、黃金鑄就す一心肝、㋝紅爐百煉更色無し、徹見す丈夫自ら謾ぜざることを。

參禪の人は草草なることを休めよ、閑忙動靜亟かに鞭考せよ、假如言行相應せずんば、一たび人身を失するも何れの處にか討ねん。

參禪の人は貢高なることを休めよ、貢高の念積れば便ち魔と成る、恐らくは㋜修羅窟に撈入せしめて、百劫千生奈若何せん。

㋽臨濟錄に「元來黃檗の佛法多子無し」と見えたり。

㋪忍不禁とは忍俊不禁の略語なり。

㋲現成とは現前成就の意にして、現象差別界を表す、之に對して本體平等界を表する語を本分といふ。

㋝禪林句集に禪林類聚を引き、「大冶の精金變色無し」と見ゆ。

㋜修羅とは詳しくは阿修羅、又は阿素羅といふ、非天と譯す、六道の一にして鬼と天との中間に位す、常に三十三天と鬪ひ勝負を爭ふ。

㋑十聖は十地の菩薩、三賢は十住、十行、十回向の菩薩なり。

㋺端的とは眞實の義なり。

㋩眞空とは眞實際なり、空有の中道を指していふ。

㋥一句とは物の分量の少き義なり。

參禪の人は綿密密、㋑十聖三賢見れども及ばず、須彌を撞倒して兩眼を開かば、死生の大事始めて㋺端的。

參禪の人は執著することを休めよ、執著すれば㋩眞空㋥一勺と成る、小見は誠に井底の蛙の如し、驢年にも夢にだも金剛脚を見んや。

參禪の人は自ら疑を決せよ、一念未だ萌さず正に好し追ふに、追ふて無生㋭無住の處に到らば、豁然として匈地吾れを欺かず。

淺野玄蕃に示す

天然無事の福を自得するも、猶ほ憐む莽鹵に漚花を覓むることを。漚花濃淡三春の夢、無事天然片月の査。水漲り船高うして上派を分ち、雲開け江靜かにして無涯に徹す。苟も能く眼底空しうして洗ふが如くならば、不二門中共に一家。

雨窓の懷舊

劫江山を燒いて盡く愁を帶ぶ、愧づらくは妙法の心憂を解く無きことを、空しく餘す幾點寒巖の涙幷せて雲濤と作して舊羞を洗はん。

㋬三瑞相を感ずることを賦す

奇なる哉三瑞林間に應ず、果して希常を感ず詎ぞ等閑ならん。華士の風光俱に掃地、扶桑の彩氣正

㋭無住とは眞空の當體住著すべからざるをいふ。金剛經に「應に住する所無うして其の心を生ずべし」と見えたり。

㋬三瑞相とは蓋し牛頭栴檀瑞像、三平瑞像、列祖圓の黃檗山に到れるをいふものならん、後に詳なり。

に(ト)斕斑。群英濟濟眞主を衞り、正信依依として素顏を壯んにす。但だ願はくは東西盡く極樂、(チ)鼕鼕たる社舞塵寰に滿つ。

黃檗の自如(リ)監寺に寄せ示す

法門千古に重く、德業植うること涯無し。海外風語を聞く、吹き來つて善芽を長せしむ。(ヌ)直心祖道を衞り、正氣群邪を伏す。返炤す中天の日、胸開いて點瑕を絕す。始終能く若し一ならば、道果嗟することを須ひず。

大村因幡守に示す

(ル)人我の相空じて、寃親致を一にす。(ヲ)解脫の門に入り、般若の智を成ず。福を植ゑる生を放つ、存亡兩ながら利す。正信に歸依し、(ワ)歡喜地に超ゆ。(カ)世諦空花爭ふ可からず、心開けば便ち是れ安身の處。

毓楚何信士、長崎より至り覲ず、此を占して之に示す

儵ち崎江に別ること(ヨ)八載餘、今朝重ねて晤す意何如。微に眼孔を開いて三際を洞にし、聊か襟懷を展べて太虛を卷く。道義頻りに增す黃檗の室、塵勞迥に脫す白牛の車。去來着せず人天の福、一塵の淸風(タ)瞎驢を壯んにす。

(ト)斕斑とはまだらなり。
(チ)鼕鼕とは鼓の聲にいふなり。
(リ)監寺とは一寺を監督し、衆僧を總領する役名なり。
(ヌ)直心とは維摩經菩薩品第四に「直心は是れ道場、虛假無きが故に」と見えたり。
(ル)人我の相とは我相人相なり、金剛經に見ゆ。
(ヲ)解脫とは業障より免るゝ義なり、法華方便品第二に「佛は一解脫の義を說き給ふ」と見えたり。
(ワ)歡喜地とは十地の位の第一位に當る、此の位にて始めて一分の中道を證するなり。
(カ)世諦とは俗諦の義、差別門をいふなり、眞諦に對す。
(ヨ)八載餘とは隱元大師、明曆元年長崎崇福寺より攝津普門寺に到り、今寬文二年に至りて八載餘となる。
(タ)瞎驢とは、瞎字に盲瞎と正瞎

善遇禪人に示す

霜顱の一老叟、海外に風顚を掣く。太和の境に揷入し、㋹高峯頂上に眠る。頓に舊時の路を忘れて、塞殺す㋞不言の天。一息夢雲の裡、滄桑幾變遷ぞ。子來つて法窟を探り、兼ねて以て華筵を祝す。孝義蓬島を撼かし、文名昔賢に契ふ。儒を知らば佛に入るに堪へたり、善く遇すれば金仙を體す。出格の志を虛しうせず、法王の前に覲すべし。日用能く是の如くならば、同じく㋡一大年に登らん。

宇津木治部右衞門に示す

大心淨信の士、㋧善積峻きこと山の如し。有爲の福に著せず、人天孰れと與に班せん。能く淸淨の眼を開かば、本來の顏を徹見せん。一念圓明にして向背無し、始めて知る生死相關らざることを。

髻輝㋤典座の㋶瑜伽を演ずるに示す

胸に一片の白㋰芙蕖を藏して、聊か毫端を吐いて太虛を滓うす、獨り幽冥の法喜に沾ふのみにあらず、人天の樂樂意ふに何如。

達磨の讚

の別あり。盲瞎は一向に貶していひ、正瞎は抑下して托上するなり。凡そ瞎驢瞎漢の意に此の二樣の使用あり、此の語は臨濟の三聖を許して「吾が正法眼藏這の瞎驢邊に向つて滅却す」といひしより來る、當に正瞎に當れり。

㋹黃檗山十二景の第一を妙高峰といふ、寺の背後に在りて衆峰に拔出せり。

㋞不言の天とは本分に譬ふ。論語陽貨第十七に「子曰く、予言ふことなからんと欲す、子貢曰く、子如し言はずんば、小子何をか述べん、子曰く、天何をか言はんや、四時行はれ百物生ず、天何をか言はんや」とあるより來る。

㋡一大年とは五穀の豐熟せるをいふ、左傳に「大いに年有り」といふ、轉じて佛果の熟せるに用ひしならん。

東土西天眼底に空ず、三千法界一蒲團。鉢盂口闊く(ウ)黃粱の夢、兀坐古今孰れと與に斑せん。是れ神光敗闕を納るゝにあらずんば、更に何れの處に於て(ヰ)心安を付せん。

　鉢を揭ぐる圖に題す

一萬の鬼子、神通盡くること有り。沒量の眞人、道力窮り無し。劍戟雷轟き電掣き、機に臨んで虛空を斬るが若し。百千の伎倆を逞盡して、勝たんと欲して轉た更に迷蒙。瞿曇驀面に點化し、(ノ)鬼母前功を醒悟す。卒急に三歸淨戒し、豁然として兒童に親見す。始めて信ず(オ)四生皆一子なることを。舌根吐き出す妙蓮紅。愛情盡くる處道情現ず、子母相將ゐて樊籠を出づ。

　季夏の偶占

火雲影裡枯腸に逼る、何れの處か飄り來る滿院の香、是れ蓮池初めて破綻すること莫しや、人の煩惱を解いて清涼と作す。

　又

人間半點の塵を惹かず、小亭聊か憩ふ也た天眞、愧づらくは一物の山色

(ネ)善積とは積善の倒語。
(ナ)典座とは粥齋を典る役名なり、初め牀座等の九事を典知せしにより名づく。
(ラ)瑜伽とは瑜伽燄口經をいふ、瑜伽は梵語、相應の義なり、心口意の三業一境に相應するをいふ、黃檗宗の施餓鬼に用ふる經文なり。
(ム)芙蕖は蓮花なり。
(ウ)黃粱とは暫時の夢のことなり、黃粱は粟の一種にして支那人の常食に供せらる、昔盧生、呂翁に邯鄲の邸中に遇ひ、自ら貧困を言ふ、方に呂翁黃粱を蒸す、一枕を盧生に與へて曰く「此れに枕せば富貴なるべし」と、生、之に枕し、將相となりて五十餘年なりしを夢む、寤むるに及んで黃粱尙ほ未だ熟せざりきと云ふ。
(ヰ)心安とは二祖安心のことなり、景德傳燈錄第三、菩提達

を壯んにする無きことを、滿頭の白髮を剃し得て新なり。

又

心に城府無く行に踪無し、塵內幾か能く此の儂を識らん、何れの處か雲を敲いて午夢を醒す、一雙の白眼青松に對す。

江州木俣守安信士、十六(ク)應眞の圖を送つて爲に黃檗に鎭す、遂に偈を占して之を識す。

新に縹紬を開いて初禪を廓かにし、閒雲の碧天に映ずることを掃盡す。十六の應眞勝侶を採り、千秋の道誼高賢を蔭ふ。太和の風雅東方の瑞、萬福の門庭特地に姸なり。微笑の法幢此れより振ひ、拈花の一會永く綿綿。

魏爾潛居士に復する書

何居士至り來翰に接す、種種の過褒、當に之れ殊に愧づべきなり。聞く足下、崎に在つて、德を養ひ以て身心を遂ぐと、是れ最も淸福なり。然れども此の時、(ヤ)唐土の正君子、道消するの際、賢達豪邁の士、盡く溝壑に付す。惟だ吾が輩(マ)桴に海外に乘じ、殘喘を全うすることを得たり、是れを至幸と爲す。惟だ冀はくは足下、三寶を正信するを根本と爲よ。根本既

磨の傳に「光曰く、我が心未だ寧からず、乞ふ師與に安んぜよ、師曰く心を將ち來れ、汝が與に安んぜん、曰く、心を覔むるに了に不可得なり、師曰く、我れ汝が與に安心し竟んぬ」と見えたり。神光とは二祖慧可大師の名なり。

(ノ)鬼母とは鬼子母神なり、是れ鬼子母神の因緣を頌す。

(オ)四生とは胎卵濕化なり。

(ク)應眞とは阿羅漢の譯語なり、又は眞人或は應儀ともいふ、煩惱の賊を殺し、智斷の功德を具し、人天の福田となるに堪へたり、此の三義を具すと云ふ。

(ヤ)論語泰伯第八に「天下道有れば見れ、道無ければ隱る」と見ゆ。

(マ)論語公冶長第五に「子曰く、道行はれず、桴に乘つて海に浮ばん、我に從はん者は其れ

に固ければ、生生枝葉必ず茂らん矣。原ぬるに夫れ世間の事、㋑水月空花、目を寓すれば便ち休せよ、久しく戀ふ可からず。中に於て恐らくは丈夫の志を埋めんことを、誰か之れ過ちぞ歟。更に冀はくは、時時に自己の身心を返照せよ。必竟這の一點の靈光、何れの處にか棲泊せんと。錯つて此の生を過す可からず、㋺到頭の一著、誰人か替り代らん。縱ひ金玉山の如く、子女堂に滿つる有れども、總に用不著、愼しまざる可けん歟。囑囑。

觀音の讚

大なる哉㋩觀自在、悲願永く休むこと無し。物我原同體、流に隨ひ又流を反す。一枝甘露洒いで、法界已に全く周し。業識茫茫の者、盡く自ら點頭せしむ。

松平隼人正の令女に示す

菩提心發し玉蓮開く、返照すれば原半點の埃無し、娘生の眞面目を徹見せば、本有の個の如來に孤かず。

土土呂木勘兵衛に示す

死生夢幻の若し、何れの處にか追尋す可けん。一念返つて觀照せば、圓明古より今に至る。人情輕きこと片葉、道義重きこと千金。大地蔴葦の如し、幾か能く此の心に徹せん。善來法旨を求む、直

由かし」と見ゆ。

㋑水中の月の如く空裏の花に似たり、假有實無貪著すべきにあらざるなり。

㋺到頭は畢竟の義なり、到頭の一著とは生死到來の時をいふなり。

㋩觀自在は新譯の名、舊譯にては觀世音といふ。

示南針を定む。

大野主税助に示す

丈夫世間を出づ、日用自ら閑閑。正氣千古に彌り、眞心㋓八還を炤す。死生能く看破せば、逆順豈に相關せんや。一念明かなること日の如く、風光老顏を壯んにす。

惟明禪人に示す

汝の所問を目るに、端無く又一種の疑心を生じて、却つて兩物と成り、其の中を雜亂して、一に歸すること能はず。終日般若を持すと雖も、般若を轉ずること能はず、却つて般若に迷はさる。則ち起滅の惑無きにあらず、愈々持すれば愈々相應せず、轉た念ずれば轉た親切ならず。正に隱隱浮沈の中に在つて、一刀兩斷すること能はず、更に來つて示を請ふ者宜なる㋢乎。然れども老僧終に頭上に頭を安じ、節外に節を生じ、人をして顚倒休むこと無からしめざるなり。但だ願はくは汝一信永信、一持永持、一決永決、一斷永斷、第二念無く、第二人無く、萬年一念、一念萬年ならば、那ぞ甕裡に㋻鱉を走らしむることを怕れん。㋚龐公の所謂日用事別無し、唯だ吾れ自ら偶諧すと。傅大士の云く、「夜夜佛を抱いて眠り、朝朝還た共に起く」と。汝能く信得及し、悟得徹し、提得起し、放得下せば、要且つ綿綿密密

㋓八還とは八方、又は八面といふに同じ、還は環に同じく、圍繞の意に用ひらる。
㋢乎は詠歎に用ふ。
㋻鱉は鼈に同じ、「すつぽん」、「どろがめ」なり。
㋚龐公。此の語は石頭希遷に于老僧に見えてよりこのかた、日用の事作麼生と問はれて、一偈を呈したる、その初二句なり。偶諧とは適合調和の意なり、滑稽詼諧の意にあらず。

にして、斧劈けども開かず、刀斫れども入らず、安んぞ日用相應せざる者有らん哉。

觀音㋖圓光の鏡銘

慈悲行願の輪、刹刹常に淸淨。衆生の心に照徹せば、本來明かなること鏡の若し。眼空點埃を絶し、觀體眞性を見る。㋴十界一圓通、達觀せば說法し竟んぬ。

黃檗の耆舊默公の像贊

彼の耆宿を相るに、㋱居諸黃檗。人に頭地を出して、唯唯として一默す。四代の知識を轉請して、風淸く月白きことを惹き得たり。兒孫烈烈轟轟として、蓬萊の片舌を托出す。海屋滔滔として贊すれども窮らず、看來れば也た是れ㋯白拈賊。

張振哲等、母周榮妙心信女を薦せんことを求む

重恩鞠育を惟ひ、報德空王を禮す。半偈靈福を薦め、㋛紅爐雪光を點ず。愛根消して淨盡す、般若獨り全く彰る。三十六春の夢、囘り看れば一咲場。孝誠投念切に、衆德復た宣揚す。業海重重に竭き、妙心片片香し。以て解脫の路を資く、直下に便ち超方す。

高泉孫に示す

㋖圓光とは熾盛の火焰の形狀をなせる後光なり、鏡はその中心にある鏡をいふ。

㋴十界とは六道四聖の總稱なり。

㋱居諸は日月をいふ語の助辭、詩經邶風に出づ。

㋯白拈賊とは白日に他の物を奪却し持ち來る底の義、白晝の盜賊なり。

㋛碧巖第六十九則の垂示に、「衲僧家、紅爐上一點の雪の如し」と見えたり。

濁劫龍象希に、縱橫㋽跛驢多し。遠聞惟だ額を蹙め、覿面意何にか居る。知る子は超群の萃、能く㋪天馬駒を扶く。正法眼を擴充して、終に區區を昧さず。一片澄潭の月、圓明徹夜の珠。㋲任從あれ滄海は變ずとも、萬古自ら如如たり。檗岫靈彩を添へ、蓬萊眉轉た舒ぶ。微笑の旨に孤かず、祖席永く虞無し。

㋝中元の嘆

搖落の空林本根に歸す、忽ち聞いて特地に深恩を懷ふ。江山限り有り情限り無し、草木存すと雖も誼も亦存す。㋜劬勞に報ゆる莫く空しく自ら嘆ず、㋑號天極り罔し誰に向つてか言はん。聊か半偈を宣べて悲愴を含む、字字淋漓として血痕を帶ぶ。

㋺空印老居士を輓す

百歲朝暮の如く、浮雲一瞬目。人生古來稀なり、而も況んや又六を加ふるをや。㋩蘭桂庭中に滿ち、福壽兩ながら倶に足る。歸道一に坦平、行藏拘束無し。生きては國に珍とせられ、去つては幽冥の福と爲る。法護厥の心を盡し、慧熖唯だ吾れ獨りす。再び晤言を期せんと欲す、云に歸ること

㋽跛驢とは「ちんばのうさぎうま」にて、役に立たぬかたはの學人をいふ。

㋪天馬駒とは、駿快不羈なるものゝ義、碧巖第二十六則の頌に見ゆ。史記大宛傳の注に「大宛國に高山あり、其の上に馬あり、得べからず、因つて五色の母馬を取つて其の下に置く、與に交つて駒を生む、汗血なり、因つて號して天馬子と曰ふ」と見えたり。

㋲續傳燈錄第二十五、蹣庵繼成の傳に「任從あれ滄海は變ずとも、終に君が爲に通ぜず」と見えたり。

㋝中元とは七月十五日をいふ。

㋜劬勞とは力を盡すことなり、詩に「哀々たる父母、我を生んで劬勞す」とあり。

㋑號天極り罔しとは、親恩の至大にして天の盡くることなきが如しといふなり。詩に「是

胡ぞ太だ速かなる。世事夢中の花、道情空谷に傳ふ。何れの處か搖落の聲、悲凄林麓を動かす。聊か以て㋥伽陀を說く、唯だ君是れ祝する所。蓮は開く千百葉、葉々車輪の如し。上品化生に任す、俯仰眞金の屋。師友閻浮に滿つ、於君唯り卜す可し。手を撒つて㋭歸去來、誰か㋬於穆を嘆[illegible]る。

又爲に拈香する偈

虛空を印破して背面無し、翻身すれば鼻孔愈々遼天、眞香一[illegible]が福を資く、特地に心開く九品蓮。

自證禪人に示す

歸家穩直の路、擬議せば三千を隔つ。一氣回互無し、行藏自ら悄然。丈夫の志決烈、豈に更に鞭を加へざらんや。生死輪回の事、夢聞亦憐む可し。中途如し錯脚せば、出を求むることは驢年を待て。

大坂喜齋、大塚卜齋信士を薦せんことを求む

伽陀義味無し、㋣水を飲んで自ら源を知る。草木春に逢うて發し、禽魚氣を得て原む。孝誠業累を回し、道重乾坤に震ふ。手を撒す十年の外、今開く解脫の門。靈能く覺悟すること有らば、徹證始めて恩を知らん。

の德を報いんと欲するに、昊天極り罔し」と。

㋺空印は酒井讃岐守忠勝の道號なり、忠勝は若狹小濱の城主にして、寛永四年家を繼ぎ、十五年大老職に補す、明暦二年五月致仕し、萬治三年四月入道して空印と號し、寛文二年七月十二日に卒す、年七十六。普照國師年譜寛文二年の條に「七月空印閣下捐館、輓するに偈を以てす、黃金千顆を遺し送つて、以て地に布くに充つ、蓋し閣下當日師に參ずる時、契證する所あり、誠に裴休の斷際に於けるに亞がざるなり」と見えたり。

㋩蘭桂とは子孫の發達せるを稱す、顧榮曰く「桂子蘭孫、家の寶と爲す」と。

㋥伽陀は梵語、略して偈といふ、頌と譯す。

㋭歸去來とは陶潛の語なり、來

松平隼人正の江戸に囘るに贈別す

(チ)蓬然たる蕭氣林丘を動かし、杯茗般勤別愁を解く。御世全く憑る三尺の法、安禪打徹す一毫頭。知んぬ君が明月を邀ふるに意有ることを、愧づ我[illegible]にして碧流に赴くことを。聞道らく德風皆草を偃すことを、歸り來れば聲價(リ)瀛洲に滿たん。

贈別

舊時の路を味すこと勿れ、歸家獨り悄然。愁ひ聞く別曲を歌ふことを、作るに懶し歸篇を賦すことを。意氣(ヌ)沖霄の外、行藏(ル)帝象の先。一聲幻夢破れ、足下三千に徧し。

酒井內記に示す

惟だ金剛の劍を秉つて、幻花夢自ら消す、眼空しうして一物無し、何れの處か逍遙せざらん。

酒井主膳に示す

塵勞の夢を放下して、大千一に坦平、頭を擧げて天外に看る、(ヲ)日午正に三更。

は助字にして、三字二句の法なり。

(ヘ)於穆とは、於は歎辭、穆は深遠なり、詩の頌、清廟の章に「於穆清廟」と見ゆ。

(ト)水を飲んで源を知るとは、一を聞いて十を知るの譬なり、景德傳燈錄第二羅睺羅多尊者の傳に、「河有り名づけて金水と曰ふ、其の味殊に美なり、云々。尊者衆に告げて曰く、此の河の源凡そ五百里に聖者僧伽難提有り、云々」と見えたり。

(チ)蓬然とは風の行く貌。

(リ)瀛洲は海中に在りて仙人の棲息する所と傳ふ、蓬萊、瀛洲、弱水、之を三神山と稱す、今は日本を指すものならん。

(ヌ)沖霄は大空をいふ。

(ル)帝象とは表にあらはれたるものをいふ。

(ヲ)日午に三更を打すとは、日中

松平民部少輔に示す

㋻開士塵世を醒し、眞人有空を破す。聊か三寸の舌を舒べて、太和の風を挽轉す。志は負ふ青霄の外、心は閒なり㋕未發の中。丈夫須らく返炤すべし、碧雲をして籠ましむること莫れ。

柏庭道茂信士を薦す

歸依㋵淨信の士、退隱已に多年。三途の業を爍破して、便ち九品蓮に登る。死生皆夢幻、出沒天然に任す。伽陀の旨を味さずんば、風光大千に偏し。

桂の雨に遇ふを賞す

轟轟たる雷雨秋光を破る、桂子紛紛として半は落香、悔ゆらくは閒に花下の路を行くことを、一身淨潔也た清涼。

偶成

自ら愧づ無能の老倒翁、飄飄として一葦西東に任す、杖頭撥ひ出す秋波の眼、覺えず毫端祖風を耀すことを。

又

を以て夜半とすることにて、大地黑漫々たる本分の境界をいふ、五家正宗贊の白雲の章に見ゆ。

㋻開士とは菩薩の譯名なり、諸の衆生を開導する士夫の義なり、前秦の符堅、沙門の德解ある者に開士の號を賜ひたることあれば、又高僧にも用ひたるものなり。

㋕未發の中とは性の本源なり、中庸に「喜怒哀樂の未だ發せざる、之を中と謂ふ、發して皆節に中る、之を和と謂ふ」と見えたり。

㋵淨信とは清淨の信心なり、金剛經に「是の章句を聞いて乃至一念も淨信を生ずるものなり」と見えたり。

一枚横に挑ぐ兩欒山、東西之れ遶つて等しく閒閒、軒かに知る百歳幻花の夢、鏡に對して寧ろ赧顔を羞づること無からんや。

又

圓顱方服眞經を講ず、說いて三途に到れば鬼も亦驚く、酒食分明なり兩個の字、活埋す多少の好英靈。

又

金剛を嚼碎してより後、一字烏ぞ齒牙に掛くべけんや、八面の鑽錐縫罅無し、機に臨んで撒き出して恒沙に滿つ。

㋟桂月の漫興

海外閒に瀟散、何ぞ期せん此の鄕に到らんとは。忽ち聞く天際の呴ゆることを、陡に落つ一枝の香。玉露秋鏡を懸け、人の肝膽を炤して涼し。少時多く孟浪、老大愈〻淸狂。髮白うして脩途邇く、眼靑うして看世忙し。㋹等慈解脫の路、般若是れ歸航。念を擧すれば三際を超え、眉を開けば十方に洞かなり。緣に隨つて放曠に任す、何れの處か吾が藏にあらざらん。

列子の㋞天瑞篇を讀む

無形の大盜天眞を盜む、向氏㋡鄘ぞ能く此の情を識らん、竊み得たり太和些子の氣、頂天立地自

㋟桂月とはよき月かげをいふ。
㋹等慈とは平等の無緣の慈悲。
㋞天瑞篇は列子の開卷第一章なり。
㋡鄘は那に同じ。

ら仁を成す。

某善人に示す

正信の歸依點塵を絶す、時時返炤す本來の身。鐘殿角に鳴る山中の主、月峰頭に吐く格外の賓。百歳の光陰能く幾か有らんや、一生の幻夢摠に眞に非ず。這回了徹して他事無し、負かず拈花會上の人。

㋧華鯨

君が家海中に住し、性命水府に錘る。木を以て其の形に肖、高懸奚ぞ太だ㋤楚なる。衆僧齋を喫せんことを要せば、先づ來つて君が肚を敲く。君が肚虚空に等し、誰人か君が苦を憐まん。苦中呴ゆること雷の如く、知音惟だ佛祖。佛祖聖賢の心、受命今古に同じ。相資く未發の前、大なる哉小補に非ず。試みに問ふ把柄の人、聲消して何れの所にか歸す。歸する處知る可からず、聞く時孰れか伍を爲す。根塵所依無し、突出す雲門の㋶普。聲聲般若の聲、色色蓮華の土。是れを眞佛陀と名づく、諸數に墮せず。

布袋和尚

獨坐の布袋、一杖天を撑ふ。眼四海を空じ、身心悄然たり。咲ふに堪へたり忙忙たる幻化の裡、幾

㋧華鯨とは木を以て魚の象を刻し、懸垂して撃つ所の法器なり、古は木魚と稱せしが、今黄檗宗にて梆と稱するもの是れなり、釋氏要覽下に「鯨魚一撃すれば蒲勞之が爲に大に鳴る」といへるもの是れなり。
㋤楚は辛痛なり。
㋶普とは雲門の一字禪なり、徧界曾て現るの意といふ。

人か未生の前に豁醒す。

山を負ひ海に跨る羅漢の圖

山を負ひ海を踏む、當に買賣を行ふべし。天涯に踏徧して、自由自在。三千の刹境毫端に現じ、一點の靈光法界に周し。

達磨の梁王に面する圖

迢迢として萬里より來り、對面如何が不識。人天の功德に貪着して、頓に不識の質を忘る。果して能く相を離れ名を離るるも、妨げず端端的的たることを。

㋰大眉徒の茅を結ぶに示す

江山踏遍して自ら閒忙、偶〻瓢居を結ぶ古樹の傍、訝ること莫れ峰高うして日の出づること晚きを、人を炤す頂上愈〻風光。

又

日用の靜操那畔邊ぞ、平懷の風雅愚賢を一にす、鳥啼き花咲ふて機鋒俊に、閒居を贏ち得て孰れと共にか傳へん。

仲秋念八の㋒晡間、明堂の外を歩す、忽ち天際の流輝、燦爛として紫繩二十四道有り、北

㋰大眉、諱は性善、字は良者、支那福建泉州府晋江縣の人なり、隱元大師に從ひて東渡し、隨侍すること前後四十餘年、晚に黃檗の東偏に居をトし、東林庵といふ、延寶元年十月十八日寂す、年五十八。

㋒晡は昔の申の刻、今の午後四時に當る、又夕晚の時に稱す。

極を貫く、竊に吉氣の應兆と爲す。聖主賢臣の民に臨むに德を以てする、所感の徵に非ざる莫し。遂に偈を述べて之を識す。

卓朔たる杖藜晩眺を閒にし、普天の靈彩禎祥に映ず。雲碧漢に收まつて千邦靜かに、桂寒巖に落ちて萬壑香し。念四の紫縄北極を貫き、一林の瑞氣文章を煥かにす。聖人の御世民德を旋し、廣く蒼生に被りて量る可きこと莫し。

二十九日空印居士終七の期、衆禪誦經修懺、以て冥福を資く。仍つて偈を述べて以て薦す。

娘未生の時一片の地、來來去去百千番。今朝直指す無生の路、(ホ)端倪を徹見せば心自ら安し。珍重す讃岐の空印叟、行藏昧すと勿く沒絃彈ず。知音萬里空しく恨を遺し、月高峯に上る玉一團。大千幻化の夢を(ノ)爍破せば、吾人等閒の看を作すこと莫し。自ら慚づ德薄うして(オ)龍鍾の甚だしきことを、聊か伽陀を述べて膽肝を照す。

(ホ)端倪とは、はし、かぎりの意、本分の端倪なるべし。
(ノ)爍破とは爍は光るなり、照破と同じ。
(オ)龍鍾とは老衰の貌。

玉峰居士に贈る

春容落落として又秋霜、何物か推遷し底事か忙し。開士忘れず弘願の力、丈夫豈に自らの行藏を昧さんや。脚跟據有つて三際を融し、眼底塵無うして十方を炤す。謂ふこと莫れ侯門深きこと海に似たりと、旁く消息に通せば愈〻風光。

半井瑞雪遠祖和氣淸麻呂眞人を薦せんことを求む

大功は宰せず久しうして彌ゝ新なり、(ク)錯節盤根妙神に入る。德乾坤に被つて千古に重く、心日月を懸けて一天眞なり。頓に(ヤ)靈鷲無生の果を超えて、徹證す蓬萊不老の春。七百年來法眼の裡、聊か半偈を吟じて眞人を表す。

自讃　越州の信童求む

少小頻りに黃檗に參じ、(マ)善財獨り觀音を禮す。多生の意氣を昧さず、圓明一片の眞心。朝昏瞻禮他事無し、魔障頓に消して古今に徹す。

九日諸禪と同じく高峯の絕頂に登る

烟收つて嶽面獨り晴明、磊落として相將ゐて頂上に行く。環遶せる千山朝に翠を拱き、高居せる一座坦然として平なり。杖は(ケ)杲日を挑げて心膽を昭し、塵は秋風を發して謂情を洗ふ。未だ敢て浪りに險崖の句を彈せず、恐らくは天外をして人の驚くを得しめん。

又

風光の碧天に映ずる有るを喜び、輕く老倒を扶けて峰巓に上る、胸開いて徧界淨きこと洗ふが如し、黃花を剩し得て眼前に供す。

(ク)錯節盤根とは、盤根はわだかまれる木の根、錯節はまじはれる木の節、共に切り難きものにて艱難辛苦の義なり、後漢書に「盤根錯節に遇はずんば、何を以て利器を別たんや」と見えたり。

(ヤ)靈鷲は印度の山名靈鷲山にて耆闍崛山の譯名なり、釋迦牟尼佛の住し給ひし處なり。

(マ)善財獨り觀音を禮すは、隱元大師父を尋ねて南海の補陀山に到り、發心せられしをいふものなり。

(ケ)杲日は明かなる日。

重陽の後二日（イ）清水寺に遊んで大士を禮す

大士清水に現じ、湛然として妙神入る。等慈苦海を濟ひ、弘願迷津を渡す。物を念ふに原同體、生を視るに兩人無し。舊面目を挽回し、本來身を徹見す。共に圓通の境を證し、淨うして半點の塵無し。密に窺ふ大慈の德、洪恩陳ぶ可きこと莫し。我れ來つて勝槩を探る、瑞氣天眞に映ず。道は契ふ山中の主、雲は從ふ格外の賓。中虛萬象を含み、雅誼日に彌〻新なり。正に清秋の景に値ひ、懷開けて意倍〻親し。法門互に帥を表し、老能仁に負かず。

（ロ）成就院主に贈る

扶桑の境に歷偏して、何ぞ期せん此の翁に逢はんとは。行藏皆樂地、（ハ）顯密盡く圓通。淨きことは清秋の月に似、渾べて太古の風を成す。未だ常に片語を吐かず、三昧其の中に在り。天運今猶ほ古、（ニ）曦車西復た東。人情流水に付し、道義虛空に廓なり。特に太和の室を造り、殷殷として意倍〻隆なり。雲を推して老叟を迎へ、榻を下つて梵宮を淨うす。山餚の供を竭盡し、懷を開いて己躬を潔くす。百年幻化の夢、唯だ此れ全功を卜す。

又別句

（イ）清水寺は京都の清水寺なり、普照國師年譜寬文二年の條に「九月成就院の主僧、請じて京師の清水寺に遊ばしむ、偈有り」と見えたり。
（ロ）成就院は清水寺內の一院にして、近年その住房となれり。
（ハ）顯密とは顯敎と密敎。
（ニ）曦車は太陽なり。

羨む君が好手蕩に㋐勾を拋つことを、搭着す無依の鐵鼻牛。淸水池邊聊か飲啜し、白雲嶺上恣に優游す。滿林の秀氣千年の瑞、大地の霜花一色の秋。芒繩を掣斷して歸り去る㋚也、了に踪跡の峰頭に落つる無し。

德風禪者の里に回るに示す

德風皆草を偃し、草偃して風光好し。幷せて太和の春と作す、世間何れの處にか討ねん。歸去騰騰に任す、再來須らく急早なるべし。九上と三登と、大事乃ち保つ可し。

松平對馬守に示す

正氣千群の象、回天の語漸く舒ぶ。丹心日月を懸け、赤膽空虛に耀く。覷破す浮雲の夢、圓明なり徹夜の珠。滄海の望に孤かず、仁者樂㋖虞ふること無し。

㋴獨本㋱藏主の自肯庵に回るに示す

來來去去して忙を辭せず、㋯溪聲を踏斷して流遠長、始めて徹す閑忙二致無きことを、脚頭脚底盡く風光。

㋛歲壬寅に次る菊月十九日、本寺觀音開光に云く、「法身宇宙に彌り、道

㋐勾は句に同じ。
㋚也は詠歎の辭。
㋖虞とは備ふることなし、卽ち安きにいふ語。
㋴獨本、諱は性源、安房の人、隱元大師の法嗣なり、深川に自肯庵を建て、又海福寺を開き、相模に淨業寺を創す、元祿二年八月十一日に寂す、年七十二。
㋱藏主は經藏を司る所の役名なり。
㋯碧巖第六則の頌に「徐に行いて踏斷す流水の聲、縱に觀て寫し出す飛禽の跡」の句あり。
㋛普照國師年譜寬文二年の條に「師國に入つてより見る所の梵像甚だ如法ならず、適々閩南に范道生といふ者あり、肖像を造ることを善くす、間監院に命じて觀音、韋駄、伽藍、祖師、監齋等の像を造らしむ、開光の日各々法語あり、四方

眼周沙に廓なり。一點光通達して、圓明にして點瑕を沒す、諸人會す麼。茲者大士示現の時、靈光正に照して、吉氣筵に臨む。祥を爲し瑞を爲して、家國晏然。霖と爲り雨と爲つて、山川秀麗。眞誠は衆生の福田、永く長河の寶筏と作る。聲を尋ねて苦を救ひ、類に隨つて生を度す。而して其の神通妙用、無量無邊、最親最切なり。何ぞ山僧が筆舌の助揚を用ひて、而る後光明とせん耶。然も是の如くなりと雖も、也た這の一點を少くことを得ず。何が故ぞ、(ニ)聻。道ふことを見ずや、(ヒ)天一點の紅光を得て、愈〻高明の廣大なることを見、地一點の精華を得て、益〻百寶の光輝を增し、人一點の正見を得て、能く邪を摧き正を扶くるの(モ)功勛を成し、僧一點の正知を得て、卻つて魔を揀び異を辨ずるの手眼有りと。然らば則ち乾坤覆載の功有りと雖も、亦今古[illegible]賢の表揚發揮を借つて、以て三才の德を成じ、而して蒼生に被らしめて、(セ)廣博窮り無きなり。山僧然も不慧なりと雖も、日用の事別無く、行藏缺虧沒し、古往と今來と、何ぞ曾て一毫端を少却せん。既に欠少無し、妨げず一隻手を出して、光明を點開し、觀音大士と互に相表揚して、共に佛事を作して、以て群機を利せんこと亦至善ならずや。」筆を擧して云く、「諸人還つて見る麼、黃檗由來多子無し、全く這の點に憑

瞻禮のもの、嘆じて希有となす」と見えたり。范道生は明の泉州の人なり、寛文初年渡來して長崎の福濟寺に寓す、十年十一月二日同寺に卒す。

(ニ)聻は物を指すにいふ語、又語餘の發聲なり。

(ヒ)老子第三十九章に「天一を得て以て清く、地一を得て以て寧く、神一を得て以て靈に、谷一を得て以て盈ち、萬物一を得て以て生ず、侯王一を得て以て天下の正となる」と見えたり。

(モ)勛は勳の古字なり。

(セ)廣博とは廣大博厚の意なり、中庸に天地の道を形容したる語なり。

つて生涯を作す。慧眼を掲開して今古に亘り、生靈を炤徹して一家に歸せしむ。」便ち點す。

長門の神谷勝右衛門、妣孤雲を薦せんことを求む

孤雲幻化の境、黑白㋜居諸を業とす。一句伽陀の語、剖開せば業盡く除く。生死海を打翻し、夜明珠を炤徹す。三界輪廻息み、一靈太虛を覺す。儼然として彼岸に登る、極樂意何如。

睡起の戯筆

老來聊か小神通を展べて、夜は家山に返り晝は東に在り、㋑夢筆花開いて新に燦爛たり、一園の桃李舊春風。

萬里相公參ずる次で、問ふ、「是の如く來る者は是れ什麼人ぞ。」師云く、「舊面目を豁開し、本來人を徹見せよ。」進んで云く、「如何が徹見し去らん。」師云く、「日用の事別無し。」相公便ち禮拜す、師云く、「會し了つて禮拜するか、會せずして禮拜するか。」進んで云く、「某甲道ふ可き無し。」師云く、「秋花點點新なり。」

河村十右衛門、妣梅岸妙林を薦せんことを求む

孝子原本を追ひ、貞臣帝京を起す。英傑の事に孤かず、豈に慈恩の情に負かんや。家國兩ながら全美、功勳一に大成す。返觀猶は未だ足らず、直に㋺法王城に造る。偈を乞うて靈福を薦す、蓮花舌上

㋜居諸とは日月の異稱。

㋑夢筆花開とは、和凝年十七、明經に擧げられて、京師に至る、忽ち人五色の筆一束を以て之に與へて謂つて曰く、「子が才以て進士に擧げらるべし」と、是れより才思敏贍、十九にして登第せりといへるに基づくなり。萬里相公とは萬里小路雅房か。

㋺法王城とは佛土なり。

に生ず。頓に三界の業を消し、淨土坦然として平なり。大道方所無く、心に隨つて善名を得。妙林登彼岸、極樂舊家聲。

胡信士に示す

久しく至寶を埋めて塵勞に在り、撥ひ出して㋩當陽に見るや也た麽や。眼虛空を廓にして欠剩無く、心滄海を平にして風波を少く。一天の霜月晴れて方に好し、萬里の江山瞬息に過ぐ。飽くまで家珍を載せて歸り去る也、高く彼岸に登る樂しみ如何。

西村久左衛門、考成玄、妣壽圭を薦せんことを求む

法を請ふは敬を主と爲す、親に事ふるは孝を先と爲す。孝敬兩ながら倶に足る、是れを眞の福田と名く。玆を以て父母を薦せば、特地に自ら玄を成ず。再び偈を乞うて證と爲す、又腦後に鞭を加ふ。頓に㋥清淨界に超えて、共に寶花蓮に坐す。

惟住孫に示す

惟れ住に所住無く、惟れ行に所行無し。兩頭倶に㋭踢脫して、日午正に三更。世を擧つて渾べて夢の如し、幾か能く此の情を醒す。霜花道骨を堅

㋩當陽とは分明の義なり。
㋥清淨界とは佛淨土に同じ。
㋭踢脫とは踢は急遽なる貌にいふ字なり、急速に解脫するの意。
㋬形山の寶とは、色身形殼の中に法身の至寶の存在するをいふ、僧肇の寶藏論に「天地の内、宇宙の間、中に一寶あり、形山に秘在す」と見えたり、碧巖第四十二則に出づ。
㋣普照國師年譜、寬文二年の條に「侍者惟一、華嚴を血書して晝夜に經を禮す云々」と見えたり。
㋠老子第一章に「無名は天地の

うし、蘿月眉を啓いて明かなり。但だ惜む㋬形山の寶、豈に世上の榮を貪らんや。蓬萊偶〻錫を寄せ、和氣平生を暢ぶ。聊か安閒の法を得て、頓に幻化の聲を消す。福慧果して圓滿、乾坤掌上に平なり。言はずして天下信[illegible]、沙界縱橫に任す。

㋣惟一侍者、華嚴經を血書するに示す

千差の路を坐斷して、儼然として一に坦平。脚跟實地を踏む、豈に更に虛聲を聽かんや。萬法皆幻の如し、一眞亦强ひて名く。㋠無名は天地の始め、觸處自ら現成。現成の物を識得せば、人天汝を輕んせず。㋷乾坤同一體、何れの處か情に關す可き。榮辱三春の夢、興亡一瞬に傾く。心心間斷無く、念念自ら圓明。滴血經海と成つて、㋦華嚴界上に行く。

始め、有名は萬物の母」と見ゆ。

㋷僧肇の涅槃無名論に「天地と我と同根、萬物と我と一體」の語あり、碧巖第二十則にあり。

㋦華嚴とは、美麗なる花にて玉臺を莊嚴する意にて、佛德の圓滿具備せるに譬へたる語なり。

歌

十二時辰の歌、㋑寶誌公の韻を用ふ

㋺平旦寅、剖出す當人の清淨身。心境兩ながら忘じて罣礙無し、拈じ來れば手に信せて是れ家珍。相に着せず迷津を啓く、觸處分明是れ塵にあらず。古に亘り今に彌りて活潑潑、由來假に非ず亦眞に非ず。

㋩日出卯、一點圓明巧巧に非ず。爍破す閻浮の八萬州、佛魔頓に盡く誰か來つて撓す。赤條條了せざる無し、直者は直く兮㋥拗者は拗なり。法法頭頭自性空、原我相無し奚ぞ憂惱せん。

㋭食時辰、當體現前す妙法身。日用尋常の淡粥飯、何ぞ須ひん更に薑辛を著くるを要することを。平等の見疎親沒す、切に忌む從前我人に着することを。一たび源頭を錯まれば千萬里、招囘未だ免れず幾埃塵。

㋬禺中巳、亘赫圓明にして至らざる無し。炤徹す沙を算ふ沒量の人、頓に實相を空じて文義を離る。死生を了じて一字無し、明明に覿露す是非

㋑寶誌、又保誌に作る、支那金城の人、梁の天監十三年に寂す、壽凡九十七。景德傳燈錄に大乘讃十首、十二時頌、十四科頌等を收む。

㋺平旦はもとの寅の刻の異名、寅の刻は今の午前四時頃なり。

㋩日出卯は今の午前六時頃なり。

㋥拗は曲るなり。

㋭食時辰は今の午前八時頃なり。

㋬禺中巳は今の午前十時頃なり。

是。我無く人無く去來無し、大千沙界吾が使と爲す。

㋣日南午、突出す㋠蘊山の一大寶。智者は山に到つて寶を得て回る、貧生澤物貧苦を賑はす。迷ふは自ら迷ひ悟るは自ら悟る、雲開け雲合す朝還た暮。等閑に踏斷す㋷兩頭の關、生死去來一路に歸す。

㋦日昳未、虛空を爛嚼して味義無し。舌頭を咬破して飽くまで休せず、縱橫舒卷㋸西來意。口に信せて談ず何の諱む所ぞ、人間天上吾が止に非ず。緣に隨つて偶〻寄る㋾古灘頭、錦鱗を釣り得て自ら棄てず。

㋻晡時申、本來無物貧を知らず。寒山幾幅か暫く知己、雲影淡濃幻假眞。外に望むこと勿し自ら神を全うす、㋕頑石團圝として隣を作すに堪へたり。咳唾一聲皆點首す、眸を凝せば何れの處か同人ならざる。

㋵日入酉、寂滅須臾長且つ久。相を離れ名を離れ古今を離る、詎ぞ聞かん虛しく㋟曹山の酒を設くることを。未だ放逸せず何ぞ守ることを須ひん、看破せば從前奚の有る所ぞ。突出す本來の鐵臉皮、無生界內團圝として走る。

㋹黃昏戌、萬別千差一室に歸す。坐臥空空爲す所無し、身を翻せば覺

㋣日南午は今の午前十二時頃なり。

㋠蘊山の一大寶とは、形山の一寶に同じ。

㋷兩頭の關とは迷悟の兩頭の關なり。

㋦日昳未は今の午後二時頃なり。

㋸西來意とは達磨西來、直指人心見性成佛の活意なり。

㋾古灘頭とは新黃檗に譬ふ、但し底意は本分の處なり、錦鱗は英靈の衲子をいふ。

㋻晡時申は今の午後四時頃なり。

㋕什門の四哲の一人、道生法師、虎丘山に隱れて涅槃經を講ぜしに、頑石皆點頭せしといへる故事なり。

㋵日入酉は今の午後六時頃。

㋟曹山の酒とは景德傳燈錄、十七曹山本寂の傳に、「僧清銳問ふ、某甲孤貧、乞ふ師拯濟せ

えず東方日あり。〔ソ〕鳥關關蟲唧唧、一部の眞經幾點の漆ぞ。動着すれば〔ツ〕毫端も大千を隔つ、未だ萠さず一念の〔ネ〕波羅蜜。

〔十〕人定亥、夢に靈山に到つて歸つて疲怠す。名勝に耽着して夢遊長し、無想の主翁今何くにか在る。〔ラ〕破砂盆誰か替り代る、東擲西拋胡ぞ罣礙せん。返照すれば個の中無一物、空花影を露して徒に怡愛す。

〔ム〕夜半子、一夢生無し曷ぞ死有らん。嘆ずるに堪へたり夢中に夢を說く人、何ぞ曾て契着せん離言の字。〔ウ〕玄中の玄格外の事、非を去却し兮是を御却す。暗謝し明來つて互に奪凌す、眞空實相誰か試むるに堪へんや。

〔中〕鷄鳴丑、一聲啼き破つて長に悠久。空色堆頭片誠を露す、追尋すれば特地に鳥何か有る。頭を沒却し手を伸出す、把住放行還つて老朽。饒ひ伊能く〔ノ〕十二時を轉ずれども、爭か如かん虛空の口を塞殺するに。

〔オ〕茅を結ぶ歌

茅居好し茅居好し、茅居素靜にして煩惱無し。家の無儉に隨つて樂しみ窮り無し、〔ク〕節槩の風情何れの處にか討ねん。松微吟して幽草を動かす、天然一段の〔ヤ〕妙嘉藻。彈せず濁世繁華の夢、但だ惜しむ光陰無價の寶。美

ふ、師曰く、鈸闍梨近前來、鈸近前す、師曰く、泉州白家酒三盞、猶ほ道ふ未だ脣を沾さず」とあるをいふなり。

〔シ〕黃昏戌は今の午後八時頃なり。

〔ソ〕關關とは鳥の鳴く聲にいふ。詩の國風關雎の章に「關關たる雎鳩」とあり。

〔ツ〕信心銘に「毫釐も差有れば、天地懸隔す」と見ゆ。

〔ネ〕波羅蜜は到彼岸と譯す、悟りの義なり。

〔十〕人定亥は今の午後十時頃なり。

〔ラ〕破砂盆とは破れたる砂の盛りたる盆の意ならん、極く無雜作なる義か、密庵咸傑の語なり。應庵一日問ふ、如何なるか是れ正法眼と、密庵答へて曰く、破砂盆と。蓋し正法眼を滅却せしものか、格外の傑答といふべし。

少年老倒を咲ふ、老倒徧く能く懷抱を開く。眼乾坤に懺いて古今を空じ、胷一帶を流して淨うして歸ふが如し。常に無事にして閒眠早く、柴門掩はざれども雲來り鎖す。夢に遊ぶ東土と西天と、淨穢踏翻して幾と絶倒す。忽ち惺惺として光浩浩たり、㋮斗室門開いて大道に通ず。寂照圓明にして缺虧沒し、果然として蓬萊島に勝れり。

㋗磊落の歌

沒量の漢莽鹵の人、端無く西に沒し又東に昇る。檗岫潭中瘦影を忘れ、扶桑添へ得たり一閒の身。有る時は喜び有る時は嗔る、惹き得たり娘生滿面の塵。凡聖位中收むれども住まらず、驢頭馬臉也た天眞。德德にあらず仁仁に非ず、殺活縱橫妙神に入る。逆順圓通にして罣礙無し、一毫頭上萬年の春。住に住無く言唯だ新なり、抖擻す衣下作家の珍。胷開いて㋫平等にして高下無し、賑濟す㋙玲瓏たる徹骨の貧。非常の法を准繩と爲す、落落たる風光陳ぶ可からず。亂草場中強ひて主と爲る、任從あれ四海自ら來賓することを。

㋓無用の歌

㋰夜半子は今の午後十二時頃なり。

㋒景德傳燈錄第十趙州從諗の傳に「僧問ふ、如何なるか是れ玄中の玄、師云く、汝玄にし來ること多少時ぞや、僧云く、之を玄にすること久し、師云く、闍梨若し老僧に遇はずんば、幾んど玄殺せらる」と見えたり。

㋼雞鳴丑は今の午前二時頃なり。

㋨古尊宿語錄第十三、趙州眞際禪師語錄に「問ふ、十二時中如何が川心せん、師云く、儞は十二時に使はれ、老僧は十二時を使ひ得たり、儞那箇の時を問ふ」と見えたり。

㋔結茅とはかやをむすぶにて、茅屋を造ることなり。

㋗師樂とは師操の義。

㋳妙蕎藻は善き文章なり。

㋮斗室とは方丈の芻室なり。

無用の人は天眞に任す、時に隨つて屈し也た時に隨つて伸ぶ。幾度か雪霜傲骨を鑿ち、一番の風月一番新なり。幻化の景は却つて眞に非ず、造物私無うして妙神に入る。蝴蝶夢中に隻眼を開き、㋢百花叢裡に身を沾さず。恒に返炤す本來の人、出沒奚ぞ曾て點塵を惹かん。㋐五濁劫中悲願切に、千華臺上能仁に捧ぐ。喜ぶ可き無し何の嗔か有らん、徹見す本來無我の人。一天淨潔にして空有を超え、徧體の風光假眞を融す。

㋚古稀の歌

壽に着せず祿を干めず、太和の風雅四時足る。無爲無事天眞を樂しみ、甘つて淸閒を守つて惟だ我れ獨りす。山は自ら靑く水は自ら綠に、萬象森羅同一幅。倏忽として天は開く㋖五老の圖、蓬萊の峯は獻ず喃喃の祝。數樹の梅幾叢の竹、一味淸幽巖谷に供ず。重重たる瑞氣東西を遶り、片片たる白雲夜共に宿す。心の欲するに從つて拘束無く、時淸く道泰にして一陽復る。正氣瀰漫たり㋙四大洲、果熟し香飄る六十六、松は蒼蒼たり花は簇簇たり。道は存す林下數間の屋、窮通壽夭自ら天然、本來眞の面目を昧さず。舊時の路は已に復ることを忘れ、人をして萬里於穆を嘆ぜしむ。頓に

㋘磊落とは度量の宏大にして細事に拘はらざる義。

㋫金剛經に「是の法平等にして高下あることなし、是れを阿耨多羅三藐三菩提と名づく」と見えたり。

㋙蛉螂とは、行くに正しからざること。

㋓莊子逍遙遊篇に、「今子の言、大にして用無し、衆同じく去る所なり」云々。今子大樹あり、其の用無きを患へば、何ぞ之を無何有の郷廣莫の野に樹ゑざる」と見えたり。

㋢普照國師年譜に、「百花叢裏に過ぎて、一葉身を沾さず」と見えたり。

㋐五濁とは劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁の五なり。阿彌陀經、倶舍論等に出づ。

㋚普照國師年譜寛文元年十一月の條に、「是の日合山の兩序齋

㋱壽相を空じて思議せず、南北東西同一轂。

㋯丈室落成の歌

安樂の節太和の天、正に是れ人間の大福田。金剛の眞種子を著得せば、花開き果を結んで三千に遍し。草莽を删り法筵を開く、丈室の落成豈に偶然ならんや。不二門中萬象を昭し、法界を收羅して廣きこと無邊。師子は吼ゆ萬松の巓、異口同音に聖賢を祝す。道泰く時豐にして家國瑞く、仁風德澤林泉に動く。般若を演じ金仙を禮し、一念圓明にして後先に耀く。㋛無位の眞人赤洒洒、門頭戸底風顚を掣く。㋾主中の主玄中の玄、由來千聖相傳へず。一聲の囫地自ら端的、瓊樓百寶の蓮を超出し、名狀に非ず言詮を離る。㋪毘耶此に到つて宣ぶること能はず、請ふ君試みに㋲威音叟に問へ、必竟如何が一言を決せん。口を開かば恐らくは三十棒ならしめん、逡巡として首を回さば更に鞭を加へん。聲を收め氣を斂めて元本に歸し、把住すれば大千枕を同じうして眠る。是の如きの撑持㋝滲漏無し、流傳の勳業萬斯年。

牛頭栴檀瑞相の歌　幷に引

を營んで慶を申ぶ、師古稀の歌を作つて以て答ふ」と見えたり。

㋖睢陽の五老あり、今之を詳にせず。白居易、晩に香山居士と號し、常に胡杲等と燕樂す、皆高年にして仕へざる者、人之を慕ふて繪いて九老の圖となす、是れ老人圖なり。禮記の曲禮に「七十を老といふ」と見え、同王制に「七十國に杖つく」と見えたり。

㋴四大洲とは南閻浮提、西瞿耶尼、北鬱單越、東弗于逮の四洲なり、卽ち古の世界なり。六十六とは日本國をいふ。天長元年九月六十六國二島と定まり、明治維新の時に及べり。

㋱金剛經の壽者相なり、法身はもと壽命の相を離れたり。

㋯丈室は維摩居士の方丈の室より來る。

㋛無位の眞人とは本來具有の眞

鬱香長者、㋜優鉢羅華を善財童子に示して云く、「㋑摩羅耶山に㋺栴檀香を出す、名けて牛頭と曰ふ。若し以て身に塗らば、設ひ火坑に入るとも、火も燒くこと能はず」と。又云く、「赤栴檀は牛首峯に出づ、峰を以て名を得たり、以て寒症の病を治す可し。故に國人の重んずる所良に以有るなり。」茲に崎中の信士に係る津田又左衞門、三十年前、其の國に往いて之を得、諸を蘊んで以て來る、知る者有ること無し。前歳適々唐人至る、善く能く滅塑す、此の香を出して觀佛を雕成す。寶相嚴麗、瞻禮咸希有と嘆ず。更に餘る、㋩逸然上座之を求め、依つて一尊を雕し、從つて老僧に上り、隨身奉供せしむ。唉、東西相去ること數萬里、奚の緣の感ずる所か、此の瑞應を得たる。加ふるに妙手の莊嚴を以てし、相好善を盡し美を盡す。夫の㋥三平の瑞相、同渡の祖圖と、並びに三瑞應の吉と作す。一會儼然、永く萬福の家貲と爲す。庶はくは百千年後、一瞻一禮、福慧兩ながら全し。其の功德曷ぞ思議す可き者ならん哉、遂に三瑞の歌を作り、以て之を識す。

㋭也太奇也太奇、天然の三瑞斯の時に會す。東西㋬程賦するに幾萬里ぞ、應感機緣思ふ可からず。牛頭沒し佛頭熙く、頓に煩惱を空じて卽ち菩提。

實主人公なり、臨濟錄に出づ。眞人の語は莊子の太宗師に出づ。

㋾主中の主とは寶鏡三昧に出づ、又臨濟宗四賓主の一なり、主は本分を指す。

㋪毘耶とは維摩詰を指す、維摩詰は毘耶離城中の長者なるが故なり。

㋲威音叟とは威音王佛をいふ、過去無數劫の佛なり、本來の主人公に譬ふ。

㋝滲漏とは八成にして未だ十成ならず、機智情境滲滯偏枯にして無礙圓通ならざるなり。洞山に三種滲漏の語あり。

㋜優鉢羅華とは、靑花と譯す、その花赤白の二色あり、蓮花に似てその花小さく、葉の形狹くして長く、上の方にて尖れりと。

㋑摩羅耶とは詳しくは摩利伽羅耶といふ、其の山は南天竺の

一瞻一禮三昧を成ず、正信に歸依すれば悟迷に徹す。老いて何の幸ぞ斯の期に逢ふ、白頭光耀す。㋣五須彌。當陽に點出す人天の眼、幷せて太和般若の基と作す。非常の相過量の儀、今朝現ずるや思議し叵し。祥海國に徹して千古を領し、信當人に感じて自ら欺かず。見無見にして狐疑を絶す、體用全く彰る若個か知る。西沒東昇二致無く、行藏取舍更に誰にか由る。作無作爲無爲、名跡を掃除して眞規を露す。頓に黄檗の多子無きことを明めば、觸目千差也た宜しきに合ふ。

菊に對する歌

人老に垂んとして天復た秋、眼底の黄花孰れか放收せん。白首閑に行いて㋠晩節を歌ひ、儼然微笑して新愁を解く。秋光好し却つて留め難

境、摩利伽羅耶國の南界に在り、山中に白栴檀木多し。

㋺栴檀は外國の香木なり、又藥用となす、白檀は熱病を治し、赤檀は風腫を去るといふ。

㋩逸然、諱は性融、浪雲庵と號す。明の人なり、正保元年に渡來し、長崎興福寺に住す、畫を善くす。寛文八年七月十四日寂す、年六十七。

㋥三平の瑞相とは閩の漳州三平山にその開山唐の義忠禪師その境に檜樹を植ゑたり、九百餘年にして枝幹盡く枯る。清順治六年隱元大師の法弟亘信和尚、その殿宇を再興せしときその樹を伐り、釋迦牟尼佛三十餘像を刻せしむ。隱元大師東渡の後、欽台の許公、此の瑞像を贈れり、隱元大師その贊を作れり。祖圖は欽台許公の爲に、その贊を題せられたる列祖圖なるべし。

㋭也太奇也太奇とは、いとめづらしき義、洞山良价の無情說法の偈に見ゆ。

㋬程も賦も共にはかる意味に用ひらる、はかるなり。

㋣五須彌とは須彌山の量に五倍せりとの義なり。觀無量壽經第九佛身觀に「眉間の白毫、右旋婉轉すること五須彌山の如し」とあり。同智者大師の疏に「須彌山の舉高三百三十六萬里、縱廣亦爾り。彼の佛の毫相此に過ぐること五倍」と見えたり。須彌山は北面は黄金、東は銀、南は吠瑠璃(青色寶)、西は頗胝迦寶(赤色の水精)の四寶を以て體とすといふ。

㋠韓魏公、北門に在り、九日に諸僚佐を燕す、詩有り云く、「羞ぢず老圃秋客の淡きことを、且つ看る寒花晩節の香しきことを」と、その風霜搖落

きも、籬邊の風景恣に悠悠たり。細に看て却つて霜に傲るの志有り、覺えず林閒一段の幽。㋷隱逸の最高流を倘び、淡淡たる清馨獨り自由す。縦ひ兩輪をして高遠に炤さしむるも、素心淨潔空に對して酬いん。名譜を離れて却つて憂無く、夢境の繁華盡く放休す。惟だ個の中の淸意味を得ば、更に此の外に於て復た何をか求めん。

の時に瘁なるを以て晩節を貫するなり。

㋷隱逸とは易に「王侯に事へず、其の事を高尚にす」と見えたり、隱遯高逸の義なり。

㋦龍鍾は竹の名。

㋸蔣詡、舍中の竹下に三徑を開く、羊仲、裘仲の徒あり、之と遊ぶ。三徑は隱遁者、又は挂冠せし人の門庭なり。

竹を種うる歌

其の志を堅うし其の心を虚しうす、日常竹を種ゑて自ら林を成す。枝枝の秀氣天澤を承け、節節の文明古今に播く。微風和雅の音を動かし、葉葉の靑標鳳吟を引く。雪㋦龍鍾を覆うて片玉を掛け、日疎影を搖かして千金を浪たたす。㋸三徑友は暢ぶ胸襟の眉、秀を開いて茂り俯す群陰の操。節霜を淩いで千古に勁く、名君子を標して聖賢欽しむ。

國譯黄檗和尚太和集終

黃檗和尚太和集

侍者 性派 性瀲 仝編

萬治三年庚子、十二月十八日、承
上命旨、所賜太和田、爲黃檗山萬福禪寺、於
寬文元年八月二十九日、進山門云、一錫臨筵、千山稽首、法法獻誠、拈來信手、黃檗安名、不忘
本有、聊與一念無緣慈、永爲千秋不請友、老僧到這裡、建立法幢、且止、只如進門一句、作麼生
道、萬福門開日日新、時豐道泰長悠久、便進至
佛殿拈云、乾坤蓋載、萬古如在、日月炤臨、光明廣大、一片坦平、縱橫無礙、卓立個中、山靈有待、
諸人還見麼、一莖草上現瓊樓、三世如來俱頂戴、至
方丈云、六牕明淨、一室虛玄、撥入個中、一會儼然、轟轟烈烈、白日青天、點凡成聖、轉愚作賢、迸
開隻眼、耀後光前、驀鼻盧都談不二、流轉燥辣起風顛、起風顛且止、今日新開黃檗又作麼生
道、一棒破荒千古振、檗山現瑞萬斯年、

初到檗山偶成

新開黃檗壯禪基、正脈流傳海外奇、有志英靈須著眼、苦心道義共撑持、法身不礙莊嚴相、勝
跡何妨出現時、劈箭峰頭觀慧日、一莖草上拄須彌、掀翻岐路險崖句、縱奪希常過量機、大道

坦然成正果、不孤塵世好男兒。

又

聊伸隻手破天荒、莖草拈來當法幢、一片太和溫道義、千秋黃檗振宗綱、掀翻陸地渡謊說、收放紅爐談上霜、盡謂通身無影像、誰知徧界不曾藏、偶來卓立高峯頂、晙看大千空白忙。

題雙鶴亭 有引

歲庚子仲冬、承上命、受太和山、爲黃檗萬福禪寺基、越明年春、再遊取向、仰望松際、有雙白鶴翹焉、更上二十餘武、其鶴翔鳴、次崘松頂而立、仍陟高峯絕頂、大觀勝槩、逾時而下、鶴猶在松、嘆曰、奇哉奇哉、此日爲我前導、點其勝跡、倘建剎時、當以此爲驗、卽紀遊贈近衛大納言公、有鶴鳴松頂招賢侶之句、嗣後龍溪同令僧仲秋念日起工、於閏八月二十九日進山、次早登亭遠眺、大暢胸襟、江山萬頃、翠靄千祥、盡在當人一瞬、可謂千古風光殊勝事、一天靈彩印文中、侍僧謂、前白鶴現瑞卽此處、當顏之雙鶴亭可也、余唯唯稱善、仍說偈以識。

空亭未現復何知、白鶴翹松示悟期、老眼豁開雙翠壁、孤筇卓立片靈芝、天然雅趣風光別、瞰世達觀格外奇、此日功成聊憩錫、僧羅秀氣正當時。

又

亭開徹見歲寒心、霜雪滿頭亦喜吟、老得古梅堪共友、靜思白鶴也知音、峰高忽吐家天月、葉落平鋪徧地金、閒把藤條聊卓朔、萬緣放下絕追尋。

示瑞光院

勞生幻世轉飄蓬、百歲渾成一夢中、金玉到頭將不去、兒孫滿眼孰同終、情關打破眞常樂、慧性圓明業頓空、倏忽心花開爛熳、何愁結果不全功。

出山釋迦讚

埋頭雪嶺豈尋常、爲道忘軀世莫量、不是一番徹骨後、如何做得法中王。

與松浦肥前守書

夫半偈撐持法界、永劫無窮、成住壞空、安可比耳、一心護惜宗門、千生不昧、幻花露影、豈能感哉、是以金剛種子、百煉愈光輝、藥汞銀禪、一煆便逗漏、驗在當人、難逃至鑑、老僧憶二十年前、在唐重興黃檗、昔首疏云、跨海非常木、撐天必大材、東君如有意、吹入我門來、嗣後工竣、應扶桑請、迄今又閱八春秋矣、茲蒙　上命開山、草創此地、仍名黃檗、始覺前偈、應驗于此日、倘來數萬里之木、爲梁爲棟、豈可思議也耶、又得居士護送到此、可謂天工人力、兩全其美、今古罕聞、擧世希有、誠不可思議之境、非凡小庸庸之所知也、然則不思議之大材、必有不思議之大用、以顯不思議之大功、成不思議之大事、功不浪施、福歸有地、他日奏成、廣聚龍象、正法流通、可普利日域、則護送之功、有所得矣、老僧德尠福微、但說一偈、兩全黃檗、單提榔栗、西沒東涌、可思議耶、不可思議耶、或試問于黃檗、黃檗亦不自知、適管城子在傍、忍俊不禁、聊答半偈、圓滿勝事云、二十年前用不盡、飄來海島復何疑、毫端逗漏無多子、突出和山第一枝。

性印信士、同獨健劉通事、令西國大木至、書示

大材必大用、美器亦非常、一拄空王殿、功勳莫可量、因緣出現處、木石自鏗鏘、相去幾萬里、何期到此方、莫非夙願力、共竪寶蓮坊、不著有爲福、當人只自強、世間盛德業、事事已全彰、棐軸添靈彩、千秋詎可忘、

又

靈山無鎖夢雲開、放出撐天拄地來、一竪空門千古振、不孤格外棟梁才、

又

昔年筆底夢花開、點醒鷲峯出格才、此際聊舒正法眼、儼然一會也奇哉、

洛中九十翁慶會

九十翁翁慶古稀、相看盡是白頭兒、頓忘壽相無增減、千載同風會一旹。

文殊普賢同幢讃

對談妙道、忘卻獅象、行解相應、天下榜樣、利己利人、成一合相、舒卷乾坤、無二致、單提如意福難量。

龐居士靈照女讃

一法空旹萬法空、家珍盡付急流中、不因靈女營生活、龐老如何立上風。

觀音讃

大悲度苦現全身、世上何人見得親、惟有當機高著眼、一回瞻禮一天眞、

雙鶴亭示松平若州守

點塵飛不到、雙鶴占機先、格外聊舒眼、胸流徧大千。

井上信士、求薦考心覺妣妙春

一言合大道、心覺便超昇、行藏無罣礙、何處不通津、孝道感天地、心花發妙春、點開清淨眼、不昧本來人、直指無囘互、悄然自此辰、覺靈悟厥旨、徹證妙天眞。

觀音讚

獨坐垂楊下、自觀觀世音、慈心能與樂、悲願渡迷津、一瞻一禮一囘顧、徹見本來無二人。

達磨讚

不識對梁王、凄凄暗渡江、去來無罣礙、面壁亦何妨、直至神光斷臂後、浪傳五葉徧諸方。

又

突出嘴臉、流露半身、無端西沒東湧、知他是假是眞、貶得眼來千萬里、囘光返照獨全神。

洛中信士送古梅樹至

枌老倚巖隈、骨瘦若寒梅、纖塵渾不染、曾占百花魁、微映驚殘雪、吟風獨露腮、清幽徧法界、脫俗也奇哉。

中景禪人送菩提樹至

菩提旣有樹、的的自西來、五葉臺中土、歸根共一枚、苟知原不二、詎可不栽培、花發三春麗、香飄九品臺、丈夫須猛省、那更又疑猜、苦口唯黃檗、無端吼似雷、知音如錯過、令我嘆時哉。

登雙鶴亭 四首

一度登亭一解懷、乾坤何意待西來、寒梅雪鶴龐眉叟、偶爾團圝撥不開、
一度登亭一展眉、江山萬頃布希奇、淡濃隱約難情狀、擧筆三思不易題。
一度登亭一破顏、陰晴顯煥刹那間、杖頭眼豁幻花夢、萬竅怒號也等閒。
一度登亭一度新、凝眸何處不天眞、山環水遶村村供、併作太和萬劫春。

贈別妻木彥右衞門回江戶

道義圓明昭日月、世情濃淡等空華、返觀本有無多子、生死岸頭路不差、此日重光臨萬福、聊吟半偈當杯茶。

門頭晚眺

閒坐庭前看晚山、半啣落日映江間、空餘返照光天德、彩氣臨門壯老顏。

示惟大禪者

禪者善調羹、頗能愜老情、二時無失候、一味卻精盈、日用事如法、心華發至誠、行門開八萬、福足自圓明。

示道榮信士

乾坤幻化夢、業海浪滔滔、六趣輪無息、悲哉奈若何、幸有西方聖、一心念汝曹、長年垂隻手、直接苦婆婆、智者三思本、翻身出愛河、狂愚癡莽鹵、逐浪又隨波、一醉利名酒、酣酣昧自他、一落繁華室、我山萬丈高、福緣逐日減、業累轉增多、縱有拔山力、曷能動一毫、丈夫亟猛省、豈可自蹉跎、本來青白眼、那更混塵勞、須秉金剛劍、剖出蘊中魔、德澤馨格外、眞風扇太和、珍重道榮

子、此行爲甚麼、寵辱三更夢、願期一刹那、虛名漫世界、若個挂烟蘿、返炤娘生面、不孤老雪陀、可吹無孔笛、拍拍應狂歌、眞個能如是、千秋不可磨。

妻木彥右衛門、求薦考朴英居士、妣梅室妙薰孺人

三界一夢宅、業識浪無休、福大昇天府、業多汨下流、杖頭開正眼、直指上遙舟、淳風亘萬古、朴道振千秋、梅室虛生白、靈然壯祖猷。

觀雪

山來眼廓不沾塵、獨占閻浮第一貧、閒臥空亭赤洒洒、黎身不覺萬山銀。

栽梅

老來無事任天眞、一鑁生涯混刹塵、纔種梅花又惹雪、雖然骨瘦也精神。

示林元實信士

搜羅萬卷書容易、打徹源頭放下難、得失窮通皆造化、榮枯夢幻不相干、風波歷盡心平坦、歲月推移性地安、海外靑山山外海、羨君一片鐵心肝。

七旬誕日自適

白雪堆頭兩鬢絲、峰高照日上遲遲、渾天理氣運無息、踏海心眞不可移、鐵幹凌霜堅志節、老松帶甲長威儀、孤光閃爍龍蛇動、葉葉濤呼慶此時。

其二

中華威慶古來稀、蓬島古稀未足奇、百歲無知猶赤子、朝聞夕死勝願期、一心淨潔超塵刹、片

念圓明徹悟迷、不涉春秋幻化夢、撞頭磕額盡龐眉。

其三

未出娘胎全體現、降晨獨露半邊腮、人天見相咸歸敬、龍象知機俱嘆哉、歷盡七旬幻化夢、重增萬福面門開、拈花一會逢斯日、奕葉香飄徧九垓。

其四

天然一會也奇哉、特地全彰格外材、眼爍三千光日月、舌翻一片猛風雷、東西坐斷無同互、今古頓空絕去來、以此視人兼自視、大家共住碧蓮臺。

復獨健徒書

老僧自入太和以來、面門與高峯同其突兀、鼻孔愈更遼天、而人情世務、不待遣而忘矣、忽然開睡峰頂、顒望西方、又不覺倏起唐國故舊之思、令人不忍聞之事、感愧交懷、抑不能已也、嗟嗟生此末運、莫非宿業所成、逆順境緣、消歸自己、則無怨尤之嘆、公等獨居安閒之地、自當努力造證斯道、爲急務、餘者盡是夢幻空花、何須眷戀、切不可錯過時光、埋卻本來面目、是老僧之所望也、果是丈夫漢子、直下便行、孰敢攔當、他日摸著老僧鼻孔、愈見通風、其慶快當何如矣、草草布謝不盡。

復毓楚何信士書

蹈海老漢、人情濃淡、早已付之東流、具眼禪和、窺覷無門、而況塵勞中、業識茫茫、豈能擬議者哉、適者妄動一念、携杖卓立太和高峯之頂、四表具觀、惹得鶴鹿獻瑞、人天仰視、如雲如雨、如

風如雷、如星如月、如稻麻粟葦、轟轟烈烈、震動山川、讀者祝者、笑者吒者、吟者呵者、聲喧九重、正眼看來、逗漏不少、似添面門之醜、遮羞無地矣、正躊躇之間、忽報來翰、讀之、不覺翻轉舊時面目、抑見昔日一會儼然如故、其慶快可思議者哉、耑此布復、

薦長崎聾道婆

崎中聾道婆、千里謁頭陀、淨念無餘欠、誠心不可磨、別來將七白、道況意如何、近聞西歸信、令人動輓歌、靈知超彼岸、決不墮塵勞、我說偈如是、功成一剎那。

馬淵性益求薦母妙仁

人生幻化夢、夢裡轉留連、福大超諸有、業盈墮九淵、昇沈幾萬劫、何時得悄然、孝誠撼大地、念正理無偏、直入太和室、拜求萬福前、乞法薦慈氏、救拔急如絃、孝眞薦必克、定超九品蓮、以此報慈德、即刻契金仙、雖然仁無敵、也須腦後鞭。

示尼性蓮

心淨潔如蓮、性明圓似鏡、不昧本來人、覩體超凡聖、看破死生關、何曾有欠剩、善人解返炤、摧邪而入正、佛祖不汝欺、天人咸歸敬。

復道詮劉信士書

意者、今歲初入太和、事事未備、雖則大誕、不必如何若何、但入境隨俗、安然爲慶、忽聖壽・興福福濟兼信士等、著人殷殷致祝、仍舊突出昔時面門、一任揉抹一上、所謂通身無影象、徧界不曾藏、添花獻彩、無可不可矣、前者蒙舍西國大木、嘆誦未已、今承慶祝之誠、其功德重重、曷可

思議者哉、蓋此時此際、頗有利於物者、可為則為、切不可錯過勝緣、徒稱丈夫之名、吾亦老矣、風燭不定、每思放生為急務、意欲慧命與生命永壽無疆、乃稱本懷、苟能體吾意行吾事、生生不盡、放放無窮、則祝國福民、報恩植福、盡在於斯、布謝不盡、何如何如。

示性堅信士

繁華蓋世總成空、若個丈夫不被蒙、花落花開夢眼裏、香飄香盡幻光中、一絲弗挂離塵網、萬事無干出樊籠、聲色堆頭看得破、是名格外主人翁。

與松平土佐守書

探草為利、非手眼親切不能也、撐持法門、非材用弘大難支矣、是以大人成大器、大機得大用、今見乎此日、則速成之功可期矣、春間意欲蓋茅峯頂、吟風嘯月自娛、以酬輸地之德而已、後蒙諸居士樂助結屋之資、誠不敢虛費、則有建方丈之舉、又慮不能全功、正躊躕間、忽接華翰、有良材美木見惠、竊喜方丈之舉可成、其功德莫大、無相之福不可思議、所謂不謀而自至、不介而自親、合乎天然、豈人情之所能議哉、茲因使回、勒此布謝、不盡依依。

王振鵬所畫五百尊者朝觀音圖序

詳夫梵語阿羅漢、華云殺賊、殺盡無明賊、以證不生不滅之果、遊戲三昧、天上人間、各展神異、誠莫可測、亦代佛揚化之一助也、忽遇振鵬王公、一筆收盡、卷而藏之、縱有無量神通、曷能為哉、信乎振鵬妙用、猶勝五百尊者者多矣、是以仁宗皇帝錫孤雲之號、良有以也、然天子所重、非重孤雲之筆、誠貴尊者之妙道也、至我明太祖一匡天下、膻氣頓除、胡人失守、此卷落于田

舍翁之手、一日持出易糧、杜史張公以斗粟得之、嗟嗟不遇其時、賤固如是、賤時非賤孤雲之筆、誠帶累五百尊者不少矣、後値遊宦點破、張公乃寶之、寶時非寶孤雲之名、誠寶尊者之妙道也、吾觀自開闢以來、佛祖聖賢、天地萬物、榮枯得失、理素如是、豈獨孤雲尊者而已哉、然則奇驥困於鹽車、伯樂一顧、日馳千里、大道屈於勢利、聖王一遇、天子師之、不以爲貴、茲大明失守、胡虜縱横、此卷又落於亂兵之手、其貴賤尊卑、又何如也、迄今三百餘載、東西得失、不知幾幾、所幸者不沒于水火、莫非尊者神通有驗歟、余遊扶桑、不意得之海外、其神遇道合、法屬相關、古今一揆、非偶然也、一展卷神異萬狀、難以名言、始知孤雲之名不虛、而尊者之道叵測、非尊者莫顯孤雲之大名、非孤雲孰知尊者之妙道、尊者孤雲、名實並稱、其貴賤尊卑、豈能擬議哉、眞格外美器、法門大寶、可入觀音大士圓通之境、與夫大光明藏、并傳永永、而無窮者宜矣。

病中頌即心即佛因縁

即心即佛死太急、非心非佛下藥遲、大梅中毒卅餘載、病入膏肓不可醫、堪嘆昔日迷路者、又來個裡弄唇皮、浪談藥病人無數、累殺江西馬簸箕。

又占二偈

偶中病魔滅素神、面門不覺又沾塵、誠如破漏郎當屋、爭得風光舊日新。

又

得病始知幻化身、豁然覷破本元辰、瞿曇曾說病爲藥、今日翻來調更新。

辛丑十一月二十日、 本師福嚴老和尚訃音至、挂眞云、此便是支那國杭州府崇德縣福嚴

堂上、傳曹溪正脈三十五世、費和尚全眞、卷起也纖塵不立、展開也大地全彰、曾坐十大寶刹、說法三十餘年、爲人一片、直心直行、挽回紆曲良多、一條惡辣鉗鎚、收拾鱗龍不少、道滿四海、如龍若虎、大似江西馬老師、踏殺天下人無數、餘風直到海門東、驚得泥牛、俱起舞蹈出、金烏出海門、光前耀後超今古、以茲用報我師恩、究竟未答一棒痕、虛空忽聽淚如雨、白浪滔天自吐吞、打濕娘生眞面目、眞誠徹骨逆兒孫、諸人還見麽、山僧如是舉揚、還當得酬恩一句麽、復云、大道存兮師益尊、法輪常轉一乾坤、正脈長流四大海、光明亘赫見師恩、便舉哀。

首七祭文

維寛文元年歲旅辛丑十一月庚子二十日、不肖徒某、寓日本國山城州黃檗山萬福禪寺、爲前一日申刻、郵到支那國杭州府崇德縣福嚴堂上、本師費老和尚遺囑、幷末後事宜一封、焚香跪讀、乃知本師以是年三月念九日未時示寂、越七日念有五日、謹以瓣香盃茗、致奠于丈室、昭告以文、曰、於戲我老和尚、生於大明神宗正盛之世、係玉融何氏巨族、早歲脫白本邑鎭東三寶巖、年十九便知有宗門中事、遍參知識二十餘秋、宗教二說、莫不該通、末後謁密師翁、受惡辣鉗鎚、乃得了手、大事已畢、慶快生平、其受用安樂、無餘蘊矣、後師翁應金粟、再上省覲、乃就西堂之職、逮翁應黃檗、亦從服勤、一日當堂、付囑正法眼藏、嗣後隱于浦城馬峯院、乙酉冬應黃檗、首開爐韛、鉗鎚惡辣、鎔凡煅聖、一鎚之下、良有本也、某也不肖、首中其毒、迄今三十餘載、幾處申雪、難釋其懷、然則中毒之深、而解之不易也、昨聞訃至、且喜天下太平、昔日之寃、不待雪而自解矣、更所歉者、承召回二書、敎誡諄諄、最親最切、徹見婆心畢露、未得覿面以快

師資之命、罪莫大焉、今也已證眞常之果、無聲無臭、雖聖賢佛祖、有所不知、況區區某小子乎、玆値首七之期、敬設純陀之供、奉獻靈前、少酬萬德、伏惟老和尙、大寂光中、鑑某微忱、尙其饗之。

聞福唐黃檗因事有感、寄外護居士、幷警本山僧衆

檗山千古、法幢聲實、徧覆諸方、正幹開闢、始祖鴻休、罵賊名揚、斷際道滿、天下軒知、源遠流長、邇來天童、重振濟道、豁然有光、吾師繼席、三載非井、有條有章、愧余莽鹵、相續門頭、戶底開張、力撑十七春秋、惹得兩鬓如霜、一旦因緣別離、杯渡直至扶桑、大擔慧公鼎首、慈悲一片、柔腸頑甚、無知無賴、成群成黨、爲殃、不尊道義、法化利圖、業識茫茫、愚者由來、自用焉知、審勢行藏、浪費斷無、結局禍來莫怨蒼蒼、江淺魚蝦可掬、林深虎豹難當、我聞如是不軌、五內如焚如傷、水遠不濟炎火、天遙豈拒狐狼、全借始終法護、圓明正眼、金湯極力、掃除妖氛、大道萬古全彰、

哭本師福嚴費老和尙

獅絃絕響在中華、撈得餘音到海涯、老大願王超法界、廣長舌相卷恒沙、雲收碧漢空生覺、葉落寒林玉吐花、愁殺杖藜無倚靠、一雙白眼對西霞。

又

吾師傑出最英華、奕葉芬芳徧海涯、撒手歸源成道果、吉祥而逝體金沙、粲然舍利僧中寶、亘赫名言錦上花、一片婆心澄碧漢、千秋道義挂煙霞。

如何是佛、突出渾身骨、一飽乳香塵、圓明相滿月。

如何是法、動着活潑潑、拈來無多子、一生用不乏。

如何是僧、白雪兩眉橫、老來無思算、日午喚三更。

如何是道、日常光浩浩、十字任縱橫、足下缺甚麼。

如何是禪、開口落牢邊、一念未生時、全彰徧大千。

次董太宰軸韻

錫寄高峯日上遲、臥雲深處夢敲詩、牧童歌舞驚啼鳥、豁醒南窻梅一枝。

壽參議乾菴陳檀越七十初度

天賦玉融叟、文章起世家、一朝宦夢破、歸隱舊桑麻、五桂常薰膝、齊眉槩王花、人天咸仰祝、道義嘆唯嘉、大哉乾德備、妙用廣無涯、一軸壽蓬島、三山映彩霞、理明昭日月、筆老化龍蛇、海屋添籌日、瑤光篆寶華、從心兩五炤、稀有淨無瑕、聊捧東溟水、爛烹趙老茶、開懷三五盞、福履滿恒沙、載上庭花甲、江干待返查、來時全歲月、歸也定無差。

文殊讃

雲中現身、妙德如神、文不加點、分外天眞、一卷心經常不離、未知等待付何人。

終七再祭

維寬文元年歲次辛丑臘月晦日、不肖徒某、謹以純陀之供、再奠于本師費老和尚覺靈之前、而告曰、嗚乎我老和尚、首開黃檗爐鞴、中興濟北之道、耀後光前、何其偉歟、末後撒手福嚴、坐斷千差、寂然解脫、有自來矣、世壽六十有九、法臘五十餘春、開法三十年、恢擴十大刹、師法森

嚴、接人不倦、繼往開來、功勳固無極矣、其正眼圓明、青天白日、胸開四達、了無城府、號令人天、著著可法、棒頭得旨者、轟轟烈烈、句下脫落者、迴迴巍巍、乃至名公鉅卿、兒童灶婦、靡不服膺染指、宗門鼎盛、師道炳如、嚴竅宗統、千古龜鑑、禪林禮樂、全備於斯矣、蓋禮貴中節、行之有方、情切正眞、感通幽顯、以正眞之情、剖露師靈之前、必也俯鑒、以中節之禮、行於常寂之堂、斷無不格、中誠君子之所貴、常寂衲僧之所歸、得其源則無孟浪之弊、貴獲其本誠、有超俗之方、吾師兼而有之、行可以濟天下、言可以垂萬世、自我明以來、名寔中正、獨脫無二者、非吾師而誰歟、末後吉祥而逝、體雙林之遺旨、荼毘之後、舍利燦然、二百餘顆、緇素區分供養、則當年之流布天上人間者、似不異於今日也、不肖某、應緣海外、已經八載、莫覩最後音容、不聞涅槃遺訓、抱恨終身、含羞無地、茲當終七之期、敬陳伊蒲之供、聊表寸忱、伏惟尙饗。

臘月念九日、本師和尙圓七、卽日安座云、濟道中興興未闌、如何撒手也無端、打翻花甲春三月、嚼碎紅爐鐵一團、位設草堂田地穩、名垂海國杖頭寬、圓通應感天眞佛、不用安神神自安、神既安也、且道、卽今在甚麼處、擧拂云、還見麼、常光瑞現靈機發、一會拈花又破顏、還有當機者麼、老倒憐兒不覺醜、和盤托出大家看、成群剔踏春光裡、若個當機不自瞞、遂披吉服、禮拜歸方丈。

本師過七誦金剛經

電光泡影夢無端、聞報師恩再展看、怪道口門無個齒、金剛嚼碎又團圞。

又誦法華經

七軸蓮經一法華、剖開心印淨無瑕、和盤托出酬師德、狼藉香風遍海涯。

辛丑辭年

乾坤負我古猶今、我負乾坤空自吟、七十如忽渾歲月、多生習氣轉浮沈、者回坐斷孤峯頂、那更無端向外尋、最喜松濤鏗晚節、共彈一曲歲寒心。

壬寅元旦

洪鈞運轉歲華新、惟爇心香祝至仁、丈室乍開萬福泰、衡門不減四時春、喜無車馬喧靈谷、却有江山繞法身、年去年來幻化裡、日常終不昧天眞。

又

無愧蒼蒼是我家、乾坤運泰慶年華、脚跟淨潔聊爲主、眼目圓明豈逐邪、梅發南枝含正氣、日昇東海擁朝霞、微風吹醒堂前柳、待得鶯啼滿院花。

春日寄懷

一氣和風開笑臉、翻身鼻孔愈遼天、江山懸隔徒懷夢、唯對梅花共悄然。

又

列祖功勲寄向誰、海天空廓欲奚爲、神頭鬼臉消磨盡、十二峯巒又展眉。

又

世界未寧家國慮、禪心不一法門憂、事難方見金湯力、拽險扶危不計秋。

又

新開黃檗今猶古、舊種青松古到今、兩點無私閒日月、照臨千載歲寒心。

自敍

少時不學無術、一味杜田到老、幸得內無雜毒、身心空淨如掃、等閑抖擻皮囊、狼藉衣中至寶、信手拈來示人、聲光落落蓬島、寒山拍手呵呵、拾得幾乎絕倒、苟能直下承當、便是風顛種草、否則錯過此生、驢年夢見斯道。

觀音讚

獨坐磐石、慈念永眞、一甌甘露、遍洒刹塵、楊柳枝頭悲願切、却敎大地盡回春。

彌勒負小兒過水圖

新春舉筆、事事堪充、偶逢布袋上人、必竟有何所得、背負少小孩兒、不覺脚跟打濕、勿忘兜率路頭、便是眞正彌勒。

列祖圖序

西乾四七、眼横鼻直、中華二三、寐語喃喃、惑亂天下、無有了期、正眼看來、電影空花、奚足爲珍、詰其本源、蓋因靈山老子、關頭不密、聊露枝花、以致頭陀哄破、無端承虛接响、以訛傳訛、相襲成風、直至如今、無人截斷、深可慨也、那更依樣畫猫兒、持來示余、致令忤心惡發、未免呵叱糊塗一上、累及東土西方諸老面門、愈增醜態、罪我奚辭、雖然如是、返憶雲門老漢、一棒打殺、餧狗子吃、貴圖天下太平、掃潔源頭、知恩有地、余之逗漏、奚足云爲、但願智者達觀斯圖、頓悟其本、則圓明亘赫、淨潔無餘、樂莫大焉、以遂丈夫之志、終不隨波逐浪、他日拈條白棒、打殺雲門、

爲釋迦老子雪屈一番、敢保佛日重光、道風益熾、列祖常寂光中、拍掌呵呵、則不孤按圖得馬之功也

一山寧禪師賛　相國寺愚溪禪人請

祖承頑極、愈添倔僵、無法爲人、觸著便棒、有放有收、無偏無黨、宗開祖印、白華遍來、隨波逐浪、褒貶黜陟、原非兩樣、末後無端動聖顏、可爲古今之標榜。

示固心信士

仁智樂山水、祖師契未萠、頓空諸色相、心月自圓明、遇物則靈鑑、隨縁利有情、凡夫能返本、天下不汝輕、本來無二致、何壞復何成、視之不可見、名之豈能名、唯餘深造者、步步證無生、珍重固心子、日常須力行、勿忘本有路、沙界任縱横。

示啓文林居士

奉道不知道、不知奉甚麼、參禪不會禪、莽鹵更堪憐、學儒不識儒、鄉愿賊何如、三教既漏逗、令人長嘆吁、九流去不返、何日得逢渠、半瓢測東海、一棒逐虛空、截斷千差路、圓明徹夜珠、天開太和臉、法界一吾廬、坐臥乘風雅、行藏無欠餘、東西皆夢幻、夢破樂無虞、一段還鄉曲、吹來慰道軀、蒼蒼如有眼、終不負區區。

示日昌劉信士

本來無一字、筆舌閑虛空、對機無縫罅、何處可通風、有語非干涉、無言大夢中、有無俱坐斷、八面盡玲瓏、塵說熾然說、心通道亦通、揚眉超語默、直指醒迷蒙、覷破言前路、譯傳始見功、掀翻

格外句不負本來翁。

　青木民部求薦罷山成休信士

心心無二念、念念無二心、心念渾一致、圓明古到今、正因該正果、終不向外尋、花發蓮池會、香飄碧玉林、以茲薦靈德、剖出罷山金、聊述偈爲證、名標上品蔵。

　薦靈雲院信女

本寂超三際、返觀無自他、蓮開方寸裡、香熟偏娑婆、助道頻伽鳥、安心極樂窩、一彈無生曲、慶快意如何。

　辛丑仲冬、檗山慧首座專使慶誕、兼請駕歸山、不果作偈慰之

洪荒萬里一乾坤、獨羨薰風撼海門、奕葉芬芳擁法座、氤氳瑞氣壯祇園、無私撥轉天鈞令、有力難消鐵棒痕、不昧九潭雲孕種、掀翻海嶽始知恩。

　自敍

老倒杖藜跨海東、不忘名質舊家風、尋常運用事無別、坐臥圓明方寸中、圍遶人天增萬福、大開手眼廓虛空、逍遙蓬島奚拘碍、徹見西來弗宰功。

　深尾庄兵衛求薦考了喜信士

生死由來幻、昇沈曉復昏、善哉能了業、葉落自歸根、八十六春夢、空無一法存、唯心常不昧、炤徹本來源、以此薦靈福、頓超詎可論、心花開馥郁、果證是知恩。

　性公尼求薦嚴石見太守清閒居士

佛日流輝四海濱、杖頭指處絕纖塵、死生爍破烏何有、來去分明別假眞、三十三春孝行滿、這囘提起愈尖新、蓮花會上風光美、盡是淸閑無事人。

薦御史津田平左衛門　孝子平六求

正氣奉天命、代巡壯帝畿、生民俱偃草、德化迅風馳、啓手無留戀、歸途春正肥、恰逢屆彼岸、徹證夫何疑、說偈通靈性、頓超淨者機、圓明亘萬古、一會碧蓮池。

仲春念五日方丈上梁

拈來莖草卻鋒芒、到處爲標水月場、徹底大機堪大用、果然成棟又成梁、門開不二千差攝、法演無多莫可量、此日太和風雅振、檗山正脈永流長。

方丈上梁、且時陰翳、侍僧恐雨及時不便、亟催拜梁、老僧謂、時至自然光輝、稍停、果驗、遂說偈識之。

新開丈室迅鋒芒、御苑翻成選佛場、莫道太和無手眼、遼天一拶愈風光。

示小川又左衛門

正信三思本、平心一自佗、檀門開六度、慈海不揚波、浩氣衛眞主、脩身驅蘊魔、百年幻化夢、豈可自蹉跎、曾謁西來叟、胸開滿太和、檗山添翠茂、福德轉增高、四海誦玄化、功歸一刹那、日常能如是、不必問如何。

三月三日誦華嚴經畢

讀罷華嚴春未闌、白毫光耀兩眉間、悲心片片承知識、願海重重壯老顏、歷盡百城幻化境、頓

忘三昧徹空還門開樓閣風光甚、勝似忙忙走萬山。

示水野源太夫

仁者與善事、恐人行惡道、惡極自滅身、幾人能到老、至善優天下、古今皆曰可、黑白兩分明、善擇是所寶、得之用弗窮、藏諸分外好、福德日彌新、慧光圓杲杲、決定信無疑、超群之種草。

虛欞禪德過訪

老衲心開解脫花、時時增長福無涯、薰風五度臨玄策、和氣三春間紫霞、潦倒不迷正法眼、英賢豈可混塵沙、香飄果熟人天慶、便是靈山一會家。

復示卓石信士

人生豪富之室、多被五欲之所籠罩、活埋丈夫之志、無一出離、眞可慨也、如信士茂年便覺無常迅速、正信此道、孜孜不退、唯願依此精進力、頻開佛知見、爲急務、不被塵勞所汩、萬中唯一二而已、甚美甚美、但信得及、晝參夜究、無間間忙、忽然囫地一聲、佛知見現前、不從外得、了了自知、生死去來、千魔百恠、不能搖動、始知自證之驗、與夫龐老子、把手並行、便信日用事無別、則不虛度此生、否則盡是流俗隊中算將去、與佛知見奚啻懸隔霄壤矣、何如。

語石禪人、求薦故考宗順信士

有子力參禪、薦超而必克、何須乞余言、而後成明德、覷破本來心、了然空卽色、死生夢幻中、夢破便超格、一拶鼻遼天、圓明無礙塞、觸處是菩提、靈然無不得。

季春望日、關梅巖居士過謁

梅巖誠信士、來謁太和翁、花柳春將暮、江山日正紅、善遊俱適趣、到處盡同風、會得個中旨、歸家路路通。

新山仁左衞門、求薦故考昭心性月信士

世途見別各崢嶸、直指西來路坦平、托出昭心常不昧、推開性月獨圓明、三千塵夢卽時澌、六五春秋撒手行、此日更求末後句、靈然一撥證無生。

老子讃　高力左近大夫求

大隱無知混闇間、如何騎犢過函關、誰人一撥五千語、玷汚面門只自譏。

示松前志摩守

正氣鎭邊疆、洪波海不揚、功成而不宰、德業始全彰、返照本來物、頓空莫可量、死生事無惑、萬慮盡消忘、突出天中月、炤人肝胆涼、仁風偃四野、草木俱生香、格外求玄旨、玉毫聊放光、淨臨東海畔、地久與天長。

示老唐張振甫

踏斷孤岩頂上峯、看來無異亦無同、眼開不著繁花夢、撼醒當人一瞬中。

僧呈一紙、師目訖云、未透祖師關、謾行險崖路、僧云、某甲喫三十棒有分、師云、有棒不打、這無血氣死漢、僧云、和尙莫向掌中弄死蛇好、師大棒打出云、且道、是死是活。

福嚴先大和尙小祥忌拈香云、吾師德量廓虛空、包裹乾坤不宰功、直截爲人三痛棒、無私照物一輪紅、滔滔法海洪流柱、兀兀宗門大雅風、此日涅槃初忌諱、又添滴淚檗山中、諸人還會

麼、福嚴堂上春光盡、太嶽峯前正脈通、忤逆橫擔鐵榔栗、觸翻鼻孔盡相同、以此酬恩猶未足、
分身刹刹答無窮、便燒香禮拜。

示一峯居士

統攝乾坤力、大開孔德容、衞生如一子、護國若雲從、捧出中天日、祿增億萬鍾、英風彌八表、一
劒定先鋒、生死無回互、獨超蓋代功、果能如是信、直截勝猶龍。

示津田道茂信士

前云、一念一行、無不成就、所謂置之一處、無事不辨、今人作工夫、心境雜亂、不能歸一、生死岸
頭、摠用不著、正謂、路多踏草不死、豈能徹見本來面目耶、又問、自今何得行去、老僧云、一念圓
明亘萬古、涅槃生死等空花、苟能徹證圓明本體、於中覓涅槃生死之相、了不可得、豈有歡喜
憂慽之事乎、故古云、隨流認得性、無喜亦無憂、之本體豈他人之可擬議者哉、是以末又答云、
一念萬年終不改、任他滄海變桑田、始終一貫、無二無別、詎生死去來之可遷變、可謂活潑自
由、無罣無礙、便是月明簾外轉身時、荊棘林中下脚處、否則無非流俗漢子算將去、與一念圓
明奚啻霄壤矣、道茂善人、勉諸勉諸。

示性海夫人、寫法華經

圓明眞性海、心發妙蓮華、手眼淨如鏡、揮毫映彩霞、三乘默稽首、諸子共牛車、七軸昭心膽、萬
言露爪牙、靈山會上客、倶證法王家。

示張敬泉信士

生平造就只如是、百歲風光一瞬過、未得源頭活潑潑、那堪忙裡哭呵呵、眼開濃淡三更夢、心着榮膺五蘊魔、珍重老人亟猛省、聖賢舊路莫蹉跎。

圓硯銘

覆蓋渾淪、涵容至德、一氣元眞、靈然叵測、盤古無端、平分黑白、天池浪濺、乾坤有色、際會風雲、文章乃克、應用三才、萬古規則。

示潁川藤左衛門

人生幻夢自浮沈、若個幻中惜寸陰、爍破塵勞淨圓鏡、打翻漆桶吼雷音、不虛出世丈夫志、豈昧靈山大士心、一味涼人無間斷、好彈格外沒絃琴。

佛誕日

囫地一聲全體現、周回指顧更吒吵、人天龍象嘆希有、草木林巒獻瑞嘉、煦日忽臨師子窟、薰風乍長法王家、團圞撈入娘生會、特地心開優鉢花。

偶成　三首

把茅蓋頂便心休、那更無端强出頭、事別千差都坐斷、理明一決獨全周、機生暗室風翻席、寂照澄潭月放勾、自得安閒消舊習、空花濃淡復何求。

也曾特地嘆奇哉、直至于今絕點埃、紅日自昇還自落、白雲飛去又飛來、無明草長菩提路、荊棘花敷般若臺、覷破死生幻化夢、千門萬戶一齊開。

牛頭沒也佛頭彰、聖字凡名莫可量、草木無心薰格外、乾坤何意映山堂、自憐一味靜方好、堪

嘆兩丸太殺忙、但得松梅同素志、渾身霜雪也風光。

示某禪德

豁開正法眼、徹見太和人、出入無回互、去來始切親、當仁能不讓、正氣自高昇、末後須深造、臨機貴轉身、善藏無縫罅、妙用自然神、萬法收歸本、風光徧刹塵、果然如是證、當體是能仁。

聞松平伊豆守謝世有感

九年壁觀絶追尋、孤負勞生直至今、不意洪鈞轉線脈、豁然大地作檀林、三思德澤垂千古、一顧太和重萬金、如是助揚正法眼、靈明獨脫始知音。

參禪偈　十首

參禪人發眞心、心眞念念絶纖塵、觸著一毫光燦爛、驢頭馬臉也天眞。
參禪人貴直截、一念圓明常亘赫、爍破死生夢幻花、拈來信手何奇特。
參禪人自酌斟、空花濃淡勿追尋、返觀本有無多子、徹骨風騷忍不禁。
參禪人亟返覺、返覺現成無彫琢、自家應用自收藏、何必蓮臺千葉托。
參禪人勿辭難、黃金鑄就一心肝、紅爐百煉無更色、徹見丈夫不自謾。
參禪人休草草、閒忙動靜亟鞭考、假如言行不相應、一失人身何處討。
參禪人休貢高、貢高念積便成魔、恐致摻入修羅窟、百劫千生奈若何。
參禪人綿密密、十聖三賢見不及、撞倒須彌開兩眼、死生大事始端的。
參禪人休執著、執著眞空成一句、小見誠如井底蛙、驢年夢見金剛腳。

參禪人自決疑、一念未萠正好追、追到無生無住處、豁然𡆇地不吾欺。

示淺野玄蕃

自得天然無事福、猶憐莽鹵覔漚花、漚花濃淡三春夢、無事天然片月査、水漲船高分上派、雲開江靜徹無涯、苟能眼底空如洗、不二門中共一家。

雨窓懷舊

劫燒江山盡帶愁、愧無妙法解心憂、空餘幾點寒巖淚、幷作雲濤洗舊羞。

賦感三瑞相

奇哉三瑞應林間、果感希常詎等閑、華土風光俱掃地、扶桑彩氣正斕斑、群英濟濟衞眞主、正信依依壯素顏、但願東西盡極樂、鼕鼕社舞滿塵寰。

寄示黄檗自如監寺

法門重千古、德業植無涯、海外聞風語、吹來長善芽、直心衞祖道、正氣伏群邪、返炤中天日、胸開絕點瑕、始終能若一、道果不須嗟。

示大村因幡守

人我相空、寃親一致、入解脫門、成般若智、植福放生、存亡兩利、正信歸依、超歡喜地、世諦空花不可爭、心開便是安身處。

毓楚何信士、自長崎至覲、占此示之

倏別崎江八載餘、今朝重晤意何如、徹開眼孔洞三際、聊展襟懷卷太虛、道義頻增黄檗室、塵

勞迥脫白牛車、去來不着人天福、一塵清風壯晧巓、

示善遇禪人

霜顱一老叟、海外挈風顛、擡入太和境、高峯頂上眠、頓忘舊時路、塞殺不言天、一息夢雲裡、滄桑幾變遷、子來探法窟、兼以祝華筵、孝義摵蓬島、文名契昔賢、知儒堪入佛、善遇體金仙、不虛出格志、可觀法王前、日用能如是、同登一大年。

示宇津木治部右衛門

大心淨信士、善積峻如山、不著有爲福、人天孰與班、能開清淨眼、徹見本來顏、一念圓明無向背、始知生死不相關。

示髻輝典座演瑜伽

智藏一片白芙蕖、聊吐毫端淨太虛、不獨幽冥沾法喜、人天樂樂意何如。

達磨讚

東土西天空眼底、三千法界一蒲團、鉢盂口闊黃粱夢、兀坐古今孰與班、不是神光納敗闕、更於何處付心安。

題揭鉢圖

一萬鬼子、神通有盡、沒量眞人、道力無窮、劍戟雷轟電掣、臨機若斬虛空、逞盡百千伎倆、欲勝轉更迷蒙、瞿曇驀面點化、鬼母醒悟前功、卒急三歸淨戒、豁然親見兒童、始信四生皆一子、舌根吐出妙蓮紅、愛情盡處道情現、子母相將出樊籠。

季夏偶占

火雲影裡逼枯腸、何處飄來滿院香、莫是蓮池初破綻、解人煩惱作清涼。

又

不惹人間半點塵、小亭聊憩也天眞、愧無一物壯山色、剩得滿頭白髮新。

又

心無城府行無蹤、塵內幾能識此儂、何處敲雲醒午夢、一雙白眼對青松。

江州木俣守安信士、送十六應眞圖、爲鎭黃檗、遂占偈識之

新開檗岫廓初禪、掃盡閒雲映碧天、十六應眞探勝侶、千秋道誼蔭高賢、太和風雅東方瑞、萬福門庭特地妍、微笑法幢從此振、拈花一會永綿綿。

復魏爾潛居士書

何居士至接來翰、種種過褒、當之殊愧也、聞足下在崎、養德以遂身心、是最清福、然此時唐土正君子、道消之際、賢達豪邁之士、盡付溝壑、惟吾輩乘桴海外、得全殘喘、是爲至幸、惟冀足下、正信三寶爲根本、根本既固、生生枝葉必茂矣、原夫世間之事、水月空花、寓目便休、不可久戀、於中恐埋丈夫之志、誰之過歟、更冀時時返炤自己身心、必竟這一點靈光、何處棲泊、不可錯過此生、到頭一著、誰人替代、縱有金玉如山、子女滿堂、總用不著、可不愼歟、囑囑。

觀音讃

大哉觀自在、悲願永無休、物我原同體、隨流又入流、一枝甘露洒、法界已全周、業識茫茫者、盡

敎自點頭。

示松平隼人正令女

菩提心發玉蓮開、返炤原無半點埃、徹見娘生眞面目、不孤本有個如來。

示士土呂木勘兵衞

死生若夢幻、何處可追尋、一念返觀炤、圓明古至今、人情輕片葉、道義重千金、大地如蔴葦、幾能徹此心、善來求法旨、直示定南針。

示大野主稅助

丈夫出世間、日用自閒閒、正氣彌千古、眞心炤八還、死生能看破、逆順豈相關、一念明如日、風光壯老顏。

示惟明禪人

目汝所問、無端又生一種疑心、却成兩物、雜亂其中、不能歸一、雖終日持般若、不能轉般若、却被般若迷、則不無起滅之惑、愈持愈不相應、轉念轉不親切、正在隱隱浮沈之中、不能一刀兩斷、更來請示者宜乎、然老僧終不頭上安頭、節外生節、令人顚倒無休矣、但願汝一信永信、一持永持、一決永決、一斷永斷、無第二念、無第二人、萬年一念、一念萬年、那怕甕裡走鼈、龐公所謂日用事無別、唯吾自偶諧、傳大士云、夜夜抱佛眠、朝朝還共起、汝能信得及、悟得徹、提得起、放得下、要且綿綿密密、斧劈不開、刀斫不入、安有日用不相應者哉。

觀音圓光鏡銘

慈悲行願輪、刹刹常清淨、照徹衆生心、本來明若鏡、眼空絕點埃、觀體見眞性、十界一圓通、遂觀說法竟。

黄檗耆舊默公像贊

相彼耆宿、居諸黄檗、出入頭地、唯唯一默、轉請四代知識、惹得風清月白、兒孫烈烈轟轟、托出蓬萊片舌、海屋滔滔贊不窮、看來也是白拈賊。

張振哲等、求薦母周榮妙心信女

重恩惟鞠育、報德禮空王、半偈薦靈福、紅爐點雪光、愛根消淨盡、般若獨全彰、三十六春夢、回看一唉場、孝誠投念切、衆德復宣揚、業海重重竭、妙心片片香、以資解脫路、直下便超方。

示高泉孫

濁劫希龍象、縱橫多跛驢、遠聞惟蹙額、覿面意何居、知子超群萃、能扶天馬駒、擴充正法眼、終不昧區區、一片澄潭月、圓明徹夜珠、任從滄海變、萬古自如如、檗岫添靈彩、蓬萊眉轉舒、不孤微笑旨、祖席永無虞。

中元嘆

搖落空林歸本根、忽聞特地懷深恩、江山有限情無限、草木雖存誼亦存、莫報劬勞空自嘆、號天罔極向誰言、聊宣半偈含悲愴、字字淋漓帶血痕。

輓空印老居士

百歲如朝暮、浮雲一瞬目、人生古來稀、而況又加六、蘭桂滿庭中、福壽兩俱足、歸道一坦平、行

藏無拘束、生爲國所珍、去爲幽冥福、法護盡厥心、慈炤唯吾獨、欲期再晤言、云歸胡太速、世事夢中花、道情傳空谷、何處搖落聲、悲凄動林麓、聊以說伽陀、唯君是所祝、蓮開千百葉、葉葉如車輻、上品任化生、俯仰眞金屋、師友滿閻浮、於君唯可卜、撒手歸去來、誰不嘆於穆。

又爲拈香偈

印破虛空無背面、翻身鼻孔愈遼天、眞香一瓣資君福、特地心開九品蓮。

示自證禪人

歸家驀直路、擬議隔三千、一氣無回互、行藏自悄然、丈夫志決烈、豈不更加鞭、生死輪回事、夢開亦可憐、中途如錯脚、求出待驢年。

大坂喜齋、求薦大塚卜齋信士

伽陀無義味、飮水自知源、草木逢春發、禽魚得氣原、孝誠回業累、道重震乾坤、撒手十年外、今開解脫門、有靈能覺悟、徹證始知恩。

贈別松平隼人正回江戶

蓬然肅氣動林丘、杯茗殷勤解別愁、御世全憑三尺法、安禪打徹一毫頭、知君有意邀明月、愧我無能赴碧流、聞道德風皆偃草、歸來聲價滿瀛洲。

贈別

勿昧舊時路、歸家獨悄然、愁聞歌別曲、懶作賦歸篇、意氣冲霄外、行藏帝象先、一聲幻夢破、足下徧三千。

示酒井內記

惟秉金剛劍、幻花夢自消、眼空無一物、何處不逍遙。

示酒井主膳

放下塵勞夢、大千一坦平、擧頭天外看、日午正三更。

示松平民部少輔

開士醒塵世、眞人破有空、聊舒三寸舌、挽轉太和風、志負靑霄外、心開未發中、丈夫須返炤、莫使碧雲籠。

薦柏庭道茂信士

歸依淨信士、退隱已多年、爍破三途業、便登九品蓮、死生皆夢幻、出沒任天然、不昧伽陀旨、風光徧大千。

賞桂遇雨

轟轟雷雨破秋光、桂子紛紛半落香、悔莫閒行花下路、一身淨潔也淸涼。

偶成

自愧無能老倒翁、飄飄一葦任西東、杖頭撥出秋波眼、不覺毫端耀祖風。

又

一杖橫挑兩檗山、東西之遶等閒閒、軒知百歲幻花夢、對鏡寧無羞赧顏。

又

圓顱方服講眞經、說到三途鬼亦驚、酒色分明兩個字、活埋多少好英靈。

又

自從嚼碎金剛後、一字烏容掛齒牙、八面鑽錐無縫罅、臨機撒出滿恒沙。

桂月漫興

海外閒瀟散、何期到此鄉、忽聞天際响、陡落一枝香、玉露懸秋鏡、熠人肝膽涼、小時多孟浪、老大愈清狂、髮白脩途邇、眼青看世忙、等慈解脫路、般若是歸航、擧念超三際、開眉洞十方、隨緣任放曠、何處不吾藏。

讀列子天瑞篇

無形大盜盜天眞、向氏郁能識此情、竊得太和些子氣、頂天立地自成仁。

示某善人

正信歸依絕點塵、時時返炤本來身、鐘鳴殿角山中主、月吐峰頭格外賓、百歲光陰能有幾、一生幻夢摠非眞、這回了徹無他事、不負拈花會上人。

華鯨

君家住海中、性命鍾水府、以木肖其形、高懸奚太楚、衆僧要喫齋、先來敲君肚、君肚等虛空、誰人憐君苦、苦中响如雷、知音惟佛祖、佛祖聖賢心、受命同今古、相資未發前、大哉非小補、試問把柄人、聲消歸何所、歸處不可知、聞時孰爲伍、根塵無所依、突出雲門普、聲聲般若聲、色色蓮華土、是名眞佛陀、不墮於諸數。

布袋和尚

獨坐布袋、一杖撐天、眼空四海、身心悄然、堪咲忙忙幻化裡、幾人豁醒未生前。

負山跨海羅漢圖

負山踏海、當行買賣、踏徧天涯、自由自在、三千刹境現毫端、一點靈光周法界。

達磨面梁王圖

迢迢萬里而來、對面如何不識、貪着人天功德、頓忘不識之質、果能離相離名、不妨端端的的。

示大眉徒結茅

江山踏遍自閒忙、偶結瓢居古樹傍、莫訝峰高日出晚、炤人頂上愈風光。

又

日用靜操那畔邊、平懷風雅一愚賢、鳥啼花咲機鋒俊、贏得閒居孰共傳。

仲秋念八晡間、步明堂外、忽天際流輝、燦爛有紫繩二十四道、貫於北極、竊為吉氣應兆、莫非聖主賢臣臨民以德、所感之徵、遂述偈識之。

卓朔杖藜閒晚眺、普天靈彩映禎祥、雲收碧漢千邦靜、桂落寒巖萬壑香、念四紫繩貫北極、一林瑞氣煥文章、聖人御世旌民德、廣被蒼生莫可量。

二十九日空印居士終七之期、衆禪誦經修懺、以資冥福、仍述偈以薦

娘未生時一片地、來來去去百千番、今朝直指無生路、徹見端倪心自安、珍重讃岐空印叟、行藏勿昧沒絃彈、知音萬里空遺恨、月上高峯玉一團、爍破大千幻化夢、吾人莫作等閒看、自慚

德薄龍鍾甚、聊述伽陀照膽肝。

贈玉峰居士

春容落落又秋霜、何物推遷底事忙、開士不忘弘願力、丈夫豈昧自行藏、脚跟有據融三際、眼底無塵炤十方、莫謂侯門深似海、旁通消息愈風光。

半井瑞雪、求薦遠祖和氣清麻呂眞人

大功不宰久彌新、錯節盤根妙入神、德被乾坤千古重、心懸日月一天眞、頓超靈鷲無生果、徹證蓬萊不老春、七百年來法眼裡、聊吟半偈表眞人。

自讚　越州信童求

少小頻參黃檗、善財獨禮觀音、不昧多生意氣、圓明一片眞心、朝昏瞻禮無他事、魔障頓消徹古今。

九日同諸禪登高峯絕頂

烟收嶽面獨晴明、磊落相將頂上行、環遶千山朝拱翠、高居一座坦然平、杖挑杲日昭膽、塵發秋風洗謂情、未敢浪彈險崖句、恐教天外得人驚。

又

喜有風光映碧天、輕扶老倒上峰巔、胸開徧界淨如洗、剩得黃花供眼前。

重陽後二日、遊清水寺禮大士

大士現清水、湛然妙入神、等慈濟苦海、弘願渡迷津、念物原同體、視生無兩人、挽回舊面目、徹

見本來身、共證圓通境、淨無半點塵、密窺大慈德、洪恩莫可陳、我來探勝槩、瑞氣映天眞、道契山中主、雲從格外賓、中虛含萬象、雅誼日彌新、正值清秋景、懷開意倍親、法門互表帥、不負老能仁。

贈成就院主

歷徧扶桑境、何期逢此翁、行藏皆樂地、顯密盡圓通、淨似清秋月、渾成太古風、未常吐片語、三昧在其中、天運今猶古、曦車西復東、人情付流水、道義廓虛空、特造太和室、般般意倍隆、推雲迎老叟、下榻淨梵宮、竭盡山餚供、開懷潔己躬、百年幻化夢、唯此卜全功。

又別句

羨君好手驀拋勾、搭着無依鐵鼻牛、清水池邊聊飲啜、白雲嶺上恣優游、滿林秀氣千年瑞、大地霜花一色秋、掣斷芒繩歸去也、了無踪跡落峰頭。

示德風禪者回里

德風皆偃草、草偃風光好、幷作太和春、世間何處討、歸去任騰騰、再來須急早、九上與三登、大事乃可保。

示松平對馬守

正氣干霄象、回天語漸舒、丹心懸日月、赤膽耀空虛、覷破浮雲夢、圓明徹夜珠、不孤滄海望、仁者樂無虞

示獨本藏主回自肯庵

來來去去不辭忙、踏斷溪聲流遠長、始徹閒忙無二致、脚頭脚底盡風光、

歲次壬寅菊月十九日、本寺觀音開光云、法身彌宇宙、道眼廓周沙、一點光通達、圓明沒點瑕、諸人會麼、玆者大士示現之時、靈光正照、吉氣臨筵、爲祥爲瑞、家國晏然、爲霖爲雨、山川秀麗、眞誠衆生之福田、永作長河之寶筏、尋聲救苦、隨類度生、而其神通妙用、無量無邊、最親最切、何用山僧筆舌助揚、而後爲光明耶、雖然如是、也少這一點不得、何故聻、不見道天得一點紅光、愈見高明之廣大、地得一點精華、益增百寶之光輝、人得一點正見、能成摧邪扶正之功勳、僧得一點正知、卻有揀魔辨異之手眼、然則乾坤雖有覆載之功、亦借今古聖賢表揚發揮、以成三才之德、而被蒼生、廣博無窮矣、山僧雖然不慧、日用事無別、行藏沒缺虧、與古往今來、何曾少却一毫端、既無欠少、不妨出一隻手、點開光明、與觀音大士互相表揚、共作佛事、以利群機、不亦至善乎、擧筆云、諸人還見麼、黃檗由來無多子、全憑這點作生涯、揭開慧眼亘今古、照徹生靈歸一家、便點。

長門神谷勝右衞門、求薦妣孤雲

孤雲幻化境、黑白業居諸、一句伽陀語、剖開業盡除、打翻生死海、照徹夜明珠、三界輪回息、一靈覺太虛、儼然登彼岸、極樂意何如。

睡起戲筆

老來聊展小神通、夜返家山晝在東、夢筆花開新燦爛、一園桃李舊春風。

萬里相公參次問、如是來者、是什麼人、師云、豁開舊面目、徹見本來人、進云、如何徹見去、師云、

日用事無別、相公便禮拜、師云、會了禮拜、不會禮拜、進云、某甲無可道、師云、秋花點點新。

河村十右衛門、求薦妣梅岸妙林

孝子追原本、貞臣起帝京、不孤英傑事、豈負慈恩情、家國兩全美、功勛一大成、返觀猶未足直造法王城、乞偈薦靈福、蓮花舌上生、頓消三界業、淨土坦然平、大道無方所、隨心得善名、妙林登彼岸、極樂舊家聲、

示胡信士

久埋至寶在塵勞、撥出當陽見也麼、眼廓虛空無欠剩、心平滄海少風波、一天霜月晴方好、萬里江山瞬息過、飽載家珍歸去也、高登彼岸樂如何。

西村久左衛門、求薦考成玄妣壽圭

請法敬爲主、事親孝爲先、孝敬兩俱足、是名眞福田、以茲薦父母、特地自成玄、再乞偈爲證、又加腦後鞭、頓超清淨界、共坐寶花蓮。

示惟住孫

惟住無所住、惟行無所行、兩頭俱踢脫、日午正三更、舉世渾如夢、幾能醒此情、霜花堅道骨、蘿月啓眉明、但惜形山寶、豈貪世上榮、蓬萊偶寄錫、和氣暢平生、聊得安閒法、頓消幻化聲、福慧果圓滿、乾坤掌上平、不言天下信、沙界任縱橫、

示惟一侍者血書華嚴經

坐斷千差路、儼然一坦平、腳跟踏實地、豈更聽虛聲、萬法皆如幻、一眞亦强名、無名天地始、觸

處自現成、識得現成物、人天不汝輕、乾坤同一體、何處可關情、榮辱三春夢、興亡一瞬傾、心心無間斷、念念自圓明、滴血成經海、華嚴界上行。

歌

十二時辰歌、用寶誌公韻

平旦寅、剖出當人清淨身、心境兩忘無罣礙、拈來信手是家珍、不着相啓迷津、觸處分明不是塵、亘古彌今活潑潑、由來非假亦非眞。

日出卯、一點圓明巧非巧、爍破閻浮八萬州、佛魔頓盡誰來撓、赤條條無不了、直者直兮拗者拗、法法頭頭自性空、原無我相奚憂惱。

食時辰、當體現前妙法身、日用尋常淡粥飯、何須更要著薑辛、平等見沒疎親、切忌從前着我人、一錯源頭千萬里、招囘未免幾埃塵。

禺中巳、亘赫圓明無不至、熠徹算沙沒量人、頓空實相離文義、了死生無一字、明明覿露是非是、無我無人無去來、大千沙界爲吾使。

日南午、突出蘊山一大寶、智者到山得寶囘、資生澤物賑貧苦、迷自迷悟自悟、雲開雲合朝還暮、等閒踏斷兩頭關、生死去來歸一路。

日昳未、爛嚼虛空無味義、咬破舌頭飽不休、縱橫舒卷西來意、信口談何所諱、人間天上非吾止、隨緣偶寄古灘頭、釣得錦鱗不自棄。

晡時申、本來無物不知貧、寒山幾幅暫知己、雲影淡濃幻假眞、勿外望自全神、頑石團圞堪作

隣、咳唾一聲皆點首、凝眸何處不同人。
日入酉、寂滅須臾長且久、離相離名離古今、詎聞虛設曹山酒、未放逸何須守、看破從前奚所有、突出本來鐵臉皮、無生界內團圝走。
黃昏戌、萬別千差歸一室、坐臥空空無所爲、翻身不覺東方日、烏關關蟲喞喞、一部眞經幾點漆、動着毫端隔大千、未萠一念波羅蜜。
人定亥、夢到靈山歸疲怠、耽着名勝夢遊共無想主翁今何在、破砂盆誰替代、東擲西抛胡罣礙、返炤個中無一物、空花露影徒憎愛。
夜半子、一夢無生曷有死、堪歎夢中說夢人、何曾契着離言字、玄中玄格外事、去却非兮翻却是、暗謝明來互奪凌、眞空實相誰堪試。
鷄鳴丑、一聲啼破長悠久、空色堆頭露片誠、追尋特地烏何有、沒却頭伸出手、把住放行還老朽、饒伊能轉十二時、爭如塞殺虛空口。

結茅歌

茅居好茅居好、茅居素靜無煩惱、隨家豐儉樂無窮、節槩風情何處討、松微吟動幽草、天然一段妙嘉藻、不彈濁世繁華夢、但惜光陰無價寶、美少年咲老倒、老倒偏能開懷抱、眼爍乾坤空古今、曾流一帶淨如埽、常無事間眠早、柴門不掩雲來鎖、夢遊東土與西天、淨穢踏翻幾絕倒忽惺惺光浩浩、斗室門開通大道、寂照圓明沒缺虧、果然勝於蓬萊島。

磊落歌

沒量漢莽鹵人、無端西沒又東昇、欒岫潭中忘瘦影、扶桑添得一閒身、有時喜有時嗔、惹得娘生滿面塵、凡聖位中收不住、驢頭馬臉也天眞、德不德仁非仁、殺活縱橫妙入神、逆順圓通無罣礙、一毫頭上萬年春、住無住言唯新、抖擻衣下作家珍、肯開平等無高下、賑濟竛竮徹骨貧、非常法爲準繩、落落風光不可陳、亂草場中強作主、任教四海自來賓。

無用歌

無用人任天眞、隨時屈也隨時伸、幾度雪霜鏗傲骨、一番風月一番新、幻化景却非眞、造物無私妙入神、蝴蝶夢中開隻眼、百花叢裡不沾身、恒返炤本來人、出沒奚曾惹點塵、五濁劫中悲願切、千華臺上捧能仁、無可喜有何嗔、徹見本來無我人、一天淨潔超空有、徧體風光融假眞。

古稀歌

不着壽不干祿、太和風雅四時足、無爲無事樂天眞、甘守清閒稚我獨、山自青水自綠、萬象森羅同一幅、倏忽天開五老圖、蓬萊峯獻喃喃祝、數樹梅幾叢竹、一味清幽供巖谷、重重瑞氣遶東西、片片白雲夜共宿、從心欲無拘束、時清道泰一陽復、正氣瀰漫四大洲、果熟香飄六十六、松蒼蒼花簇簇、道存林下數間屋、窮通壽夭自天然、不昧本來眞面目、舊時路已忘復、令人萬里嘆於穩、頓空壽相不思議、南北東西同一轂。

丈室落成歌

安樂節太和天、正是人間大福田、著得金剛眞種子、花開結果遍三千、刪草莽開法筵、丈室落成豈偶然、不二門中昭萬象、收羅法界廣無邊、師子吼萬松巓、異口同音祝聖賢、道泰時豐家

國瑞、仁風德澤動林泉、演般若禮金仙、一念圓明耀後先、無位眞人赤洒洒、門頭戶底掣風顚、主中主玄中玄、由來千聖不相傳、一聲団地自端的、超出瓊樓百寶蓮、非名狀離言詮、毘耶到此不能宣、請君試問威音叟、必竟如何決一言、開口恐致三十棒、逡巡回首更加鞭、收聲斂氣歸元本、把住大千同枕眠、如是撐持無滲漏、流傳勳業萬斯年。

牛頭栴檀瑞相歌幷引

彌香長者、優鉢羅華、示善財童子云、摩羅耶山出栴檀香、名曰牛頭、若以塗身、設入火坑、火不能燒、又云、赤栴檀出牛首峯、以峰得名、可以治寒症病、故國人所重、良有以也、茲係崎中信士津田又左衛門、三十年前、往其國得之、蘊諸以來、無有知者、前歲適唐人至、善能滅塑、出此香雕成觀佛、寶相嚴處、瞻禮咸嘆希有、更餘、遂然上座求之、仍雕一尊、送上老僧、隨身奉供、映、東西相去數萬里、奚緣所感、得此瑞應、加以妙手莊嚴、相好盡善盡美、與夫三平瑞相、同渡祖圖、並作三瑞應責、一會儼然、永爲萬福之家寶、庶百千年後、一瞻一禮、福慧兩全、其功德曷可思議者哉、遂作三瑞歌以識之。

也太奇也太奇、天然三瑞會斯時、東西程賦幾萬里、應感機緣不可思、牛頭沒佛頭熙、頓空煩惱卽菩提、一瞻一禮成三昧、正信歸依徹悟迷、老何幸逢斯期、白頭光耀五須彌、當陽點出人天眼、幷作太和般若基、非常相過量儀、今朝現也叵思議、祥徵海國頌千古、信感當人不自欺、見無見絕孤疑、體用全彰若個知、西沒東昇無二致、行藏取舍更由誰、作無作爲無爲、掃除名跡露眞規、頓明黃檗無多子、觸目千差也合宜。

對菊歌

人垂老天復秋、眼底黄花孰放收、白首閑行歌晩節、儼然微笑解新愁、秋光好却難留、籬邊風景恣悠悠、細看却有傲霜志、不覺林間一段幽、尚隱逸最高流、淡淡淸馨獨自由、縱使兩輪高遠炤、素心淨潔對空酬、離名謂却無憂、夢境繁華盡放休、惟得個中淸意味、更於此外復何求。

種竹歌

堅其志虚其心、日常種竹自成林、枝枝秀氣承天澤、節節文明播古今、微風動和雅音、葉葉靑標引鳳吟、雪覆龍鍾掛片玉、日搖疎影浪千金、三徑友暢胸襟、眉開秀茂俯群陰、操節凌霜千古勁、名標君子聖賢欽。

黄檗和尚太和集終

國譯禪林口實混名集

解題

本書上下二卷は本邦黃檗派の格峰實外和尙の撰述する所のものなり。師は由來、多病の身を以て諸所の山庵に住し、其の間、內外四十餘種の漢籍祖錄を涉獵して本書を著はす。古來、禪門の古德には本名の外に、一種の綽名又は通稱を以て呼ばるゝもの頗る多し。例へば達磨大師を「碧眼胡」、「缺齒老胡」、「壁觀胡僧」といひ、永嘉大師を「一宿覺」、南泉を「王老師」、寂音尊者を「甘露滅」と稱する類是れなり。本書は之等異稱、類號、綽名などに關し、上は達磨大師より下は明の愼行禪師に至るまで、苟も叢林に著名なる古德一百九十人に就いて、各其の略傳を述ぶると共に一々其の異名の因つて來る所以を明かにし、因つて以て同名にして異人なる、異名にして異名に非ざるもの等、混名の著なるものを辨析して、後學をして其の德と名とを知らしめんとするにあるなり。故に本書は、一面より視れば、支那禪宗の諸祖に於ける一種の異稱字典とも言ふことを得べし。

本書卷頭には嵯峨直指庵月潭道澄作の著者の別號に關する詩二首を冠し、卷末には著者の詩一律と實海界輪の跋文とを附す。猶ほ師は本書に漏れたるものを集めて、別に補遺一卷を編まんとしたれども、

老病の故を以て其の志を遂ぐる能はざりきといふ。こは實に遺憾の極みといふべし。

著者の傳を案ずるに、字は格峰、諱は實外、別に斷橋と號す。肥前國鹿島城主鍋島直朝の長子にして承應元年三月四日を以て其の城中に生る。承應年間は實に我が檗宗興隆の時なり。乃ち同二年には明僧澄一和尙、獨立性易和尙の來朝あり、同三年には隱元禪師及び其の一門の歸化するあり、翌年には木庵、慈岳の徒來る。師は實に此の新宗教の將に起らんとする際に方つて生る。又其の間、多少の因緣なしと言ふべからず。師、延寶四年正月、年二十五歲となる。雨あり、一首の和歌を詠じて曰く、

ふりそむるみのりの雨よこの春に
ねがふ心の花をうるほせ

斯くして師は佛を慕ふの意遂に止み難く、此の春、同國藤津郡能古見村福源寺に入り、桂巖明幢に就いて出家す。其の冬、同村久保山の居宅を捨てて寺となし、圓福山普明寺と號し、桂巖和尙を請じて開山始祖となす。其の外、古江田（今は古枝に作る）村の祐德院、佐嘉郡梅野山葛谷の庵、並に慶福院、心花庵、渣開浦の天開圖畫亭等を開創す。本書混名集は實に此の天開圖畫亭に於て編成せられしものなり。元祿四年七月、藤津郡能古見村水梨谷の巖泉庵に住し、五年、神埼郡仁比山村朝日山安國寺に出世す。同じく十年、安國寺を退いて巖泉に歸る。歸庵の日、愛宕橋を過ぐる時、過ぎ了れば橋俄かに蹈斷せり。即ち和歌を詠じて曰く、

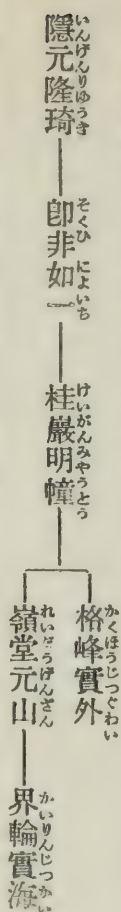
神も我がこころを知るやはしたえて
世にかよはしのみち示すなり

之を桂巖和尙に呈示したるに、桂巖乃ち斷橋の號を與ふ。月潭之を聞き、斷橋の號を賦して詩二首を贈れり。本書の卷頭に載する所のもの即ち是れなり。巖泉庵は後に高岳山曹源庵と改む。師は正德五年五月、微恙を示し、同六月十八日遂に寂す。壽六十又四、闍維して後、塔を普明の山と曹源とに建て、遺骨を此處に葬る。

師は資性病弱にして慈仁深く、又學を好み、詩歌、篆文に巧みなり。著はす處の書、本書の外、篆字金剛經、華藏世界圖說、東渡南游記、陳希夷睡像上進記、道祖神記等あり。

又本書跋文の撰者、字は界輪、諱は實海、後、字を藏山と改む。普明寺の塔頭法泉庵の第五代、普明寺の第六代として住す。又詩に巧みなり。

今、格峰、界輪二師の法系を表はせば、

隱元隆琦――即非如一――桂巖明幢―┬―格峰實外
　　　　　　　　　　　　　　　　└―嶺堂元山――界輪實海

以上の如し。又以て隱元四世の法孫にして、黃檗の正統たるを知るべし。

國譯禪林口實混名集序

獨木橋横つて崖壁險なり、等閒に踏斷すれば兩頭空し。俊流若し㋑的盧の至るに遇はば、眼を合して跳過するも活路通ず、險崖橋斷えて尋ぬるに路なし、許さず庸常人の往還することを。黄巖倫老の輩を除却して、是れ誰か親しく到つて禪關を扣かん。

巖泉禪師別に斷橋と號す。此れを作つて寄贈す。哂を博す。

㋺峨　皐　澄

㋑的盧。的盧は字典に「馬の名」と。「埤雅」に「顙有二白毛一、謂二之的盧一。俗に的顙といふは非なり」とあり。

㋺峨皐澄。一の字は月潭、名は道澂。黄檗派の人。隱元三世なり、山城嵯峨の直指庵に住す。獨照性圓に嗣ぐ。著述巽山稿二卷あり。

國譯禪林口實混名集㋑凡例

一、大凡そ僧の字と諱とある外、別に呼ぶ所、禪林尤も多し。一には勅號、二には所住の山名、三には所住の寺號、四には所居の庵室、五には所居の州縣、六には所居の形勢、七には語に因つて號と爲す、八には事の爲に觸發せらる、九には事に因つて師友に稱せらる、十には相貌言行の奇異に因る。

一、勅號に二つあり、生前に賜ふを特賜といふ。梁の婁約、隋の智者を以て濫觴となす。滅後に賜ふを追謚といふ。後魏の胡靈公、唐の大通禪師はその權輿か。所住の山名を以て人に呼ばるるものは、百丈・黃檗など。所居の寺院を以て世に稱せらるるものは、臨濟・香嚴など。所居の庵室を以て自ら號するものは晦堂・雲庵など。所居の州縣を以て人に呼ばるるものは、趙州・汾陽など。所居の形勢を以て人に呼ばるるものは、石頭・斷崖など。語に因つて號となすを以て世に稱せらるるものは、丹霞の然、鐵牛の定など。事の爲に觸發せらるるを以て自ら號するものは、死心叟などの如し。事に因つて師友に稱せらるるものは、破竈墮・岑大蟲など。相貌言行の奇異に因つて諸方に呼召せらるゝものは、乃ち

㋑凡例とは書中の大要又は注意の箇條などなり。左傳の序に「凡を發して以て例をいふ」と見えたり。

碧眼胡・赤頭瓈・打地・骨剉などあり。今採る所のものは第六と第九と第十との類なり。〔第一勅號は禪教を分たず、婁約・智顗・法果・神秀並び擧ぐ。」

一、諸師の諸名は、事に因り、相に因り、言に因り、行に因り、姓に因り、字に因り、所住所居に因り、所業所作に因る。大都ね叢林に傑出するの士は、尋常名字の外に、所因の名は一ならず。師姑・散人・居士と曰ふと雖も、異號の正しき者は、集中に收在して、苟も後輩をして其の德を知らしめんと欲するなり。

一、今達磨大師以下一百九十人を收むるのみ。間衲子と稱せざる者あり、取るべからざるか。只だ禪者の口實に在つて、出書の著明なるを以て併せ收む。

一、二祖の可大師を斷臂の兒と謂ひ、四祖の信大師を破頭老人と謂ふが如きは、稱呼せざるに非ず。然れども本傳を考ふるに、之を紀するを見ず。故に今除き去つて、且く後人の考ふる所を俟つ。亦異名に似て異名に非ざるものあり、類を推して須らく察すべし。

一、教門の先德、青眼律師・白足和尚並に攝山・詮公の四友の如きも亦茲に載せず。蓋し禪林を以て題首に表すればなり。〔得意布、四句朗、領悟辯、文章勇、之を攝山・詮公の四友と謂ふ。咸南北義學の碩師なり。」

一、臨濟下の四庵主、馬祖下の烏臼・黑眼等、皆法諱を顯さず。今之を取る可くして取らざる者は、

意、繁を厭ふに在り、故に之を删減す。

一、東禪・西禪・龍光・文殊・觀音・禾山・芭蕉・林泉・南院・南臺・大覺・萬歳・月華は、皆唐及び五代宋に出で、時に和尚と稱せらる。亡名の尊宿にして、各各兩人あるなり。後の僧史を閱ん者は、等閑に看過して、誤つて一人と作す可からず。然も混名に幾しと雖も、繁を厭うて載せず。

一、祖庭事苑巻の二、㊀瀑泉集に出す所の白頭因は、是れ何れの人といふことを知らず。註に列ね出す。事に因つて號を立つるもの二十七員、其の中二十二人は、已に考へて此の集に載す。五人は未だ眞名と世代とを詳にせず。按ずるに、喎頭副は道副禪師を謂ふか、忽雷澄は宗派の圖の神秀下に見えたり。恐らくは唐人ならん。清八路・黒令初・明半面は、學者宜しく之を稽へて以て添入すべし。

㊀瀑泉集。雪竇重顯の著述にして一巻あり、明覺禪師語錄の第四に收む。

一、此の集編成つて兩年餘を經て後、還つて諸の禪冊を檢閱するに、網に漏るるものも亦少からず。是に於て別に補遺一巻を輯め、兼ねて扶桑宗匠混名集を附せんと欲するに、年老い病劇しくして志を遂ぐること能はず、豈に遺憾なきことを得んや。本集兩巻の如きは、好事者の爲に取り去らるるなり。

凡例　終

採用書目

高僧傳　僧寶傳　傳燈錄　普燈錄　增集續傳燈錄
續燈存稿　五燈會元　五燈嚴統　佛祖統紀　佛祖通載
正宗記　稽古略　祖庭事苑　文字禪　禪林類聚
頌古聯珠　臨濟錄夾山鈔　碧巖集不二鈔　虛堂錄　無準錄
無門關　正宗贊　林間錄　大慧武庫　大慧普說
羅湖野錄　雲臥紀談　正燈錄　大光明藏　人天寶鑑
叢林盛事　中峰廣錄　枯崖漫錄　山庵雜錄　建州弘釋錄
竹窻隨筆　禪林寶訓音義　禪宗漁樵集　冷齋夜話　郤掃編
揮麈後錄　瀛奎律髓　五車韻瑞　大明一統志

書目終

國譯㋑禪林口實混名集卷之上

晩學沙門斷橋撰す

南北

碧眼胡僧

初祖菩提達磨大師は、南天竺國香至王の第三子なり。姓は刹帝利、本の名は菩提多羅、後般若多羅の本國にて王の供養を受くるに遇ふて、師の密迹を知る。因つて試に二兄と與に施す所の寶珠を辨じて、心要を發明せしむ。既にして尊者謂く、「汝諸法に于て已に通量を得たり。夫れ達磨とは通大の義なり、宜しく達磨と名くべし」と。因つて改めて菩提達磨と號す。

㋺高僧傳に曰く、「達磨は眼青色なり、故に碧眼の胡僧と稱す」と。又㋩祖庭事苑に曰く、「達磨は法の爲に西來して、未だ嗣子に逢はず、面壁冷坐九載、傳法繼祖のもの一人、是れに繇つて隻履西に歸り、道東に傳ふ。是の時

㋑原本には此の上卷の前に目錄數枚あり、又目錄の下に「出興の次第、師資の前後を列せず、但だ世代を分つのみ」の割注あれども、編輯の都合によつて凡て之等を删る。猶ほ目錄の或題目の下にも注あれど、之等は何れも本文の題目の下に移載せり。

㋺高僧傳は續高僧傳にして、三十卷あり、唐の道宣律師の撰する所なり。

㋩祖庭事苑は八卷あり、宋の睦

に當つて、皆之を(ニ)壁觀婆羅門と謂ふ。故に一には壁觀胡僧に作る。又缺齒の老胡及び(ホ)勿版子の號あり。「(ヘ)碧巖集三教老人の序に曰く、「(ト)齾齺東に來つて、心印を單傳して文字を立せざることは固よりなり」と。」梁の大通二年十月五日に入滅す。唐の代宗に至つて諡して圓覺大師と號す。「(チ)雪堂の行、廓然無聖の話を頌して曰く、「西天の屠子氣雄豪、神州に欺負して罪逃るること莫し、梁帝當頭輕く一拶すれば、果然として提起す活人刀」と。又寂光の豁、拈じて曰く、「達磨大いに理直きときは則ち氣壯なるに似たり。佛心天子、孟嘗君の仁術あつて、善く高賓を待す。當に若し箇の漢あらば、咄して言ふべし。然も是の如くなりと雖も、強賓焉んぞ善く弱王を抑せんや。老臊胡豈に止だ江を渡るのみならんや」と。善卿の曰く、「西竺を稱して胡と爲すことは、秦晉より沿襲し來つて、卒に變革し難し。故に佛を名けて老胡と爲し、經を胡語と爲し、祖を碧眼胡と爲し、其の後に裔たるものを胡種と爲すあり。釋氏の子となして胡種と名くることは、膺を撫して自ら愧ぢざることを得んや。所謂必ずや名を正さんか」と。」

隋

庵善卿の撰する所なり。

(ニ)續高僧傳には達磨大師の姓を婆羅門となす。

(ホ)勿版子は一に沒板齒に作る、缺齒に同じ。達磨大師、毒に中つて前面の齒を缺落せられたりといふより稱す。

(ヘ)碧巖集は十卷あり、宋の圓悟禪師の著述なり。

(ト)齾は齒のあらはれたるをいひ、齺は齒の嚙き朽ち缺けたるなり。達磨大師をいふ。

(チ)雪堂、諱は道行、宋の佛眼清遠の法嗣にして、楊岐派第五世に屬す。

赤頭璨

三祖の僧璨大師は、何れの許の人といふことを知らず。初め居士を以て二祖の可大師に北齊に見ゆ。二祖之を器なりとして、爲に剃度して受具得法せしむ。陳の大建元年北齊より司空山に來り、遂に舒州の皖公山に隱る。後周の武帝、佛法を破滅するに屬して、居に常の處なく、十年餘を積んで、時の人の能く知るものなし。後に道信大師を得て法を付す。隋の大業二年に入滅す。唐の玄宗、鑑智禪師と諡す。❶正宗記の師の傳に曰く、「其の元復た黑髮なし、故に舒州に號して赤頭璨となす」と。〔大師に信心銘あり、盛に世に行はる。〕

❶正宗記は詳しくは傳法正宗記となづく、十卷あり、宋の明教大師契嵩の編纂する所なり。

唐

嬰兒行菩薩

鶴林の玄素禪師は、姓は馬氏、牛頭の威に參じて旨を得たり。貴賤怨親も曾て喜慍なし。時に之を嬰兒行菩薩と目く。天寶中に卒す。後人、俗氏を以て之を呼んで馬祖といふ。或は姓名兼ね稱して馬素と曰ふ。勅して大律禪師と諡す。

老安國師

嵩嶽の慧安國師は、五祖の忍に嗣ぐ。則天、國師と爲し、中宗、紫衣を賜ふ。隋の開皇壬寅に生れ、

唐の景龍己酉に滅す。春秋一百二十八。時に老安國師と稱す。

鳥窠禪師

道林禪師は徑山の國一に謁して、遂に正法を得たり、後に秦望山に長松あり、枝葉繁茂し、盤屈して蓋の如くなるを見て、遂に其の上に棲止す。故に時の人之を鳥窠禪師と謂ふ。復た鵲巣あり、其の側に于て自然に馴れ狎る。人亦名けて鵲巣和尙と爲す。元和中、白居易因に山に入つて禮謁す。乃ち問ふ「禪師の住處甚だ危險」と。師曰く、「太守の危險尤も甚だし。」曰く、「弟子位、江山を鎭す、何の險といふことか之れ有らん。」師曰く、「薪火相交り、識性停まらず、險に非ざることを得んや」と。

布毛侍者

杭州招賢寺の會通禪師、姓は吳氏、俗名は元卿、供奉の官たり。元和中、帝に奉じて出家し、鳥窠に師事す。一日辭して遊方せんとす。窠、布毛を吹いて之に示す。師遂に玄旨を悟る。時に布毛侍者と號す。

降魔禪師

章信寺の崇惠禪師、姓は章氏、杭州の人なり。徑山の國一を禮して弟子と爲る。禪觀を勤むと雖も、多くは三密の敎を以て恒務と爲す。初め昌化の千頃の最峯頂に於て茅を結んで菴と爲し、專ら佛頂呪を誦すること數稔。又鹽官の硤石東山に往いて、小尖頭の草屋を卓て、多く年月を歷ぬ。後道士の史

華と佛力道法を角して、大いに勝を得たり。因つて護國三藏と號し、勅して安國寺に居らしむ。世に謂つて中子山降魔禪師と爲すは是れなり。

降魔藏

降魔藏禪師は七歳にして出家す。時に野に妖多く、鬼魅人を惑はすに屬す。師、孤形にして制伏して、曾て少しも畏るることなし。故に降魔の名を得たり焉。後に(ヌ)北宗の記を得たり。

破竈墮

破竈墮和尙は名氏を稱せず。言行測ること叵し。嵩嶽山に隱居す。塢に廟ありて甚だ靈なり。殿中唯だ一竈を安ず。遠近の祭祠輟まず。物命を烹殺すること甚だ多し。師一日、侍僧を領じて廟に入り、杖を以て竈を敲くこと三下して曰く、「咄、此の竈、唯だ是れ泥瓦合成す。聖何れより來り、靈何れより起つてか、恁麼に物命を烹宰す。」又打つこと三下すれば、竈乃ち傾破して墮落す。安國師、號して破竈墮と爲す。遂に其の法を受く。

騰騰和尙「憨憨和尙」

福先の仁儉禪師は、嵩山に(ル)罷問してより、郊廊に放曠たり。時に之を騰騰和尙と謂ふ。天冊萬歲の中、天后詔して殿に入らしむ。前んで天后を仰ぎ視て、良久して曰く、「會すや。」后曰く、「不會。」

(ヌ)北宗は北宗神秀禪師を指すなり。
(ル)罷問とは罷參に同じ、參禪問請を罷休せるをいふ。乃ち大事了畢せるをいふなり。

師曰く、「老僧不語戒を持す」と言ひ訖つて出づ。唯だ了元の歌一首、盛んに世に行はる。〔又同時に憨憨和尚あり。〕

盧(ヲ)行者

六祖慧能大師は新州の盧氏に生る。年二十有四にして經を聞いて省あり、黄梅に往いて五祖を參禮す。祖之を器として、三鼓に衣法を付すと云云。(ワ)南泉、上堂して曰く、「五祖下五百人、只だ盧行者一人、佛法を會せず、文字を識らず、只だ禪を會す」と。〔大光明藏の上に、石室行者を以て六祖大師と爲すは、蓋し誤るのみ。一には盧公といひ、又盧居士と曰ふ。或は鬻薪の漢子と稱す。(カ)佛照の光、六祖風旛の話を頌して曰く、「非風旛の話、全機を露はす、千古の叢林是非を起す。咄、這の新州の賣柴漢、便宜を得るは是れ便宜に落つ」と。又(ヨ)雪嶠の信、拈じて曰く、「六祖、黄梅に在つて些子の氣息を得たり。這裏に向つて便ち亂撒たるも、也た只だ箇の賣柴翁」と。〕

石室行者

潭州の石室善道和尚は、攸縣の長髭の曠に嗣ぐ。後に(タ)沙汰に値ふて乃

(ヲ)行者とは出家して僧寺に入れども、未だ度牒を得ざるものをいふ。六祖を以て始めとなす。

(ワ)南泉は唐の南泉山の普願禪師なり。馬祖道一の法嗣なり。

(カ)佛照、諱は德光、大慧宗杲の法嗣にして、育王、光孝、靈隱等に歷住し、南宋の孝宗に奏對せり。

(ヨ)雪嶠、諱は圓信、幻有正傳の法嗣にして、楊岐派第二十世なり。明末徑山及び雲門に住す。

(タ)沙汰とは僧尼佛事を淘汰し、多く僧尼を還俗せしめ、佛寺を毀廢するをいふ。これは唐の會昌の廢佛を指すなり。

ち行者と作つて石室に居す。因つて人呼んで石室行者と爲す。僧、臨濟に問ふ、「祇だ石室行者の碓を踏んで脚を移すことを忘却するが如きんば、什麽の處に向つてか去る。」濟曰く、「深泉に沒溺す」と。

一宿覺

永嘉玄覺禪師は、㋹東陽の策と同じく曹溪の六祖に詣す。初め到つて錫を振ひ瓶を携へて祖を繞ること三帀、卓然として立つ。祖曰く、「夫れ沙門は三千の威儀、八萬の細行を具す。大德何れの方より來つてか大我慢を生ず。」師曰く、「生死事大、無常迅速。」祖曰く、「何ぞ無生を體取し、無速を了ぜざるや。」師曰く、「體すれば卽ち無生、了ずれば本無速。」祖曰く、「如是如是。」師方に威儀を具して參禮す。須臾にして辭を告ぐ。祖曰く、「返ること太だ速なるや。」師曰く、「本自ら動に非ず、豈に速あらんや。」祖曰く、「誰か動に非ざるを知る。」師曰く、「仁者自ら分別を生ず。」祖曰く、「汝甚だ無生の意を得たり。」師曰く、「無生豈に意あらんや。」祖曰く、「意なくんば誰か當に分別すべけん。」師曰く、「分別も亦意に非ず。」祖歎じて曰く、「善哉善哉、少く留つて一宿せよ」と。時に一宿覺と謂へり。證道歌等を著す。盛んに世に行る。學者輻輳して眞覺大師と號す。㋞高僧傳に曰く、「既に所疑を決して能く留ること一宿す。號して一宿覺といふ」と。」

㋹東陽の策とは婺州金華の玄策禪師をいふ。六祖慧能大師の法嗣なり。
㋞高僧傳は唐の續高僧傳を指す。

馬祖

江西の道一和尚は、漢州什邡の人なり。姓は馬氏、法を南嶽の讓に嗣ぐ。六祖、讓に謂つて曰く、「向後佛法、汝が邊より去つて、一馬駒を出して天下の人を蹋殺せしめん」と。厥の後江西の法嗣、天下に布く。時に馬祖と號す。又稱して馬大師と曰ふ。元和の中に大寂禪師と追謚せらる。「馬氏は世、簸箕を業とす、故に祖を以て馬簸箕と曰ふ。又鐵山の仁、馬祖不安の話を頌じて曰く、「漢州生じ得たり馬駒兒、病、膏肓にあり醫すべからず。院主端なく安好を問ふ、佗を引いて賣弄す口唇皮。」又㋡張無盡の頌に曰く、「什防の駒子氣生獰、毘盧頂上を蹴蹋して行く。正に患ふ脾疼み却つて頭痛することを、病み來つて猶ほ心情を巧にすることあり」と。」

㋡張商英、字は天覺、無盡と號す。宋の宰相なり。兜率從悅禪師の法を嗣ぐ。

石頭

石頭の希遷大師は端州高安の人なり。姓は陳氏、天寶の初めに於て衡山の南寺に造る。寺の東に石あり、狀臺の如し、師乃ち菴を其の上に結ぶ。時に石頭和尚と號す。著す所の草菴の歌、參同契、盛んに世に行る。法を青原の思に嗣ぐ。

懶殘

神僧明瓚、初め遊方して嵩山に詣して、普寂に從つて禪法を聽く。默證心契、衡岳に間居す。性、懶にして殘を食ふ。故に懶殘と號す。又大石を下して虎害を除く。一郡至聖と呼ぶ。

打地和尚

忻州の打地和尙は江西に旨を領じてより、其の名を晦ます。凡そ學者問を致せば、惟だ棒を以て地を打して之に示す。時に之を打地和尙と謂ふ。一日僧に棒を藏卻せられて、然る後に問はれて、師但だ其の口を張る。

王老師

南泉の普願禪師、姓は王氏、大寂の室を扣いて、頓然として筌を忘じ、遊戲三昧を得たり。師有る時曰く、「文殊普賢昨夜三更、人每に二十棒を與へて院を趁ひ出せり。」趙州曰く、「和尙の棒、誰をしてか喫せしめん。」師曰く、「王老師過什麼の處にかある。」趙州禮拜して出づ。師、明日莊舍に遊ばんと擬取す。其の夜土地神、先づ莊主に報ず。莊主乃ち預め備を爲す。師到つて莊主に問ふ、「爭か老僧の來ることを知つて、排辦此の如くなる。」莊主曰く、「昨夜土地報じて道ふ、和尙今日來らんと。」師曰く、「王老師、修行力なうして、鬼神に覰見せらる」と。師有る時曰く、「江西の馬祖は、卽心卽佛と說く、王老師は不恁麼、道く、不是心、不是佛、不是物」と。師一日鉢を捧げて堂に上る。㋧黃檗和尙、第一座に居す。師を見て起たず。師問うて曰く、「長老什麼の年中にか行道す。」黃檗曰く、「空王佛の時。」師曰く、「猶ほ是れ王老師が孫なること在り。下り去れ。」師一日黃檗に問ふ、「黃金を世界と爲し、白銀を㋤壁落と爲す。此れは是れ什麼人の居處ぞ。」檗曰く、「是れ聖人の

㋧黃檗和尙は黃檗希運禪師にして、百丈懷海禪師の法嗣なり。南泉普願禪師の法姪に當る。

㋤壁落とは墻壁籬落の意、乃ちまがき、かき、かこひのことなり。

居處。」師曰く、「更に一人あり、何れの國土にか居す。」檗乃ち叉手して立つ。師曰く、「道不得ならば何ぞ王老師に問はざる。」師、衆に示して曰く、「王老師身を賣らんと要す、阿誰か買はんことを要す。」一僧出でて曰く、「某甲買はん。」師曰く、「他、貴價と作さず、賤價と作さず、汝作麼生か買はん。」僧對なし。此れより諸方も亦王老師と稱す。

功德山

徑山の國一禪師、字は㋒法欽、俗姓は朱氏、吳郡崑山の人なり。德宗の貞元五年使を遣して、璽書を齎して宣勞し、幷に慶賜豐厚たり。師の京に在り廻るに及んで、浙の令僕公王節制より州邑の名賢の弟子の禮を執るものは、相國崔渙裴・晉公度・第五琦・陳少遊等なり。淮よりして南、婦人禮し乞ひ、號して皆之を目けて功德山と爲す。「師始め鶴林の素禪師に遇ふ、素曰く、「汝流に乘じて行け、徑に逢はば卽ち止れ」と。後臨安に到つて、東北の高巒を視るに、乃ち天目の分徑なり。偶樵子に問ふ、曰く、「是れ徑山なり」と。遂に錫を此に挂く。代宗、師の德を聞いて更に仰重を加ふ。南陽の㋰忠國師に謂つて曰く、「朕法欽に一名を錫はんと欲す」と。手詔して號を國一と賜ふ。」

隱山和尚

隱山和尚、㋒大寂に參じて心要を發明し、潭州の龍山に隱居す。一日洞

㋒法欽は一に道欽に作る、牛頭派第六世鶴林玄素の法嗣なり。

㋰忠國師は六祖慧能大師の法嗣、南陽山の慧忠國師なり。

㋒大寂、馬祖道一禪師なり。

山、(牛)密師伯と遊山す。溪に菜葉を流すを見て、洞山曰く、「深山に人なし、何に因つて菜有つて流に隨ふ。道人有つて居すること莫しや否や」と。乃ち共に撥草を議す。溪行六七里の間、忽ち師の羸形異貌なるを見る。師問うて曰く、「此の山路なし、闍梨何れの處よりか來る。」洞曰く、「路なきことは且く置く、和尙何れよりしてか入る。」師曰く、「吾れ雲水より來らず。」洞曰く、「和尙此の山に住すること多少時ぞ。」師曰く、「春秋渉らず。」洞曰く、「和尙先づ住するか、此の山先づ住するか。」師曰く、「知らず。」洞曰く、「甚麼としてか知らざる。」師曰く、「我れ人天より來らず。」洞曰く、「和尙何の道理を得てか便ち此の山に住す。」師曰く、「我れ兩箇の泥牛、鬪つて海に入るを見る。直に今に至るまで消息を絶す。」洞山始めて威儀を具して、禮拜して便ち問ふ、「如何なるか是れ主中の賓。」師曰く、「青山、白雲を覆ふ。」曰く、「如何なるか是れ賓中の主。」師曰く、「長年、戸を出でず。」曰く、「賓主相去ること幾何ぞ。」師曰く、「長江水上の波。」曰く、「賓主相見、何の言說かある。」師曰く、「清風明月を拂ふ。」洞山辭して退く。師乃ち偈を述べて曰く、「三間の茆屋從來住す、一道の神光萬境閑なり。是非を把り來つて我れを辨ずることを莫れ、浮生の穿鑿相關らず。」之に因つて菴を燒き、深山に入つて見えず、時の人號して隱山和尙と爲す。「一には龍山和尙と曰ふ、即ち長沙府の龍王山是れなり。」

なり。勅諡號を大寂禪師と謂ふによる。

(牛)密師伯とは潭州神山の僧密禪師なるべし。師は洞山と同じく雲巖曇晟の法嗣なり。

折林會

湖南の東寺の如會禪師は、初め徑山に謁し、後に大寂に參ず、學徒既に衆し。僧堂の牀榻、之が爲に陷折す。時に折牀會と稱し、又夾山和尚と稱す。長慶癸卯の歳に歸寂す。勅して傳明大師と諡す。

鄧隱峰

五臺山の隱峯禪師は、福建邵武の人なり。姓は鄧氏、時に鄧隱峯と稱す。馬大師の言下に於て契悟す。元和年中、臺山に遊ぶ、路淮西に出づ。(ノ)吳元濟、兵を阻んで王命に違す。官軍、賊と鋒を交ふ。師、錫を飛して陣を解く。

赤眼歸宗

廬山歸宗寺の智常禪師は、法を馬祖に嗣ぐ。目に重瞳あるを以て。遂に藥を將つて手づから按摩し、以て目眥倶に赤きを致す。世に赤眼の歸宗と號す、後に滅を示す。至眞禪師と諡す。〔赤眼　或は拭眼に作る。〕

涅槃和尚

百丈山第二代法正禪師は、之を涅槃和尚と謂ふ。〔(オ)碧巖不二鈔に、(ワ)會元を引いて曰く、「百丈の海の法嗣、百丈山涅槃和尚は、一日衆に謂つて曰く、『汝等我が與に田を開け、我れ汝が與に大義を說かん。』衆、田を開き了つて歸り、大義を說かんことを請ふ。師乃ち兩手を展開す。衆措くことなし。」

(ノ)吳元濟は元和十年に反し、十二年に誅せらる。淮西は吳少誠以來の根據地なり、この時苦むこと最も甚だし。

(オ)碧巖不二鈔は岐陽方秀の撰する所なり。

(ワ)會元とは五燈會元にして三十卷あり、宋の大川普濟の撰する所なり。

註に洪覺範の㋳林間錄に曰く、「百丈第二代の法正禪師は、㋮大智の高弟、其の先嘗て涅槃經を誦す、姓名を言はず、時に呼んで涅槃和尚となす。住して法席と成すことは、師の功最も多し。衆をして田を開かしめ、方に大義を説くは乃ち師なり。㋘古靈・黃檗の諸大士、皆之を推尊す。唐の文人黃武翊、其の碑を撰す、甚だ詳なり」と。」

華嚴尊者〔華嚴和尚二人、華嚴三藏、華嚴大師、華嚴菩薩〕

普寂禪師は北宗神秀の上足なり。初め嵩山に在つて、煽に禪法を唱ふ。道聲、㋫帝扆に聞えて、詔して東都の華嚴寺に居らしむ。故に世人華嚴尊者と稱す。「華嚴和尚は、亡名の尊宿なり。禪法を北宗の神秀に學べり。又華嚴和尚あり、姓名を顯さず。幽州の城北に居して、恒に華嚴經を持すと。又實叉難陀、一には施乞叉難陀と曰ふ、華には學喜と言ふ、㋙新華嚴と同じく至る、故に華嚴三藏と號す。又釋の法藏、姓は康氏、字は賢首、康居の人、或は康藏と曰ふ。㋓澄觀推して華嚴の三祖と爲す。乃ち華嚴大師と號す。又元に釋の正順といふものあり、惟だ華嚴を閱して千部に盈つ。每に華嚴觀に入つて、三五日にして方に起つ。時の人之を華嚴菩薩と謂ふ。」

船子和尚

㋳林間錄は二卷あり。宋の覺範慧洪の撰述にかゝる。

㋮大智は百丈懷海禪師の勅諡號なり、大智禪師といふ。

㋘古靈とは福州古靈山の神贊禪師なるべし。黃檗希運禪師と同じく百丈懷海禪師の法嗣なり。

㋫扆は天子の諸侯に對するときに、後に立てし屛風なり、高さ八尺といふ。帝扆は宮廷を指すなり。

㋙新華嚴とは唐の于闐國の沙門實叉難陀の譯する所の八十卷

船子和尚、諱は徳誠、法を藥山に得たり。後に㋢道吾・雲巖と同道の交を爲す。藥山を離るゝに泊んで、乃ち二同志に謂つて曰く、「公等應に各一方に據つて藥山の宗旨を建立すべし。予率性疎野、唯だ山水を好む、情を樂んで自ら遣る、能くする所なし。佗後我が所止の處を知つて、若し靈利の㋐座主に遇はゞ、一人を指して來らしめよ。或は彫琢に堪へなば、將に生平の所得を授けて、以て先師の恩に報いん。」遂に分携して秀州の華亭に至つて、一小舟を泛ぶ。縁に隨つて日を度り、以て四方往來のものを接す。時の人其の高踏を知ること莫し。因つて船子和尚と號す。後に㋚夾山を得て、船を覆して水に入つて逝す。

陳蒲鞵

睦州の陳蒲鞵、諱は道明、江南陳氏の後なり。初め睦州の龍興寺に居して、迹を晦し用を藏して草㋖屨を製し、密密道上に置く。歳久しうして人知る。乃ち陳蒲鞋の號あり。時に學人あつて之を叩激すれば、問に隨つて遽に答ふ。詞語峻險、既に轍に循ふに非ず。淺機の流は、往往に之を嗤ふ。唯だ玄學性敏なるものは欽伏す。之に因つて諸方歸慕す。又之を陳尊宿と謂ふ。

の華嚴經を指すなり。之に對して東晉の佛陀跋陀羅、卽ち覺賢三藏の譯したる六十卷本を舊華嚴と稱す。

㋓澄觀は華嚴宗第四祖に當り、唐の五臺山清涼寺に住し、清涼國師と勅賜せらる。

㋢道吾は潭州道吾山の圓智禪師をいひ、雲巖は潭州雲巖山の曇晟禪師をいふ、共に船子德誠と同じく藥山惟儼の法嗣なり。

㋐座主とは一座の主といふ意なり、學解の優秀なるものをいふ。

㋚夾山とは澧州夾山の善會禪師をいふ。勅諡傳明大師なり。

㋖屨は履なり、草履は「わらぐつ」なり。

小釋迦

仰山の慧寂禪師は、少うして手の二指を斷つて出家を求む。父母之を許す。南華の通に就いて披剃して、法を ㋴潙山に得たり。梵僧あり、空よりして至る。曰く、「特に東土に來つて文殊を禮せんとす、却つて小釋迦に遇ふ」と。遂に梵書の ㋱貝多葉を出して、師に與へて作禮し、空に乘じて去る。之より諸方、小釋迦と號す。滅後智通大師と謚す。「始め潙山に參じて棲泊す。十四五歲にして足跛ふ。時に跛脚の ㋯驅烏と號す。」

小斷兒〔普化和尙〕

臨濟大師、諱は義玄、姓は邢氏、曹州南華の人なり。黄檗の運に嗣法す、慧照禪師と謚す。一日河陽木塔の長老と同じく、僧堂地爐の内に在つて坐す。因に說く、「普化毎日街市にあつて掣風掣顚す。知んぬ佗は是れ凡か是れ聖か」と。言猶ほ未だ了らざるに、普化入り來る。師便ち問ふ、「汝は是れ凡か是れ聖か。」普化曰く、「汝且く道へ、我れは是れ凡か是れ聖かと。」師乃ち喝す。普化手を以て指して曰く、「河陽は ㋛新婦子、木塔は老婆禪、臨濟は小斷兒、却つて一隻眼を具す」と。「鎭州の普化、何れの許の人といふとを知らず。㋽盤山の順世に暨んで、北地に於て行化す。或は城市、或は

㋴潙山は潭州潙山の靈祐禪師なり、百丈懷海禪師に嗣法す。

㋱貝多とは貝多羅のことなるべし、また多羅ともいふ。貝多はその葉厖厚にして強く、多羅はその葉薄輕にして光滑白淨細好なりといふ。皆文を書するに用ひらる。

㋯驅烏とは僧食の上の烏を驅逐するの意といふ。七歲より十三歲に至るまでの沙彌を稱す。

㋛新婦子とは見解の軟弱なるをいひ、老婆禪とは丁寧に過ぐ

塚間、一鐸を振つて曰く、「明頭來や明頭打、暗頭來や暗頭打、云云。」時に普化和尚と號す。」

周金剛

德山の宣鑑禪師は、簡州周氏の子なり。(ト)丱歳にして出家し、秊に依つて受具す。精しく律藏を究め、性相の諸經に於て旨趣を貫通し、常に金剛般若を講ず、時に之を周金剛と謂ふ。遂に(モ)龍潭に往いて紙燭吹滅の下に於て大悟し、遂に其の法を嗣ぐ。(セ)雪竇の頌、德山托鉢の話を拈じて曰く、「曾て聞說らく、箇の獨眼龍、元來只だ一隻眼あり。」(ス)明招の謙、德山に代つて曰く、咄、咄、沒處去、沒處去と。」殊に知らず德山は、是れ箇の無齒の大蟲なることを。若し是れ(イ)巖頭の識破するにあらずんば、爭か明日と昨日と同じからざることを得ん。諸人末後の句を會せんと要すや。只だ老胡の知を許して、老胡の會を許さず。」

踢天太

泰首座は何れの許の人といふことを知らず、洞山、果子を喫する次で、師に問ふ、「一物あり、上天を拄へ、下地を拄ふ、黑きこと漆に似たり、常に動用の中にあり、動用の

ろをいひ、小斷兒とは小の機智技巧あるもののいひなり。斷は召使のことなり。

(エ)幽州盤山の寶積禪師は馬祖道一禪師の法嗣にして、普化和尚の師なり。

(ト)丱とは幼稚の稱なり。

(モ)龍潭は澧州龍潭山の崇信禪師をいふ、天皇道悟禪師の法嗣なり。

(セ)明州雪竇山の重顯禪師は、智門光祚禪師の門人にして、雲門宗の祖師なり。

(ス)明招の謙は婺州明招山の德謙禪師なり。羅山道閑禪師の法嗣にして、靑原下八世に屬す。

(イ)巖頭は鄂州巖頭山の全豁禪師をいふ。德山宣鑑の法嗣なり。識破云云は末後の句をいふなり。

中收不得、汝道へ、過甚れの處にか在る。」師曰く、「過動用の中に在り。」山便ち喝して果卓を掇却せしむ。後に諸方、首座を稱して踢天太と曰ふ。傳燈錄に泰長老に作る。

密師伯

潭州神山の僧密禪師は、時に密師伯と稱す。雲巖の晟に嗣ぐ。師嘗て洞山の价公と同じく遊山して龍山和尙に見ゆ。价公の問答は隱山の下に見えたり。又傳燈錄の鄂州百顏の明哲禪師の傳に、洞山と密師伯と到り參ず、師問うて曰く、「闍梨、近離什麼の處ぞ。」洞山曰く、「近ろ湖南を離る。」師曰く、「觀察使、姓は什麼ぞ。」曰く、「姓を得ず。」師曰く、「名は什麼とか名く。」曰く、「名くることを得ず。」師曰く、「還つて事を治すや無や。」曰く、「自ら郎幕の在るあり。」師曰く、「豈に出入せざらんや。」洞山拂袖して去る。

泰布衲〔遵布衲、稠布衲〕

南嶽の玄泰禪師、性、方正を摻つて、言浪に施さず、衡山の東七寶と號する臺に居す。蠶縷を衣ず、時に之を泰布衲と謂ふ。始め德山に見え、後に(ロ)石霜に謁して遂に室に入る。〔遵布衲は未だ眞名を詳にせず。浴佛の次で、藥山曰く、「這個は汝が浴するに從ふ、還つて那箇を浴し得てんや麼や。」遵曰く、「那箇を把り將ち來れ。」山乃ち休す。又稠布衲は何れの人といふことを知らず。(ハ)禪林僧寶傳の(ニ)曹山の寂の章に曰く、「稠布衲といふものあ

(ロ)石霜は潭州石霜山の慶諸禪師をさす。潭州道吾山の圓智禪師の法嗣なり。
(ハ)禪林僧寶傳は宋の覺範慧洪の撰述にして三十卷あり。
(ニ)撫州曹山の本寂禪師は洞山良价禪師の法嗣なり。

り。問うて曰く、『披毛戴角、是れ什麼の墮ぞ。』寂曰く、『是れ類墮。』問ふ、『不斷聲色、是れ什麼の墮ぞ。』曰く、『是れ墮墮。』問ふ、『不受食是れ什麼の墮ぞ。』曰く、『尊貴墮』と。」

骨剉和尚

羅漢の宗徹禪師は、黄檗に依つて旨を領ぜり。或時上堂、僧問ふ、「如何なるか是れ西來意。」師曰く、「骨剉也」と。剉機多く此れを用ふ。時に骨剉和尚と號す。

紙衣和尚　「紙衣和尚、紙衣道者」

克符道者は號して紙衣和尚と曰ふ。臨濟に參見す。(ホ)四料簡の頌あり。

〔克符は乃ち琢州の紙衣なり。又洪州の紙衣和尚あり、(ヘ)大安に嗣ぐ。又紙衣道者は、其の姓氏を顯さず。僧寶傳の曹山の寂の章に曰く、「僧あり、紙を以て衣を爲る、號して紙衣道者と爲す。洞山より來る。寂問ふ、『如何なるか是れ紙衣下の事。』僧曰く、『一裘才に體に挂けて、萬事悉く皆如なり。』又問ふ、『如何なるか是れ紙衣下の用。』其の僧前んで立つて曰く、『諾』と。卽ち脫し去る。寂曰く、『汝但だ恁麼に去ることを解して、恁麼に來ることを解せず。』僧忽ち眼を開いて曰く、『一靈の眞性、胞胎を假らざる時如何。』寂曰く、『未だ是れ妙ならず。』僧曰く、『如何なるか是れ妙。』寂曰く、『不借借。』其の僧、坐して堂中に於て化す」と。」

(ホ)臨濟の四料簡とは、(一)あるときは人を奪つて境を奪はず、(二)あるときは境を奪つて人を奪はず、(三)あるときは人境ともに奪ふ、(四)あるときは人境ともに奪はず。

(ヘ)大安は福州の大安禪師にして百丈懷海禪師の法嗣なり、勅諡圓智禪師と號す。

不語通

廣州和安寺の通禪師は、婺州雙林寺に受業す。幼より言寡し、時の人之を不語通と謂ふ。因に佛を禮する次で、禪者あり、問ふ、「座主禮する底是れ甚ぞ。」師曰く、「是れ佛。」禪者乃ち像を指して曰く、「這箇は是れ何物ぞ。」師對なし。夜に至つて威儀を具して禮して問ふ、「今日の所問、某甲未だ意旨如何といふことを知らず。」禪者曰く、「座主、幾夏ぞや。」師曰く、「十夏。」禪者曰く、「還つて出家を會すや、也た未だしや。」師、轉た茫然たり。禪者曰く、「若し也た會せずんば、百夏すとも奚かせん。」乃ち命じて同じく馬祖に參ず。江西に至るに及んで、祖已に圓寂す。遂に百丈に謁して頓に疑情を釋く。

钁頭通

益州北院の通禪師は、洞山に在つて衆に隨つて參請すれども、未だ旨に契はず。遂に洞山を辭して、嶺に入り去らんと擬す。洞山曰く、「善く爲ば飛猿嶺の峻なる好く看よ。」師沈吟良久しうす。洞山曰く、「通闍黎。」師、應諾す。洞山曰く、「何ぞ嶺に入り去らざる。」師此れに因つて省悟して、更に嶺に入らず。洞山に師とし事ふ。時に钁頭通と號す。

老觀和尚

福州烏石山の靈觀禪師は、本山の薛老峰に住して、黃檗の運に嗣ぐ。尋常戸を扃して、人罕に之を見る。唯だ一りの信士、毎に食時に至つて供を送るとき方に開く。稱して老觀和尚と曰ふ。「是れ乃ち

丁慕山に住する時なり。」

趙古佛

趙州從諗禪師は、南泉に嗣ぐ。僧、㋣雪峯に問ふ、「古澗寒泉の時如何。」峯曰く、「瞪目して底を見ず。」僧、曰く、「飲む者は如何。」峯曰く、「口より入らず。」僧、趙州に擧似す。曰く、「口より入らずんば、鼻孔裏より入るべからず。」僧却つて問ふ、「古澗寒泉の時如何。」州曰く、「苦。」曰く、「飲む者如何。」州曰く、「死。」峯聞き得て、乃ち曰く、「趙州古佛」と。遙に望んで作禮す。此れより諸方古佛と稱す。寂する年一百二十歲、眞際大師と謚す。「㋠楚石の琦、趙州勘婆の話を頌して曰く、「先づ行いて到らず、末後太だ過ぎたり。趙州屋裏に坐して、勘破す臺山の婆。獅子人を咬み、㋷韓獹塊を逐ふ。七百甲子の老兒、今日賊に和して捉敗す」と。」

㋣雪峯は福州雪峯の義存禪師にして、德山宣鑒禪師の法嗣なり。

㋠楚石梵琦禪師は徑山の元叟行端禪師の法嗣にして、元代の人なり。南嶽下第十八世に屬す。

㋷韓獹は韓國の俊犬の名なり。

岑大蟲

湖南の景岑禪師は招賢大師と號す。居に定所なし、但だ緣に徇つて物を接し、請に隨つて法を說く。時に衆之を長沙和尚と謂ふ。因に仰山と月を翫ぶ次で、山曰く、「人人盡く這箇あり、只だ是れ用不得。」師曰く、「恰も是れ汝を倩つて用ひん。」山曰く、「儞作麼生か用ひん。」師乃ち蹋倒す。山曰く、「㘞。直下箇の大蟲に似たり。」此れより諸方、稱して岑大蟲と爲す。法を南泉に得たり。

大哥和尙

石門寺の獻禪師は、(ヌ)青林に記を受けてより、兩處に開法す。凡そ對機多くは曰く、「好好大哥」と。時に之を大哥和尙と謂ふ。

大禪佛

五臺山の智通禪師は、自ら大禪佛と稱す。初め(ル)歸宗の會下に在つて、忽ち一夜連叫して曰く、「我れ大悟せり」と。衆之を駭く。明日上堂、衆集る。宗曰く、「昨夜大悟底の僧出で來れ。」師出でて曰く、「某甲。」宗曰く、「汝甚麽の道理を見てか便ち大悟と言ふ、試に說け看ん。」師曰く、「師姑は元是れ女人の做。」宗之を異なりとす。師便ち辭し去る。宗、門送して與に笠子を提ぐ。師、笠子を接得して、頭上に戴いて、便ち行いて更に回顧せず。

(ヌ)青林は洞山第三世師虔禪師なり、亦青林和尙とも號す。洞山良价の法嗣なり。

(ル)歸宗は廬山歸宗寺の智常禪師にして、馬祖道一禪師の法嗣なり。

劉陽叟

潭州石霜の慶諸禪師は、之を劉陽叟と謂ふ。道吾の印を受けて、迹を遁れて自處す。時に始めて二夏の僧たり。因に世を避けて俗に長沙劉陽の陶家の坊に混ず。人之を識らず。洞山の价訪ふて之を得たり。遂に辭けて石霜山に居す。「洞山、師に何ぞ道はざる、門を出づれば便ち是れ草といふの語あるを聞いて、驚いて曰く、「劉陽に古佛ありや」と。」

倶胝和尚

金華の㋟倶胝和尚は、亡名の尊宿なり。天龍和尚の一指頭の禪を得たり。婺州明招の謙、國泰に問ふ、「古人道く、倶胝祇だ三行の呪を念じて、便ち名、一切の人に超えたることを得たりと。作麼生か他の與に三行の呪を拈却せん。」泰一指を竪起す。謙曰く、「今日に因らずんば、爭か瓜州の客を得たることを識らん。」師一生、倶胝佛母准提陀羅尼を持誦して、諸の効驗を顯す。故に倶胝和尚と號す。

米七師〔辛七師〕

京兆の米和尚は、亡名の尊宿なり。又米七師と號す、或は米胡と曰ふ。法を潙山の祐に得たり。「又唐の陝府に辛七師といふ者あり、身に奇光あり、衆人之を重んずること神の若し。」

大小朗〔二人〕

慧朗禪師は、㋻石頭に造つて言下に信入す。後に招提寺に住して戸を出でざること三十年、凡そ參學の者至れば皆曰ふ、「去れ去れ、汝佛性なし」と。其の接機大約此の如し。時に之を大朗禪師と謂ふ。又小朗禪師あり、唐の嚴維の普・選の二上人に酬ゆる律詩の前對に曰く、「遙に知る大小朗、已に斷ゆ去來の心。」全篇は㋕瀛奎律髓に見えたり。

劉鐵磨

㋟倶胝和尚は南嶽下第四世なり。

㋻石頭和尚は唐の南嶽の希遷禪師にして、青原行思禪師の法嗣なり。無際大師と諡號せらる。

㋕瀛奎律髓は元の方回の撰述なり。四十九卷あり。

劉鐵磨は、潙山の祐和尚の嗣なり。碧巖集に曰く、「潙山を去ること十里にして菴を卓つ。一日去つて潙山を問ふ、山來るを見て便ち曰く、『老牸牛汝來るや』と。」木杯の曰く、「劉は姓なり、鐵磨とは鐵做底の磨子なり。言ろは磨齒快にして一切の物を碎くなり、然も此の尼、口牙俊利快便なり、人當るべからず。仍つて劉鐵磨と號す。」

伏虎

松溪の行儒禪師は、景福元年、中峰に菴す。虎あり、人を齧む、鄉人、衆を集めて之を捕へんとす。師乃ち虎に騎つて出でて迎ふ。衆大いに驚く。因つて之を呼んで伏虎と稱す。

雨禪師

雨禪師は光化中の人なり。師信と名く。隱山の故基に庵す。歲旱に民雨を祈つて響のごとくに應ず。馬氏、荊楚に據有し、之に欽み事へて敢て名はず、止だ雨禪師と曰ふ。

寒山〔拾得〕

寒山子は風狂の士、恒度をもつて之を推すべからず。天台の寒巖に隱居す。樺皮を以て冠と爲し、大木屐を曳く。或は辭氣を發して、宛も所歸有りて佛理に歸す。後に巖石穴縫の中に入つて、杳として蹤跡を絕す。而も其の本氏族無し。越の民唯だ呼んで寒山子となす。「天台の國淸寺に拾得といふ者あり、因に豐干禪師、赤城路の側に於て之を得たり、十歲可りなり。委問するに家なし。庫院に付し

て之を養ふこと三年にして、食堂を知せしむ。因つて拾得と號す。寒山子若し來らば、卽ち負ふて去る。或は長廊に快活と叫喚す。寺僧逐罵すれば、掌を撫して大いに笑ふ。」

胡釘鉸

胡釘鉸は唐の㋵散人なり。世名を以て顯さず。會元の㋟寶壽の章に曰く、「胡釘鉸參ず。師問ふ、『汝は是れ胡釘鉸なること莫しや。』曰く、『不敢。』師曰く、『還つて虛空に釘ち得てんや。』曰く、『請ふ、和尙打破せよ。』師便ち打つ。胡曰く、『和尙錯つて某甲を打つこと莫れ。』師曰く、『向後多口の阿師有つて、儞が與に點破すること在らん。』後に趙州に到つて前話を擧す、州曰く、『汝甚麼に因つてか他に打たる。』胡曰く『知らず過甚麼の處にかある。』師曰く、『祇だ這の一縫奈何ともせず。』胡是に於て省あり。州曰く、『且く這の一縫を釘せよ』と。」

㋵散人とは無用のやくにたゝぬ人の義。
㋟寶壽は鎭州寶壽第一世沼和尙をいふ。臨濟義玄禪師の法嗣なり。

五代

布袋和尙

釋契此は氏族を詳かにせず。形裁腲脮、蹙頞皤腹、常に杖を以て布囊を荷つて廛に入る。時に長汀子布袋和尙と號す。江浙の間多く其の像を畫く。〔又之を風和尙と謂ふ。〕

蜆子和尚〔豬頭和尚〕

蜆子は姓名を顯さず。心を洞山に印してより、俗に閩川に混ず。道具を畜へず、律儀に循はず。日に江岸に沿ふて蝦蜆を採掇して腹に充す。暮るれば卽ち東山の白馬廟紙錢の中に臥す。居民目けて蜆子和尚と爲す。㋹箇北磵、賛あり、曰く、「蜆兒蜆子齋盂に實つ、少小より持齋して蔬を茹はず。洞を出で來つてより敵手なし、豬頭鷄足是れ門徒。」〔務州の沙門志蒙、姓は徐氏、常に錦衣を衣、豬頭を食することを喜ぶ。人の災祥を言ふに、驗あらずといふこと無し。人を呼んで小舅と爲す、自ら徐姉夫と號す。一日、三衢の吉祥寺に坐化す。遺言すらく、「吾れは是れ定光佛なり」と。是に至つて眞身を奉じて祈禱して歇まず。世に之を目けて豬頭和上と曰ふ。又時に金華尊者と稱す。㋞廣壽開山和尚、讃あり、曰く、「亥元木樝羹を喫するが如し、格外の風流一生を過す。是れ末梢好手に誇るにあらずんば、佗の箇箇深坑に落つることを賺す。」雞足未だ詳かならず、且く考を俟てと。

跛脚子

韶州の雲門大師、名は文偃、初め睦州に至つて聞くに、老宿あり、古寺に飽參して門を掩ひ、蒲履を織つて母を養ふと。往いて之を謁す。門を扣くに方つて、老宿之を㋡搷して曰く、「道へ道へ」と。

㋹北磵、諱は居簡、宋の淨慈寺の北磵に住して號となす。拙庵德光禪師の法嗣にして、楊岐派第五世に屬す。
㋞廣壽開山和尚とは、豐前廣壽山福聚寺開山卽非如一禪師をいふなり。隱元隆琦禪師の法嗣なり、黃檗宗に屬す。
㋡搷はったんさする、ねらふ意なり。

[illegible]驚いて答ふるに暇あらず。乃ち推し出して曰く、「秦時の㊁轆轢鑽」と。隨つて其の扉を掩ふに、師の右足を損す。因つて跛脚子の號あり。雪峯に得法す。㊂倫斷橋は瑞巖にありて、結夏小參に擧す。僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ諸佛出身の處。」雲門曰く、「東山水上行。」後來㊃圜悟道く、「若し是れ天寧ならば、卽ち然らず。忽ち人あつて、如何なるか是れ諸佛出身の處と問はば、薫風自南來、殿閣生微涼。」拈じて曰く、「一箇の跛脚子、一箇の巴頭子、互に相發明す。故に是れ作家、其れ奈せん。松柏千年靑し、時の人の意に入らざることを。」「師は嘉興の人なり。又偃浙子と稱す。又㊄眞淨の文、乾峯一路の話を拈じて曰く、「只だ乾峯の恁麼なるが如き、曾て夢にだも見るや也た未だしや、若し是れ老僧ならば然らず。十方㊅薄伽梵、一路涅槃門、未審し路頭甚麼の處にかある。劈脊に便ち棒して却つて伊に問はん、路頭甚麼の處にかある。伊が口を開かんと擬せんを待つて、熱喝して出で去らん。更に箇の雲門折脚の老比丘あり、緇素を分たず、正邪を辨ぜず。扇子を拈じて曰く、『扇子𨁝跳して三十三天に上つて、㊆帝釋の鼻孔に築着す。東海の鯉魚打つこと一棒すれば、雨盆の傾くに似たり』と。遮般の和泥合水の漢に似たらば、糞掃堆裏に十箇五

㊁轆轢鑽はめぐろのみのこと、秦のときの轆轢鑽は木に入ることさ能はぬとの意なるべし。方語に、「儞が入頭の處なし」とあり。

㊂斷橋妙倫禪師は無準師範禪師の法嗣にして、宋の杭州淨慈寺に住す。楊岐派第九世なり。

㊃圜悟克勤禪師は五祖法演禪師の法嗣にして、楊岐派第四世なり。

㊄宋の眞淨克文禪師は、黃龍慧南禪師の法嗣なり、黃龍派第二世に屬す。

㊅薄伽梵は梵語なり、衆德成滿の意義にして、如來の尊號の一なり。

㊆帝釋とは釋提桓因にして、忉利卽ち三十三天の天主なり。

箇を埋却すとも、又甚の過か有らん。阿呵呵、樂不樂、足不足、而今幸に山青く水綠なるに對して、年來是の事一時に休す。身心を信任して拘束するに懶し。大衆、瞌睡を休めば好し」と。」

鑒多口

巴陵新開の顥鑒大師は、雲門の偃に嗣ぐ。碧巖に曰く、「巴陵衆中に之を鑒多口と謂ふ。常に坐具を縫ふて行脚す。深く佗の雲門脚跟下の大事を得たり。」多口と謂ふは、師辯口利舌、故に此の稱ありと云ふ。「雪竇、銀盌に雪を盛る話を頌して曰く、「老新開端的別なり、道ふことを解す銀盌裏に雪を盛ると。九十六箇應に自知すべし、知らずんば卻つて天邊の月に問へ。提婆宗。提婆宗、赤幡の下清風起る」と。」

獨眼龍

明招の德謙禪師は、羅山の印記を受けて、一隅に滯らず。玄旨を擊揚して、人皆其の敏捷を畏る、敢て鋒に當るもの鮮し。左目を失するを以て、遂に獨眼龍と號す。

扣冰古佛

扣冰澡先古佛は、初め雪峯に參ず。峯曰く、「子異日必ず王者の師と爲らん。」後に鵞湖より溫嶺に歸つて菴を結ぶ、繼で將軍巖に居す、二虎側に侍す。神人地を獻じて瑞巖院と爲す、學者爭ひ集る。夏は楮を衣、冬は氷を扣いて浴す、故に世人號して扣冰古佛と爲す。

華嚴和尙

華嚴和尙は、五代亡名の尊宿なり。法を曹山の寂に嗣ぐ。僧、問ふ、「既に是れ華嚴、還つて華を將ち得來るや。」師曰く、「孤峯頂上千指秀づ、一句機に當つて聖明に對す。」

備頭陀

玄沙宗一大師　法名は師備、姓は謝氏、幼にして好んで釣を垂る。小艇を南臺江に泛べて、漁者に狎る。忽ち(ノ)出塵を慕ふて落髪す。布衲芒履、食纔に氣を接ぐ。常に終日宴坐す。(オ)雪峯の存と本法門の昆仲なり。後に其の法を嗣ぐ。雪峯、其の苦行を以て、呼んで備頭陀と爲す。問ふ、「如何なるか是れ清淨法身。」師曰く、「膿滴々地。」又問ふ、「如何なるか是れ親切底の事。」師曰く、「我れは是れ謝三郎」と。師、(ク)還鄕の偈有り、盛んに世に傳ふを以て、故に遂に還鄕和尙と號す。

羅漢「羅漢和尙二人、王羅漢、常羅漢、牟羅漢」

地藏の桂琛禪師は、李氏に生る、常山の人なり。初め雪峯の存公に謁して、大いに發明せず、又玄沙に事へて、遂に奥に臻る。漳州の牧王公、請じて城西の石山に住せしむ。十餘年にして羅漢院に遷つて、衆の爲に法を宣ぶ。閩人止だ呼んで羅漢と曰ふ。「唐宋に羅漢和尙といふもの有り、共に亡名の

(ノ)出塵とは煩惱の塵垢を出離すること。四十二章經に曰く、「透二得此門一、出塵羅漢」と。
(オ)雪峯存、名は義存、法を德山に嗣ぐ。五代梁の太祖開元三年に寂す、年八十七。
(ク)還鄕偈、曰く、「還鄕寂寂として杳として蹤なし、孤帆を挂けず水陸に通ず、故關を踏得して田地穩なり、更に南北と西東となし。」

尊宿なり。唐の羅漢は關南の常に嗣ぐ。宋の羅漢は㋳香林の遠に嗣ぐ。又宋に王羅漢・常羅漢といふもの有り、王は明州の乾明寺に住す、不測の僧なり。漢南王錢氏、私に名を易へて、密修神化尊者と爲す。常は嘉州の異僧、好んで人を勸めて羅漢齋を設く、又牟羅漢は眉人、名は安。廂兵、倅廳に隷するを以て、岷山に如く。清坂に陟上して、忽ち髯者に遇ふ。顧み笑つて曰く、「汝飢う、柏子を食はざるや」と。子を摘んで其の口に投ず。是れより火食せずと云云。一日江水暴に漲る、牟遂に笠を水に置いて、其の上に趺坐して、江を截つて以て濟る。觀る者之を異む。時の人、皆牟羅漢を以て之を呼ぶ。」

孫公

長慶の慧稜禪師は、杭州鹽官の人、姓は孫氏、業を蘇州の開元寺に隷して、禪肆に歷參す。後に雪峯に見えて、疑情氷のごとくに釋く。同參の鼓山、常に呼んで孫公と爲す。㋖鏡清の怤の曰く、「若し是れ孫公にあらずんば、便ち髑髏野に徧きことを見ん」と。

手相大師

歸本禪師は雪峯を禮す。峯、禪牀を下つて、背を跨つて坐す。師、是に於て省覺す。後に襄州雲蓋山の西雙泉禪院に住す。師の手指纖く長うして千人に異なる。時に手相大師と號す。

㋳香林遠、諱は澄遠、雲門に嗣ぐ。
㋖鏡清怤、道怤禪師なり、玄沙に法嗣す。

小怤布衲

鏡清の怤禪師、初め雪峯に謁して機緣あり、峯一日垂語して曰く「此の事恁麼に尊貴なることを得、恁麼に綿密なることを得たり。」師對へて曰く、「道怤到來してより數年、恁麼の示誨を聞かず。」峯曰く「我れ向前に無しと雖も、今已に有るが如し。妨ぐる所有ること莫しや。」師曰く、「不敢、此れは是れ和尚已まざる而已。」雪峯曰く、「我れ此の如し。」師此れより信入して且つ衆に隨ふ。後に鏡清禪苑に住して、雪峯の旨を唱ふ。閩中之を小怤布衲と謂ふ。

照布衲

靈照の眞覺禪師は高麗の人なり。閩越に萍遊して、雪峯の堂に陞り、冥に玄旨を領ず。居唯だ一衲閩中之を照布衲と謂ふ。

矮師叔

疎山の匡仁禪師は形短矮し、㋐香嚴和尚、時に矮師叔と稱す。又矬師叔と曰ふ。叢林に呼んで矮闍梨と爲す。僧寶傳の曹山寂の章に曰く、「感通の初め、高安に至つて、悟本禪師价公に謁す。依止すること十餘年、价以爲らく、己に類するに大法に堪任たらん」と。是に於て名、叢林に冠たり。將に辭し去らんとす。价曰く、「三更に當に來るべし、汝に曲折を授けん」と。時に矮師叔といふ者、之を知つて、繩牀の下に蒲伏す、价知らざるなり。中

㋐香嚴は鄧州香嚴寺の智閑禪師なり、潙山靈祐禪師に嗣法す。

夜に寂に先雲巖の付する所の寶鏡三昧・五位顯訣・三種滲漏を授け畢る。再拜して趨り出づ。矮師叔頸を引いて、呼んで曰く、「洞山の禪我が手に入る」と。价大いに驚いて曰く、「盜法のもの、倒屙及ぶこと無からん。」後に皆言ふ所の如し。

覺鐵觜

楊州城東光孝院の慧覺禪師は、趙州の嗣子なり。嘗て崇壽に到る。法眼問ふ、「近離甚れの處ぞ。」師曰く、「趙州。」眼曰く、「承り聞く、趙州に庭前柏樹子の話ありと、是なりや否や。」師曰く、「無し。」眼曰く、「往來皆言ふ、僧問ふ、『如何なるか是れ祖師西來意。』州曰く、『庭前の柏樹子』と。上座何ぞ無しと言ふことを得る。」師曰く、「先師實に此の語なし、和尚、先師を謗ずること莫くんば好し。」光明藏に寶曇の曰く、「此れ覺鐵觜なり、用處電の如し、而して霹靂之に隨ふ。其れ能く龍蛇を起して雲雨を渙ぐ。」法眼と相見せり。

㋑南院慧顒禪師は興化存弉禪師の法嗣にして、臨濟宗第三世なり。

安鐵胡

潁橋の安禪師は㋑南院顒の嗣子なり。時に鐵胡と號す。鍾司徒と火に向ふ次で、鍾忽ち問ふ、「三界焚燒の時、如何が出得せん。」師、香匙を以て火を撥開す。鍾擬議す。師曰く、「司徒、司徒。」鍾忽ち省あり。

老華嚴

魏府の老華嚴、諱は懷洞、初め華嚴の敎を弘む。晚に興化の存奬禪師に參じて、敎外別傳の旨を得、遂に天鉢に出世し、次に歴沙禪苑に徙る。河朔の緇素之に尊び事ふ。故に老華嚴と稱す。禪門宗派圖に、天鉢和尚の系の興化に出づる者あるは是れなり。

大禪佛

霍山の景通禪師、始めは仰山に參ず。山、目を閉ぢて坐す。師乃ち右足を翹てて起つて曰く、「如是如是、西天の二十八祖も亦是の如し、中華の六祖も亦是の如し、和尚も亦是の如し。景通も亦是の如し」と。仰山起ち來つて打つこと四藤條。師此れに因つて自ら集雲峰下の四藤條、天下の大禪佛と稱す。師化緣將に畢らんとす。先づ薪を郊野に備へ、徧く檀信を辭し、食し訖つて薪所に至り、弟子に謂つて曰く、「日午に當に來り報ずべし。」日午に至つて、師自ら炬を積薪の上に執り、笠を以て頂後に置き、圓光の相を作し、手に拄杖を執つて、降魔の杵の勢を作し、立ちながら紅燄の中に終ふ。

澄散聖

靈澄散聖、訣を巴陵に受け、應接測り叵し。正燈錄に曰く、「泐潭の澄といふもの二人あり、共に雲門宗なり。其の一は靈澄と名く、巴陵の鑒に嗣ぐ。其の二は懷澄と名く、五祖の戒に嗣ぐ。皆泐潭に住す。而して黃龍の南の依る所のものは、乃ち懷澄なり、澄散聖に非ざるなり。」正宗贊に黃龍を讃し

て曰く、「會て監寺と栗棘蓬、十載同參、澄散聖冬瓜の印を搭けて、半生屈を受く」と。蓋し誤れり。㋙聯燈に懐澄を澄散聖と作すも亦誤るのみ。

長耳和尚

長耳和尚、諱は行修、姓は陳氏、泉州の人なり、少うして北巖院に投じて出家す。年始めて十八、存雪峯の存禪師に參じて、衆に隨つて請問す。未だ旨を詮せず、辭して言く、「浙に入り去らん」と。存曰く、「汝が與に容儀を理定し、彼の土人をして、相を睹て發心せしめん。」遂に其の耳を指して曰く、「輪郭幸に長く垂れて、㋓璫猶ほ短し。吾れ汝が爲に之を伸ばさん」といつて、雙手をもつて平に曳けば、卽ち肩に及ぶ。是の如くなること三び、此れより長く垂る。見る者目を擧す。後唐の天成二年丁亥の歲、浙中に入る。城を傾けて瞻望す。檀施紛紛たり。杭人、長耳を以て之を稱す。示寂の後、弟子漆布を以てす。今猶ほ存す。

㋙聯燈錄は宋の晦翁悟明の撰する所なり。
㋓璫は耳かざりの珠なり。
㋢天台の德韶國師は法眼文益禪師の法嗣にして、法眼宗の第二祖なり。

小壽禪師

興教和尚、諱は洪壽、錢唐曹氏の子なり。之を小壽と目く。林間錄に曰く、「杭州興教小壽禪師は、初め㋢天台の韶國師に隨つて普請す。墮薪を聞き、偈を作つて曰く、『撲落他物に非ず、縱橫是れ塵にあらず。山河及び大地、全く法王身を露す』國師之を頷くのみ。」〔案ずるに、小壽は恐らくは㋐永

明の延壽を以て大壽と爲し、師を小壽と爲す者か。猶ほ大本小本及び大範小範等のごとし。」

小彥長老

台州瑞巖の師彥禪師、姓は許氏、閩越の人なり。初め杜默を樂しんで、言ふこと能はざる者に似たり。巖頭に見えて領會す。時の人目けて小彥長老と爲す。〔㋚無門關に云く、「瑞巖和尚、毎日自ら主人公と喚び、復た自ら應諾して乃ち曰く、「惺惺着。喏、他時異日、人の瞞を受くること莫れ。喏喏と。」

大小靜〔二人〕

國清寺の師靜は、印を玄沙に得て、天台に居すること三十餘載、山を下らず。三學を博綜して、操行孤立なり。禪寂の餘、龍藏を閱す。遐邇欽重して、時に大靜上座と謂ふ。師因に敎中幻の義を視て、乃ち一偈を述して諸の學流に問ふ。偈に曰く、「若し法皆幻有の如しと道はば、諸の過惡を造るも應に咎無かるべし。云何ぞ所作の業忘れず、而も佛慈に藉つて接誘を興す。」時に小靜上座あり。答へて曰く、「幻人幻を興して幻輪圍む、幻業能く招くも幻の治する所、幻生諸幻の苦を了ぜずんば、如幻を覺知するも幻爲すこと無けん。」二靜上座並びに本山に終ふ。今國清に其の遺蹤あり。〔禪者、師靜に問うて曰く、「坐の時心念紛飛す、願はくは師示誨せよ。」靜云く、「汝當に心念紛飛の時、却つて紛飛の心を將つて、以て紛飛の處を究むべし。之を究めて處無きときは、即ち紛飛の念、何か存せん。反つて究心を究む

㋐杭州永明寺の延壽禪師は、天台德韶國師の法嗣なり。
㋚無門關は宋の無門慧開の撰する所にして一卷あり。

るときは、則ち能究の心安にか在らん。又能照の智本空なれば、所縁の境も亦寂なり。寂にして寂に非ざれば、蓋し能寂の人なし。照にして照に非ざれば、蓋し所照の境なし。境智倶に寂なれば、心慮安然。此れ乃ち還源の要道なり」と。」

國譯禪林口家混名集卷之上 終

國譯禪林口實混名集卷之下

晩學沙門斷橋撰す

宋

樓子和尚

樓子和尚は、何れの許の人といふことを知らず、未だ法嗣を詳にせず、其の名氏を遺る。一日偶街市の間に經遊して、酒樓の下に於て襪帶を整ふ。次で樓上の人の曲を唱ふるを聞くに、曰く、「汝既に無心ならば我れも也た休せん。」忽然として大悟す。因つて樓子和尚と號す。

端師子

西余の淨端禪師、始め師子を弄ずる者を見て心要を發明す。則ち綵帛の其の皮を像るを以て常に之を着く。因つて端師子と號す。雪の朝毎に綵衣を著けて城に入る。小兒爭ひて譁しく之を逐ふ。人に從つて錢を乞ふ。得れば卽ち以て飢寒の者に散ず、常に法華を誦す。又好んで漁父の詞を歌ふ。湖州の西余山に住して、(イ)翠峯の月に嗣ぐ。

(イ)翠峯月は蘇州洞庭翠峯の慧月禪師なり。谷隱蘊聰禪師の法

珍師子

㊆別峯の珍和尚は、㊇佛心の才の嗣子なり。鼓山を退いて育王に詣し、大慧を候見す。一蒲團を佛殿の後に置いて、坐すること七十九日、因に秦國太夫人。大慧を請じて陞座せしむ。私に自ら喜んで曰く、「今日見ることを得んこと必せり」と。果して一見を得たり。語、室中に合ふ。復た三轉の語を投じて去る。大慧大いに之を奇として、遂に宏智と同じく之を擧して、岳林に住せしむ。師偏身長毫あり、時に珍師子と號す。

珍布衲

建陽の惟珍禪師、天賚和雅にして、杜多の行に篤し。嘗て粗布の僧伽黎を搭く。韻致高古、叢林、珍布衲の名あり、㊈慈明に參じて旨を得たり。出でて洪州の百丈山に住す。

元布袋

護國の景元禪師は、資度豊碩、世に畵く所の布袋和尚といふ者の如し。故に人之を稱して元布袋と爲す。圓悟に參じて、豁然として大いに徹す。繼いで執侍す。機辯逸發、圓悟目けて聱頭の元侍者と爲す。遂に自ら肖像に題して、之に付して曰く、「生平只だ聱頭の禪を說く。聱頭に撞着すれば鐵壁の

嗣にして、臨濟下第七世なり、然れども續傳燈錄によるに、西余淨端は慈聰の法嗣龍華齊岳の法嗣なり。

㊆別峯珍は福州鼓山の別峯祖珍禪師なり。

㊇佛心才は潭州上封の佛心本才禪師なり、黃龍維淸禪師の法嗣にして、黃龍派の第四世なり。

㊈慈明祖圓禪師は汾陽善照禪師の法嗣にして、臨濟下第七世なり。

ごとし、云云と。」又圓悟嘗て人に語つて曰く、「我れに些子の禪あり、元兄一布袋に盛り將ち去れり。」

元五斗

成都府昭覺の徹庵道元禪師は、綿州鄧氏の子なり。法を圓悟の勤に嗣ぐ。(ホ)大慧の武庫に云く、「寶峰の元首座も亦有道の士なり。答話の機鋒鈍なり。覺範號して元五斗と爲す。蓋し口を開き氣を取つて、五斗の米を炊ぎ得て、熟して方に一轉語を答ふ。」〔元、一には源に作る。(ヘ)羅湖野錄に曰く、「源應機鈍なること甚だし。(ト)寂音目けて源五斗と爲す。蓋し口を開いて氣を取つて、五斗の粟を炊熟して、方に能く一轉語を酬ゆ。」(チ)妙喜老師は蚤に嘗て源が爲に知らる。因に李商老に謁して、年を逾えて歸る。源之を譏めて曰く、「啞、荒し了れり、豈に無常迅速を念はざらんや。」老師常に此れを以て學徒に語つて且つ謂く、「當時覺えず汗下る」と。」

元枯木〔成枯木、榮枯木、枯木道人〕

溫州雁山能仁祖元禪師、姓は林氏、七閩長樂の人なり。風骨淸癯にして、危坐して日を終ふ。大慧嘗て目けて元枯木と爲す。遂に其の法を得たり。乃ち(リ)洋嶼發明の者十三人の一のみ。〔枯木の法成は(ヌ)芙蓉の楷に嗣ぐ。榮禪師も亦枯木と號す。無方の安に嗣ぐ。所謂成枯木・榮枯木といふ者是れなり。

(ホ)大慧普覺禪師宗門武庫は二卷あり、參學道謙の編輯する所なり。

(ヘ)羅湖野錄は宋の曉瑩の撰する所なり、四卷あり。

(ト)寂音は宋の覺範慧洪の號なり。

(チ)妙喜は宋の大慧宗杲の號なり。

(リ)洋嶼は福州長樂縣の洋嶼を指す、紹興四年、大慧ここに庵を建つ、學徒五十日ならずして法を得るもの十三人ありきといふ。

(ヌ)芙蓉道楷は投子義靑の法嗣にして、曹洞宗第八世なり。

然れども混名に非ず。故に惟だ元枯木一人を出して、成榮の二公を取らず。又元の天目師子巖の一山行魁首座は、蘇州の人なり。枯木道人と號す、嘗て㋸妙高峰に見え來る。師天資敏捷にして、內外典に通ず。其の滅後、身を洪氏の家に託して、空室和尚に謁す。事は續燈存稿に載す。」

元青州〔慶福建〕

北京天盋寺の重元禪師は、青州千乘孫氏の子なり。㋾天衣の懷に得法す。懷、印可して曰く、「此れ吾が家千里の駒なり」と。武庫に曰く、「懷禪師、㋻秀圓通に謂つて曰く、『元青州、慶福建並びに汝三人克く吾が宗を振はん。自餘は皆是れ根に隨つて道を受く』と。」〔慶福建は未だ詳ならず。〕

蘭布裩

光孝の慧蘭禪師は、自ら碧落道人と號す。㋕大潙の喆に得法す。師嘗て觸衣を以て七佛の名を書す。叢林稱して蘭布裩となす。擬草庵の歌一篇あり、世に行はる。

皓布裩

㋵玉泉の皓禪師は、元豐の間、衆に襄陽の谷隱に首たり。望諸方を聳す。無盡張公、使を京西南路に奉ず。就いて之に謁す。問うて曰く、「師何人にか得法す。」師曰く、「㋟復州北塔の廣和尚。」公曰

㋸高峰原妙は雪巖祖欽の法嗣にして、虎丘派第七世に屬す。

㋾天衣義懷は雪竇重顯の法嗣にして、雲門宗第五世なり。

㋻圓通法秀は天衣義懷の法嗣なり。

㋕大潙慕喆は翠岩可眞の法嗣にして、臨濟下九世に屬す。

㋵玉泉承皓禪師なり。

㋟北塔思廣は五祖師戒の法嗣にして、雲門宗第四世なり。

く、「彼と相契ふ。得て聞きつべしや。」師曰く、「只だ伊が肯て人の與に說かざる爲なり。」公其の言を善しとして、致めて郢州の大陽に開法せしむ。師嘗て犢鼻褌を製して、歷代祖師の名を書す。而して之を服して乃ち曰く、「唯だ文殊普賢のみ有つて些子に較れり。」且つ帶上に書す。故に叢林目けて皓布褌と爲す。侍僧有り、之に效ふ。師見て訶つて言く、「汝何の道理を見てか、敢て以て戲事を爲すや。」僧尋で言ふ所の如くにして逝す。

盧公〔韓大伯〕

雪竇の重顯禪師、字は隱之、遂州の李氏に生る。法を㋹智門の祚に得たり。碧巖集に曰く、「昔雪竇、自ら呼んで盧公と爲す。他迹を晦して自ら貽すといふに題して曰く、『圖畫昔年洞庭を愛す、波心七十二峰靑し。而今高臥して前事を思へば、添へ得たり盧公が石屏に倚ることを』と。」師初め㋒大陽の玄の會下に在つて、客を典するとき、僧と夜話し、古今を㋨雌黃す。趙州柏樹子の因緣に至つて、客問うて云く、「當時覺鐵觜曰く、『先師實に此の語なし』と、而して法眼之を肯ふ、其の旨安にか在る。」師曰く、「宗門の抑揚那ぞ規轍有らんや。」時に韓大伯といふ者あり、行者たり、寢ねて其の旁に侍す、輒ち笑つて去る。客退いて師之を數めて曰く、「賓客に對して敢て而るや。」對へて曰く、「㋧知客古今を定むるの辯有つて、古今を定むるの眼なし。故に敢て笑ふ。」師曰く、

㋹智門光祚は香林澄遠の法嗣にして、雲門宗第三世なり。
㋒大陽警玄　梁山緣觀の法嗣にして、曹洞宗第六世なり。
㋨雌黃は一種の繪の具なり、評定の意に用ふ。
㋧知客は賓客をつかさどる役の名なり。

「且つ趙州の意、汝作麽生か會す。」因つて偈を以て之に對ふ。「一兎身を横へて古路に當る。云云。」後に韓、師の會下に在つて、自ら宗㊀上座と號す。師偶經行して杖を植つ。衆衲之を環る。忽ち問うて曰く、「僧あり、雲門に問ふ、『樹凋み葉落つる時如何。』曰く、『體露金風。』雲門遮の僧に答ふるか、爲に解說するか。」宗曰く、「老漢の悟處有らんを待つて卽ち說かん。」師熟視て驚いて曰く、「韓大伯に非ずや。」曰く、「老漢瞥地なり。」〔雪竇は七翰林の才有り、或は曰く、「十翰林の才なり」と。賓翰林の號此に在り。韓大伯は苦行の僧なり。林間錄に或の曰く、「卽ち承天の傳宗禪師是れなり」と。然らば則ち韓後に法を雪竇に嗣ぐ者か。古人承嗣の無私なること見るべし。」

㊀上座とは上位の僧を呼ぶ敬稱なり。

言法華〔風法華、久法華、法華朗、法華和尙〕

志言大士、姓は許氏、梵相奇古、直に視て瞬かず。口吻衮衮、識るべからず。常に法華を誦す。因つて以て言法華と稱す。靈異甚だ多し、慶曆年中に逝す。仁宗、內使を遣して、眞身の塑像を以て、其の居る所の開寶寺に置き、榜して顯化禪師と曰ふ。亦世に言風子と呼ぶ。〔又唐に風法華あり、姓は張、故に一には張法華と曰ふ。宋にも亦久法華あり、又隋の僧朗法師も、每に法華經を誦す。一座に七遍、終に七萬部に至る。時に法華朗と號す。又明の釋の傳記といふもの、三十餘載、日に法華を誦し、每に瑞應を獲たり、之を法華和尙と謂ふ。」

念法華

汝州㋶首山の念禪師は狄氏に生る、萊州の人なり。幼にして家を棄て、南禪寺に得度す。人となり簡重にして精識あり、專ら頭陀の行を修して法華經を誦す。叢林之を畏敬し、目けて以て念法華と爲す。風穴に至つて衆に隨つて作止す。參扣する所なし。然も終に敎外に別傳の法有るを疑つて言はず。風穴每に念ふ、㋰大仰、識あり臨濟の一宗は風に至つて止らんと。之に當ることを懼る。熟座下を視るに、法道に堪任せる、念が如き者なし。一日陞座して曰く、「世尊青蓮の目を以て迦葉を顧みる。正是の時に當つて、且く道へ、箇の什麼ぞ。若し不說にして說くと言はば、又是れ先聖を埋沒せん。」語未だ卒らざるに、師便ち下り去る。侍者進んで曰く、「念法華、言ふ所なうして去る。何ぞや。」風穴曰く、「渠會せり。」

青華嚴

投子山の義青禪師は、法を大陽の玄に嗣ぐ。李氏の子なり。髮を薙り洛に入つて華嚴を聽く。義、貫珠の若し、故に叢林、青華嚴の譽あり。時に㋒圓鑑遠、席を退いて會聖巖に居す。遠夢むらく俊鷹を得て之を畜ふと。既に覺めて師適至る。遠以爲らく、吉徵なりと。意を加へて延いて之を禮す。留止すること三年。遠問うて曰く、「外道、佛に問ふ、『有言を問はず、無言を問はざる時如何。』世尊默然たり、如何が會す。」師、進語せんと擬す。遠驀に手を以て其の口を掩ふ。是に於て師開悟し、拜して起つ。遠曰く、「玄機を妙悟すや。」師曰く、「設ひ妙悟あるも、也た須らく吐

㋶首山省念は風穴延沼の法嗣にして、臨濟宗第五なり。
㋰大仰とは仰山慧寂を指す。
㋒圓鑑遠とは舒州浮山の法遠圓鑑禪師をいふ。葉縣歸省の法嗣にして、臨濟宗第七世なり。

御すべし。」時に資侍者といふ者有り、旁に在りて曰く、「青華嚴、今日病の汗を得るが如し。」師回顧して曰く、「狗口を合取せよ。汝更に切切ならば、我れ即ち嘔せん」と。服勤すること又三年。「圓鑒、大陽の皮履・布直裰を以て師に付し、洞上の宗旨を續がしむと云ふ。」

覺華嚴

智度の覺禪師、因に華嚴經を冥誦して、現相品に至つて曰く、「佛身、生有ること無し、而も能く出生を示す。法性、虚空の如し、諸佛中に於て住す。無住亦無主、處處皆佛を見る」と。是に於て華嚴の境界に悟入す。無盡居士に荊南に謁す。居士曰く、「若し向上の一着ならば、蔣山老に非ずして、孰か能く指南せん」と。遂に書を遣して師の紹介と爲す。其の略に曰く、「覺華嚴は乃ち吾が郷の大講主なり、云云」と。後に五年を經て、浮山の遠の削執論を閲して、頓に所疑を釋き、法を圓悟に嗣ぐ。

顒華嚴

投子の顒禪師、姓は梁氏、霍山の文廣上人に依つて出家圓具す。經を講席に横へて、洞に佛意を曉る。華嚴の九會、敷演すること三四たび、遂に諸方に遊び、蘇州瑞光圓照の法席に造つて、禪宗を扣問す。一日溷に登つて捺倒して、水瓶を打破して省あり。偈を作つて曰く、「這の一交、這の一交、云云」と。名聲藹然たり。遂に出世說法す。乃ち㊉圓照の本に嗣ぐ、初め壽州の資壽に住して數大刹に歴遷し、又舒州の投子に還る。道譽愈叢林に

㊉圓照宗本は天衣義懷の法嗣にして、雲門宗第六世なり。

播る。同じく號して顯華嚴と曰ふ。

安楞嚴〔楞嚴師〕

上方の遇安禪師、常に楞嚴經を閲す、「知見、知を立すれば卽ち無明の本、知見、見なければ斯れ卽ち涅槃」といふに至つて、師乃ち句を破つて讀んで曰く、「知見立すれば知卽ち無明の本、知見無ければ見斯れ卽ち涅槃」と。是に於て省あり、人あつて師に語つて曰く、「句を破り了れり。」師曰く、「此れは是れ我が悟處、生を畢るまで易へず。」時に之を安楞嚴と謂ふ。天台の韶國師に得法す。〔又楞嚴師、㋭名は㋨子璿、自ら楞嚴疏を作る、未だ成らざる時、文殊口に入ると夢む、時に楞嚴師と稱す。法を瑯邪の覺に嗣ぐ。〕

璉三生

宗璉禪師、姓は董氏、合州雲門の人、兒たりし時、言ふこと異なれり。遂に恩を蒙つて得度す。後に迹を南嶽に晦すこと二十年。三生藏に居す、因つて璉三生と號す。報恩・福嚴及び龍王・玉泉に歷住して、紹興中に寂す、壽六十四。㋷大潙の杲に嗣ぐ。〔林間錄に、㋳大覺の璉を以て、璉三生と作すは、恐らくは是に非ざらん。〕

頂三敎

㋨宋の長水子璿は、楞嚴經疏注經十卷など撰す。
㋭瑯邪慧覺は汾陽善昭の法嗣にして、濟臨宗第七世なり。
㋷大潙善杲は開福導寧の法嗣にして、楊岐派第五世なり。
㋳大覺懷璉は泐潭懷澄の法嗣に

福州東山の雲頂禪師は、泉南の人、㋮大愚の芝、㋘神鼎の諲の諸名衲に謁して、後に羅漢下の尊宿に見えて、始めて己事に徹す。道學聞ゆることあり、叢林稱して頂三教と爲す。㋫普燈の未詳嗣承に出づ。

如十智

㋙如無明は三衢の人、㋓雲蓋の智和尙に參じて、汾陽の十智同眞の話を悟る。凡そ禪を說くに便ち十智同眞を說く、叢林號して如十智と爲す。後に道場に住す、水庵圓極皆之に依る。故に圓極嘗て之を贊して曰く、「生鐵の面皮、湊泊し難し、等閒に歩を擧して乾坤を動ず。戯に十智同眞の話を拈じて、黃龍嫡骨の孫に負かず。」

して、雲門宗第五世なり。
㋮大愚守芝は汾陽善昭の法嗣にして、臨濟宗第七世なり。
㋘神鼎洪諲は首山省念の法嗣にして、臨濟宗第六世なり。
㋫普燈錄は宋の雷庵正受の撰する所なり。五燈の一。
㋙無明法如禪師なり。
㋓雲蓋守智は黃龍慧南の法嗣なり。

甘露滅〔安穩眠〕

寂音尊者、諱は德洪、字は覺範、江寧の淸涼寺に住して、狂僧の爲に誣告せられて罪に抵つ。張丞相、國に當つて、復た度して僧と爲す。詔あり、號を寶覺圓明禪師と賜ひ、自ら寂音尊者と稱す。又自ら甘露滅と號し、兼て甘露滅齋の銘を作る。因つて時に甘露滅を以て之を呼ぶ。枯崖和尙の曰く、「昔甘露滅、瑩仲溫、皆見地明白なり。其れ文字を以を之を多しとすべけんや」と。〔道融の曰く、庵堂の道號、前輩例して無し、但だ所居の處を以て之を呼ぶ。南岳・靑原・百丈・黃檗の如き是れなり。

庵堂は寶覺禪師、事を黄龍に謝して㋢晦堂に退居せしより始まる。人因つて以て之を稱す。自後㋐靈源・死心・草堂、皆其の高弟なるが故に、遞に相之に法る。㋚眞淨と晦堂と同じく黄龍の門に出づ。故に亦雲庵を以て之を號す。覺範は乃ち雲庵の子なり。故に寂音甘露滅を以て自ら標す。云云」と。道融は乃ち古月の融禪師なり。自ら安穩眠と號す、丹丘に住す、叢林盛事を撰す。

遠錄公〔薛大頭〕

浮山の遠禪師、姓は王氏。自ら紫石野人と稱す。年十九にして出家し、諸德に參じて契悟あり、圓鑑禪師と號す。晩に會聖巖に歸休す。法を葉縣の省に嗣ぐ。師嘗て達觀の穎、薛大頭の七八輩と蜀に遊んで、幾んど横逆に遭ふ。師、智を以て之を脱す。衆、師の吏の事を曉るを以ての故に、遠錄公と號す。〔眞淨和尚、遊方の時、二僧と偕に行いて谷隱の薛大頭に到る。問うて曰く、「三人同行するときは必ず一智あり、如何なるか是れ一智。」二僧語なし、淨、下肩に立つて聲に應じて便ち喝す。薛、拳を竪てて相撲の勢を作す。淨云く、「再勘を勞せず。」薛、拄杖を拽いて趁ひ出す。薛は石門の慈照禪師に見ゆと云ふ。照は首山の念に嗣ぐ。〕

㋢晦堂祖心にして、黄龍慧南の法嗣なり。

㋐靈源惟清、死心悟新、草堂善清の三人、みな晦堂祖心の法嗣なり。

㋚眞淨克文は黄龍慧南の法嗣なり。

丘氏伯

慧月禪師、姓は丘氏、信州永豐縣の人、初め湘漢に遊び、永豐に歸るに暨んで、或は巖谷に處し、

或は市廛に居す。鄕民稱して丘氏伯と曰ふ。法を㋖雲居の祐に得たり。

鄧師波

五祖法演和尙、初め四面に住し、後に蘄州の五祖に止る、其の法を嗣ぐ者の中に、世に三佛と稱するあり。乃ち㋴佛果の勤・佛鑑の懃・佛眼の遠なり。演和尙を以て鄧師波と謂ふは、㋱虛堂錄に曰く、「西川の鄧師波、東山下の左邊底を會得す。」鈔に曰く、「五祖の演は綿州鄧氏の子、師波は乃ち師伯なり。」「光明藏に曰く、「五祖和尙 暮年多く面目を振轉して曰く、『不是不是。』當時目けて振面の鐵酸餡と爲す」と。」

勤巴子

佛果圓悟禪師、諱は克勤、字は無着、彭州駱氏の子、法を五祖の演に嗣ぐ。所謂東山下三佛の一なり、諸方之を勤巴子と稱す。會元に曰く、「㋲靜南堂、後に天童に住す、天目の㋛文禮、師の畫像の贊を作つて曰く、「東山一會の人、唯だ他不唧𠺕、別處に閑房を著く。叢林講究し難し。邡水潭蛇出づ。人を驚かす鈍鐵鍋、鷄は啼く白晝の雜劇、打し來つて全火祇候す。晩歲疎慵を放つて、却つて俗と和同す。勤巴子、人をして勘驗せしむ。香貼を擲つて便ち家風を顯す。定光無佛、枉げて羅籠を費す。行くに臨んで鐸を搖して虛空に向ふ。那ぞ知らん喪盡す白雲宗。」又正 宗贊大慧の傳に曰く、「初

㋖雲居元祐は、黃龍慧南の法嗣なり。
㋴佛果克勤、佛鑑慧懃、佛眼淸遠の三師なり。
㋱虛堂錄は宋の虛堂智愚和尙の語錄なり、十卷あり。
㋲南堂元靜は五祖法演の法嗣なり。
㋛滅翁文禮は松源崇岳の法嗣にして、楊岐派第九世なり。

め湛堂に參じて侍者と爲る。堂、病革なり。師曰く、『和尚此の疾若し起たずんば、某甲去つて誰にか依附せん。』堂曰く、『勤巴子甚だ好し』と。」會元湛堂の章及び大慧の年譜に川勤に作る。又師の頭上に瘢痕有り、巴の字の如し、故に之を巴頭子と曰ふ。

杲風子

大慧普覺禪師、諱は宗杲、宣州の奚氏に生る。卽ち㊂雲峰の悅和尚の後身なり。叢林之を杲風子と謂ふ。正宗贊の㊃顏卍庵の贊に、「杲風子に随つて、遠く梅州に竄せらる」の語あり。又杲罵天・罵天翁の稱あり。妙喜庵に居するに因つて、自ら妙喜と號す。性褊急なり、故に自ら又褊急性菩薩と稱す。隆興中に寂す。勅して普覺と謚す、圓悟に師法す。

㊂雲峯文悅は大愚守芝の法嗣にして、臨濟宗第八世なり。
㊃卍庵道顏は大慧宗杲の法嗣なり。

會魔子

三祖の會禪師は天衣懷公の師なり。天資敬嚴にして、衆に臨んで煩苛なり。叢林之を目けて會魔子と爲す。

顯牛子

西蜀の顯禪師は紹覺白の剃度の弟子なり。白公、偈あり、之が南遊を送つて曰く、「古路迢迢として自ら坦夷、云云」と。後に演和尚に海會に參じて、機語相契ふ。久しうして成都に旋つて長松の命に

應ず。開堂の日、拈香して曰く、「一には則ち爐鞴功精し、一には磨淬極めて妙なり。二功並び著る、理孰か先と爲ん。道ふことを見ずや、本重く末輕し、風に當つて辨ずべし。此の香紹覺の爲にし奉る。爐中に爇向して、普天匝地をして、溝に塡ち壑に塞がらしむ。天下の衲僧氣を出す處なし」と。瑩仲温の曰く、「嗚呼、言浮にして其の實、隱さんと欲して彌露る。無乃ろ計の左なるか、其れ一宿覺と蓋し相萬せり。」蚤く㋲戴嵩の筆を善くするに至る。故に叢林目けて顯牛子と爲す。既に小技を以つて道望を掩ふ、故を以て情謬つて師承を紊る。而も後世の矜式と爲さば、其れ可ならんや。

福建子

介石朋禪師は閩人なり。性高簡にして㋝浙翁に得法す。諸方福建子と稱す。其の室に扁して靑山外人と曰ふ。師淨慈に住す。㋜珍藏叟、諸山の疏に曰く、「皇帝勅あり、況んや釋梵天より來る。丞相私なし、未だ嘗て福建子を嫌はず。」

杭州子

無等の才禪師は妙喜に衡陽に從ふ。一日因に入室す。喜問ふ、「庵内の人、什麼としてか庵外の事を見ざる。」師曰く、「鮎魚竹竿に上る。」喜、竹篦を以て迅撃一下す。師平生の疑情、渙然として冰のごと

㋲戴嵩は支那の畫家にして、韓滉を師とす、只だ牛を畫くに於ては、滉にまさることこそ甚だ遠しといふ。
㋝浙翁如琰は、大慧宗杲第三世の法孫なり。
㋜藏叟善珍は、大慧宗杲第四世の法嗣なり。

くに釋く。妙喜、此れより毎に師を呼んで杭州子と爲す。諸方も亦之に隨ふ。

建州子

㋑開善の謙和尚に建寧の人なり。初め京師に之いて圓悟に謁し、後に妙喜に泉南に隨ふ。喜、徑山を領ず、師も亦侍して行く。未だ幾ならざるに、喜、長沙に往いて紫巖居士に書を通ぜしむ。師自ら惟ふて曰く、「我れ參禪二十年、迥に入處なし、更に此の行を作す、決定して荒廢せん」と。意行くこと無からんと欲す。友人宗元といふ者、乃ち責めて曰く、「路に在つて參禪し得ざるべからず。吾れ汝が與に倶に往かん。」師已むことを得ずして往く。路に在つて泣いて、元に謂つて曰く、「我れ一生參禪、殊に力を得る處なし。今又途路に奔走す、如何が相應し去ることを得ん。」元之に告げて曰く、「但だ諸方に參得する底、悟得する底、圓悟、妙喜汝が與に說得する底を將つて、都べて理會せんと要せざれ、途中替るべき底の事、我れ盡く替り得てん。只だ五件の事有りて儞に替ることを得ず。」師曰く、「甚の五件の事ぞ。」元曰く、「着衣喫飯、屙屎送尿、箇の死屍を把つて路上に行く。」師言下に於て大悟して曰く、「兄に非ずんば如何が此の田地を得ん。」元卽ち途中より還る。師、長沙に到つて留ること半載、乃ち徑山に歸る。妙喜、杖を策いて門に倚つて待つ。師を一見して曰く、「建州子、這回別にし了れり。」

㋑開善道謙禪師なり。

烏頭子

無準の範禪師、少うして穎悟、機辯を以て自ら將く。蒙菴に雙徑に謁す。庵問ふ、「何れの處の人事ぞ。」師曰く、「劍州人。」又問ふ、「還つて劍を將ち得來るや。」師一喝を下す。菴曰く、「烏頭子も也た人を括噪す。」師髮黑し、時に號して烏頭と爲す。後に徑山に住して徽號金襴を賜ふ。法を破庵に嗣ぐ。「師の行狀に曰く、「老深首座といふ者あり、蜀の人なり。久しく病む、師爲に湯藥に執持す。深、平生惟だ一喝して事を用ふ。佛照疾を問ふ次で、深に謂つて曰く、『深首座何ぞ一喝すべからざる。』深却つて喝す。佛照曰く、『猶ほ主宰と作ることあり。』顧みて師に謂つて曰く、『何れの處の人ぞ。』師曰く、『劍州人。』佛照曰く、『劍を帶び得來るや。』師聲に隨つて便ち喝す。佛照笑つて曰く、『者の烏頭子、也た亂做。』師年方に二十にして、機に臨んで屈せざる類此の如し。貧甚だしうして薙髮するに資なし、故に佛照室中、常に烏頭子を以て之に目く」と。」

通烏頭

眞州北山の法通禪師は、法を長蘆の了に嗣ぐ。叢林稱して通烏頭と曰ふ。

箇浙客

明州天童の淸箇禪師は、錢塘張氏の子、師、事を爲すこと孤潔なり。時に之を箇浙客と謂ふ。晩に雪竇に居して終ふ。寺の東南隅に塔す、歸宗の柔に嗣法す。

了菩薩

㋺眞歇の了禪師は、之を了菩薩と謂ふ。正宗贊の丹霞の讃に曰く、㋑「威音王已前、了菩薩を收めて毫光一掌に歸す。云云」と。祖照禪師、長蘆に住す。座下常に千衆に滿つ。師㋩丹霞の會下より來る。時に年尙ほ幼し。祖照其の敏利なるを見て、衆に首たらしむ。後に退院、之が與に其の承嗣を意へり。拈衣に及んで乃ち曰く、「法を丹霞の室に得て、衣を祖照の庭に傳ふ。恩深うして轉た語なし、懷抱自ら分明」と。照樂まず、下座、其の衣を扯き奪ふ。師此れより終身、法衣を搭けず。江湖有識の者、皆其の本を忘れざるを雅なりとす。

覺夫子

㋥宏智の覺禪師、丹霞の淳に嗣ぐ。故に正宗贊の丹霞の讃に曰く、「夜明簾、覺夫子を擒へて、筆陣、千軍を掃ふことを借らず」と。蓋し師は丹霞の席下に在つて、牋記を掌る、故に之を覺夫子と稱す。「師は濕州李氏の子、因つて稱して濕州の古佛と曰ふ。」

泉大道

㋭南嶽芭蕉庵の谷泉禪師は性垢汚に耐へたり。大言にして遜らず、世に呼んで泉大道と爲す。其の歌頌、間大道を題とすること有るを以てなり。六巴鼻頌の如き曰く、「大道の巴鼻、悶着すれば瞌睡す。背に胡盧を負ふ、狂歌逸戲す」と。散聖禪師、衲僧座主、山童の巴鼻の頌あり、一日杖を以て大酒瓢

㋺眞歇淸了禪師なり。
㋩丹霞子淳は曹洞宗第三世なり。
㋥宏智正覺禪師なり。
㋭芭蕉谷泉は汾陽善昭の法嗣にして、臨濟宗第七世なり。

を荷つて、山中に往來す。人問ふ、「瓢中何物ぞ。」曰く、「大道醬なり」と。訣を汾陽に受く、慈明と同參なり。「泉一」には全に作る。揮塵後錄餘話卷の一に曰く、「皇祐の初め、名僧谷全、全大道と號す。道行を以て禪林に重んぜらる。廬山の圓通寺に住す。忽ち一男子、藥を貨つて山に入る。自ら曰く、『帝子なり』と。全其の狀貌を見るに、頗る異なり。厚く其の行を資けて京師に住かしむ。自陳鞫治するに、其の妄を得たり。廼ち郡人冷緒の男青なり。之を誅す。全、黥に坐して郴州に配せらる。郡中、城を築く土を荷はしむ。歲盛暑に當るを經て、忽ち擔を市中に弛いて、頌を作つて曰く、『今朝六月六、老全罪を受くること足れり。若し天堂に登らずんば、定んで地獄に入らん』と、言ひ訖つて趺坐して化す。郡人其の地に卽いて塔を建つ」と。」

泉萬卷〔超萬卷〕

蔣山の法泉禪師、幼歲にして出家し、群書目を過ぐれば誦を成す、叢林號して泉萬卷と爲す。後に蔣山に住す。一日筆を索めて偈を書し、跏趺して逝す。佛慧禪師と勅諡す、雲居の舜に嗣ぐ。紹聖元年東坡居士、嶺外の行あり、舟金陵に次つて風に江滸に阻てらる。師其れを迎へて至らしめ、從容として道を語る。是に於て居士、智海の燈の問あり、師偈を以て對ふ。居士、欣然として詩を以て其の事を紀す。〔超萬卷は曜庵と號す、博く經史に通じて、竹庵の珪・雲臥の瑩と友たり。天童の宏智目けて超萬卷と爲す。乃ち了堂の照禪師十世の祖なりと云ふ。〕

囘石頭

自囘禪師は世石工を業とす。眼盲龜の如く、一字を識らず。然も善根内に啓け、志空宗を慕ふ。人に求めて口授せられて、能く法華を誦す。遂に家を棄てて、大隋に投じて掃灑に供ず。寺中崖石を取らしむ。師手に鎚鑿を釋てず、而も經を誦して口に輟めず。一日石を鑿するに火光迸り出づ、忽然として徹悟す。人皆呼んで石頭和尚と爲す。所謂囘石頭といふ者是れなり。

古塔主

薦福の承古禪師、操行高潔にして、性を稟くること虚明なり。大光の敬玄に參じて、乃ち曰く、「祇だ是れ箇の草裏の漢。」遂に福嚴の雅和尚に參ず。又曰く、「祇だ是れ箇の脱灑の衲僧」と。是れに因つて、終日默然として先德の洪規を深究す。一日雲門の語を覽て、忽然として發悟す。此れより韜藏して名聞を求めず、雲居弘覺の塔所に棲止して、四方の學者奔湊す。因つて古塔主と稱す。「寂音、師の遙に雲門に嗣ぐを呵して曰く、「己に於ては甚だ重く、法に於ては甚だ輕し。」蓋し授受の要を紊るを以てなり。」

本慕顧〔古慕固〕

雲蓋智本禪師は、白雲端の師なり。本慕顧と謂ふは、乃ち是れなり。始め守智和尚の雲蓋に住するとき、太守山に入つて談空亭に憩ふ。問ふ、「如何なるか是れ談空亭。」智曰く、「只だ是れ箇の談空亭」

と。太守喜ばず、遂に擧して師に問ふ。師曰く、「只だ亭を將つて法を說く、何ぞ用ひん口空を談ずることを。」太守大いに喜ぶ。〔古墓固は未だ何人といふことを詳にせず。雲臥庵主の書に曰く、「禮の錄に、其の中に尙ほ雲蓋の古和尙を叢林に古墓固と謂ふもの、狗子無佛性の話を頌すと說くことあり。曰く、『狗子無佛性、終日庭前睡つて驚かず。狂風打落す古松子、起き來つて連吠す兩三聲。』老師曰く、『此れ狗子を吟ずる詩なり』と。」〕

馬嗜山

華亭昭慶寺の法寧禪師は、東密州莒縣、李氏の子なり。初め沂州天寧の妙空の明和尙に依つて得度す。參得既に久しうして、盡く雲門の宗旨を得たり。出世して沂の淨居寺に住し、大いに雪竇の道を弘む。嘗て因に馬嗜山に住す。時の人馬嗜山を以て之を呼ぶ。

眞點胸

翠巖の可眞禪師は福州の人なり。他に因つて胸襟を裝點して、高く人に過ぎんと欲す。故に點胸の名、叢林に播揚す。嘗て善侍者の爲に打難せられて、金鑾より回る。石霜の慈明呵して曰く、「解夏未だ一月ならざるに、乃ち已に此に至つて叢林を破壞す。何の忙しき事か有る。」師曰く、「大事未だ透脫せざる故のみ。」明曰く、「汝何を以てか佛法の要切と爲す。」師曰く、「雲の嶺上に生ずる無くんば、月の波心に落つる有り。」明訶つて曰く、「面皺み齒豁にして猶ほ此の見解を作す。」師敢て仰ぎ視ずして

曰く、「願はくは爲に之を決せよ。」明曰く、「汝問へ、汝れ答へん。」師前話を理る。明曰く、「雲の嶺上に生ずるなくんば、月の波心に落つるあり。」師遂に悟つて其の法を得たり。

南匾頭

洪州黄龍の慧南禪師、姓は章氏、慈明の圓に嗣ぐ。正宗贊に曰く、「天地に塞がる壯膽の氣、冲冲として江湖に滿つ。匾頭の名籍籍たり」と。又翠巖眞の曰く、「天下の佛法一隻の船の如し、大寧の寛師兄頭に坐し、南匾頭其の中に在り、可眞梢を把る、東に去るも也た我れに由り、西に去るも也た我れに由る。」又淸素首座、（ヘ）兜率の悦に謂つて曰く、「南匾頭、先師に見えて久しからずして、後に法道大いに振ふこと此の如し」と。師嘗て臺山婆子の因縁を頌して慈明に呈して曰く、

「叢林に傑出す是れ趙州、老婆の勘破來由沒し。而今四海鏡よりも淸し、行人路を以て讎と爲さず。」慈明手を以て沒の字を點じて師を顧みる。師卽ち有の字に易ふ。而して其の妙密に心服す。留まること月餘にして辭し去る。

（ヘ）兜率從悦は眞淨克文の法嗣にして黄龍派第三世なり。

文關西

眞淨和尚、諱は克文、陝府閿鄕の鄭氏より出づ。時に邵武の人、洪英首座、機鋒觸るべからず。師と名を齊しうす。衆中、英邵武・文關西を以て稱す。覺範、眞戒を請じて開福に住せしむる疏に曰く、「敵を八面に受けて、文關西の家風を蓋ひ、諸方を貶剝して、英邵武の膽氣あり。」二公共に黄龍の南に

嗣ぐ。

英邵武

(ト)寶峰の英禪師は邵武の陳氏に出づ。嘗て眞淨の文に謂つて曰く、「物暴に長ずる者は必ず夭折す、功速かに成る者は必ず壞し易し。久長の計を推さずして卒に成るに造るは、皆遠大の資に非ず。」英邵武とは是なり。

新孟八

死心禪師、姓は王氏、名は悟新、平生佛を呵し祖を罵り氣諸方を蓋ふ。故に叢林目けて新孟八と爲す。始め黄龍の寶覺禪師に謁して、談辯抵捂する所なし。寶覺曰く、「若のごときの技、此に止るや、云云。」一日(チ)下版に默坐す。會知事、行者を捶つ。師、杖聲を聞いて忽ち大悟す。奮起して其の履を納むることを忘る、方丈に趨つて寶覺に見えて、自ら曰く、「天下の人は總に是れ學得底、某甲は是れ悟得底。」寶覺笑つて曰く、「選佛甲科を得たり、何ぞ當るべきや。」師自ら號して死心叟と爲す。又其の居を榜して死心室と曰ふ。

旻古佛

(リ)圓通の旻和尚、興化仙遊の人、(ヌ)泐潭の乾に見えて其の法を得たり。諸方稱して古佛と曰ふ。左

(ト)泐潭洪英禪師、寶峰とは泐潭の寶蓮峯を指す。
(チ)下版は僧堂の下間の版頭なり。
(リ)圓通道旻禪師なり。
(ヌ)泐潭應乾は東林常總の法嗣にして、黄龍派の第三世なり。

丞范公致靈、初め內翰より出でて豫章に帥たり。侯溪に過つて、因に語る次で、范歎じて曰く、「行將に老いんとす、金紫行中に墮在して、此の事を知ること稍遠し。」師卽ち內翰と呼ぶ。翰應諾す。師曰く、「也た遠からず。」翰曰く、「好好、更に望むらくは指示せよ。」師曰く、「此去つて洪都、四程にあり。」翰佇思す。師曰く、「見ば卽ち見よ、思はんと擬せば卽ち差はん。」翰此れより所入あり。樞密吳公居厚、節を擁して鍾陵に歸つて師に見えて曰く、「頃省試に赴き、圓通の趙州關を過つて、因に前住訥老に問ふ、『透關底の事如何』と。訥曰く、『且く去つて官を做せ』と。今覺えず五十餘年。」師曰く、「曾て透關底の事を明め得るや。」吳曰く、「八次經過して常に念を存す。然も未だ脫灑ならざることあり。」師扇を擧し、之に與へて曰く、「請ふ扇を使へ。」吳、扇を揮ふ。師曰く、「甚の脫灑ならざる處か有らん。」吳大いに喜んで曰く、「便ち請ふ、末後の句。」師乃ち扇を搖すこと兩下。吳曰く、「親切親切。」師曰く、「咭嘹舌頭三千里」と。陳諫議彭公汝霖、手から觀音經を寫して師に施す。師拈起して曰く、「這箇は是れ觀音經、那箇か是れ諫議底。」彭曰く、「此れは是れ某の親書。」師曰く、「寫底は是れ字、那箇か是れ經。」彭笑つて曰く、「却つて了不得なり。」師曰く、「卽現宰官身而爲說法。」彭曰く、「人人分あり。」師曰く、「經を謗ずること莫くんば好し。」彭曰く、「如何が卽ち是ならん。」師、經を擧して之に示す。彭掌を撫して大いに笑つて曰く、「嗄。」師曰く、「又道へ了不得と。」彭乃ち頂禮す。安相國南遷せられ、經過して師に見え、嘆じて曰く、「一生做官、今日謫せらる。從前を覺見するに、但だ一夢なるのみ。」師曰く、

「相公覺するや。」安曰く、「此れ皆是れ本有、但だ未だ甚だ明了ならず。」師卽ち相公と召す。安首を擧す。師曰く、「了也。」安曰く、「事に使ひ得らるるを奈せん。」師曰く、「京を離るること幾程にか此に至る。」安曰く、「四十二日。」師曰く、「甚れの處にか得來る。」安笑つて曰く、「得力得力。」師曰く、「直下に受用し去れ。」安曰く、「如何が受用せん。」師曰く、「朝朝相似たり、日日一般。」安乃ち合掌す。師曰く、「但だ諸有を空ぜよ、諸無を實とすること莫れ、大率ね此の如くにして眞に大自在を得。」

端古事

南海の僧守端、字は介然、人と爲り高簡にして持律嚴甚なり。書史に於て博く究めずといふこと無し。古今を商搉して、動もすれば典據あり、叢林目けて端古事と爲す。亦喜んで詩を工にし、務むるに雅賞を以てす。其の石盆庵に題して曰く、「庵額初めて頒つて樹頭に挂く、樹摧け庵朽ちて幾か脩を經。石盆は滅せず數升の水、野菜時に添ふ一筋の油。童子面り承く天子の問、老師の心は祖師と儔し。我れ來つて蹭蹬して高蹈を思へば、萬壑雲横ふ楚甸の秋。」

政黄牛

餘杭の惟政禪師、字は煥然、世人呼んで政黄牛と爲す。師の住山、標致最も高し。時に蔣侍郎堂、錢塘に守たり。師と方外の友たり。師每に來つて之に謁すれば、則ち一の黄犢に跨り、㊈軍持を以て角上に掛く。市人爭

㊈軍持は梵語捃稚迦の略なり、譯して瓶といふ。雙口の澡鑵なり。僧の愛用なる所のものにして銅瓶なり。

ふて之を觀る。師自若たり。郡庭に至れば、犢を下りて談笑終日にして去る。一日郡に貴客有つて至る。蔣公、師を留めて曰く、「明日府に燕飮あり、師固に律を奉ずれども、能く我が爲に少しく留ること一日せよ。」因に淸話せんと欲す。師之を諾す。明日人をして之を要せしむれば、一偈を留めて去れり。曰く、「昨日曾て今日を將つて期す、門を出でて杖に倚つて又思惟す。僧と爲つては只だ合に嵓谷に居すべし。國士筵中甚だ宜しからず。」坐客皆其の標致を仰げり。又山中の偈を作つて曰く、「橋上山萬層、橋下水千里、唯だ白鷺鷥のみ有つて、我れを見て常に此に來る。」嘗て自像を贊して曰く、「貌古り形踈にして杖藜に倚る、分明に畫き出す須菩提。解空は許さず聲色を離るることを、孤猿の月下に啼くを聽くに似たり。」平生の製作を錦溪集と號す。又書に工にして筆法勝絕なり。法を㋾淨土の素に嗣ぐ。

㋾淨土惟素は法眼宗第三世なり。

廣無心

九峰の希廣禪師は眞淨の子なり。天資純至にして世故に脫略なり。晩年同門の深公に寶峯に依る。雪夜深け、與に爐を擁して語論すること久しうして、潛に人をして戲れに廣の榻の衾褥を去らしむ。寢に就くに及んで摸索すれども有ること無し。置いて問はず、須臾にして熟睡し鼻息雷の如し。是れより先、叢林、道者を以て之を呼ぶ。此に至つて又廣無心の稱を得たり。

廣南蠻

曇廣南は久しく密庵に依る。後に佛照の會中に在つて寮元と爲る。鹽を化する頌あり、「合水和泥一處に烹る、水泥盡くる處雪華生ず。便ち能く遼天の價を索起して、公驗分明誰か敢て爭はん。」佛照、喜んで曰く、「這の廣南蠻、也た葫廣」と。後に霅の道場に住して、其の道を將に振はんとす。而して有力の者の爲に之を攘はれ、未だ幾ならずして冷泉に終ふ。

瞌睡虎

虎丘の隆禪師は、初め湛堂に黃龍に謁し、次に圓悟に參ず。一日入室、悟問ふ、「見を見するの時、見是れ見にあらず、見猶ほ見を離る、見も及ぶこと能はず。」拳を擧して曰く、「還つて見るや。」師曰く、「見る。」悟曰く、「頭上に頭を安ず。」師聞いて脫然として契證す。悟、叱して曰く、「箇の甚麼をか見る。」師曰く、「竹密にして妨げず流水の過ぐることを。」悟之を肯ふ。尋いで藏敎を掌らしむ。悟に問ふものあり、曰く、「隆知藏、柔易なること此の如し、何ぞ能く爲んや。」悟曰く、「瞌睡虎のみ。」此れより睡虎と稱す。

華匾頭

應庵の曇華禪師は、生れて奇傑なり。髮を去つて虎丘に參じて、頓に大事を明む。虎丘の忌日の拈香に曰く、「平生沒興、者の無意智の老和尙に撞着して、伎倆を做し盡せども湊泊し得ず。云云」と。

密庵の傑、初め嶺を出でて婺州の智者に至る。偶ま暄を負ふ次で、老宿あり問うて曰く、「上座此の行、

何れの處にか去る。」傑曰く、「四明の育王に佛智和尚に見え去る。」老宿云く、「世衰へ道喪び、後生家行脚するに、例して耳を帶びて眼を帶びず。」傑曰く、「何の謂ぞや。」老宿曰く、「今育王一千の來衆、長老日に接陪を逐ふて暇あらず。豈に工夫の著實に汝が輩の與に、機を發する有らんや。」傑、涙を下して曰く、「若し此の如くならば、某何れの處にか往かん。」老宿曰く、「此去つて衢州の明果に華匾頭あり、見識超卓なり、汝宜しく之に見ゆべし。」傑、敎に依つて明果に往いて師に依る。一日室中に問ふ、「如何なるか是れ正法眼。」傑曰く、「甚の破沙盆にか直らん。」師、再追して曰く、「虛空消殞の時如何。」傑曰く、「著著頴脫。」師曰く、「罪重ねて科あらず。」傑、後母の老いたるを以て、辭して鄕に歸る。師、偈を以て送つて曰く、「大徹投機の句、當陽頂門を廓にす。相從つて四載を經、徵詰洞にして痕なし。未だ鉢袋を付せずと雖も、氣宇乾坤を吞む。却つて正法眼を把つて、喚んで破沙盆と作す。此の行將に省覲せんとす、切に忌む便ち跺跟することを、吾れに末後の句あり、歸るを待つて汝が遵はんことを要す。」

因褊頭

瑞州黃檗の志因禪師は、法を智海の本逸に嗣ぐ。人之を因褊頭と謂ふ。寂音、超不群の黃檗に歸つて因禪師に見ゆるを送る詩に曰く、「幽尋忽ち覺ゆ暗香の吐くことを云云。我れは識る山中の因褊頭、骨目淸堅貌淳古、便ち閒に折脚鐺を提げて、柏子庵邊に茆を結んで住せんと欲することを。行看ん

談笑に雲門を起して、海上の橫行洒祖の如くならんことを。」〔智海の逸は開先の善暹に嗣ぐ。乃ち雲門宗なり。暹始め德山の遠に參じ、後に雪竇に至る。竇與に語つて其の超邁を喜ぶ、自ら曰く、「海上橫に行く暹道者」と。」

順婆婆〔卯君〕

景德の順禪師は、仁慈を以て物を佐く。叢林之を目けて順婆婆と曰ふ。元豐三年蘇子由、睢陽の從事を以て、筠陽搉筦の任に左遷せらる。是の時、師其の父文安先生と契分あり、因つて往いて訪ふ。子由咨ぬるに心要を以てす。師鼻を搐る因緣を示す。子由久しうして省あり、偈を作つて師に呈して曰く、「中年道を聞いて前非を覺ゆ。邂逅相逢ふ老順師、鼻を搐つて徑に參ず眞の面目、頭を掉つて受けず別の鉗鎚。云云」と。師は法を黃龍の南に得たり。〔子由己卯の歲に生る。兄の東坡之を號して卯君と曰ふ。」

莫理會

曇現禪師は圓悟の嗣子なり。凡そ所問有れば、皆對へて曰く、「莫理會」と。故に流輩、咸莫理會を以て之を稱す。

祥叉手〔賢叉手、圓通訥〕

渤潭の景祥禪師は大潙の喆の子なり。常に叉手して夜賓に對するが如し。初め坐するとき、手、趺と

綴る、五鼓に至つて必ず膺に齊し。因つて諸方、祥叉手と呼ぶ。「圓通訥も亦禪坐するに、初め叉手して自如たり、中夜に至つて漸く升つて膺に至る。侍者、每に之に候して以て曉色を待つ。叉賢叉手は未だ本名を考へず。僧寶傳の黃龍南の章に曰く、「老宿賢叉手と號する者は、大陽明安の嗣なり。公に命じて書記を掌らしむ。泐潭の法侶、公の石霜に入らざるを聞いて、使を遣して來り訊せしむ。俄に賢、卒す。郡主、慈明を以て福嚴を領ぜしむ。公心に之を喜ぶ」と。」

賢蓬頭

興陽の賢禪師は江州の人なり。叢林、賢蓬頭を以て之を呼ぶ。眞如の會中に號して角立と稱す。見地明白にして機鋒穎脫なり。超師の作あり、而も行業謹まず、一衆之を易る。大慧の普說に曰く、「眞如の會中に、此の賢蓬頭あり、却つて是れ悟底の禪なり。先師此れより倶に其の室に入り、又眞如の門戶に入得す。眞、劇して道を稱す。」

用大碗

雙林の德用禪師は高庵の悟に承嗣す。雪堂の曰く、「高庵、雲居に住す、用姪、㋐監寺たり。用姪尋常廉約にして常住の油を點ぜず、己に處すること儉なりと雖も、人の與にすること甚だ豊なり。四來を接納して、略倦める色なし。高庵一日之を見て曰く、『監寺の用心固に得難し。更に須らく常住を照管して、疎失せしむることなかるべし。』用姪曰

㋐監寺とは寺務を總監する役なり。

く、「某に在つては失小過と爲す。和尚に在つては賢を尊び士に待して、海のごとくに納れ、山のごとくに容れ、細微を問はず、誠に大德となす」と。高庵笑ふのみ。故に叢林、用大碗の稱あり。」師乃ち婺州金華の戴氏に出づ。

翁大木

天童の無用禪師、諱は淨全、大慧に嗣法す。越州翁氏の子なり。諸方翁大木と稱す。

大死翁

景深禪師、姓は王氏、始め淨慈の象禪師に謁す。一日象の「思つて知り、慮つて解するは、皆鬼家の活計、與自ら遏らず」と曰ふを聞いて、遂に寶峰に往いて、照公に謁して入室を求む。照公曰く「直に須らく起滅の念を斷じて、空劫已前に向つて、玄路を掃除し、正偏に渉らず、今時を盡却し、全身放下し、放盡して還つて放つて。方に自由の分あるべし。」師聞いて頓に厥の旨を領ず。照、鼓を擊つて衆に告げて曰く「深、㋕闡提大死の道を得たり、後學宜しく之に依るべし」と。因つて大死翁を以て之を稱す。

老瞶翁〔岩獃〕

㋵松源の岳禪師は、處の龍泉の吳氏に生る。印を密庵の傑に得、法を蘇臺の澄照に開く。慶元の間、

㋕闡提惟照は芙蓉道楷の法嗣にして、曹洞宗第九世なり。
㋵松源崇岳禪師は密庵咸傑の法嗣にして、楊岐派第八世なり。

旨を被つて靈隱に住す。門庭高峻なり。老いて瞶す、叢林呼んで老瞶翁と爲す。「漫錄の訥堂の辯の章に曰く、「眞に岩獸の子、岳聾の孫たることを忝うせざるなり。岩獸は乃ち雲巢の道巖なり。松源に嗣ぐ。經を寫すの偈及び靈雲見桃花の頌あり、增集續傳燈に見えたり」と。」

寶生薑

洞山の自寶禪師は壽州の人なり。娼室に生る。姓氏なし。人となり廉謹なり。㋟五祖の戒の處に在つて事を主る。戒病んで行者をして庫司に往いて生薑を取つて藥を煎ぜしむ。師之を叱す。行者、戒に白す。戒錢を將つて回つて買はしむ。寶、方に薑を取つて之に付す。後に筠州の洞山に人を闕く、郡主、書を以て戒に託して、知る所の者を擧して、之を主らしむ。戒曰く、「賣生薑の漢、住し得てん。」遂に出世して戒の嗣と爲る。此れより林下、寶生薑と稱す。師初め行脚の時、嘗て旅邸に宿す。倡女の爲に窘めらる。遂に榻を讓つて之に與へて睡らしめ、師は坐禪す。明發に倡女宿錢を索む。師之に與へ、門を出でて自ら被褥を燒いて去る。倡女、實を以て父母に告ぐ。父母遂に請じて歸らしめ、齋を致して以て謝す。「愚、謂らく、此れ夫鐵脚の事と頗る相類す、併せ按ずべしと。又㋹文字禪に曰く、「黃龍の南、遊方の時、嘗て歸宗に至る。寶、髮頭、茶に會するに方つて、師、椅を卻けて坐す。寶之を呵す」と。」

㋟五祖師戒は雲門宗第三世なり。
㋹文字禪は石門文字禪といふ、宋の覺範慧洪の著にして三十卷あり。

訥叔

吉祥訥禪師は廬山の東林より、圓通の秀公に參じ、遂に其の嗣と爲る。晩年圓通の法屬、多く之に依る。故に訥叔の譽を叢林に得たり。嘗て偈あり、曰く「月に嘯き風に吟ず水石の間、機を忘じて贏ち得て此の心閒なり。端なく打破して空しく狼藉、羞らくは白雲の舊山に歸るに對することを。」

顚游

典牛和尚、姓は鄭氏、名は天游、本仕族たり。竟に廬山に往いて、剃髮して舊名を改めず、首め死心に參じて契はず、乃ち湛堂に泐潭に依る。時に妙喜、侍者たり、師、書司に居す。後に古藥山に往いて大事を發明す。廬山の小寶峰に出世して、又雲巖に徙る。嘗て忠道者の牧牛の頌を和して曰く、「兩角天を指し、四蹄地を踏む。鼻圈を拽斷して、甚の屎屁をか牧つ。」初め張無盡、其の坦率にして事を事とせざるを見て、嘗て慢つて之を顚游と謂ふ。後妙喜、此の頌を持して之に獻ず。無盡、几を撫して稱賞す。妙喜曰く、「相公且く道へ、者の頌は是れ甚麽人の做ぞ。」無盡曰く、「此れ彌勒大士に非ずんば、安んぞ能く此の言を發せん。」妙喜曰く、「此れ乃ち前日の顚游が所作。」無盡曰く、「奇なる哉奇なる哉、湛堂乃ち此の兒ありや、臨濟の一宗其れ此に在り」と。師後に雲巖を退いて、武寧に庵すること四十年、身を終るまで出でず。塗毒の之に見ゆるときは、已に九十三なりき。〔塗毒策禪師は雙徑に住す、乃ち函主と稱する者なり。〕

英鐵觜

衡州の花藥英禪師は、江の湖口李氏の子なり。初め眞淨の處に於て記莂を受け、乃ち雲居に往く。佛印、命じて衆僧に首たらしむ。一日佛印、拳を握つて問うて曰く、「首座如何。」師曰く、「佗日敢て和尙を忘ぜず。」佛印私に以て喜を爲す。偈あり、之に還つて曰く、「誰人か識得せん吉州の英、觜は是れ新羅の鐵打成。終に佗の烏鵲の隊に隨はず。雲に望んで閑に叫ぶ兩三聲」と。蓋し其の機辯を美むるなり。是れより叢林、呼んで英鐵觜と爲す。「又文字禪の古詩に、「規模乃翁の如し、鐵喙石肝膽、豈に特に七閩の英のみならん、蓋し亦叢林の棟」と。」

感鐵面

福嚴感禪師は、面目嚴冷にして孤硬秀出す。林下時に之を感鐵面と謂ふ。衆僧に江州の承天に首たり。佛印の元、將に蘄州の斗方に遷り居らんとす。師を郡主に譽めて、嗣續せしめんと欲す。且つ師を召して其の事を語る。師曰く、「某、念此に至らず。和尙終に推し出して衆の爲に粥飯の主人とし、共に叢席を成さしめんと欲す、敢て德を忘れず。若し法を嗣がしめば、則ち某自ら師あり」と。遂に出世して黃龍の子と爲る。

諶鐵面

育王無示の介諶禪師、姓は張氏、溫州永嘉の人なり。年十六にして崇德の慧微を禮して落髮す。宣

和六年、太師劉公正夫、臨第を捨てて顯寧寺と爲す。師を請じて出世せしむ。師の性剛毅、衆に涖むに古法あり。又嘗て身燈を然して佛事を爲す。時の人謂鐵面を以て之を稱す。㋨長靈の卓に嗣ぐ。㋡人天寶鑑に曰く、「長靈の卓禪師、無示に命じて立僧せしむ。法席嚴肅なり。堂厨を事とせず。唯だ安禪以て佳供に當て、夜參以て藥石に當つ。其の間衲子の任へざる者あり。無示、卓に告げて曰く、「人は食を以て先と爲す。是の如きんば、則ち衆將安ぜんや。」卓之を慍つて曰く、「表率安んぞ之を爲すべけん。」無示曰く、「某　爭はずんば、堂厨誰をしてか爭はしめんや。」日本建仁の開山明庵の西公は、乃ち師が五世の孫なり。」

秀鐵面

圓通の法秀禪師、一には秀關西と號す。諸方、秀鐵面と稱す。秦州の人なり。俗姓は辛氏、天衣の懷に嗣ぐ。僧寶傳に曰く、「眞州の長蘆に住す。衆千人あり、金檉長老といふもの有り、登座に至つて、衆之を目笑して、出でて問ふ者なし。是に於て師出でて拜し趨つて問ふ、「如何なるか是れ法秀が自己。」檉笑つて曰く、「秀鐵面自己を識らざるか。」師曰く、「當る者は迷ふ。」又曇希叟の贊に曰く、「赤土㋧牛妳に塗る。佛魔に入つて命懸絲の如く、生鐵面皮を裹む。龍蛇を辨ずるの機嚙鏃の如し。」又冷齋夜話に曰く、「洪州武寧の安和尚は、天衣の懷禪師の嗣なり、秀關西と同行たり。秀已に詔に應じて法雲寺に住す。其の威光、以て其の法友を挾んで、雲

㋨長靈守卓は靈源惟淸の法嗣にして、黄龍宗第四世なり。
㋡人天寶鑑は宋の曇秀の撰する所なり、一卷あり。
㋧妳は嬭の俗字なり、乳なり。

天に登つて翔るべし。安止だ荒村破院に單丁なること三十年。秀時に書を以て安に致す。安未だ嘗て視ずして之を棄つ。侍者其の意を解せず、閒に因つて之を問ふ。安曰く、『吾れ始め以らく、秀、精彩ありと。乃ち今其の癡なるを知る。夫れ出家兒は塚間樹下、那事を辨ずること頭然を救ふが如くにす。故なく八達衢頭に於て、大屋を架して數百の閒漢を養ふ。此れ眞に眼を開いて牀に尿するなり。何ぞ復た對語するに足らんや。吾が宗此れより益亦微ならん、子が曹當に之を見るべし』と。」

(ナ)昺鐵面

南華の智昺禪師は、蜀川永康の人なり。人となり嚴厲なり。叢林目けて昺鐵面と爲す。佛鑑の懃に嗣ぐ。

宏鐵面

德宏禪師は、諸方鐵面を以て之を呼ぶ。徧く師席に遊んで後に泐潭の景祥に得法し、出でて烏回に住し、次に啓霞に遷る。

夫鐵脚

長蘆の應夫廣照禪師、一邸に至る。娼女あり、母の爲に迫められて其の房に入つて去らず。師跏趺して旦に達る。叢林因つて之を夫鐵脚と謂ふ。「(ラ)寶訓の音義に、洞山の永孚禪師を以て、孚鐵脚と作すは是に非ず。永孚は泐潭の澄に嗣ぐ、應夫は天衣の懷に嗣ぐ、共に雲門宗なり。」

(ナ)昺は昞に同じ。
(ラ)寶訓は禪林寶訓をいふ。又は禪門寶訓に作る、四卷あり、宋の妙喜竹庵共集、明の淨善重集に係る。

清鐵脚〔阡都寺〕

四明壽國の夢窓嗣清禪師は、越の山陰干氏の子なり。業を郡の天童に隷して、法を㋰浙翁佛心に得たり。時に鐵脚の號あり。〔枯崖漫錄の東山源の章に曰く、「凌霄會中、人物林の如し。清鐵脚、阡都寺咸あり。阡都寺は天童辨山の仟なり。」〕

遠鐵橛

短蓬の遠禪師は、生平臥具を設けず、晝夜枯坐す。遠鐵橛の稱を得たり。永壽に開法して㋒明極の嗣と爲る。

鐵鞭

允韶禪師は、福州綿亭の人なり。剛性孤硬にして、大法を以て重任と爲す。因に密庵開堂す。師直に趨つて前んで問答あり、庵入室罷んで、衆に告げて曰く、「適來箇の漢あり、牙、劍樹の如く、口、血盆に似たり。手に一條の垂條を把つて、鐵鞭の如くに相似たり。老僧親しく一下に遭ふ、汝等諸人、切に須らく照顧すべし」と。此れより號して鐵鞭と曰ふ。

醉和尚

刑州開元の法明上座は、報本に依つて未だ久しからざるに、深く法忍を得たり。後に里に歸つて落

㋰浙翁如琰は佛照德光の法嗣にして、大慧派第三世なり。
㋒明極楚俊は楊岐第十二世なり日本に渡來し南禪寺に住す。

魄を事とす。多くは酒を嗜んで(ホ)呼盧す。大醉する毎に、柳詞を唱へて數闋む。日に以て常と爲す、郷民之を侮る。齋に召すときは則ち拒み、飮に召すときは則ち從ふ。是の如くなるもの十餘年、咸指して醉和尚と曰ふ。一日寺衆に謂つて曰く、「吾れ明旦當に行くべし、汝等他に行くこと無れ。」衆竊に之を笑ふ。翌晨、衣を攝めて座に就き、大いに呼んで曰く、「吾れ去らん、吾が一偈を聽け」と。衆聞いて奔り視る。師乃ち曰く、「平生醉裏に顚蹶す、醉裏却つて分別あり。今朝酒醒む何れの處ぞ、楊柳の岸曉風殘月」と。言ひ訖つて寂然たり。之を撼せば、巳に委蛻せり。師は法を報本の蘭に嗣ぐ、蘭は雪竇に嗣ぐ。

酒仙

遇賢禪師、姓は林氏、龍華の珠禪師に參じて心印を發明し。向つて明覺院に居す。唯だ飮酒を事とす。醉ふときは則ち歌頌を成して道俗を警む。因つて酒仙と號す。雜詠十首普燈に見えたり。

酒曇

橘州の寶曇禪師は、小雲と號す、川人なり。之を呼んで酒曇と曰ふ。乃ち(ヘ)別峰印和尚の法弟なり。學問該博にして名を天下に擅にす。宋朝、甘露滅の後、獨り師一人を推すのみ。南郭洲の中に就いて淨院を築いて、舍を遶つて萬樹を樹う。因つて又橘州と號す。師の傳及び語句は、(ト)五燈に出づるこ

(ホ)呼盧は胡盧と同じかるべし、大いに笑ふ貌にいふ。

(ヘ)別峯寶印は華藏安眠の法嗣にして、圓悟克勤の法孫なり。

(ト)五燈は禪宗五種の傳燈錄を稱する名稱なり。五燈は左の如し。景德傳燈錄は宋景德中、道原撰、廣燈錄は宋天聖中、李遵勗撰、續燈錄は宋建中靖國元年、佛國惟白撰、聯燈錄は宋淳熙十年、晦翁悟明撰、普燈錄　宋嘉泰中　雷庵正受撰。

となし。惟だ㋨釋氏資鑑、叢林盛事及び枯崖漫錄に之を載す。盛事に曰く、「曇、賦性坦率にして、拘檢を事とせず。竹院に在りし日、復た酒の事を以て、太守林侍郎に迫はれて、對を出して之に與へて酒曇、界を過ぎて無爲に住して、爲さざる所なしと曰ふに至る。」蓋し曇曾て無爲に住するが故なり。一日沐浴して衣を更へて、史魏公を請じて、平日の行紀を叙す、談笑の中に化す。闔城の士俗、皆之を送る。茶毘して舍利無數を獲たり。

禪狀元

敎忠彌光禪師は㋳晦庵と號す。偶大慧、雲門の洋嶼庵に在つて、衆纔に五十三人、慧、竹篦の話を擧して徒に示す。結夏以來、未だ五十日を經ざるに、十三人を打發す。師は最も初めに大悟す。故に大慧、之を稱して禪狀元と爲す。又之を光狀元と謂ふ。慧遂に鼓を擂つて衆に告げて曰く、「龜毛拈起して笑哈哈、一擊萬重關鑰開く。平生を慶快することは今日にあり。孰か云ふ千里吾れを賺し來る」と。師も亦頌を以て之に呈して曰く、「一拶機に當つて怒雷吼ゆ、須彌を驚起して北斗に藏さしむ。洪波浩渺浪滔天。鼻孔を拈得し口を失却す。」

禪判官

聖泉の岊翁淳禪師は、福州石岊の人なり。賦性獎を好んで人の善を稱す。嘗て雪峯に坐夏して、重

㋨釋氏資鑑は明の熙仲の編集する所にして、十二卷あり。
㋳晦庵彌光は大慧宗杲の法嗣なり。

ねて鼇山閣を架するに値ふ偈あり、時に競つて傳誦す。雪巢、無準、向に嘗て同行に與ふ、皆誠敬しで心服す。叢林の間、禪者與に可否を決せんとすれば、議論鋒のごとくに發す。戯れに禪判官を以て之を呼ぶ。

老　磵　〔天目禮〕

淨慈の居簡禪師、字は敬叟、○羅湖の瑩仲溫、師と議論して大いに之を奇として、大慧の洋嶼庵に居するとき、把る所の竹篦を以て之に付す。法を佛照光に得たり。師飛來峯の北磵に於て、一室を掃つて居ること十年、人敢て字を以て稱せず、北磵を以て之を呼ぶ。兼ねて之を老磵と謂ふ。〔簡、天目の○禮禪師と同じく佛照の會中に在つて、相與に衡を提ぐ。故に簡川禮竅の呼あり。川竅の二字は禮記に出づ。〕

○宋の仲溫曉瑩は、大慧宗杲の法嗣なり。
○滅翁文禮は、松源崇岳の法嗣にして、楊岐派第九世なり。
○妙峯之善は佛照德光の法嗣にして、大慧宗杲の法孫なり。

老　劉

○妙峯善禪師は劉氏の子なり。再び佛照に育王に見えて、風幡の話を以て箭鋒の機に直る。佛照之に贈るに偈を以てす。「今日君が爲に一線を通ず、斬丁截鐵吾が宗を起す」といふの句あり。晩年足限を越えず、晝夜惟だ楮衾を擁して兀坐す。垂示の語言皆人を發藥す。叢林、老劉を以て之を呼ぶ。

辯　蠡

平江府南峯の雲辯禪師は、初め穹窿の圓公に參じて、省發する所あり、既に京に入つて、天寧圓悟の法席に與る。愈々奧閫に臻り、遂に其の法を嗣ぐ。因に大慧、船子の夾山を接するの話を頌して曰く、「驀口の一橈解を作すことを除く、玆より夾嶺氣天を衝く。鉤を離るゝこと三寸消息なし、獨り滄溟に向つて鐵船を泛ぶ。」師其の韻に屬して曰く、「合類語を着けて船子に醻ゆ、恰も地を掘つて青天を覓むるに似たり。直饒ひ楫下に通明徹すれども、也た是れ華亭の破漏船」と。師人となり疎放なり、叢林目けて辯蠢と爲す。

遵太言

中際の可遵禪師は、野軒と號す。早く江湖に於て詩頌を以て所長を暴す。故に叢林之を目けて遵太言と爲す。因に廬山の湯泉に題す。東坡、見て之を和す。是れより名愈彰る。報本の蘭に得法す、雪竇を以て大父と爲すと云ふ。

規方外〔圓方外〕

道場草堂の有規禪師は、法を㊀法雲の本に嗣ぐ。時に之を呼んで規方外と曰ふ。傳は會元に見えたり。〔宋の睢陽の徐度敦立の卻掃編に曰く、「往歳吳中に詩僧多し、其の名往往に前輩文集の中に見ゆ。予江を渡るの初め、猶ほ有規といふものを見る、詩を以て名を知らる。其の人となり、性坦率なり。其の徒之を規方外と謂ふ。時に年七十餘なり。又

㊀法雲善本は、雲門宗第七世なり。

元に圓方外あれども、混名には非ざるなり。乃ち隆教方外の行圓なり、環溪の一に嗣ぐ。」

體亂攞

㋓或庵の體和尚は黄巖の人なり、賦性麤糙にして、事に遇ふて敢て爲す。受業上下、體亂攞と號す。此庵の元に護國に參ず。一日羅漢殿に在つて行道す、忽ち庫下に行者を毆つを聞くに、大いに呼ぶてと一聲す、豁然として大悟し、走つて元に見ゆ。元曰く、「這の十一郎、今日病の汗を得るが如し。」

才蘇嚧

㋢龍牙の才禪師は潭の帥曾公孝序の請を受けて、既に天寧に開堂す。僧有り問を致す、「德山の棒、臨濟の喝、今日請ふ爲に拈掇せよ。」答へて曰く、「蘇嚧蘇嚧。」進んで曰く、「蘇嚧蘇嚧、還つて西來意ありや也た無や。」答へて曰く、「蘇嚧蘇嚧。」是れに由つて叢林呼んで才蘇嚧と爲す。一日曾公延いて見ゆ。諸禪因に問うて曰く、「龍牙の答話、只だ蘇嚧と加何。」道林の月庵、乃ち聲に應じて諸禪を顧みて曰く、「借問す、諸方會すや也た無や。」曾公笑つて曰く、「聯ねて一頌と成し、以て禪悅の樂みと爲すべし」と。時に座に續くもの無し。傳へて雲蓋に至るに及んで、慈觀長老といふものあり、曰く、「昨夜虛空口を開いて笑ふ、祝融呑却す洞庭湖」と。師は佛鑑の懃に嗣法す。

㋓或庵師體は此庵景元の法嗣にして、圓悟克勤の法孫なり。
㋢龍牙智才は佛鑑慧懃の法嗣にして、楊岐宗第四世の法孫なり。

才煎

㋐佛心禪師才公は靈源禪師に參ず。凡そ入室あれば出でて必ず淚を揮つて、自ら訟へて曰く、「此の事我れ見得して甚だ分明なり。只だ是れ機に臨んで吐けども出でず。若爲がせん如何がせん。」源其の勤篤なるを知つて、告ぐるに須らく是れ大徹して、自在を得べしといふを以てす。居ること何も無うして竊に隣案の僧の曹洞の廣錄を讀むを見るに、「藥山薪を採つて歸る、僧あり、問ふ、『甚麼の處よりか來る。』山曰く、『柴を討め來る。』僧、山の腰下を指して曰く、『鳴剝剝、是れ箇の什麼ぞ。』山刀を拔いて斫る勢を作す」といふにいたつて、師忽ち欣然として隣案の僧を摑すること一掌して、簾を揭げて寮門を趨り出で、口を衝いて偈を說いて曰く、「徹せり徹せり、大海乾枯し、虛空迸裂す。四方八面遮闌を絕す、萬象森羅齊しく漏泄す」と。其の人となり褊急なり。叢林之を目けて才煎と爲す。

一糙

㋚水庵の一和尙は婺の東陽の人なり。外行搶糙なり。叢林之を一糙と謂ふ。久しく㋖月庵の杲に參ず。杲嘗て雲門の話墮を以て之を詰る。一日下語して曰く、「靈山の受記、須らく是れ和尙にして始めて得べし。」又嘗て頌して曰く、「二八の佳人美態嬌し、繡衣輕く整へて暗香飄る。儵身華圃に徐徐として立つ、黃鶯を引き得て柳條を下らしむ。」月庵之を器とす。後に同列と和せず、人に暗に計り擠けらる。月庵其の言を信じて院を擯出す。行くに臨んで偈を書して、之を識

㋐佛心本才は靈源惟淸の法嗣にして、黃龍宗第四世なり。

㋚水庵師一は佛智蓬庵端裕の法嗣にして、圓悟克勤の法孫なり。

㋖月庵善杲は開福道寧の法嗣にして、五祖法演の法孫なり。

つて曰く、「稽首す月庵藏裏の佛、黄金の妙相實に觀難し、白面の夜叉七八箇、推轉することは珠の玉盤に走るが如し」と。後に台の慈雲に出世して佛智の嗣と爲る。

璁白頭

芥室の璁禪師は木庵の室に入り、晩に吳門の聖因に住して、益々聲譽を馳す。白髮肩に垂る、叢林呼んで璁白頭と爲す。

徹白頭

明州光孝の思徹禪師は了堂と號す。壯より髮白し、江湖呼んで徹白頭と曰ふ。三衢の人、石窓の恭と同じく㋥宏智の門に出づ。操履孤潔にして世と接らず。嘗て賓を太白に典る。妙喜大いに俊敏なるを見て、私に之を喜び、計を以て其の玉几に過ぎることを誘はんとす。師志を秉つて渝らず、竟に㋦老天童に依つて其の法を嗣ぐ。

㋥宏智正覺は曹洞宗第十世なり。

㋦老天童とは宏智正覺をいふ。自得慧暉も宏智正覺の法嗣なり。

宗白頭

明州雪竇の嗣宗禪師は聞庵と號す。之を宗白頭と謂ふ。徽州の人にして陳氏の子なり。幼うして經を業とす。圓具し、妙湛に慧詰に依つて、問の次で釋然として契悟す。詰、麈尾拂を以て之に付す。後、宏智に謁して印可を蒙り、其の道愈々尊し。出でて普照・善權・翠巖に住す。嘗て自得の暉と同じ

く長蘆の祖照の席下に在り、時に一窩蜂發いて衆皆散じ去る。唯だ暉と師と二人動ぜず、師、私に謂つて曰く、「參禪は本生死に敵せんが爲なり、豈に此の難に因つて、便ち逃避すべけんや。況んや我が身又弱し、若し中路に至るも也た則ち佗の手に落ちん」と。賊既に至る。衆僧倶に散じて、唯だ暉、堂中に在つて坐禪するを見て、爭ふて箭を以て之を射るに中らず。暉、寂然として動ぜず。末後の一箭袖より射て函櫃に透る。暉方に驚き覺む。此れに因つて（ひ）顫病を成す。賊見て遂に縛して射殺せんと欲す。傍に（ゑ）直歳の僧あり、再三近前して、賊に白して代らんと乞ふ。賊曰く、「汝は是れ佗の何の眷屬ぞ。」僧曰く、「此の僧已に禪に參得し了る、佗時出で來つて大善知識と爲つて衆生を敎化すべし。我れ未だ曾て參得せず、便ち死すとも緊要なし、故に之に代らんと乞ふ。」賊其の言を奇なりとして、二人倶に放す。後に師明の翠巖に居して、其の道大いに振ふ。向に代らんとせし所の者も亦座下に來る。師常に謂つて曰く、「此れ乃ち我が再生の父母なり」と。

（ひ）顫病。かしらのうごく病。
（ゑ）直歳は一歳中の作務を掌る役なり。

照白眉

南嶽の方廣照禪師は西蜀の人なり。淳素鄙朴にして罵詈を以て佛事を爲す、學者之を憚る。佛照會中に照白眉と號す。

百拙

㋪報恩の登禪師は、和州烏江の人なり。族は閔氏、應庵の晩子なり。賦性彫飾を絶す、機語皆質直なり。故に百拙の號あり。

淨長

㋲慶元府天童の如淨禪師は、頎然として豪爽なり、叢林號して淨長と曰ふ。問あり、「瑞世誰にか嗣ぐ」と。曰く、「如淨。」問ふ、「道號何と謂ふぞ。」曰く、「淨長」と。後に太白山に於て疾を感じて席を退く。涅槃堂に下り、始めて大いに哭し、㋝鑑足庵の爲に燒香して入寂す。乃ち日本永平開山道元和尙、得法の師なり。

小南

㋜盧山羅漢の系南禪師は、祐禪師に潭の道林に參じて、印可を獲たり。世系に依るときは則ち黃龍の南、便ち是れ師の大父なり。名既に同じうして道望逼亞す。故に叢林、師を呼んで小南と爲す、黃龍を尊びて老南と稱す。〔老南は乃ち前に出す所の南匾頭なり。〕

惺惺道者

保寧の圓璣禪師は福州林氏の子なり。法を黃龍の南に嗣ぐ。天資精勤にして、㋑談噱味あり。大

㋪報恩善登は應菴曇華の法嗣にして、楊岐宗第七世なり。
㋲天童の長翁如淨は曹洞宗第十三世にして、日本曹洞宗開祖道元禪師の師なり。
㋝足庵知鑑は長翁如淨の師なり。
㋜羅漢系南は雲居元祐の法嗣にして、黃龍慧南の法孫なり。
㋑噱は大いに笑ふなり。

慧其れを謂つて惺惺道者と爲す。師は洪の翠巖に住す。張無盡、漕と作り山に入りて之を訪ふ。師門に迎ふ、無盡問うて曰く、「如何なるか是れ翠巖の境。」答へて曰く、「門は洪崖千尺の井に近し、石橋水を分ちて松杉を遶す。」無盡、師の手を握つて曰く、「道者の名を聞くこと久し、何ぞ能く此の如く祗對するや。」師曰く、「適然たるのみ。」無盡大いに笑ふ。復た㊀哦して曰く、「野僧、客を迎へて煙嵐を下る、試みに問ふ如何なるか是れ翠巖。門は洪崖千尺の井に近し、石橋水を分ちて松杉を遶す。」時に林下傳へて盛事と爲す。

㊀哦。うたふこと、吟ずること。

閒灌頂

桐江大悲の閒長老は、福州閩縣の般若精舍に閒居す。紹興甲寅、時に年八十有四、大慧洋嶼に居す、般若と一水の隔なり。師、老いたりと雖も、尤も參究に篤し、日に來つて衆に隨つて入室す。大慧因に問うて曰く、「萬法と侶たらざる者、是れ什麼人ぞ。」師曰く、「扶くれども起たず。」慧曰く、「扶くれども起たざる底、是れ什麼人ぞ。速に道へ速に道へ。」師對せんと擬す。大慧竹篦を以て便ち打つ。師忽ち契悟す。慧偈を說いて之を印して曰く、「一棒に打破す生死の窟、云云」と。而して閩中之を嘲けるに偈を以てするもの有り、曰く、「八十の老翁閒灌頂、只だ說く如今行路難しと。海門洋嶼煙波の裏、舊に依つて漁翁釣竿を把る。」大慧演べて四偈と爲して曰く、「八十の老翁閒灌頂、鵝王乳を擇ぶ自家に知る、語を寄す叢林の瞎漆桶、鶴唳を將つて鴉啼と作すこと莫れ。」「只だ說く如今行路難しと、前三

三と後三三と、書を寄す叢林の瞎漆桶、雲頭放下して更に來つて參ぜよ。」「海門漾漲煙波の裏、其の中に到ることを存する人少なる、語を寄す叢林の瞎漆桶、須ひず背後に貪嗔を起すことを。」「舊に依つて漁翁釣竿を把る、錦鱗蝦蟹顢頇ならず、語を寄す叢林の瞎漆桶、生滅を將つて話頭を看ることを休めよ。」

述先馳

述首座、字は無己、大慧禪師、初め徑山に住す。述、先馳を作す。亦機用あり。是れより叢林呼んで述先馳と爲す。後に衆に梅山の愚丘禪師の會裏に首として卒す。「師は何れの許の人といふことを知らず、嗣承も亦未だ詳ならず。」

叢林大禪

徑山の了明禪師は、形頎く腹大にして、道貌豊碩なり。紹興辛酉、妙喜の衡陽に謫せらるるに隨ふ。州縣防送すること甚だ嚴なり。師爲に枷を荷つて、㋩間關として辛苦し、未だ嘗て少しも怠らず。既に貶所に至つて、衲子追ひ隨つて道を問ふもの、率ね二三百人を下らず。妙喜、齋粥の給せざるを以て、且つ禍を慮つて屢勉めて去らしむれども、師然りとせず。毎に自ら㋥栲栳を肩つて行乞して、晩に至る。是の如きもの十七年、癸亥に辭して浙西に往く。妙喜、偈を以て之を送つて曰く、「㋭藞苴た

㋩間關とはいくたびとなく艱難に會ふにいふ。
㋥栲栳は柳を曲げて作りたる物を盛る器。柳行李なり
㋭藞苴は泥の熟せざる貌、四川の人を罵つていふ。

り明大禪、孟浪方比を絶す。云云。」故に叢林大禪の譽を得たり。之を久しうして舒州の投子に出世し、後詔を奉じて徑山に住す。江浙湖湘、之を號して布袋の再世と爲す。

大範

浙翁無相の範禪師は、松源に參じて法を焦山に開く。叢林皆大範を以て之を呼ぶ。蓋し無準の範と行道同一時なればなり。

大小本〔二人〕

宗本禪師は神宗、延和殿に召し對せしむ。既に退くや、上之を目送して左右を顧みて曰く、「眞の福慧の僧なり」と。號を圓照と賜ふ、世に之を大本と謂ふ。法を天衣の懷に嗣ぐ。善本禪師は婺の雙林に出世し、杭の淨慈に遷り、圓照の本に繼ぐ。時に之を小本と號す。

大小秀

潙山の秀禪師は、法雲の秀禪師と久しく天衣の懷和尙に依る。號して飽參と爲す。倶に詩名あり、叢林大小秀を以て之を呼ぶ。〔大秀は前に出す所の秀鐵面なり。〕

瘦權〔癩可〕

善權、字は巽中、何れの許の人といふことを知らず、亦未だ其の氏族を詳にせず。尤も詩名あり、人物淸癯なり、時に目けて瘦權と爲す。同時に詩僧祖可といふ者あり、惡疾に罹れり、因つて癩可と

呼ぶ。◉雲臥紀談に曰く、「南昌の信無言といふもの、早く詩を以て叢林に鳴る。徐公師川・洪公玉父、其の詩を品第す。韻致高古にして瘦權・懶可と一頭地を出せり。覺範、巽中に贈る詩に曰く、『道人廬山に來る、山光水色盤飧に供ず。坐して山水秀傑の氣をして、胸中に繚繞して塊搏と成さしむ。』云云。」〔東溪の祖可、字は正平、姓は蘇氏、覺範、懶可の贊に曰く、「伯固を父とし、養直を兄とす、父は超絶、兄は豪逸、家世風流第一と稱す。二祖の名、三祖の疾、名は是れ虛、疾は是れ實、詩成つて舌頭霹靂を翻す」と。〕

◉雲臥紀談は感山雲臥紀談といふ、二卷あり、宋の仲溫曉瑩の著述なり。

喩彌陀

錢塘の喩彌陀は、早に專ら彌陀佛を畫くを業と爲す。楊傑次公、其の精妙を賞識して、姓を以て之を呼んで喩彌陀と爲す。是れに由つて名を得たり。部使者あり、問ふに、「能く彌陀を畫いて何ぞ參禪せざる」といふを以てす。答ふるに偈を以てして曰く、「平生只だ解す彌陀を畫くことを、參禪の奈何ともすべきを解せず。幸に五湖風月の在る有り、太平何ぞ用ひん干戈を動ずることを。」後に年三十五にして僧籍を占めて思淨と名く。乃ち城北に於て舍を僦つて鉢を持して食を乞ひ、期して以て百萬の僧に飯せんとす。二十寒暑ならざるに八百萬に及べり。郡、妙行院の額を其の處に移して、以て其の勤を旌す。〔律師、嘗て心經の句を集めて頌を爲ると云ふ、鼓三の道霈の請益說に見えたり。〕

劉道者

豫章東山の僧修演は、里中の劉氏の子なり。石門の謙に得法す。偈あり、曰く、「未だ悟らざるの日參禪を要すと。云云。」爾れより頭陀の行を修して、常に夏の夜に於て、體を裸にして以て蚊蚋に飴す。施あつて衣を與ふるときは則ち受けて轉じて無きものを濟ふ。亦偈を說いて意を見す、曰く、「四十年來常に跣足、剃頭せず澡浴せず。郡官我が爲に衣衫を換へしむ、只だ恐る平生願足らざるを。」世に劉道者と稱す。「道者後に入定す、徒屬、壙を啓いて之を視るに、趺坐して嚴然たり。遂に(ト)傳するに香泥を以てすと云ふ。」

(ト)傳は著くるなり。

戒和上

蘇軾、字は子瞻、東坡居士と號す、乃ち五祖戒和尙の後身なり。弟の轍、高安に謫せられし時、洞山の雲庵聰禪師と一夕同じく夢むらく、子由と城を出でて五祖の戒を迓ふと。已にして子瞻至る。三人城を出でて之を候つて夢みる所を語る。軾曰く、「八九歲の時、前身是れ僧にして陝右に往來することを夢む。」又曰く、「先妣孕むとき眇目の僧、託宿を求むと夢む。」庵驚いて曰く、「戒公は陝右の人、一目眇なり。」逆に其の終るを數ふるに、已に五十年なり。」而して子瞻、時に四十九。是れより常に居士を稱して戒和上と曰ふ。

元

倫驢

淨慈斷橋の妙倫禪師は、無準に得法す。始め自ら謂へり、吾れ口訥に耳(チ)聵なれば、把本の修行に若かずと。日に誦經を以て業と爲す。忽ち楞伽を雲居の見山堂に閲するに、蚊蝱螻蟻、言說あることなうして、而も能く事を辯ずといふに至つて、頓然として省あり。倫驢と謂ふは、驢の性狠戾にして進まず、師の性も亦此の如し。因つて叢林に此の稱あり。

斷崖

天目の了義禪師は、大徹の後、母と與に武康に入り、五年を越えて山に還る。高峯爲に剃度して了義と名く。元貞乙未、峯示寂す、師も亦迹を韜す。然して至る所歸重して立僧せしめ、咸之を稱して義首座と曰ふ。初め天目山の斷崖に居す。因つて叢林、斷崖を以て之を呼ぶ。

常達磨〔暎達磨〕

雪竇の常(リ)藏主は横山の弟子なり、姓氏を詳にせず。貌寒陋にして、眼丁を識らず。惟だ禪定を習ふ。故に同時の人、皆常達磨を以て之を稱す。所作の偈頌、事理混融して、音律調暢し、大いに人を啓迪する處あり。〔又宋に暎達磨といふもの有り、

(チ)聵は生れつきのつんぼなり。
(リ)藏主とは經藏を主る役なり。

未だ何れの人といふことを詳にせず。僧寶傳の福昌の善の章に曰く、「僧自ら咦達磨と號する者あり。纔に方丈に入つて坐具を提起して曰く、『展ぶれば卽ち法界に徧周し、展べざれば卽ち賓主分たず。展ぶるが卽ち是、展べざるが卽ち是。』善曰く、『汝平地に喫交し了れり。』咦曰く、『明眼の尊宿、果然として在ること有り。』善便ち打つ。咦曰く、『拄杖を奪つて和尙を打倒せん、言ふこと莫れ道はずと。』善曰く、『棺木裏に瞠眼する漢、且坐喫茶』と。茶罷んで咦前んで白して曰く、『適來容易に和尙に觸悞す。』善曰く、『兩重の公案、罪重ねて科あらず』と。便ち喝して去らしむ」と。

明

昷鐵脊

慧昷禪師、字は虛白、湖廣の族、丹陽に家す。姓は王氏、寶藏持和尙の處に於て省徹す。偈に曰く、「一拳に打破す太虛空、百億の須彌踪を留めず。借問す個の中誰か是れ主、扶桑に涌出して一輪紅なり。」安谿の東明に住すること二十餘年、晝夜睡むること無し、坐して鐵幢の如し、因つて昷鐵脊と稱す。乃ち南岳第二十七世の正傳源流の祖、東明の昷是れなり。

小高僧

愼行禪師、姓は毛氏、別號は卍庵、台の臨海の人なり。才思泉涌き、偈句觚を操つて立ちどころに

成す。時の人之を稱して小高僧と爲す。法を靈隱の明に嗣ぐ。

國譯禪林口實混名集卷之下 終

尊僧の一律以て後代に貽す

本種族なし釋を氏と爲す、君父爭か能く之を臣子とせん。綴鉢糞衣世寶に超え、巖栖穴處人の知ることを畏る。議論舌利し鑒多口、罵詈眼高し照白眉。嘆息す後來僧傳を繼がば、何の才識有つてか名緇を取らん。

跋

斷橋和尙は乃ち古人格外の擧措を稱賞して、閩門下の衲子と掌を拊して淸譚す。混名の著なるもの、捃摭して集と爲す。苟も古を翫ぶ士をして、其の德行を知らしめんと欲すればなり。是に於て竊に取つて之を剞劂氏に附し、以て諸れを世に公にす。惟れば翁は四十餘年、病を岩壑に抱いて、誓つて出世せず、然も古來庵居の知識と稱する❶幻住・華頂の諸祖と、自然に其の軌躅を同じうすることは、則ち豈に特に一時泛濫の弊を矯正するのみならんや。抑も法利の大なる、數百年の下に播くに足れり。又斯の集の如き、宗門を輔翼すること、必ずしも翁の籍に登り、亦雷鼓を撾つを待つて、而も得たりと爲ざるなり。唯だ病既に篤うして版本を覩ること莫き、是れを憾と爲るのみ。越に遷寂の後、數月にして京師の書林より至る。海一たび卷を開けば、人をして酸嘆已まざらしむ。於戲是歲春三月、翁預め囑するに後事を以てし、親しく遺囑を書して、諸れを書櫃に藏む。夏五月遽に微恙を示して、起たざるの色あり。六月十八日、右脇にして逝す。壽六十又四、闍維の後、其の遺命に遵ひ、竟に靈骨を奉じて、塔を普明の山に建て、瘞む。是れより先、翁の第を捨てて寺と爲し、父公と同じく桂老師を延いて、祝國請

❶幻住は元の中峯明本をさし、華頂は同時の無見先覩をいふ。

法するの由に於ては、詳かに載せて夫の開堂錄の中に在り。今其の細を略す。翁の述する所は、東渡南遊錄、併に詳略圖、重編枯崖漫錄、陳希夷睡像上進記、華藏世界圖等、普明に秘在す。海、法門猶子の誼を荷ひ、誨を納ること玆に多年、況んや此の撰に於てをや。遂に其の槪を述して以て歳月を識すと云ふ。

正德乙未孟冬上澣の日

劣姪寀海界輪稽首九拜、肥前州圓福山下法泉禪房に書す

禪林口實混名集序

獨木橋橫崖壁險、等閑踏斷兩頭空、俊流若遇的盧至、合眼跳過活路通、險崖橋斷尋無路、不許庸常人往還、除却黃巖倫老輩、是誰親到扣禪關。

巖泉禪師別號斷橋、作此寄贈博哂

峨皐澄

禪林口實混名集凡例

一、大凡僧之有字與諱外、別所呼禪林尤多、一、勅號、二、所住山名、三、所住寺號、四、所居庵室、五、所居州縣、六、所居形勢、七、因語爲號、八、爲事觸發、九、因事被師友稱、十、因相貌言行奇異。

一、勅號有二、生前賜曰特賜、以梁婁約・隋智者而爲濫觴、滅後賜曰追謚、後魏胡靈公・唐大通禪師其權輿歟、以所住山名被人呼者、百丈・黃檗等、以所居寺院被世稱者、臨濟・香嚴等、以所居庵室而自號者、晦堂・雲庵等、以所居州縣被人呼者、趙州・汾陽等、以所居形勢被人呼者、石頭・斷崖等、以因語爲號、被世稱者、丹霞然・鐵牛定等、以爲事觸發、而自號者、如死心叟等、因事被師友稱者、破竈墮・岑大蟲等、因相貌言行奇異、被諸方呼召者、乃碧眼胡・赤頭璨・打地・骨剉等也、今所採者、第六第九第十之類也。(第一勅號禪敎不分、婁約・智顗・法果・神秀並擧。)

一、諸師諸名、因事因相、因言因行、因姓因字、因所住所居、因所業所作、大都傑出叢林之士、尋常名字之外、所因之名不一、雖曰師姑・散人・居士、異號正者收在集中、苟欲使後輩而知其德也。

一、今收達磨大師以下一百九十八人而已、間有不稱衲子者、不可取耶、只在禪者口實、而以出書著明併收。

一、如二祖可大師謂斷臂兒、四祖信大師謂破頭老人、非不稱呼、然考本傳、不見紀之、故今除去、且俟後人所考、亦有似異名而非異名者、推類須察。

一、如教門先德青眼律師・白足和尙並攝山・詮公四友、亦不載茲、蓋以禪林表題首也。〔得意布・四句朗・領悟辯・文章勇、謂之攝山詮公四友、咸南北義學碩師。〕

一、臨濟下四庵主・馬祖下烏臼・黑眼等、皆不顯法諱、今可取之而不取者、意在厭繁、故刪減之。

一、東禪・西禪・龍光・文殊・觀音・禾山・芭蕉・林泉・南院・南臺・大覺・萬歲・月華、皆出乎唐及五代宋、時稱和尙、亡名之尊宿、而各各有兩人也、後之閱僧史者、不可等閑看過誤作一人、雖然幾乎混名、厭繁不載。

一、祖庭事苑卷二、瀑泉集所出白頭因、不知是何人、註列出、因事立號者二十七員、其中二十二人、已考載此集、五人未詳眞名世代、按嗝頭副、謂道副禪師乎、忽雷澄見于宗派圖神秀下、恐唐人矣、清八路・黑令初・明半面、學者宜稽之而以添入。

一、此集編成、經兩年餘後、還檢閱諸禪冊、漏網亦不少、於是欲別輯補遺一卷、兼附扶桑宗匠混名集、年老病劇不能遂志、豈得無遺憾哉、如本集兩卷、爲好事者所取去也。

凡例 終

採用書目

高僧傳　僧寶傳　傳燈錄　普燈錄
增集續傳燈錄　續燈存稿　五燈會元　五燈嚴統
佛祖統紀　佛祖通載　正宗記　稽古略
祖庭事苑　文字禪　禪林類聚　頌古聯珠
臨濟錄夾山鈔　碧巖集不二鈔　虛堂錄　無準錄
無門關　正宗贊　林間錄　大慧武庫
大慧普說　羅湖野錄　雲臥紀談　正燈錄
大光明藏　人天寶鑑　叢林盛事　中峰廣錄
枯崖漫錄　山庵雜錄　建州弘釋錄　竹窻隨筆
禪林寶訓音義　禪宗漁樵集　冷齋夜話　卻掃編
揮麈後錄　瀛奎律髓　五車韻瑞　大明一統志

書目終

禪林口實混名集卷之上

晩學沙門　斷橋　撰

南北

碧眼胡僧

初祖菩提達磨大師者、南天竺國香至王第三子也、姓刹帝利、本名菩提多羅、後遇般若多羅本國受王供養、知師密迹、因試令與二兄辨所施寶珠、發明心要、既而尊者謂、汝于諸法、已得通量、夫達磨者、通大之義也、宜名達磨、因改號菩提達磨、高僧傳曰、達磨眼青色、故稱碧眼胡僧、又祖庭事苑曰、達磨爲法西來、未逢嗣子、面壁冷坐九載、傳法繼祖者一人、繇是隻履西歸、道傳東、當是時、皆謂之壁觀婆羅門、故一作壁觀胡僧、又有缺齒老胡及勿版子之號。碧巖集三教老人序曰、鬅鬙來東、單傳心印、不立文字固也。梁大通二年十月五日入滅、至唐代宗諡號圓覺大師。雪堂行頌、廓然無聖話曰、西天屠子氣雄豪、欺負神州罪莫逃、梁帝當頭輕一撥、果然提起活人刀、又寂光豁拈曰、達磨大似理直則氣壯、佛心天子、有孟嘗君之仁術、善待高賓、當若有箇漢咄言、雖然如是、强賓焉能抑弱王、老臊胡豈止渡江而已哉、善卿曰、稱西竺爲

胡、自秦晉訟襲而來、卒難變革、故有名佛爲老胡、經爲胡語、祖爲碧眼胡、裔其後者爲胡種、爲釋氏子、而名胡種、得不撫膺自愧、所謂必也正名乎。

隋

赤頭璨

三祖僧璨大師、不知何許人、初以居士見二祖可大師於北齊、二祖器之、爲剃度受具得法、陳大建元年自北齊來司空山、遂隱舒州之皖公山、屬後周武帝破滅佛法、居無常處、積十年餘、時人無能知者、後得道信大師付法、隋大業二年入滅、唐玄宗諡鑑智禪師、正宗記師傳白、其元無復黑髮、故舒州號爲赤頭璨、大師有信心銘、盛行于世。

唐

嬰兒行菩薩

鶴林玄素禪師者、姓馬氏、參牛頭威得旨、貴賤怨親曾無喜慍、時目之嬰兒行菩薩、天寶中卒、後人以俗氏呼之曰馬祖、或姓名兼稱曰馬素、勅諡大律禪師

老安國師

嵩嶽慧安國師、嗣五祖忍、則天爲國師、中宗賜紫衣、隋開皇壬寅生、唐景龍己酉滅、春秋一百二十八、時稱老安國師。

鳥窠禪師

道林禪師謁徑山國一、遂得正法、後見秦望山有長松、枝葉繁茂、盤屈如蓋、遂棲止其上、故時人謂之鳥窠禪師、復有鵲巢于其側、自然馴狎、人亦目爲鵲巢和尚、元和中、白居易因入山禮謁、乃問、禪師住處甚危險、師曰、太守危險尤甚、曰、弟子位鎭江山、何險之有、師曰、薪火相交、識性不停、得非險乎。

布毛侍者

杭州招賢寺會通禪師、姓吳氏、俗名元卿、爲供奉官、元和中、奉帝出家、師事鳥窠、一日辭遊方、窠吹布毛示之、師遂悟玄旨、時號布毛侍者。

降魔禪師

章信寺崇惠禪師、姓章氏、杭州人、禮徑山國一爲弟子、雖勤禪觀、多以三密敎爲恒務、初於昌化千頃最峯頂、結茅爲菴、專誦佛頂呪、數稔、又往鹽官硤石東山、卓小尖頭草屋、多歷年月、後與道士史華角佛力道法、大得勝也、因號護國三藏、勅居安國寺、世謂爲中子山降魔禪師是也。

降魔藏

降魔藏禪師、七歲出家、時屬野多妖、鬼魅惑於人、師孤形制伏、曾無少畏、故得降魔名焉、後得北宗記。

破竈墮

破竈墮和尚、不稱名氏、言行叵測、隱居嵩嶽山、塢有廟甚靈、殿中唯安一竈、遠近祭祠不輟、烹殺物命甚多、師一日領侍僧入廟、以杖敲竈三下曰、咄、此竈只是泥瓦合成、聖從何來、靈從何起、恁麼烹宰物命、又打三下、竈乃傾破墮落、安國師號爲破竈墮、遂受其法。

騰騰和尚〔憨憨和尚〕

福先仁儉禪師、自嵩山罷問、放曠郊鄽、時謂之騰騰和尚、天冊萬歲中、天后詔入殿、前仰視天后、良久曰、會麼、后曰、不會、師曰、老僧持不語戒、言訖而出、唯了元歌一首、盛行于世。〔又同時有憨憨和尚。〕

盧行者

六祖慧能大師、生新州盧氏、年二十有四、聞經有省、往黃梅參禮五祖、祖器之、三鼓付衣法、云云、南泉上堂曰、五祖下五百人、只盧行者一人、不會佛法、不識文字、只會禪〔大光明藏上、以石室行者爲六祖大師、蓋誤耳、一曰盧公、又曰盧居士、或稱鬻薪漢子、佛照光頌六祖風旛話曰、非風旛話露全機、千古叢林起是非、咄、這新州賣柴漢、得便宜是落便宜、又雪嶠信拈曰、六祖在黃梅、得些子氣息、向這裏便亂撒也、只箇賣柴翁。〕

石室行者

潭州石室善道和尚、嗣攸縣長髭曠、後値沙汰、乃作行者、居于石室、因人呼爲石室行者、僧問臨濟、祇如石室行者踏碓忘却移脚、向什麼處去、濟曰、沒溺深泉。

一宿覺

永嘉玄覺禪師、與東陽策同詣曹谿六祖、初到振錫携瓶繞祖三帀、卓然而立、祖曰、夫沙門者具三千威儀、八萬細行、大德自何方而來生大我慢、師曰、生死事大、無常迅速、祖曰、何不體取無生了無速乎、師曰、體卽無生、了本無速、祖曰、如是如是、師方具威儀參禮、須臾告辭、祖曰、返太速乎、師曰、本自非動、豈有速耶、祖曰、誰知非動、師曰、仁者自生分別、祖曰、汝甚得無生之意、師曰、無生豈有意耶、祖曰、無意誰當分別、師曰、分別亦非意、祖歎曰、善哉善哉、少留一宿、時謂一宿覺矣、著證道歌等、盛行于世、學者輻湊、號眞覺大師。高僧傳曰、旣決所疑、能留一宿、號曰一宿覺。」

馬祖

江西道一和尚者、漢州什邡人、姓馬氏、嗣法南嶽讓、六祖謂讓曰、向後佛法、從汝邊去、出一馬駒、蹋殺天下人、厥後江西法嗣、布于天下、時號馬祖、又稱曰馬大師、元和中追諡大寂禪師。馬氏世業簸箕、故以祖曰馬簸箕、又鐵山仁頌馬祖不安話曰、漢州生得馬駒兒、病在膏肓不可醫、院主無端問安好、引佗賣弄口脣皮、又張無盡頌曰、什邡駒子氣生獰、蹴蹋毘盧頂上行、正患脾疼却頭痛、病來猶有巧心情。」

石頭

石頭希遷大師、端州高安人、姓陳氏、於天寶初、造衡山南寺、寺之東有石、狀如臺、師乃結菴於其上、時號石頭和尚、所著草菴歌、參同契、盛行于世、嗣法青原思。

懶殘

神僧明瓚、初遊方詣嵩山、從普寂聽禪法、默證心契、問居衡岳、性懶而食殘、故號懶殘、又下大石除虎害、一郡呼至聖。

打地和尙

忻州打地和尙、自江西領旨、晦其名、凡學者致問、惟以棒打地而示之、時謂之打地和尙、一日被僧藏卻棒、然後問、師但張其口。

王老師

南泉普願禪師、姓王氏、扣大寂之室、頓然忘筌、得遊戲三昧、師有時曰、文殊普賢、昨夜三更、每人與二十棒趁出院也、趙州曰、和尙棒敎誰喫、師曰、王老師過在什麼處、趙州禮拜而出、師擬取明日遊莊舍、其夜土地神先報莊主、莊主乃預爲備、師到問莊主、爭知老僧來排辨如此、莊主曰、昨夜土地報道、和尙今日來、師曰、王老師修業無力、被鬼神覰見、師有時曰、江西馬祖、說即心即佛、王老師不恁麼、道不是心不是佛不是物、師一日捧鉢上堂、黃檗和尙居第一座、見師起、師問曰、長老什麼年中行道、黃檗曰、空王佛時、師曰、猶是王老師孫在、下去、師一日問黃檗、黃金爲世界、白銀爲壁落、此是什麼人居處、檗曰、是聖人居處、師曰、更有一人居何國土、檗乃叉手立、師曰、道不得、何不問王老師、師示衆曰、王老師要賣身、阿誰要買、一僧出曰、某甲買、師曰、他不作貴價、不作賤價、汝作麼生買、僧無對、自此諸方亦稱王老師。

功德山

徑山國一禪師、字法欽、俗姓朱氏、吳郡崑山人也、德宗貞元五年、遣使齎璽書宣勞、幷慶賜豐

厚、師之在京及廻、浙令僕公王節制州邑名賢、執弟子禮者、相國崔渙裴晉公度・第五琦・陳少遊等、自淮而南、婦人禮乞、號皆目之爲功德山。師始遇鶴林素禪師、素曰、汝乘流而行、逢徑卽止、後到臨安、視東北之高巒、乃天目之分徑、偶問樵子、言、是徑山、遂挂錫於此、代宗聞師德、更加仰重、謂南陽忠國師曰、朕欲錫法欽一名、手詔賜號國一矣。

隱山和尚

隱山和尚、參大寂發明心要、隱居潭州龍山、一日洞山、密師伯遊山、見溪流菜葉、洞山曰、深山無人、因何有菜隨流、莫有道人居否、乃共議撥草、溪行六七里間、忽見師羸形異貌、師問曰、此山無路、闍梨從何處來、洞曰、無路且置、和尚從何而入、師曰、吾不從雲水來、洞曰、和尚住此山多少時、師曰、春秋不涉、洞曰、和尚先住、此山先住、師曰、不知、洞曰、爲甚麽不知、師曰、我不從人天來、洞曰、和尚得何道理、便住此山、師曰、我見兩箇泥牛鬪入海、直至於今絕消息、洞山始具威儀禮拜便問、如何是主中賓、師曰、青山覆白雲、曰、如何是賓中主、師曰、長年不出戶、曰、賓主相去幾何、師曰、長江水上波、曰、賓主相見、有何言說、師曰、清風拂明月、洞山辭退、師乃述偈曰、三間茆屋從來住、一道神光萬境閑、莫把是非來辨我、浮生穿鑿不相關、因之燒庵、入深山不見、時人號爲隱山和尚、一曰龍山和尚、卽長沙府龍王山是也。

折牀會

湖南東寺如會禪師、初謁徑山、後參大寂、學徒既衆、僧堂牀榻、爲之陷折、時稱折牀會、又稱夾山和尚、長慶癸卯歲歸寂、勅諡傳明大師。

鄧隱峰

五臺山隱峯禪師、福建邵武人、姓鄧氏、時稱鄧隱峰、於馬大師言下契悟、元和年中遊臺山、路出淮西、吳元濟阻兵違王命、官軍與賊交鋒、師飛錫解陣。

赤眼歸宗

廬山歸宗寺智常禪師、嗣法馬祖、以目有重瞳、遂將藥手按摩、以致目眥俱赤、世號赤眼歸宗焉、後示滅、謚至眞禪師。〔赤眼或作拭眼。〕

涅槃和尚

百丈山第二代法正禪師、謂之涅槃和尚。〔碧巖不二鈔引會元曰、百丈海法嗣百丈山涅槃和尚、一日謂衆曰、汝等與我開田、我與汝說大義、衆開田了歸、請說大義、師乃展開兩手、衆罔措、註洪覺範林間錄曰、百丈第二代法正禪師、大智高弟、其先嘗誦涅槃經、不言姓名、時呼爲涅槃和尚、住成法席、師功最多、使衆開田、方說大義、乃師也、古靈・黃檗諸大士、皆推尊之、唐文人黃武翊、撰其碑甚詳。〕

華嚴尊者〔華嚴和尚二人、華嚴三藏、華嚴大師、華嚴菩薩〕

普寂禪師、北宗神秀之上足也、初在嵩山倡禪法、道聲聞帝宸、詔居東都華嚴寺、故世人稱華嚴尊者。〔華嚴和尚者亡名尊宿、學禪法於北宗神秀、又有華嚴和尚、不顯姓名、居幽州城北、恆持華嚴經、又實叉難陀、一曰施乞叉難陀、華言學喜、與新華嚴同至、故號華嚴三藏、又釋法藏、姓康氏、字賢首、康居人、或曰康藏、澄觀推爲華嚴三祖、乃號華嚴大師、又元有釋正順者、惟

閱華嚴盈千部、每入華嚴觀、三五日而方起、時人謂之華嚴菩薩。

船子和尙

船子和尙、諱德誠、得法於藥山、後與道吾雲巖爲同道交、泊離藥山、乃謂二同志曰、公等應各據一方建立藥山宗旨、予率性疎野、唯好山水、樂情自遣、無所能、佗後知我所止處、若遇靈利座主、指一人來、或堪彫琢、將授生平所得、以報先師之恩、遂分携至秀州華亭、泛一小舟、隨緣度日、以接四方往來之者、時人莫知其高踏、因號船子和尙、後得夾山、覆船入水而逝。

陳蒲鞵

睦州陳蒲鞵、諱道明、江南陳氏之後也、初居睦州龍興寺、晦迹藏用製草屨、密置於道上、歲久人知、乃有陳蒲鞋之號焉、時有學人、叩激之、隨問遽答、詞語峻險、既非循轍、淺機之流、往往嗤之、唯玄學性敏者欽伏、由是諸方歸慕、又謂之陳尊宿。

小釋迦

仰山慧寂禪師、少斷手二指求出家、父母許之、就南華通披剃、得法於潙山、有梵僧、從空而至、曰、特來東土禮文殊、却遇小釋迦、遂出梵書貝多葉、與師作禮、乘空而去、自此諸方號小釋迦、滅後諡智通大師。(始參潙山棲泊、十四五歲而足跛、時號跛脚驅烏。)

小厮兒(普化和尙)

臨濟大師、諱義玄、姓邢氏、曹州南華人、嗣法黃檗運、諡慧照禪師、一日與河陽木塔長老同在僧堂地爐內坐、因說、普化每日在街市掣風掣顚、知佗是凡是聖、言猶未了、普化入來、師便問、

汝是凡是聖、普化曰、汝且道、我是凡是聖、師便喝、普化以手指曰河陽新婦子、木塔老婆禪、臨濟小厮兒、却具一隻眼。鎭州普化、不知何許人、曁盤山順世、於北地行化、或城市或塚間、振一鐸曰、明頭來明頭打、暗頭來暗頭打、云云、時號普化和尙。

周金剛

德山宣鑒禪師、簡州周氏子、丱歲出家、依秊受具、精究律藏、於性相諸經、貫通旨趣、常講金剛般若、時謂之周金剛、遂往龍潭、於紙燭吹滅下、大悟、遂嗣其法、雪竇顯拈德山托鉢話曰、曾聞說、箇獨眼龍、元來只有一隻眼。明招謙代德山曰、咄咄、沒處去、沒處去。殊不知、德山是箇無齒大蟲、若不是巖頭識破、爭得明日與昨日不同、諸人要會末後句麼、只許老胡知、不許老胡會、

踢天太

泰首座不知何許人、洞山喫果子次、問師、有一物、上拄天下拄地、黑似漆、常在動用中、動用中收不得、汝道、過在甚處、師曰、過在動用中、山便喝令撥却果卓、後諸方稱首座曰踢天太、傳燈錄作泰長老。

密師伯

潭州神山僧密禪師、時稱密師伯、嗣雲巖晟、師嘗與洞山价公同遊山、見龍山和尙、价公問答見隱山之下、又傳燈錄鄂州百顏明哲禪師傳、洞山與密師伯到參、師問曰、闍梨近離什麼處、洞山曰、近離湖南、師曰觀察使姓什麼、曰、不得姓、師曰、名什麼、曰、不得名、師曰、還治事也無、曰、自有郎幕在、師曰、豈不出入、洞山拂袖而去。

泰布衲〔遵布衲、稠布衲〕

南嶽玄泰禪師、性摻方正、言不浪施、居衡山東號七寶臺、不衣蠶縷、時謂之泰布衲、始見德山、後謁石霜、遂入室焉。〔遵布衲未詳眞名、浴佛次、藥山曰、這箇從汝浴、還浴得那箇來、山乃休、又稠布衲、不知何人、禪林僧寶傳曹山寂章曰、有稠布衲、問曰、披毛戴角、是什麼墮、寂曰、是類墮、問、不斷聲色、是什麼墮、曰、是墮墮、問、不受食、是什麼墮、曰、尊貴墮。〕

骨剉和尙

羅漢宗徹禪師、依黃檗領旨、有時上堂、僧問、如何是西來意、師曰、骨剉也、對機多用此、時號骨剉和尙。

紙衣和尙〔紙衣和尙、紙衣道者〕

克符道者號曰紙衣和尙、參見臨濟、有四料簡之頌。〔克符乃琢州紙衣也、又有洪州紙衣和尙、嗣大安、又紙衣道者、不顯其姓氏、僧寶傳曹山寂章曰、有僧以紙爲衣、號爲紙衣道者、自洞山來、寂問、如何是紙衣下事、僧曰、一裘才挂體、萬事悉皆如、又問、如何是紙衣下用、其僧前而立曰、諾、卽脫去、寂曰、汝但解恁麼去、不解恁麼來、僧忽開眼曰、一靈眞性、不假胞胎時如何、寂曰、未是妙、僧曰、如何是妙、寂曰、不借借、其僧坐於堂中而化。〕

不語通

廣州和安寺通禪師、婺州雙林寺受業、自幼寡言、時人謂之不語通、因禮佛次、有禪者問、座主禮底是甚麼、師曰、是佛、禪者乃指像曰、這箇是何物、師無對、至夜具威儀禮問、今日所問、某甲

未知意旨如何、禪者曰、座主幾夏邪、師曰、十夏、禪者曰還會出家也未、師轉茫然、禪者曰、若也不會、百夏奚爲、乃命同參馬祖、及至江西、祖已圓寂、遂謁百丈、頓釋疑情。

钁頭通

益州北院通禪師、在洞山、隨衆參請、未契旨、遂辭洞山、擬入嶺去、洞山曰、善爲飛猿嶺峻好看、師沈吟良久、洞山曰、通闍黎、師應諾、洞山曰、何不入嶺去、師因此省悟、更不入嶺、師事於洞山、時號钁頭通。

老觀和尙

福州烏石山靈觀禪師、住本山薛老峰、嗣黃檗運、尋常扃戶人罕見之、唯一信士、每至食時送供方開、稱曰老觀和尙。（是乃住丁墓山時也。）

趙古佛

趙州從諗禪師、嗣南泉、僧問雪峰、古澗寒泉時如何、峰曰、瞪目不見底、曰、飲者如何、峰曰、不從口入、僧擧似趙州、州曰、不從口入、不可鼻孔裏入、僧却問、古澗寒泉時如何、州曰、苦、曰、飲者如何、州曰、死、峰聞得乃曰、趙州古佛、遙望作禮、自此諸方稱古佛、寂年一百二十歲、諡眞際大師。（楚石琦頌趙州勘婆話曰、先行不到、末後太過、趙州屋裏坐、勘破臺山婆、獅子咬人、韓獹逐塊、七百甲子老兒、今日和贓捉敗。）

岑大蟲

湖南景岑禪師、號招賢大師、居無定所、但徇緣接物、隨請說法、時衆謂之長沙和尙、因與仰山

翫月次、山曰、人人盡有這箇、只是用不得、師曰、恰是倩汝用、山曰、儞作麼生用、師乃蹋倒、山曰、㘞、直下似箇大蟲、自此諸方稱爲岑大蟲、得法南泉。

大哥和尚

石門寺獻禪師、自青林受記、兩處開法、凡對機多曰、好好大哥、時謂之大哥和尚。

大禪佛

五臺山智通禪師、自稱大禪佛、初在歸宗會下、忽一夜連叫曰、我大悟也、衆駭之、明日上堂、衆集、宗曰、昨夜大悟底僧出來、師出曰、某甲、宗曰、汝見甚麼道理、便言大悟、試說看、師曰、師姑元是女人做、宗異之、師便辭去、宗門送與提笠子、師接得笠子戴頭上便行、更不回顧。

瀏陽叟

潭州石霜慶諸禪師、謂之瀏陽叟、受道吾印、遁迹自處、于時始爲二夏僧、因避世混俗於長沙瀏陽陶家坊、人不之識、洞山价訪而得之、遂辟居石霜山。洞山聞師有何不道、出門便是草之語、驚曰、瀏陽乃有古佛耶。

俱胝和尚

金華俱胝和尚者、亡名尊宿也、得天龍和尚一指頭禪、婺州明招謙、問國泰、古人道、俱胝祇念三行呪、便得名超一切人、作麼生與他拈卻三行咒、泰竪起一指、謙曰、不因今日、爭識得瓜州客、師一生持誦俱胝佛母准提陀羅尼、顯諸効驗、故號俱胝和尚。

米七師（辛七師）

京兆米和尚者、亡名尊宿也、又號米七師、或曰米胡、得法潙山祐。〔又唐陝府有辛七師者、身有奇光、衆人重之若神。〕

大小朗〔二人〕

慧朗禪師、造石頭言下信入、後住招提寺、不出戸三十年、凡參學者至、皆曰、去去、汝無佛性、其接機大約如此、時謂之大朗禪師、又有小朗禪師、唐嚴維酬普選二上人律詩前對曰、遙知大小朗、已斷去來心。〔全篇見瀛奎律髓。〕

劉鐵磨

劉鐵磨者、爲山祐和尚之嗣也、碧巖集曰、去潙山十里卓庵、一日去訪潙山、山見來便曰、老牸牛、汝來也、木杯曰、劉者姓也、鐵磨者鐵做底磨子也、言磨齒快碎一切物也、然此尼、口牙俊利快便、人不可當、仍號劉鐵磨。

伏虎

松溪行儒禪師、景福元年菴于中峰、有虎齧人、鄕人集衆捕之、師乃騎虎出迎、衆大驚、因呼之稱伏虎。

雨禪師

雨禪師者、光化中人、名師信、庵于隱山故基、歲旱民祈雨響應、馬氏據有荊楚、欽事之、不敢名、止曰雨禪師。

寒山〔拾得〕

寒山子者風狂之士、弗可恒度推之、隱居天台之寒巖、以樺皮爲冠、曳大木屐、或發辭氣宛有所歸、歸于佛理、後入巖石穴縫中、杳絶蹤跡、而其本無氏族、越民唯呼爲寒山子。天台國清寺有拾得者、因豐干禪師、於赤城路側得之、可十歲、委問無家、付庫院養之三年、令知食堂、因號拾得、寒山子若來卽負而去、或長廊叫喚快活、寺僧逐罵撫掌大笑。」

胡釘鉸

胡釘鉸唐散人、世不以名顯也、會元寶壽章曰、胡釘鉸參、師問、汝莫是胡釘鉸麼、曰、不敢、師曰、還釘得虛空麼、曰、請和尚打破、師便打、胡曰、和尚莫錯打某甲、師曰、向後有多口阿師、與儞點破在、後到趙州、擧前話、州曰、汝因甚麼被他打、胡曰、不知過在甚麼處、師曰、祇這一縫不奈何、胡於是有省、州曰、且釘這一縫。

五代

布袋和尙

釋契此者、不詳氏族、形裁腲脮、蹙頞皤腹、常以杖荷布囊入鄽、時號長汀子布袋和尙、江浙間多畫其像焉。「又謂之風和尙。」

蜆子和尙「豬頭和尙」

蜆子者不顯姓名、自印心於洞山、混俗於閩川、不畜道具、不循律儀、日沿江岸、採掇蝦蜆充腹、暮卽臥東山白馬廟紙錢中、居民目爲蜆子和尙、簡北磵有賛、曰、蜆兒蜆子實齋盂、少小持齋

弗茹葷、自出洞來無敵手、豬頭鷄足是門徒。〔務州沙門志蒙、姓徐氏、常衣錦衣、喜食豬頭、言人災祥無不驗、呼人爲小舅、自號徐姊夫、一日坐化于三衢吉祥寺、遺言、吾是定光佛、至是奉眞身、祈禱不歇、世目之曰豬頭和上、又時稱金華尊者、廣壽開山和尚有讚、曰、亥元如與木樝羹、格外風流過、一生不是末梢誇好手、賺佗箇箇落深坑、雞足未詳、且俟考焉。〕

跛脚子

韶州雲門大師、名文偃、初至睦州聞有老宿飽參古寺、掩門織蒲屨養母、往謁之、方扣門、老宿搊之曰、道道、師驚不暇答、乃推出曰、秦時𨍏轢鑽、隨掩其扉、損師右足、因有跛脚子之號、得法雪峰、倫斷橋在瑞巖結夏小參擧、僧問雲門、如何是諸佛出身處、雲門曰、東山水上行、後來圓悟道、若是天寧即不然、忽有人問如何是諸佛出身處、薰風自南來、殿閣生微涼、拈曰、一箇跛脚子、一箇巴頭子、互相發明、故是作家、其奈松柏千年青、不入時人意。〔師嘉興人、又稱偃浙子、又眞淨文、拈乾峯一路話曰、只如乾峯恁麼、曾夢見也未、若是老僧不然、十方薄伽梵、一路涅槃門、未審路頭在甚麼處、劈脊便棒、卻問伊、路頭在甚麼處、待伊擬開口、熱喝出去、更有箇雲門折脚老比丘、不分緇素、不辨正邪、拈扇子曰、扇子𨁝跳上三十三天、築着帝釋鼻孔、東海鯉魚打一棒、雨似盆傾、似遮般和泥合水漢、糞掃堆裏、埋却十箇五箇、又有甚過、阿呵呵、樂不樂、足不足、而今幸對山青水綠、年來是事一時休、信任身心懶拘束、大衆休瞌睡好。〕

鑒多口

巴陵新開顥鑒大師、嗣雲門偃、碧巖曰、巴陵衆中謂之鑒多口、常縫坐具行脚、深得佗雲門脚

跟下大事、謂多口者、師鵞口利舌、故有此稱云。（雪竇頌銀盌盛雪話曰、老新開端的別、解道銀盌裏盛雪、九十六箇應自知、不知卻問天邊月、提婆宗、提婆宗、赤幡之下起清風。）

獨眼龍

明招德謙禪師、受羅山印記、不滯一隅、擊揚玄旨、人皆畏其敏捷、鮮敢當鋒者、以失左目、遂號獨眼龍。

扣冰古佛

扣冰澡先古佛、初參雪峯、峯曰、子異日必爲王者師、後自鵞湖歸溫嶺結菴、繼居將軍巖、二虎侍側、神人獻地爲瑞巖院、學者爭集、夏則衣楮、冬則扣冰而浴、故世人號爲扣冰古佛。

華嚴和尙

華嚴和尙者、五代亡名尊宿也、嗣法於曹山寂、僧問、既是華嚴、還將得華來麽、師曰、孤峯頂上千指秀、一句當機對聖明。

備頭陀

玄沙宗一大師、法名師備、姓謝氏、幼好垂釣、泛小艇於南臺江、狎漁者、忽慕出塵、落髮、布衲芒屨、食纔接氣、常終日宴坐、與雪峯存本法門昆仲、後嗣其法、雪峯以其苦行、呼爲備頭陀、問、如何是清淨法身、師曰、膿滴滴地、又問、如何是親切底事、師曰、我是謝三郎、師以有還鄉偈盛傳於世、故遂號還鄉和尙。

羅漢（羅漢和尙二人、王羅漢、常羅漢、牟羅漢）

地藏桂琛禪師、生李氏、常山人也、初謁雪峯存公、不大發明、又事玄沙、遂臻奧、漳州牧王公、請住城西石山、十餘年遷於羅漢院、爲衆宣法、閩人止呼曰羅漢。〔唐宋有羅漢和尚、共亡名尊宿、唐羅漢嗣關南常、宋羅漢嗣香林遠、又宋有王羅漢・常羅漢、王住明州乾明寺、不測僧、漢南王錢氏、私易名、爲密修神化尊者、常喜州異僧、好勸人設羅漢齋、又牟羅漢、眉人、名安、以廂兵隸倅廳、如岷山、陟上清坂、忽遇髯者、顧笑曰、汝飢、不食柏子耶、摘子投其口、從是不火食云云、一日江水暴張、牟遂置笠水、而趺坐其上、截江以濟、觀者異之、時人皆以牟羅漢呼之。〕

孫　公

長慶慧稜禪師、杭州鹽官人、姓孫氏、隸業蘇州開元寺、歷參禪肆、後見雪峯、疑情冰釋、同參鼓山、常呼爲孫公、鏡清怤曰、若不是孫公、便見髑髏徧野。

手相大師

歸本禪師禮雪峯、峯下禪牀、跨背而坐、師於是省覺、後住襄州雲蓋山西雙泉禪院、師手指纖長異于人、時號手相大師。

小怤布衲

鏡清怤禪師、初謁雪峯有機緣、峯一日垂語曰、此事得恁麼尊貴、得恁麼綿密、師對曰、道怤自到來數年、不聞恁麼示誨、峯曰、我向前雖無、如今已有、莫有所妨麼、師曰、不敢、此是和尚不已而已、雪峯曰、我如此、師從此信入、而且隨衆、後住鏡清禪苑、唱雪峰之旨、閩中謂之小怤布衲。

照布衲

靈照眞覺禪師高麗人也、萍遊閩越、陞雪峯之堂、冥領玄旨、居唯一衲、閩中謂之照布衲。

矮師叔

疎山匡仁禪師、形短矮、香嚴和尙時稱矮師叔、又曰矬師叔、叢林呼爲矮闍梨、僧寶傳曹山寂章曰、咸通初至高安、謁悟本禪師价公、依止十餘年、价以爲類已堪任大法、於是名冠叢林、將辭去、价曰、三更當來、授汝曲折、時矮師叔者、知之蒲伏繩牀下、价不知也、中夜授寂先雲巖所付寶鏡三昧・五位顯訣・三種滲漏、畢再拜趨出、矮師叔引頸呼曰、洞山禪入我手矣、价大驚曰、盜法者倒屙無及矣、後皆如所言。

覺鐵觜

楊州城東光孝院慧覺禪師、趙州之嗣子也、嘗到崇壽、法眼問、近離甚處、師曰、趙州、眼曰、承聞趙州有庭前柏樹子話、是否、師曰、無、眼曰、往來皆言、僧問、如何是祖師西來意、州曰、庭前柏樹子、上座何得言無、師曰、先師實無此語、和尙莫謗先師好、光明藏寶曇曰、此覺鐵觜也、用處如電、而霹靂隨之、其能起龍蛇、渙雲雨、與法眼相見也。

安鐵胡

潁橋安禪師、南院顒之嗣子、時號鐵胡、與鍾司徒向火次、鍾忽問、三界焚燒時、如何出得、師以香匙撥開火、鍾擬議、師曰、司徒司徒、鍾忽有省。

老華嚴

魏府老華嚴、諱懷洞、初弘華嚴之敎、晚參興化存奘禪師、得敎外別傳之旨、遂出世天鉢、次徙

歷沙禪苑、河朔緇素尊事之、故稱老華嚴、禪門宗派圖、有天鉢和尚系出興化者是也。

大禪佛

霍山景通禪師、始參仰山、山閉目坐、師乃翹起右足曰、如是如是、西天二十八祖亦如是、中華六祖亦如是、和尚亦如是、景通亦如是、仰山起來打四藤條、師因此自稱集雲峰下四藤條天下大禪佛、師化緣將畢、先備薪於郊野、徧辭檀信、食訖至薪所、謂弟子曰、日午當來報、至日午師自執炬積薪上、以笠置頂後、作圓光相、手執拄杖作降魔杵勢、立終紅燄中。

澄散聖

靈澄散聖受訣巴陵、應接叵測也、正燈錄曰、潙潭澄者有二人、共雲門宗也、其一名靈澄、嗣巴陵鑒、其二名懷澄、嗣五祖戒、皆住潙潭、而黃龍南之所依者、乃懷澄也、非澄散聖矣、正宗贊讃黃龍曰、與會監寺栗棘蓬、十載同參、搭澄散聖冬瓜印、半生受屈、蓋誤矣、聯燈懷澄作澄散聖、亦誤耳。

長耳和尚

長耳和尚、諱行修、姓陳氏、泉州人也、少投北巖院出家、年始十八、參雪峰存禪師、隨衆請問、未詮旨、辭言入浙去、存曰、與汝理定容儀、令彼土人睹相發心、遂指其耳曰、輪郭幸長垂、璫猶短、吾爲汝伸之、雙手平曳、卽及肩、如是三、自此長垂、見者擧目、後唐天成二年丁亥歲、入浙中、傾城瞻望、檀施紛紛、杭人以長耳稱之、示寂後、弟子以漆布今猶存焉。

小壽禪師

興敎和尙、諱洪壽、錢唐曹氏之子也、目之小壽、林間錄曰、杭州興敎小壽禪師、初隨天台韶國師普請、聞墮薪作偈曰、撲落非他物、縱橫不是塵、山河及大地、全露法王身、國師頷之而已、〔案、小壽恐以永明延壽爲大壽、師爲小壽者乎、猶大本小本及大範小範等。〕

小彥長老

台州瑞巖師彥禪師、姓許氏、閩越人、初樂杜默、似不能言者、見巖頭領會、時人目爲小彥長老。〔無門關云、瑞巖和尙、每日自喚主人公、復自應諾乃曰、惺惺着、喏、他時異日、莫受人瞞、喏喏。〕

大小靜〔二人〕

國淸寺師靜、得印玄沙、居天台三十餘載、不下山、博綜三學、操行孤立、禪寂之餘閱龍藏、遐邇欽重時謂大靜上座、師因覩敎中幻義、乃述一偈問諸學流、偈曰、若道法皆如幻有、造諸過惡應無咎、云何所作業不忘、而藉佛慈興接誘、時有小靜上座、答曰、幻人興幻幻輪圍、幻業能招幻所治、不了幻生諸幻苦、覺知如幻幻無爲、二靜上座竝終於本山、今國淸其遺縱在焉、〔禪者問師靜曰、坐時心念紛飛、願師示誨、靜曰、汝當心念紛飛時、却將紛飛之心、以究紛飛之處、究之無處、則紛飛念何存、反究究心、則能究之心安在、又能照之智本空、所緣之境亦寂、寂而非寂者、蓋無能寂之人也、照而非照者、蓋無所照之境也、境智俱寂、心慮安然、此乃還源之要道也。〕

禪林口實混名集卷之上　終

禪林口實混名集卷之下

晩學沙門　斷橋　撰

宋

樓子和尚

樓子和尚者、不知何許人也、未詳法嗣、遺其名氏、一日偶經遊街市間、於酒樓下整襪帶、次聞樓上人唱曲曰、汝既無心我也休、忽然大悟、因號樓子和尚。

端師子

西余淨端禪師、始見弄師子者、發明心要、則以綵帛像其皮、常着之、因號端師子、毎雪朝、著綵衣入城、小兒爭譁逐之、從人乞錢、得卽以散飢寒者、常誦法華、又好歌漁父詞、住湖州西余山、嗣翠峯月。

珍師子

別峰珍和尚者、佛心才之嗣子也、退鼓山詣育王、候見大慧、置一蒲團於佛殿後、坐七十九日、因秦國太夫人、請大慧陞座、私自喜曰、今日得見必矣、果得一見、語合室中、復投三轉語而去、

大慧大奇之、遂與玄智同學之住岳林、師徧身有長毫、時號珍師子。

珍布衲

建陽惟珍禪師、天資和雅、篤于杜多之行、嘗搭粗布僧伽黎、叢林有珍布衲之名、參慈明得旨、出住洪州百丈山。

元布袋

護國景元禪師、資度豊碩、如世所畫布袋和尙者、故人稱之爲元布袋、參圓悟豁然大徹、繼而執侍、機辯逸發、圓悟目爲聱頭元侍者、遂自題肖像、付之曰、生平只說聱頭禪、撞着聱頭、如鐵壁、云云、又圓悟嘗語人曰、我有些子禪、元兄一布袋盛將去也。

元五斗

成都府昭覺徹庵道元禪師、綿州鄧氏子、嗣法圓悟勤、大慧武庫曰、寶峰元首座、亦有道士、答話機鋒鈍、覺範號爲元五斗、蓋開口取氣、炊得五斗米、熟方答一轉語。元一作源、羅湖野錄曰、源應機鈍甚、寂音目爲源五斗、蓋開口取氣、炊熟五斗粟、方能醻一轉語、妙喜老師亟嘗爲源見知、因謁李商老、逾年而歸、源讓之曰、啞荒了也、豈不念無常迅速、老師常以此語學徒、且謂、當時不覺汗下。

元枯木（成枯木、榮枯木、枯木道人）

溫州雁山能仁祖元禪師、姓林氏、七閩長樂人、風骨淸癯、危坐終日、大慧嘗目爲元枯木、遂得其法、乃洋嶼發明者、十三人之一耳。（枯木法成嗣芙蓉楷、榮禪師亦號枯木、嗣無方安、所謂成

枯木・榮枯木者是也、然非混名矣、故惟出元枯木一人、不取成榮之二公焉、又元天目師子巖一山行魁首座、蘇州人、號枯木道人、嘗見妙高峰來、師天資敏捷、通內外典、其滅後託身洪氏家、謁空室和尙、事載于續燈存稿。）

元青州（慶福建）

北京天盔寺重元禪師、青州千乘孫氏子、得法天衣懷、懷印可曰、此吾家千里駒也、武庫曰、懷禪師謂秀圓通曰、元青州・慶福建竝汝三人、克振吾宗、自餘皆是隨根受道。（慶福建未詳。）

蘭布裩

光孝慧蘭禪師、自號碧落道人、得法大爲喆、師嘗以觸衣書七佛名、叢林稱爲蘭布裩、有擬草庵歌一篇、行于世。

皓布裩

玉泉皓禪師、元豐間、首衆於襄陽谷隱、望聳諸方、無盡張公、奉使京西南路、就謁之、問曰、師得法何人、師曰、復州北塔廣和尙、公曰、與彼相契、可得聞乎、師曰、只爲伊不肯與人說、公善其言、致開法于郢州大陽、師嘗製犢鼻裩、書歷代祖師名、而服之乃曰、唯有文殊普賢、較些子、且書於帶上、故叢林目爲皓布裩、有侍僧、效之、師見訴言、汝見何道理、敢以爲戲事耶、僧尋如所言而逝。

盧公（韓大伯）

雪竇重顯禪師、字隱之、生遂州李氏、得法智門祚、碧巖集曰、昔雪竇自呼爲盧公、他題晦迹自

貽曰、圖畫昔年愛洞庭、波心七十二峰青、而今高臥思前事、添得盧公倚石屛、師初在大陽玄會下、典客與僧夜話、雖黃古今、至趙州柏樹子因緣、客問曰、當時覺鐵觜曰、先師實無此語、而法眼肯之、其旨安在、師曰、宗門抑揚、那有規轍乎、時有韓大伯者、爲行者、寢侍其旁、輙笑而去、客退師數之曰、對賓客敢爾、對曰、知客有定古今之辯、無定古今之眼、故敢笑、師曰、且趙州意、汝作麼生會、因以偈對之、一兎橫身當古路、云云、後韓在師會下、自號宗上座、師偶經行植杖、衆衲環之、忽問曰、有僧問雲門、樹凋葉落時如何、曰、體露金風、雲門答遮僧耶、爲解說耶、宗曰、待老漢有悟處即說、師熟視、驚曰、非韓大伯乎、曰、老漢瞥地也、「雪竇有七翰林之才、或曰、十翰林之才也、竇翰林之號、在于此、韓大伯苦行僧、林間錄、或曰、即承天傳宗禪師是也、然則韓後嗣法雪竇者歟、古人承嗣之無私可見也。」

言法華、「風法華、久法華、法華朗、法華和尚」

志言大士、姓許氏、梵相奇古、直視不瞬、口吻衮衮、不可識、常誦法華、因以稱言法華、靈異甚多、慶曆年中逝、仁宗遣內使、以眞身塑像、置其所居開寶寺、榜曰顯化禪師、亦世呼言風子。又唐有風法華、姓張、故一曰張法華、宋亦有久法華、又隋僧朗法師、每誦法華經、一座七遍、終至七萬部、時號法華朗、又明釋傳記者、三十餘載、日誦法華、每獲瑞應、謂之法華和尚。」

念法華

汝州首山念禪師者、生狄氏、萊州人也、幼棄家得度於南禪寺、爲人簡重、有精識、專修頭陀行、誦法華經、叢林畏敬之、目以爲念法華、至風穴、隨衆作止、無所參扣、然終疑敎外有別傳之法、

不レ言也、風穴每念、大仰有レ識、臨濟一宗、至レ風而止、懼レ當レ之、熟視二座下一、堪三任法道一、無レ如二念者一、一日陞座曰、世尊以二青蓮目一顧二迦葉一、正當二是時一、且道、箇什麼、若言二不說而說一、又是埋二沒先聖一、語未レ卒、師便下去、侍者進曰、念法華無レ所レ言而去、何也、風穴曰、渠會。

青華嚴

投子山義青禪師、嗣二法於大陽玄一、李氏子、薙レ髮入レ洛聽二華嚴一、義若二貫珠一、故叢林有二青華嚴之譽一、時圓鑑遠、退レ席居二會聖巖一、遠夢、得二俊鷹畜一レ之、既覺而師適至、遠以爲二吉徵一、加レ意延禮レ之、留止三年、遠問曰、外道問レ佛、不レ問二有言一、不レ問二無言一時如何、世尊默然、如何會、師擬二進語一、遠驀以レ手掩二其口一、於レ是師開悟、拜起、遠曰、妙悟二玄機一耶、師曰、設有二妙悟一、也須二吐却一、時有二資侍者一、在レ旁曰、青華嚴今日如二病得一レ汗、師回顧曰、合二取狗口一、汝更忉忉、我卽便嘔、服勤又三年、圓鑑以二大陽皮履布直裰一付レ師、續二洞上宗旨一云。

覺華嚴

智度覺禪師、因二冥誦華嚴經一、至二現相品一曰、佛身無レ有レ生、而能示二出生一、法性如二虛空一、諸佛於レ中住、無住亦無主、處處皆見レ佛、於レ是悟二入華嚴境界一、謁二無盡居士於荊南一、居士曰、若向上一著、非二蔣山老一、孰能指南、遂遺レ書爲二師紹介一、其略曰、覺華嚴乃吾鄉大講主、云云、後經二于五年一、閱二浮山遠削執論一、頓釋二所疑一、嗣二法圓悟一。

顒華嚴

投子顒禪師、姓梁氏、依二霍山文廣上人一出家圓具、橫二經講席一、洞曉二佛意一、華嚴九會、敷演三四、遂

遊諸方、造蘇州瑞光圓照法席、扣問禪宗、一日登溷捺倒、打破水瓶有省、作偈曰、這一交、這一交、云云、名聲藹然、遂出世說法、乃嗣圓照本、初住壽州資壽、歷遷數大刹、又遷舒州投子、道譽愈播、叢林同號曰顚華嚴。

安楞嚴〔楞嚴師〕

上方遇安禪師、常閱楞嚴經、至知見立知、卽無明本、知見無見、斯卽涅槃、師乃破句、讀曰、知見立知卽無明本、知見無見斯卽涅槃、於是有省、有人語師曰、破句了也、師曰、此是我悟處、畢生不易、時謂之安楞嚴、得法于天台韶國師。〔又楞嚴師、名子璿、自作楞嚴疏、未成時、夢文殊入口、時稱楞嚴師、嗣法瑯邪覺。〕

璉三生

宗璉禪師、姓董氏、合州雲門人、兒時異言、遂蒙恩得度、後晦迹南嶽二十年、居三生藏、因號璉三生、歷住報恩福嚴及龍王玉泉、紹興中寂、壽六十四、嗣大潙杲。林間錄以大覺璉、作璉三生、恐非是。〕

頂三教

福州東山雲頂禪師者、泉南人、謁大愚芝・神鼎諲諸名衲、後見羅漢下尊宿、始徹己事、道學有聞、叢林稱爲頂三教、出普燈未詳嗣承。

如十智

如無明者三衢人、參雲蓋智和尙、悟汾陽十智同眞話、凡說禪、便師十智同眞、叢林號爲如十

智、後住道場、水庵圓極皆依之、故圓極嘗賛之曰、生鐵面皮難湊泊、等閑擧步動乾坤、戲拈十智同眞話、不負黃龍嫡骨孫。

甘露滅〔安穩眠〕

寂音尊者、諱德洪、字覺範、住江寧清涼寺、爲狂僧誣告抵罪、張丞相當國、復度爲僧、有詔、賜號寶覺圓明禪師、自稱寂音尊者、又自號甘露滅、兼作甘露滅齋銘、因時以甘露滅呼之、枯崖和尚曰、昔甘露滅・瑩仲溫、皆見地明白、其可以文字多之。〔道融曰、庵堂道號、前輩例無、但以所居處呼之、如南岳・青原・百丈・黃檗是也、庵堂者、始自寶覺禪師謝事黃龍、退居晦堂、人因以稱之、自後靈源・死心・草堂、皆其高弟故、遞是相法之、眞淨與晦堂同出黃龍之門、故亦以雲庵號之、覺範乃雲庵之子、故以寂音甘露滅自標、云云、道融乃古月融禪師、自號安穩眠、住丹丘、撰叢林盛事〕。

遠錄公〔薛大頭〕

浮山遠禪師、姓王氏、自稱棠石野人、年十九出家、參諸德、有契悟、號圓鑑禪師、晚歸休會聖巖、嗣法葉縣省、師嘗與達觀穎・薛大頭七八輩、遊蜀幾遭横逆、師以智脫之、衆以師曉吏事、故號遠錄公。〔眞淨和尚遊方時、與二僧偕行到谷隱薛大頭、問曰、三人同行、必有一智、如何是一智、二僧無語、淨立下肩、應聲便喝、薛竪拳作相撲勢、淨云、不勞再勘、薛拽拄杖趂出、薛見石門慈照禪師云、照嗣首山念〕。

丘氏伯

慧月禪師、姓丘氏、信州永豊縣人、初遊湘漢、暨歸永豊、或處巖谷、或居市廛、鄉民稱曰丘氏伯、得法雲居祐。

鄧師波

五祖法演和尚、初住四面、後止蘄州五祖、有嗣其法者中世稱三佛、乃佛果勤・佛鑑懃・佛眼遠、以演和尚謂鄧師波者、虛堂錄曰、會得西川鄧師波、東山下左邊底、鈔曰、五祖演綿州鄧氏子、師波乃師伯也。光明藏曰、五祖和尚、暮年多振轉面目曰、不是不是、當時目爲振面鐵酸餡。

勤巴子

佛果圓悟禪師、諱克勤、字無著、彭州駱氏子、嗣法於五祖演、所謂東山下三佛之一也、諸方稱之勤巴子、會元曰、靜南堂後住天童、天目文禮作師畫像贊曰、東山一會人、唯他不唧{口留}、別處著閑房、叢林難講究。邡水潭蛇出驚人鈍鐵鍋、雞啼白晝雜劇、打來全火祗候、晚歲放疎慵、却與俗和同、勤巴子使人勘驗、擲香貼便顯家風、定光無佛枉費羅籠、臨行搖鐸向虛空、那知喪盡白雲宗、又正宗贊大慧傳曰、初參湛堂、爲侍者、堂病革、師曰、和尚此疾若不起、某甲去依附誰、堂曰、勤巴子甚好、會元湛堂章及大慧年譜作川勤、又師頭上有瘢痕、如巴字、故呼之曰巴頭子。

杲風子

大慧普覺禪師、諱宗杲、生于宣州奚氏、卽雲峰悅和尚之後身也、叢林謂之杲風子、正宗贊顏卍庵贊、有隨杲風子遠竄梅州之語、又有杲罵天・罵天翁之稱、因居妙喜庵、自號妙喜、性褊急、

故自叉稱褊急性菩薩、隆興中寂、勅諡普覺、嗣法圓悟。

會魔子

三祖會禪師者、天衣懷公之嗣也、天資敬嚴、臨衆煩苛、叢林目之爲會魔子。

顯牛子

西蜀顯禪師者、紹覺白剃度之弟子也、白公有偈送之南遊曰、古路迢迢自坦夷、云云、後參演和尚于海會、機語相契、久之旋成都、應長松之命、開堂日、拈香曰、一則爐鞴功精、一則磨淬極妙、二功並著、理孰爲先、不見道、本重末輕、當風可辨、此香奉爲紹覺、爇向爐中、令教普天帀地、寘溝塞壑、天下衲僧、無出氣處、瑩仲溫曰、嗚呼言浮其實、欲隱彌露、無乃計之左乎、其與一宿覺蓋相萬也、至於蚤善藏嵩之筆、故叢林目爲顯牛子、既以小技掩道望、以故情謬紊師承、而爲後世矜式、其可耶。

福建子

介石朋禪師者、閩人也、性高簡、得法浙翁、諸方稱福建子、扁其室曰青山外人、師住淨慈、珍藏叟諸山疏曰、皇帝有勅、況來自釋梵天、丞相無私、未嘗嫌福建子。

杭州子

無等才禪師、從妙喜於衡陽、一日因入室、喜問、庵內人爲什麼不見庵外事、師曰、鮎魚上竹竿、喜以竹篦迅擊一下、師平生疑情、渙然而冰釋、妙喜自此每呼師爲杭州子、諸方亦隨之。

建州子

開善謙和尚者、建寧人也、初之京師謁圓悟、後隨妙喜于泉南、喜領徑山、師亦侍行、未幾喜令往長沙通紫巖居士書、師自惟曰、我參禪二十年、迥無入處、更作此行、決定荒廢、意欲無行、友人宗元者、乃責曰、不可在路參禪不得、吾與汝俱往、師不得已而往、在路泣謂元曰、我一生參禪、殊無得力處、今又途路奔走、如何得相應去、元告之曰、但將諸方參得底、悟得底、圓悟妙喜、與汝說得底、都不要理會、途中可替底事、我盡替得、只有五件事、替儞不得、師曰、甚五件事、元曰、着衣喫飯、屙屎送尿、把箇死屍路上行、師於言下大悟曰、非兄如何得此田地、元卽還自途中、師到長沙留半載、乃歸徑山、妙喜策杖倚門而待、一見師曰、建州子、這回別了也。

烏頭子

無準範禪師、少穎悟、以機辯自將、謁蒙菴于雙徑、庵問、何處人事、師曰、劍州人、又問、還將得劍來麼、師下一喝、菴曰、烏頭子也括噪人、師髮黑、時號爲烏頭、後住徑山、賜徽號金襴、嗣法破庵。〔師行狀曰、有老深首座者、蜀人、久病、師爲執侍湯藥、深平生惟一喝用事、佛照問疾次、謂深曰、深首座、何不可一喝、深却喝、佛照曰、猶作主宰在、顧謂師曰、何處人、師曰、劍州人、佛照曰、帶得劍來麼、師隨聲便喝、佛照笑曰、者烏頭子、也亂做、師年方二十、而臨機不屈、類如此、貧甚無資薙髮、故佛照室中、常以烏頭子目之。〕

通烏頭

眞州北山法通禪師、嗣法長蘆了、叢林稱曰通烏頭。

簡浙客

明州天童清簡禪師、錢塘張氏子、師爲事孤潔、時謂之簡浙客、晩居雪竇而終、塔于寺之東南隅、嗣法歸宗柔。

了菩薩

眞歇了禪師、謂之了菩薩、正宗贊丹霞讚曰、威音王已前、收了菩薩、毫光歸一掌、云云、祖照禪師住長蘆、座下常滿千衆、師自丹霞會下來、時年尚幼、祖照見其敏利、令首衆、後退院、與之意、共承嗣、及拈衣乃曰、得法丹霞室、傳衣祖照庭、恩深轉無語、懷抱自分明、照不樂下座、扯奪其衣、師自此終身、不搭法衣、江湖有識者、皆雅其不忘本也。

覺夫子

宏智覺禪師、嗣丹霞淳、故正宗贊丹霞讚曰、夜明簾、不借擒覺夫子筆陣掃千軍、蓋師在丹霞座下、掌牋記、故稱之覺夫子。（師濕州李氏子、因稱曰濕州古佛。）

泉大道

南嶽芭蕉庵谷泉禪師、性耐垢汚、大言不遜、世呼爲泉大道、以其歌頌問有大道爲題、如六巴鼻頌、曰、大道巴鼻、問著瞌睡、背負胡蘆、狂歌逸戲、有散聖禪師、衲僧座主、山童巴鼻頌、一日以杖荷大酒瓢、往來山中、人問、瓢中何物、曰、大道醬也、受訣汾陽、與慈明同參也、（泉一作全、揮塵後錄餘話卷一曰、皇祐初、名僧谷全、號全大道、以道行重禪林、住廬山圓通寺、忽一男子貨藥入山、自曰、帝子、全見其狀貌頗異、厚資其行、使往京師、自陳鞫治得其妄、廼都人冷緒之男靑也、誅之、全坐黥配郴州、郡中令荷築城土、經歲當盛暑、忽弛擔市中、作頌曰、今朝六月六、老全

受罪足、若不登天堂、定是入地獄、言訖趺坐而化、郡人即其地建塔焉。)

泉萬卷（超萬卷）

蔣山法泉禪師、幼歲出家、群書過目成誦、叢林號爲泉萬卷、後住蔣山、一日索筆書偈、跏趺而逝、勅謚佛慧禪師、嗣雲居舜、紹聖元年東坡居士、有嶺外之行、舟次金陵、阻風江滸、師迎其至、從容語道、於是居士有智海之燈問、師以偈對、居士欣然以詩紀其事。(超萬卷號曜庵、博通經史、與竹庵珪・雲臥瑩爲友、天童宏智目爲超萬卷、乃了堂照禪師十世祖也云。)

回石頭

自回禪師世業石工、眼如盲龜、不識一字、然善根內啓、志慕空宗、求人口授能誦法華、遂棄家投大隋供掃灑、寺中令取崖石、師手不釋鎚鑿、而誦經不輟口、一日鑿石火光迸出、忽然徹悟人皆呼爲石頭和尙、所謂回石頭者是也。

古塔主

薦福承古禪師、操行高潔、禀性虛明、參大光敬玄、乃曰、祇是箇草裏漢、遂參福嚴雅和尙、又曰、祇是箇脫灑衲僧、由是終日默然、深究先德洪規、一日覽雲門語、忽然發悟、自此韜藏不求名聞、棲止雲居弘覺塔所、四方學者奔湊、因稱古塔主。(寂音呵師之遙嗣雲門曰、於己甚重、於法甚輕、蓋以案授受之要也。)

本慕顧（古慕固）

雲蓋智本禪師、白雲端之嗣、謂本慕顧乃是也、始守智和尙、住雲蓋、太守入山憩談空亭、問、如

何是談空亭、智曰、只是箇談空亭、太守不喜、遂擧問師、師曰、只將亭說法、何用口談空、太守大喜。（古墓固未詳、何人、雲臥庵主書曰、禮之錄其中、尙有說、雲蓋古和尙叢林謂古墓固者、頌狗子無佛性話、曰、狗子無佛性、終日庭前睡不驚、狂風打落古松子、起來連吠兩三聲、老師曰、此吟狗子詩也。）

馬嵴山

華亭昭慶寺法寧禪師、東密州莒縣李氏子也、初依沂州天寧妙空明和尙得度、參得旣久、盡得雲門宗旨、出世住沂之淨居寺、大弘雪竇之道、嘗因住馬嵴山、時人以馬嵴山呼之。

眞點胸

翠巖可眞禪師者、福州人、因他裝點胸襟、欲高過於人、故點胸之名、播揚於叢林、嘗爲善侍者折難、自金鑾回、石霜慈明呵曰、解夏未一月、乃已至此、破壞叢林、有何忙事、師曰、大事未透脫故耳、明曰、汝以何爲佛法要切、師曰、無雲生嶺上、有月落波心、明訴曰、面皺齒豁、猶作此見解、師不敢仰視、曰、願爲決之、明曰、汝問、我答、師理前話、明曰、無雲生嶺上、有月落波心、師遂悟得其法。

南匾頭

洪州黃龍慧南禪師、姓章氏、嗣慈明圓、正宗贊曰、塞天地壯膽氣、冲冲滿江湖、匾頭名籍籍、又翠巖眞曰、天下佛法如一隻船、大寧寬師兄坐頭、南匾頭在其中、可眞把梢、去東也由我、去西也由我、又淸素首座謂兜率悅曰、南匾頭見先師不久、後法道大振如此、師嘗頌臺山婆子因

緣、呈慈明曰、傑出叢林是趙州、老婆勘破沒來由、而今四海淸於鏡、行人以路不爲讎、慈明以手點沒字顧師、師卽易有字、而心服其妙密、留月餘辭去。

文關西

眞淨和尙、諱克文、出於陝府閿鄉鄭氏、于時邵武人洪英首座、機鋒不可觸、與師齊名、衆中以英邵武・文關西稱焉、覺範請眞戒住開福、疏曰、受敵八面、蓋文關西之家風、貶剝諸方、有英邵武膽氣、二公共嗣黃龍南。

英邵武

寶峰英禪師、出于邵武陳氏、曾謂眞淨文曰、物暴長者必夭折、功速成者必易壞、不推久長之計、而造卒成、皆非遠大之資、英邵武者是也。

新孟八

死心禪師、姓王氏、名悟新、平生呵佛罵祖、氣蓋諸方、故叢林目爲新孟八、始謁黃龍寶覺禪師、談辯無所抵捂、寶覺曰、若之技止此耶、云云、一日默坐下版、會知事搥行者、師聞杖聲忽大悟、奮起忘納其履、趍方丈見寶覺自曰、天下人總是學得底、某甲是悟得底、寶覺笑曰、選佛得甲科、何可當也、師自號爲死心叟、又榜其居曰死心室。

旻古佛

圓通旻和尙、興化仙遊人、見泐潭乾得其法、諸方稱曰古佛、左丞范公致靈、初自內翰出帥豫章、過侯溪因語次、范歎曰、行將老矣、墮在金紫行中、知此事稍遠、師卽呼內翰、翰應諾、師曰、也

不遠、翰曰、好好、更望指示、師曰、此去洪都在四程、翰佇思、師曰、見卽便見、擬思卽差、翰從此有所入、樞密吳公居厚、擁節歸鍾陵、見師曰、頃赴省試、過圓通趙州關、因問前住訥老、透關底事如何、訥曰、且去做官、今不覺五十餘年、師曰、曾明得透關底事麼、吳曰、八次經過常存念、然未脫灑在、師擧扇與之曰、請使扇、吳揮扇、師曰、有甚不脫灑處、吳大喜曰、便請、末後句、師乃搖扇兩下、吳曰、親切親切、師曰、咭嘹舌頭三千里、陳諫議彭公汝霖、手寫觀音經施師、師拈起曰、這箇是觀音經、那箇是諫議底、彭曰、此是某親書、師曰、寫底是字、那箇是經、彭笑曰、卻了不得也、師曰、卽現宰官身而爲說法、彭曰、人人有分、師曰、莫謗經好、彭曰、如何卽是、師擧經示之、彭撫掌大笑曰、嗄、師曰、又道、了不得也、彭乃頂禮、安相國南遷、經過見師、嘆曰、一生做官、今日被謫、覺見從前、但一夢耳、師曰、相公覺耶、安曰、此皆是本有、但未甚明了、師卽召相公、安擧首、師曰、了也、安曰、奈被事使得、師曰、離京幾程至此、安曰、四十二日、師曰、甚處得來、安唉曰、得力得力、師曰、直下受用去、安曰、如何受用、師曰、朝朝相似、日日一般、安乃合掌、師曰、但空諸有、勿實諸無、大率如此、眞得大自在。

端古事

南海僧守端、字介然、爲人高簡、持律嚴甚、於書史無不博究、商推古今、動有典據、叢林目爲端古事、亦喜工詩、務以雅實、其題石盆庵曰、庵額初頒挂樹頭、樹摧庵朽幾經脩、石盆不滅數升水、野菜時添一筋油、童子面承天子問、老師心與祖師儔、我來蹭蹬思高躅、萬壑雲橫楚甸秋。

政黄牛

餘杭惟政禪師、字煥然、世人呼爲政黃牛、師住山、標致最高、時蔣侍郎堂守錢塘、與師爲方外友、師每來謁之、則跨一黃犢、以軍持掛角上、市人爭觀之、師自若也、至郡庭下犢、而談笑終日而去、一日郡有貴客至、蔣公留師曰、明日府有燕飮、師固奉律、能爲我少留一日、因欲清話、師諾之、明日使人要之、留一偈而去矣、曰、昨日曾將今日期、出門倚杖又思惟、爲僧只合居嵓谷、國士筵中甚不宜、坐客皆仰其標致、又作山中偈曰、橋上山萬層、橋下水千里、唯有白鷺鷥見我常來此、嘗贊自像曰、貌古形疎倚杖藜、分明畫出須菩提、解空不許離聲色、似聽孤猿月下啼、平生製作號錦溪集、又工書、筆法勝絕、嗣法淨土素。

廣無心

九峰希廣禪師、眞淨之子也、天資純至、脫略世故、晩年依同門深公於寶峯、雪夜深與擁爐、語論之久、潛使人戲去廣榻衾褥、及就寢、摸索無有、置而不問、須臾熟睡、鼻息如雷、先是叢林、以道者呼之、至此又得廣無心之稱。

廣南蠻

曇廣南者、久依密庵、後在佛照會中爲寮元、有化鹽頌、合水和泥一處烹、水泥盡處雪華生、便能索起遼天價、公驗分明誰敢爭、佛照喜曰、這廣南蠻也、茆廣後住雪之道場、其道將振、而爲有力者擠之、未幾終于冷泉。

瞌睡虎

虎丘隆禪師初謁湛堂黃龍、次參圓悟、一日入室、悟問、見見之時、見不是見、見猶離見、見不能

及、擧拳曰、還見麼、師曰、見、悟曰、頭上安頭、師聞脫然契證、悟叱曰、見箇甚麼、師曰、竹密不妨流水過、悟肯之、尋俾掌藏敎、有問悟曰、隆知藏柔易若此、何能爲哉、悟曰、瞌睡虎耳、自此稱睡虎。

華匾頭

應庵曇華禪師、生而奇傑、去髮參虎丘、頓明大事、虎丘忌日拈香曰、平生沒興、撞着者無意智老和尚、做盡伎倆、湊泊不得、云云、密庵傑、初出嶺至婺州智者、偶負暄次、有老宿問曰、上座此行何處去、傑曰、四明育王見佛智和尚去、老宿云、世衰道喪、後生家行脚例帶耳不帶眼、傑曰、何謂也、老宿曰、今育王一千來衆、長老日逐接陪不暇、豈有工夫著實與汝輩發機、傑下淚曰、若如此、某往何處、老宿曰、此去衢州明果有華匾頭、見識超卓、汝宜見之、傑依敎往明果依師、一日室中問、如何是正法眼、傑曰、直甚破沙盆、師再追曰、虛空消殞時如何、傑曰、著著頴脫、師曰、罪不重科、傑後以母老辭歸鄕、師以偈送曰、大徹投機句、當陽廓頂門、相從經四載、徵詰洞無痕、雖未付鉢袋、氣宇呑乾坤、却把正法眼、喚作破沙盆、此行將省覲、切忌便躁跟、吾有末後句、待歸要汝遵。

因褊頭

瑞州黃檗志因禪師、嗣法於智海本逸、人謂之因褊頭、寂音送超不群歸黃檗見因禪師詩曰、幽尋忽覺暗香吐、云云、我識山中因褊頭、骨目淸堅貌淳古、便欲閑提折脚鐺、柏子庵邊結茆住、行看談笑起雲門、海上橫行如迺祖、(智海逸嗣開先善暹、乃雲門宗、暹始參德山遠、後至雪竇、竇與語喜其超邁、自曰、海上橫行暹道者。)

順婆婆（卯君）

景德順禪師、以仁慈佐物、叢林目之曰順婆婆、元豐三年、蘇子由以睢陽從事、左遷筠陽推筦之任、是時師與其父文安先生、有契分、因往訪焉、子由咨以心法、師示搐鼻因緣、子由久之有省、作偈呈師曰、中年聞道覺前非、邂逅相逢老順師、搐鼻徑參眞面目、掉頭不受別鉗鎚、云云、師得法黃龍南、子由己卯歲生、兄東坡號之曰卯君。

莫理會

曇現禪師、圓悟之嗣子也、凡有所問、皆對曰、莫理會、故流輩咸以莫理會稱之。

祥叉手（賢叉手、圓通訥）

泐潭景祥禪師、大潙喆之子也、常叉手夜如對賓、初坐、手與趺綴、至五鼓必齊膺、因諸方呼祥叉手、圓通訥亦禪坐、初叉手自如、至中夜漸升至膺、侍者每候之、以待曉色、又賢叉手、未考本名、僧寶傳黃龍南章曰、老宿號賢叉手者、大陽明安之嗣、命公掌書記、泐潭法侶、聞公不入石霜、遣使來訊、俄賢卒、郡主以慈明領福嚴、公心喜之。

賢蓬頭

興陽賢禪師、江州人、叢林以賢蓬頭呼之、眞如會中號稱角立、見地明白、機鋒穎脫、有超師之作、而行業不謹、一衆易之、大慧普說曰、眞如會中有箇賢蓬頭、却是悟底禪也、先師自此俱入其室、又入得眞如門戶、眞劇稱道。

用大碗

雙林德用禪師、承嗣高庵悟、雪堂曰、高庵住雲居、用姪爲監寺、用姪尋常廉約、不點常住油、處己雖儉、與人甚豊、接納四來、略無倦色、高庵一日見之曰、監寺用心固難得、更須照管常住、勿令疎失、用姪曰、在某失爲小過、在和尚尊賢待士、海納山容、不問細微、誠爲大德、高庵唉而已、故叢林有用大碗之稱、師乃出于婺州金華戴氏。

翁大木

天童無用禪師、諱淨全、嗣法於大慧、越州翁氏子、諸方稱翁大木。

大死翁

景深禪師、姓王氏、始謁淨慈象禪師、一日聞象曰、思而知、慮而解、皆鬼家活計、與不自過、遂往寶峰、謁照公求入室、照公曰、直須斷起滅念、向空劫已前、掃除玄路、不涉正偏、盡却今時、全身放下、放盡還放、方有自由分、師聞頓領厥旨、照擊鼓告衆曰、深得闡提大死之道、後學宜依之、因以大死翁稱之。

老聵翁〔岩獃〕

松源岳禪師、生處之龍泉吳氏、得印于密庵傑、開法於蘇臺澄照、慶元間被旨住靈隱、門庭高峻、老而聵、叢林呼爲老聵翁。〔漫錄訥堂辯章曰、眞不忝爲岩獃之子岳聾之孫也、岩獃乃雲巢道巖、嗣松源、有寫經偈及靈雲見桃花頌、見增集續傳燈。〕

寶生薹

洞山自寶禪師、壽州人、生娼室、無姓氏、爲人廉謹、在五祖戒處主事、戒病令行者往庫司、取生

薑煎藥、師叱之、行者白戒、戒令將錢回買、寶方取薑付之、後筠州洞山闕人、郡主以書託戒、擧所知者主之、戒曰、賣生薑漢住得、遂出世爲戒嗣、自此林下稱寶生薑、師初行脚時、嘗宿旅邸、爲倡女所窘、遂讓榻與之睡、師坐禪、明發倡女索宿錢、師與之出門、自燒被褥而去、倡女以實告父母、父母遂請歸、致齋以謝、「愚謂、此與夫鐵脚之事頗相類也、可併按、又文字禪曰、黃龍南遊方時、嘗至歸宗、寶鑒頭方會茶、師卻椅而坐、寶呵之。」

訥叔

吉祥訥禪師、自廬山東林、參圓通秀公、遂爲其嗣、晩年圓通法屬、多依之、故得訥叔之譽於叢林、嘗有偈曰、嘯月吟風水石間、忘機贏得此心閒、無端打破空狼藉、羞對白雲歸舊山。

顚游

典牛、和尚、姓鄭氏、名天游、本仕族、竟往廬山、剃髮不改舊名、首參死心不契、乃依湛堂於泐潭、時妙喜爲侍者、師居書司、後往古藥山、發明大事、出世廬山小寶峰、又徙雲巖、嘗和忠道者牧牛頌曰、兩角指天四蹄踏地、拽斷鼻圈、牧甚屎屁、初張無盡見其坦率不事事、嘗慢之、調之顚游、後妙喜持此頌獻之、無盡撫几稱賞、妙喜曰、相公且道、者頌是甚麼人做、無盡曰、此非彌勒大士、安能發此言、妙喜曰、此乃前日顚游所作、無盡曰、奇哉奇哉、湛堂乃有此兒耶、臨濟一宗其在此矣、師後退雲巖、庵于武寧四十年、終身不出、塗毒見之、已九十三矣。「塗毒策禪師、住雙徑、乃稱唱主者也。」

英鐵觜

衡州花藥英禪師、江之湖口李氏之子也、初於眞淨處受記莂、乃往雲居、佛印命首衆僧、一日佛印握拳、問曰、首座如何、師曰、佗日不敢忘和尙、佛印私以爲喜、有偈讚之曰、誰人識得吉州英、鸎是新羅鐵打成、終不隨佗烏鵲隊、望雲閑叫兩三聲、蓋美其機辯矣、由是叢林呼爲英鐵鸎。〔又文字禪古詩、規模如乃翁、鐵喙石肝膽、豈特七閩英、蓋亦叢林棟。〕

感鐵面

福嚴感禪師、面目嚴冷、孤硬秀出、林下時謂之感鐵面、首衆僧於江州承天、佛印元將遷居蘄州斗方、譽於師郡主、欲使嗣續之、且召師語其事、師曰、某念不至此、和尙終欲推出爲衆粥飯主人、共成叢席、不敢忘德、若使嗣法、則某自有師矣、遂出世爲黃龍之子。

諶鐵面

育王無示介諶禪師、姓張氏、溫州永嘉人、年十六、禮崇德慧微落髮、宣和六年、太師劉公正夫、捨臨第爲顯寧寺、請師出世、師性剛毅、涖衆有古法、又嘗然身燈爲佛事、時人以諶鐵面稱之、嗣長靈卓、人天寶鑑曰、長靈卓禪師、命無示立僧、法席嚴肅、不事堂厨、唯安禪以當佳供、夜參以當藥石、其間衲子、有不任者、無示告卓曰、人以食爲先、若是則衆將安乎、卓慍之曰、表率安可爲此、無示曰、某不爭、堂厨教誰爭邪。〔日本建仁開山明庵西公、乃師五世之孫。〕

秀鐵面

圓通法秀禪師、一號秀關西、諸方稱秀鐵面、秦州人、俗姓辛氏、嗣天衣懷、僧寶傳曰、住眞州長蘆、衆千人、有金檣長老、至登座、衆目笑之、無出問者、於是師出拜趨問、如何是法秀自己、檣笑

曰、秀鐵面不識自己乎、師曰、當者迷、又曇希叟贊曰、赤土塗牛嬭、入佛魔命如懸絲、生鐵裹面皮、辨龍蛇機如嚙鏃、又冷齋夜話曰、洪州武寧安和尚者、天衣懷禪師之嗣也、與秀關西爲同行、秀已應詔住法雲寺、其威光可以挾其法友登雲天而翔也、安止荒村破院、單丁三十年、秀時以書致安、安未嘗視棄之、侍者不解其意、因閒問之、安曰、吾始以秀有精彩、乃今知其癡、夫出家兒、塚間樹下、辨那事如救頭然、無故於八達衢頭架大屋養數百閑漢、此眞開眼尿牀也、何足復對語哉、吾宗自此益亦微、子曹嘗見之。

昺鐵面

南華智昺禪師、蜀川永康人、爲人嚴厲、叢林目爲昺鐵面、嗣佛鑑懃。

宏鐵面

德宏禪師、諸方以鐵面呼之、徧遊師席、後得法於泐潭景祥、出住烏回、次遷啓霞。

夫鐵脚

長蘆應夫廣照禪師、至一邸、有娼女、爲母所迫、入其房不去、師跏趺達旦、叢林因謂之夫鐵脚。〔寳訓音義、以洞山永孚禪師作孚鐵脚非是、永孚嗣泐潭澄、應夫嗣天衣懷、共雲門宗。〕

清鐵脚〔阡都寺〕

四明壽國夢窓嗣清禪師、越之山陰于氏子、肄業郡之天童、得法浙翁佛心、時有鐵脚之號。〔枯崖漫錄東山源章曰、凌霄會中人物如林、清鐵脚阡都寺咸在焉、仟都寺天童辨山仟。〕

遠鐵櫛

短蓬遠禪師、生平不設臥具、晝夜枯坐、得遠鐵橛之稱、開法永壽、爲明極之嗣。

鐵鞭

允韶禪師、福州綿亭人、剛性孤硬、以大法爲重任、因密庵開堂、師直趨前有問答、庵入室罷、告衆曰、適來有箇漢、牙如劍樹、口似血盆、手把一條垂條、如鐵鞭相似、老僧親遭一下、汝等諸人、切須照顧、自此號曰鐵鞭。

醉和尚

荊州開元法明上座、依報本未久、深得法忍、後歸里事落魄、多嗜酒呼盧、每大醉、唱柳詞數闋、日以爲常、鄉民侮之、召齋則拒、召飲則從、如是者十餘年、咸指曰醉和尚、一日謂寺衆曰、吾明旦當行、汝等無他往、衆竊笑之、翌晨攝衣就座、大呼曰、吾去矣、聽吾一喝、衆聞奔視、師乃曰、平生醉裏顚蹶、醉裏却有分別、今朝酒醒何處、楊柳岸曉風殘月、言訖寂然、撼之已委蛻矣、師嗣法報本蘭、蘭嗣雪竇。

酒仙

遇賢禪師、姓林氏、參龍華珠禪師、發明心印、囘居明覺院、唯事飲酒、醉則成歌頌、警道俗、因號酒仙、雜詠十首見于普燈。

酒曇

橘州寶曇禪師、號小雲、川人也、呼之曰酒曇、乃別峯印和尚法弟、學問該博、擅名天下、宋朝甘露滅後、猶推師一人而已、就南郭洲中、築淨院、遶舍樹萬橘、因文號橘州焉、師傳及語句、五燈

無出、惟釋氏資鑑・叢林盛事、及枯崖漫錄載之、盛事曰、曇賦性坦率、不事拘檢、在竹院日、復以酒事遭太守林侍郎追、至出對與之曰、酒曇過界住無爲、而無所不爲、蓋曇曾住無爲故也、一日沐浴、更衣請史魏公叙平日行紀、談笑中而化、闔城士俗皆送之、荼毘獲舍利無數。

禪狀元

敎忠彌光禪師、號晦庵、偶大慧在雲門洋嶼庵、來纔五十三人、慧擧竹篦話示徒、結夏以來、未經五十日、打發十三人、師最初大悟、故大慧稱之、爲禪狀元、又謂之光狀元、慧遂擂鼓告衆曰、龜毛拈起笑哈哈、一擊萬重關鏁開、慶快平生在今日、孰云千里賺吾來、師亦以頌呈之曰、一拶當機怒雷吼、驚起須彌藏北斗、洪波浩渺浪滔天、拈得鼻孔失却口。

禪判官

聖泉旵翁淳禪師、福州石旵人、賦性好獎稱人善、嘗坐夏雪峯、有値重架龕山閣偈、時競傳誦、雪巢無準、向嘗與同行、皆誠敬心服、叢林間、禪者與決可否、議論鋒發、戲以禪判官呼之。

老磵（天目禮）

淨慈居簡禪師、字敬叟、羅湖瑩仲溫、與師議論大奇之、以大慧居洋嶼庵、所把竹篦付之、得法佛照光、師於飛來峯北磵、掃一室居十年、人不敢以字稱、以北磵呼之、衆謂之老磵、簡與天目禮禪師同在佛照會中、相與提衡、故有簡川禮窓之呼、川窓二字、出于禮記。）

老劉

妙峯善禪師、劉氏子也、再見佛照於育王、以風幡話直箭鋒機、佛照贈之以偈、有今日爲君通

一線、斬丁截鐵起吾宗之句、晩年足不越限、晝夜惟擁楮衾兀坐、垂示語言、皆發藥人、叢林以老劉呼之。

辯蟲

平江府南峯雲辯禪師、初參穹窿圓公、有所省發、既入京與天寧圓悟法席、愛臻奥閫、遂嗣其法、因大慧頌船子接夾山話曰、驀口一橈除作解、從茲夾嶺氣衝天、離鉤三寸無消息、獨向滄溟泛鐵船、師屬其韻曰、合類着語藤船子、恰似掘地覓靑天、直饒楫下通明徹、也是華亭破漏船、師爲人疎放、叢林目爲辯蟲。

遵太言

中際可遵禪師、號野軒、早於江湖以詩頌暴所長、故叢林目之爲遵太言、因題廬山湯泉、東坡見而和之、自是名愈彰、得法報本蘭、以雪竇爲大父云。

規方外〔圓方外〕

道場草堂有規禪師、嗣法於法雲本、時呼之曰規方外、傳見會元、宋睢陽徐度敦立卻掃編曰、往歲吳中多詩僧、其名往往見於前輩文集中、予渡江之初、猶見有規者、以詩知名、其爲人性坦率、其徒謂之規方外、時年七十餘矣、又元有圓方外、非混名也、乃隆教方外之行圓、嗣環溪一已

體亂擾

或庵體和尚、黃巖人、賦性麤糙、遇事敢爲、受業上下、號體亂擾、參此庵元於護國、一日在羅漢

殿行道、忽聞庫下殿行者、大呼一聲、豁然大悟、走見元、元曰、這十一郎、今日如病得汗。

才蘇嚧

龍牙才禪師、受潭帥曾公孝序之請、既開堂於天寧、有僧致問、德山棒臨濟喝、今日請師爲拈掇、答曰、蘇嚧蘇嚧、進曰、蘇嚧蘇嚧、還有西來意也無、答曰、蘇嚧蘇嚧、由是叢林呼爲才蘇嚧、一日曾公延見、諸禪因問曰、龍牙答話、只蘇嚧、如何、道林月庵乃應聲、而顧諸禪曰、借問諸方會也無、曾公笑曰、可聯成一頌、以爲禪悅之樂、時座無續者、及傳至雲蓋、有慈觀長老、曰、昨夜虛空開口笑、祝融呑却洞庭湖、師嗣法佛鑑懃。

才煎

佛心禪師才公、參靈源禪師、凡入室出必揮涙、自訟曰、此事我見得甚分明、只是臨機吐不出、若爲奈何、源知其勤篤、告以須是大徹得自在也、居無何、竊覩隣案僧讀曹洞廣錄、至藥山採薪歸、有僧問、甚麼處來、山曰、討柴來、僧指山腰下曰、鳴剁剁、是箇什麼、山拔刀作斫勢、師忽欣然、摑隣案僧一掌、揭簾趨出寮門、衝口說偈曰、徹徹、大海乾枯、虛空迸裂、四方八面絕遮欄、萬象森羅齊漏泄、其爲人褊急叢林目之爲才煎。

一糙

水庵一和尙、婺之東陽人、外行摘糙、叢林謂之一糙、久參月庵杲、杲嘗以雲門話墮詰之、一日下語曰、靈山受記、須是和尙始得、又嘗頌曰、二八佳人美態嬌、繡衣輕整暗香飄、偸身華圃徐徐立、引得黃鶯下柳條、月庵器之、後與同列不和、遭人暗計擠之、月庵信其言擯出院、臨行書

偈、讖之曰、稽首月庵藏裏佛、黃金妙相實難觀、白面夜叉七八箇、推轉如珠走玉盤、後出世台之慈雲、爲佛智之嗣。

璁白頭

芥室璁禪師、入木庵室、晚住吳門聖因、益馳聲譽、白髮垂肩、叢林呼爲璁白頭。

徹白頭

明州光孝思徹禪師、號了堂、自壯髮白、江湖呼曰徹白頭、三衢人、與石窓恭同出宏智門、掃履孤潔、不與世接、嘗典賓於太白、妙喜見大俊敏、私喜之、以計誘其過玉几、師秉志不渝、竟依老天童嗣其法。

宗白頭

明州雪竇嗣宗禪師、號聞庵、謂之宗白頭、徽州人、陳氏子、幼業經、圓具、依妙湛慧喆、問次、釋然契悟、喆以麈尾拂付之、後謁宏智蒙印可、其道愈尊、出住普照・善權・翠巖、嘗與自得暉同在長蘆祖照席下、時一窩蜂發、衆皆散去、唯暉與師二人不動、師私謂曰、參禪本爲敵生死、豈可因此難便逃避、況我身又弱、若至中路也則落佗手、賊既至、衆僧俱散、唯暉在堂中坐禪、爭以箭射之、不中、暉寂然不動、末後一箭、從袖射透函櫃、暉方驚覺、因此成顫病、師坐庫司、賊見遂縛欲射殺、傍有直歲僧、再三近前白賊、乞代、賊曰、汝是佗何眷屬、僧曰、此僧已參得禪了、佗時可出來爲大善知識、教化衆生、我未曾參得、便死無緊要、故乞代之、賊奇其言、二人俱放、後師居明翠巖、其道大振、向所代者亦來座下、師常謂曰、此乃我再生父母也。

照白眉

南嶽方廣照禪師、西蜀人、淳素鄙朴、以罵詈爲佛事、學者憚之、佛照會中、號照白眉。

百拙

報恩登禪師者、和州烏江人、族閔氏、應庵晩子也、賦性絶彫飾、機語皆質直、故有百拙之號。

淨長

慶元府天童如淨禪師、頎然豪爽、叢林號曰淨長、有問、瑞世嗣誰、曰、如淨、問、道號謂何、曰、淨長、後於太白山、感疾退席、下涅槃堂、始大哭、爲鑑足庵燒香入寂、乃日本永平開山道元和尚得法師。

小南

廬山羅漢系南禪師、參祐禪師於潭之道林、獲印可、依世系則黃龍南、便是師大父、名既同而道望逼亞、故叢林呼師爲小南、尊黃龍稱老南、老南乃前所出南匾頭也。

惺惺道者

保寧圓璣禪師、福州林氏子、嗣法黃龍南、天資精勤、談噱有味、大慧謂其爲惺惺道者、師住洪之翠巖、張無盡作漕、入山訪之、師門迎、無盡問曰、如何是翠巖境、答曰、門近洪崖千尺井、石橋分水遶松杉、無盡握師手曰、聞道者之名久矣、何能如此祗對、師曰、適然爾、無盡大笑、復哦曰野僧迎客下煙嵐、試問如何是翠巖、門近洪崖千尺井、石橋分水遶松杉、時林下傳爲盛事。

間灌頂

桐江大悲閒長老、閒居福州閩縣般若精舍、紹興甲寅、時年八十有四、大慧居洋嶼、與船若一水之隔、師雖老、而尤篤參究、日來隨衆入室、大慧因問曰、不與萬法爲侶者、是什麼人、師曰、扶不起、慧曰、扶不起底是什麼人、速道速道、師擬對、大慧以竹篦便打、師忽契悟、慧說偈印之曰、一棒打破生死窟、云云、而閩中有嘲之以偈、曰、八十老翁問灌頂、只說如今行路難、海門洋嶼煙波裏、依舊漁翁把釣竿、大慧演爲四偈曰、八十老翁問灌頂、鵝王擇乳自家知、寄語叢林瞎漆桶、莫將鶴唳作鶯啼、只說如今行路難、前三三、與後三三寄語叢林瞎漆桶、雲頭放下更來參、海門洋嶼煙波裏、得到其中有幾人、寄語叢林瞎漆桶、不須背後起貪嗔、依舊漁翁把釣竿、錦鱗蝦蠏不顧頂、寄語叢林瞎漆桶、休將生滅話頭看。

逃先馳

逃首座、字無己、大慧禪師初住徑山、逃作先馳、亦有機用、由是叢林呼爲逃先馳、後首衆於梅山愚岳禪師會裏而卒。〔師不知何許人、嗣承亦未詳。〕

叢林大禪

徑山了明禪師、形頎腹大、道貌豐碩、紹興辛酉、隨妙喜謫衡陽、州縣防送甚嚴、師爲荷枷、閑關辛苦、未嘗少怠、既至貶所、衲子追隨、問道者率不下二三百人、妙喜以齋粥不給、且慮禍屢勉令去、師不然、每自肩栲栳、行乞至晚、如是者十七年、癸亥辭往浙西、妙喜以偈送之曰、磊苴明大禪、孟浪絕方比、云云、故得叢林大禪之譽、久之出世舒州投子、後奉詔住徑山、江浙湖湘、號之爲布袋再世。

大範

雪竇無相範禪師、參松源、開法焦山、叢林皆以大範呼之、蓋與無範行道同一時也。

大小本（二人）

宗本禪師、神宗召對延和殿、既退、上目送之、顧左右曰、眞福慧僧也、賜號圓照、世謂之大本、嗣法天衣懷。

善本禪師、出世婺之雙林、遷杭之淨慈、繼圓照本、時號之小本。

大小秀

潙山秀禪師、與法雲秀禪師、久依天衣懷和尚、號爲飽參、俱有詩名、叢林以大小秀呼之。（大秀前所出秀鐵面也。）

瘦權（癩可）

善權、字巽中、不知何許人、亦未詳其氏族、尤有詩名、人物清癯、時目爲瘦權、同時有詩僧祖可者、罹于惡疾、因呼癩可、雲臥紀談曰、南昌信無言者、早以詩鳴於叢林、徐公師川・洪公玉父、品第其詩、韻致高古、出瘦權・癩可一頭地、覺範贈巽中詩曰、道人來廬山、山光水色供盤飡、坐令山水秀傑氣、繚繞胸中成塊搏、云云。（東溪祖可、字正平、姓蘇氏、覺範癩可贊曰、父伯固、兄養直、父超絕、兄豪逸、家世風流稱第一、二祖名三祖疾、名是虛、疾是實、詩成舌頭翻霹靂。）

喩彌陀

錢塘喩彌陀者、早專畫彌陀佛爲業、楊傑次公、賞識其精妙、以姓呼之爲喩彌陀、由是得名、有

部使者、問以能畫彌陀何不參禪、答以偈曰、平生只解畫彌陀、不解參禪可奈何、幸有五湖風月在、太平何用動干戈、後年三十五、占僧籍名思淨、乃於城北僦舍、持鉢乞食、期以飯百萬僧、不二十寒暑、及八百萬、郡移妙行院額於其處、以旌其勤、律師嘗集心經句為頌云、見于鼓山道霈請益說。

劉道者

豫章東山僧修演、里中劉氏子、得法於石門謙、有偈曰、未悟之日要參禪、云云、自爾修頭陀行、常於夏夜、裸體以飼蚊蚋、有施與衣、則受而轉濟無者、亦嘗說偈見意、曰、四十年來常跣足、不剃頭兮不澡浴、郡官為我換衣衫、只恐平生願不足、世稱劉道者、道者後入定、徒屬啓壙視之趺坐嚴然、遂傳以香泥云。

戒和上

蘇軾、字子瞻、號東坡居士、乃五祖戒和尚之後身也、弟轍謫高安時、洞山雲庵與聰禪師、一夕同夢、與子由出城迓五祖戒、已而子瞻至、三人出城候之、語所夢、軾曰、八九歲時、夢前身是僧往來陝右、又曰、先妣孕時夢眇目僧求託宿、庵驚曰、戒公陝右人、一目眇、逆數其終已五十年、而子瞻時四十九、自是常稱居士曰戒和上。

元

倫驢

淨慈斷橋妙倫禪師、得法無準、始自謂、吾口訥耳聵、不若把本修行、日以誦經爲業、忽聞楞伽於雲居見山堂、至蚊蝱螻蟻無有言說、而能辨事、頓然有省、謂倫驢者、驢性狠戾而不進、師性亦如此、因叢林有此稱。

斷崖

天目了義禪師、大徹後、與母入武康、越五年還山、高峯爲剃度名了義、元貞乙未、峯示寂、師亦韜迹、然所至、歸重立僧、咸稱之曰義首座、初居天目山斷崖、因叢林以斷崖呼之。

常達磨（咦達磨）

雪竇常藏主、横山之弟子、不詳姓氏、貌寒陋眼不識丁、惟習禪定、故同時人、皆以常達磨稱之所作偈頌、事理混融、音律調暢、大有啓迪人處。又宋有咦達磨者、未詳何人、僧寶傳福昌善章曰、有僧自號咦達磨者、纔入方丈、提起坐具曰、展卽徧周法界、不展卽賓主不分、展卽是、不展卽是、善曰、汝平地喫交了也、咦曰、明眼尊宿、果然有在、善便打、咦曰、奪拄杖打倒和尚、莫言不道、善曰、棺木裏瞠眼漢、且坐喫茶、茶罷咦前白曰、適來容易觸忤和尚、善曰、兩重公案、罪不重科、便喝去之。

明

昷鐵脊

慧昷禪師、字虛白、湖廣族、家於丹陽、姓王氏、於寶藏持和尚處省徹、偈曰、一拳打破太虛空、百

偲須彌不留蹤、借問個中誰是主、扶桑涌出一輪紅、住安谿東明二十餘年、晝夜無睡、坐若鐵幢、因稱出鐵脊、乃南岳第二十七世正傳源流祖、東明出是也。

小高僧

愼行禪師、姓毛氏、別號卍庵、台之臨海人、才思泉涌、偈句操觚而立成、時人稱之爲小高僧、嗣法於靈隱明。

禪林口實混名集卷之下　終

尊僧一律以貽後他

本無種族釋爲氏、君父爭能臣子之、綴鉢囊衣超世實、巖栖穴處畏人知、議論舌利鑒多口、罵詈眼高照白眉、嘆息後來繼僧傳、有何才識取名編。

跋

斷翁和尚、乃稱賞古人格外之擧措、而間與門下衲子、拊掌淸譚、混名著者、摺撫爲集、苟欲使翫古之士、而知其德行也、於是竊取附之剞劂氏、以公諸世焉、惟翁四十餘年、抱病岩壑、誓不出世、然與古來稱庵居知識、幻住華頂諸祖、自然同其軌躅、則豈特矯正一時泛濫之弊、抑法利之大、足播數百年之下矣、又如斯集、輔翼宗門、不必待翁之登籍、亦撾雷鼓而爲得也、唯病旣篤而莫囑版本、是爲憾耳、越遷寂之後、數月至自京師書林、海一開卷、使人酸嘆弗已、於戲、是歲春三月、翁預囑以後事、親書遺囑、藏諸書櫃、夏五月、遽示微恙、有不起色、六月十八日、右脇而逝、壽六十又四、闍維之後、遵其遺命、竟奉靈骨、建塔於普明之山塋焉、先是、於翁捨第爲寺、與父公同延桂老師、祝國請法之由、詳載在夫開堂錄中、今略其細、翁之所述、東渡南遊錄・併詳略圖・重編枯崖漫錄・陳希夷睡像上進記・華藏世界圖等、秘在普明、海荷法門猶子之誼、納誨多年于茲、況於此撰哉、遂述其槪以識歲月云・

正德乙未孟冬上澣日、劣姪實海界輪稽首九拜、書于肥前州圓福山下法泉禪房・

國譯禪學大成奥付

昭和五年七月十五日印刷
昭和五年七月二十日發行

編者　國譯禪學大成編輯所
代表者　宮裡祖泰

發行者　宮下軍平
東京市神田區錦町一丁目十六番地

印刷者　藤本茂人
東京市神田區表猿樂町二丁目五番地

印刷所　藤本印刷所
東京市神田區表猿樂町二丁目五番地

發行所　二松堂書店
東京市神田區錦町一ノ十六
振替口座東京三四〇九番